OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方言におけるノダ相当形式の発展ー大阪方言と石川方言を中心にー
Author(s)	野間, 純平
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51842
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2014 年度　大阪大学大学院文学研究科　博士学位申請論文

方言におけるノダ相当形式の発展

―大阪方言と石川方言を中心に―

野間　純平

2014 年 **12** 月

要旨

現代日本語（標準語）には、ノダ文と呼ばれる次のような表現がある。

（1） A：どこに行くの？

B：学校に行くんだ。

（1）の例において、下線を引いた「の」「んだ」が「ノダ」に当たり、他にも「んです」「んじゃない」「のだった」のように、様々な形をとる。これらはすべて準体助詞の「の」およびコピュラの「だ」から成るという点で「ノダ」とまとめられ、「ノダ」が付加された文は「ノダ文」と呼ばれる。

このようなノダ文は標準語だけでなく諸方言にも存在し、標準語と同様に、方言の「ノダ」も「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっている。例えば、大阪方言では、準体助詞「ン」とコピュラ「ヤ」を組み合わせた「ン（ヤ）」が使用される。

（2） A：どこ行くン？

B：学校行くンヤ。

（2）は（1）を大阪方言に翻訳したものである。下線部が「の」から「ン」に、「んだ」から「ンヤ」になっているが、単に形式が標準語形から大阪方言形に置き換わっただけである。準体助詞やコピュラには方言による形式的バリエーションがあるため、「ノダ」は「ガジャ」「トヤ」など、方言によって様々な形をとる。いずれにせよ、形が置き換わっただけで、「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっていることには変わりない。

しかし、方言によっては、「ノダ」に置き換えられるものの、「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっていない形式を使う場合がある。例えば、（2）の大阪方言の例は、次のように言うこともできる。

（3） A：どこ行くン？

B：学校行くネン。

（3）を（2）と比べると、A は同じだが、B の発話が異なっていることがわかる。（2）では「行くンヤ」となっていたが、（3）では「行くネン」となっている。この場面において、両者の間に大きな意味の違いはないが、形式的には大きく異なる。上で述べたように、「ンヤ」は「準体助詞＋コピュラ」だが、「ネン」にはそのような構成はない。

このような、大阪方言の「ネン」は、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持つ「ンヤ」が変化したものとされており、形式と意味のどちらにおいても、「ンヤ」との異なりが見られる。このような変化は標準語には起こっておらず、そのような方言も少ない。そこで、本研究では、大阪方言の「ネン」のような、「準体助詞＋コピュラ」が変化したノダ相当形式を持つ方言、具体的には、上で例を示した大阪方言と、石川方言を取り上げる。そして、その特徴を記述し、成立過程を明らかにすることで、日本語におけるノダ相当形式の変化のあり方とその方向性を明らかにする。そのことにより、日本語のノダ文だけでなく、他言語も含めた形式名詞や名詞化辞の変化に関する研究に新たな知見をもたらすことを目指す。

本論文は全体が 4 部構成となっており、第Ⅰ部が序論、第Ⅱ部（大阪）と第Ⅲ部（石川）が本論、第Ⅳ部が結論となっている。

第Ⅰ部は序論であり、本研究の位置づけや用語の定義について述べる。第 1 章では、「準体助詞」「ノダ相当形式」「コピュラ」といった本研究のキーワードとなる用語を定義し、本研究の目的を述べる。第 2 章では、関連する先行研究を整理し、本研究をその中に位置づける。第 3 章では、日本語諸方言におけるノダ相当形式を概観し、本研究で主に取り上げる大阪方言と石川方言が、その中でも独自の変化を起こしていることを確認する。

第Ⅱ部と第Ⅲ部は本論であり、第Ⅱ部で大阪方言を、第Ⅲ部で石川方言をそれぞれ取り上げる。どちらも体系記述（第 4 章、第 6 章）と成立過程の解明（第 5 章、第 7 章）で構成されている。

第 4 章では、筆者の内省をもとに、大阪方言のノダ相当形式について記述した。大阪方言では、ンヤ・ネヤ・ネンヤ・ネンの 4 種類のノダ相当形式が主に使用されており、それぞれ性質が異なる。形式面については、ンヤが最も「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っているのに対して、ネヤ・ネンヤはその構成を少し失い（「*ネカ」のように「ヤ」が潜在した形をとれない）、ネンになるとその構成は全くなくなり（そもそも「ヤ」がない）、終助詞のようになる。意味面については、ンヤ・ネヤ・ネンヤとネンで違いがある。ネンは基本的に〈対人〉用法に限定されており、〈対事〉用法では使えない。一方、ンヤ・ネヤ・ネンヤは〈対事〉用法で使えるが、〈対人〉用法ではいつでも使えるというわけではない。例えば、聞き手に前置きなく一方的に「今度東京行くネン」のように提示する場合、ネンだと自然だが、他の形式だと終助詞を伴うなどしなければ不自然になる。以上を踏まえると、大阪方言のノダ相当形式は、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持っているンヤと、形式的にも意味的にも終助詞に近いネンがあり、ネヤとネンヤはその中間に位置づけられる。

第 5 章では、大阪方言のノダ相当形式、特にネンとテンがどのような過程を経て成立したかを明らかにした。考察に際しては、大阪を含む近畿地方の談話資料および昔話資料をデータとした。それらの資料を用いた文献調査の結果、ネンとテンの使用には地域差があり、テンは使うがネンは使わないという地域があることがわかった。また、述語が過去形の場合、「ノヤ」のようなノ系の形式よりも「ンヤ」のようなン系の形式が使われることが圧倒的に多いことがわかった。以上の結果から、大阪方言におけるネンとテンの成立過程を以下のように考えた。まず、テンは使うがネンは使わないという地域があることから、ネンとテンは別の要因によって成立したと考えた。テンは、述語が過去形の場合の「タンヤ」が母音変化によって「テンヤ」と変化し、そこから「ヤ」が脱落したことによって成立した。一方、主に述語が非過去形の場合につく「ノヤ」は母音変化により「ネヤ」となり、先に成立していたテンからの類推でネンが成立した。このように考えることで、ネンが「*行ったネン」のように過去形に後接できず、「行っテン」となるのはなぜかということを説明することができる。

第Ⅲ部では、石川方言のノダ相当形式を取り上げた。伝統的な石川方言では、準体助詞「ガ」とコピュラ「ヤ」の組み合わせから成るノダ相当形式「ガヤ」を使用していたが、現

在の若年層はこの「ガヤ」をほとんど使わず、ガンやゲンといった新形式を使う。第 6 章では、このような新形式を中心とする若年層の体系を記述した。〈対人〉用法においては、接続する述語の種類とテンスによって使用する形式が異なるが、これらは E 群（ゲン・-eN・ネン・テン）と A 群（ガン・-aN・ナン・タン）に分かれており、平叙文の場合は前者の形式を、疑問文の場合は後者の形式を使用する。一方、〈対事〉用法は、〈対人〉用法に比べて変化が進んでおらず、地方共通語の「ンヤ」を使うか、〈対人〉用法の形式をもとに作った「ゲンヤ」などの形式を使うしかない。以上の記述を踏まえると、石川県若年層方言のノダ相当形式の体系は、〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別することに力点を置いた体系であると言える。伝統形式である「ガヤ」から大きく体系を変化させた背景には、若年層話者が準体助詞の「ガ」をほとんど使わなくなったことが考えられる。

第 7 章では、石川方言のノダ相当形式がどのような過程を経て現在のような体系に至ったのかを明らかにした。考察に当たっては、石川県各地の談話資料・昔話資料をデータとし、文献調査を行った。その結果を踏まえて、ノダ相当形式の変遷過程を以下のように考えた。先行研究のようにガン・ゲンから-aN・-eN ができたと考えるのではなく、動詞非過去形と「ガヤ」「ゲ」との融合形からできた-aN・-eN のほうが先にあり、動詞の形を復元するためにガン・ゲンができたと考えられる。そして、「アランヤ」「アレン」といった融合形から-aN・-eN が析出され、ア段とエ段の違いという対立が成立したことによりタン・テン、ナン・ネンといった形式が次々にできていった。以上のように考えることで、ガン・ゲンが過去形に接続できないのはなぜか、A 群と E 群の機能分担はいかにしてできたかといった先行研究が説明できなかった問題を解決することができる。また、この一連の変化は、1 つの形式が文法的な要素に徐々に変化していくという一方向的な文法化としてとらえることはできない。変化における重要なポイントとして、新たな対立の完成による体系変化があり、これがこの変化の大きな特徴である。

第 8 章は、ここまでの記述・分析のまとめ、および本研究の結論である。本研究で取り上げてきた大阪方言と石川方言のノダ相当形式を対照することで、両方言の異同を明らかにした。

まず、どちらの方言も〈対人〉用法に特化した形式を発達させているが、体系のあり方には両方言で違いがあるということを指摘した。大阪方言は平叙文の中で〈対人〉に特化したネンなどを発達させているのに対して、石川方言では〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別することに力点を置いている。そして、新形式のもとになった伝統形式を使用するか否かに違いがあることもわかった。大阪方言では、ネンやネヤなどの新形式とともに伝統形式ンヤも使用するが、石川方言では伝統形式ガヤが使われなくなっている。他にも、個々の形式についても共通点と相違点がそれぞれ存在する。

また、ノダ相当形式の変化に関して、体系変化の方向性に違いがあることがわかった。大阪方言におけるノダ相当形式の変化は、ンヤがコピュラの性質を失ってネヤ、コピュラそのものを切り離してネンというように、ンヤがネンに向かって徐々に性質を変えていくという一方向的な文法化としてとらえられる。一方、石川方言におけるノダ相当形式の変化は、

伝統形式を体系から追い出したところに A 群と E 群で疑問文と平叙文を区別するという新たなルールを導入したという点に特徴があり、一方向的な文法化ととらえるのは難しい。

そして、以上の対照を踏まえて、大阪方言と石川方言のノダ相当形式を日本語や他言語の中に位置づけ、以下のことを明らかにした。

大阪方言と石川方言は、形式や機能が異なる複数のノダ相当形式を使用するという点で、他の日本語諸方言とは異なっており、他の方言に先駆けて最先端の変化を遂げた方言と位置づけられる。

また、大阪方言と石川方言のノダ相当形式に起こった変化のプロセスには、母音変化を起こすことと、接辞形式からの類推で新たな形式ができることの 2 点が共通しており、この 2 つがノダ相当形式のさらなる変化の条件となっていると考えられる。

さらに、他言語も視野に入れて考察を行った。アジアの諸言語から見ても、本研究で取り上げた大阪方言と石川方言のノダ相当形式は、先行研究で議論されている文法化のルートのさらに先にある変化であると言える。この 2 つの方言の事例は、アジアの言語における名詞化辞の文法化研究に新たな知見を提供すると言える。

最後の第 9 章では、本研究で明らかになったことをまとめて、今後の研究の展望を述べた。本研究の意義は、ノダ相当形式に起こっている最先端の変化をとらえ、詳細に記述したこと、そして、それによって本研究が他の方言や言語において今後起こりうる変化を予測する指針になったことである。事例が少ないため、十分な一般化はできなかったが、今後起こりうる変化の先駆けをとらえた研究として位置づけられる。

目次

はじめに 1

第Ⅰ部　序論

第 1 章　本研究の目的 4

1. はじめに 4
2. 本研究で扱う用語の定義 5
   2.1. 準体助詞 5
   2.2. コピュラ 8
   2.3. ノダ相当形式 8
      2.3.1. 形式面の特徴 9
      2.3.2. 意味面の特徴 10
   2.4. 様々なノダ相当形式 11
3. 本研究の目的 13

第 2 章　先行研究の概観と本研究の位置づけ 15

1. はじめに 15
2. 日本語の準体助詞・ノダ文に関する研究 15
   2.1. 現代語の記述的研究 15
      2.1.1. 標準語 15
      2.1.2. 方言 16
   2.2. 準体助詞の変化に関する研究 17
      2.2.1. 準体助詞の成立に関する歴史的研究 17
      2.2.2. 共時態の体系から変化の過程を想定する研究 18
3. 他言語における名詞化辞の機能拡張に関する研究 21
4. 形式名詞の文法化 24
5. 本研究の位置づけ 26

第 3 章　日本語諸方言におけるノダ相当形式 28

1. はじめに 28
2. 準体助詞の全国分布 28
3. 日本語諸方言におけるノダ相当形式 29
   3.1. ノ類のノダ相当形式 30
   3.2. ト類のノダ相当形式 30
   3.3. ガ類のノダ相当形式 31

3.4. ガン類のノダ相当形式.....32
3.5. φ類のノダ相当形式.....33
4. 本研究で取り上げる方言.....34

第Ⅱ部　大阪方言におけるノダ相当形式の発展
第 4 章 大阪方言におけるノダ相当形式..... 37
1. はじめに.....37
2. 大阪方言について.....37
3. 大阪方言における準体助詞.....39
3.1. 準体助詞の基本的な分布.....39
3.1.1. 名詞・連体格助詞につく場合.....39
3.1.2. 用言につく場合.....40
3.2. 「ノン」の分布と性質.....41
3.3. ネヤ・ネンなど.....43
4. 大阪方言におけるノダ相当形式のバリエーション.....44
4.1. 使用される形式.....44
4.2. 本章で主に取り上げる形式.....45
4.2.1. ンヤ.....46
4.2.2. ネヤ.....46
4.2.3. ネン.....46
4.2.4. ネンヤ.....47
4.2.5. ノダ相当形式の全体像.....47
5. 形式的特徴.....48
5.1. 述語への接続.....48
5.2. 「ヤ」の振る舞い.....49
5.2.1. 「ヤ」の活用.....50
5.2.2. 「ヤ」の潜在.....51
5.3. 文タイプ.....53
5.4. 文中における位置.....54
5.5. 形式的特徴まとめ.....54
6. 意味的特徴.....56
6.1. 用法による形式の使い分け.....56
6.2. 終助詞との関係.....58
6.2.1. 〈対人〉と終助詞.....58
6.2.2. 〈対事〉と終助詞.....60
7. まとめ：大阪方言におけるノダ相当形式の体系.....61
7.1. 4 つのノダ相当形式の特徴.....61

7.1.1. ンヤの特徴.....62
7.1.2. ネヤ・ネンヤの特徴.....63
7.1.3. ネンの特徴.....64
7.2. 準体助詞との関係.....64
7.3. まとめ.....65

第 5 章 近畿方言におけるネン・テンの成立.....66
1. はじめに.....66
2. 先行研究と問題のありか.....67
2.1. ネンの成立について.....67
2.2. テンの成立について.....67
2.3. 問題のありか.....68
3. 調査概要.....69
4. 昔話資料における近畿方言のノダ相当形式の特徴.....71
4.1. 昔話資料に現れた形式.....71
4.2. 各形式の分布.....73
4.2.1. ノ系とン系の偏り.....76
4.2.2. ネンとテンの差.....77
5. ネンとテンの成立過程.....78
5.1. ネンとテンの成立過程の概要.....79
5.2. テンの成立過程.....79
5.3. ネンの成立過程.....81
5.4. ネヤとネンヤの成立過程について.....82
6. 先行研究との比較.....83
6.1. 自説の妥当性.....83
6.2. 自説の問題点.....84
7. 考察.....84
7.1. 変化の位置づけ.....85
7.2. 変化の要因.....86
7.3. 今後の変化.....87
8. 本章のまとめ.....87

第Ⅲ部　石川方言におけるノダ相当形式の発展
第 6 章 石川方言におけるノダ相当形式.....90
1. はじめに.....90
2. 調査概要.....91
2.1. 調査地について.....91

2.2. インフォーマントについて.....92
3. 石川方言における準体助詞.....95
4. 石川方言におけるノダ相当形式のバリエーション.....96
4.1. 使用される形式.....97
4.2. 本章で取り上げる形式.....98
4.2.1. 使用に地域差・個人差のある形式.....98
4.2.2. 「ンヤ」と「ン（ケ）」について.....101
5. 形式的特徴.....102
5.1. 述語への接続.....102
5.1.1. 述語が非過去形の場合.....103
5.1.2. 述語が過去形の場合.....105
5.2. 活用.....106
5.3. 文タイプ.....107
5.4. 文中における位置.....108
5.5. 形式的特徴まとめ.....109
6. 意味的特徴.....110
6.1. 〈対事〉用法で使用される形式.....110
6.2. 〈対人〉用法と終助詞.....111
7. 石川県若年層方言のノダ相当形式の体系.....111
8. まとめ.....112

第 7 章 石川方言におけるノダ相当形式の変遷過程.....114
1. はじめに.....114
2. 先行研究と問題のありか.....114
2.1. 先行研究.....114
2.2. 問題のありか.....116
3. 調査概要.....117
3.1. 昔話資料.....117
3.2. 談話資料.....118
4. ノダ相当形式のバリエーションの成立過程.....119
4.1. ガヤ→ガイ→ゲの音変化.....119
4.2. 動詞とガヤ・ガイ・ゲの融合.....121
4.3. -aN と-eN の析出による A 群と E 群の対立の成立.....124
4.4. 過去形や名詞への広がり.....125
4.5. 動詞の形を復元するためにガン・ゲン成立.....127
4.6. 成立過程まとめ.....128
5. 先行研究との比較.....128

5.1. ガン・ゲンの接続制限について……129
5.2. A 群と E 群の機能分担について……129
5.3. E 群の形式の活用について……130
6. 考察……130
6.1. 変化の位置づけ……131
6.1.1. （ア）語形の短縮化……131
6.1.2. （イ・ウ）意味の漂白化……132
6.1.3. （エ）脱範疇化……133
6.2. 変化の要因……134
6.3. 今後の変化……135
7. まとめ……136

第Ⅳ部　結論

第 8 章 方言におけるノダ相当形式のバリエーションと成立……138
1. はじめに……138
2. 大阪方言と石川方言のノダ相当形式概略……138
2.1. 大阪方言のノダ相当形式とその成立……138
2.2. 石川方言のノダ相当形式とその成立……139
3. 大阪方言と石川方言のノダ相当形式対照……141
3.1. 体系の対照……141
3.1.1. 体系の特徴……141
3.1.2. 伝統形式との関係……142
3.1.3. 個々の形式について……143
3.2. 変化の対照……145
3.2.1. 体系変化の方向性……146
3.2.2. 変化のプロセス……147
3.2.3. 変化の背景……148
4. 大阪方言と石川方言のノダ相当形式の位置づけ……149
4.1. 日本語の中での位置づけ……149
4.1.1. 体系の位置づけ……149
4.1.2. 変化の動機とプロセス……151
4.2. 言語変化の位置づけ……153
5. まとめ……156

第 9 章 まとめと展望……158
1. はじめに……158
2. 本研究で明らかになったこと……158

2.1. 大阪方言 158
2.2. 石川方言 159
2.3. 本研究の結論 161
3. 今後の展望 162
3.1. 社会言語学的な研究 162
3.2. ノダ相当形式の意味に踏み込んだ研究 163
3.3. 名詞述語文や形式名詞との対照 163
4. おわりに 163

用例出典 165
参考文献 166

例文について

本論文では、作例や調査票の例文は漢字かな混じり表記とする。そして、議論の対象となる部分のみをカタカナで表記する。その際、当該の例文や形式が文法的に不適格な場合は「*」を、不適格とまでは言わないが不自然に感じられる場合は「?」を付す。

用例の出典は本論文の末尾を参照されたい。また、一部の先行研究の引用において使用しているグロスについては、以下の一覧を参照されたい。

グロスについて

本論文では、日本語の例文にはグロスを付していないが、日本語以外の言語の例文には、先行研究を引用する際にグロスと英語訳も引用している。基本的に先行研究のグロスをそのまま使用するが、一部改めているものもある。本論文で使用しているグロスは以下のとおり。

ABL	奪格（ablative）	ACC	対格（accusative）
ADN	連体形（adnominal）	CAUS	使役（causative）
COP	コピュラ（copula）	DAT	与格（dative）
DEM	指示詞（demonstrative）	FUT	未来（future）
GEN	属格（genitive）	HON	尊敬（honorific）
LOC	所格（locative）	MOOD	ムード標識（mood marker）
NEG	否定（negative）	NMZ	名詞化辞（nominalizer）
NOM	主格（nominative）	PL	複数（plural）
POSS	所有（possession）	PST	過去（past）
PN	代名詞（pronoun）	PRES	現在（present）
Q	疑問（question）	SEQ	副動詞（sequential converb）
SFP	終助詞（sentence final particle）	SG	単数（singular）
STANCE	スタンス（stance marker）	TOP	主題（topic）
1	1 人称	2	2 人称

はじめに

現代日本語（標準語）には、次のような「ノダ文」と呼ばれる表現がある。

(1)　A：どうして遅刻したの？

　　B：電車が止まっていたんだ。

この例において、下線を引いた「の」「んだ」が「ノダ」に当たり、他にも「んです」「んじゃない」「のだった」のように、様々な形をとる。これらはすべて準体助詞の「の」およびコピュラの「だ」から成るという点で「ノダ」とまとめられ、「ノダ」が付加された文は「ノダ文」と呼ばれる。現代日本語において、このような「ノダ」は様々な文脈で使用され、様々な意味を表す。これまで日本語学では、多くの研究者が「ノダ」の表す意味や使用条件などをめぐって、膨大な研究を積み重ねてきた。

一方、方言にも「ノダ」は存在する。標準語と同様に、方言の「ノダ」も「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっている。例えば、大阪方言では、準体助詞「ン」とコピュラ「ヤ」を組み合わせた「ン（ヤ）」が使用される。

(2)　A：なんで遅刻したン？

　　B：電車止まっとったンヤ。

(2) は (1) を大阪方言に翻訳したものである。下線部が「の」から「ン」に、「んだ」から「ンヤ」になっているが、単に形式が標準語形から大阪方言形に置き換わっただけである。準体助詞やコピュラには方言による形式的バリエーションがあるため、「ノダ」は「ガジャ」「トヤ」など、様々な形をとりうる。いずれにせよ、形が置き換わっただけで、「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっていることには変わりない。

しかし、方言によっては、「ノダ」に置き換えられるものの、「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっていない形式を使う場合がある。例えば、(2) の大阪方言の例は、次のように言うこともできる。

(3)　A：なんで遅刻したン？

　　B：電車止まっとっテン。

(2) と (3) を比べると、A は同じだが、B の発話が異なっていることがわかる。(2) では「止まっとったンヤ」となっているが、(3) では「止まっとっテン」となっている。この場面において、両者の間に大きな意味の違いはないが、形式的には大きく異なる。上で述べたように、「ンヤ」は「準体助詞＋コピュラ」だが、「テン」にはそのような構成はない。

(4) 今忙しい｛ンヤ／ネン｝。後にしてくれるか。

(4) もまた大阪方言の例で、何か用事を頼まれてそれを断る場面である。この場面において、標準語で「忙しいんだ」と言うのと同様に、大阪方言では「忙しいンヤ」と言う。しかし、(4) に示したように、「忙しいネン」のように「ネン」を使って答えることもできる。この「ネン」には準体助詞もコピュラも含まれていない。

このような、大阪方言の「テン」「ネン」は、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持つ「ンヤ」

が変化したものとされており、形式と意味のどちらにおいても、「ンヤ」との異なりが見られる。このような変化は標準語には起こっておらず、そのような方言も少ない。そこで、本研究では、大阪方言の「テン」や「ネン」のような、「準体助詞＋コピュラ」が変化したノダ相当形式を持つ方言、具体的には、上で例を示した大阪方言と、石川方言を取り上げる。そして、その特徴を記述し、成立過程を明らかにすることで、日本語におけるノダ相当形式の変化のあり方とその方向性を明らかにする。そのことにより、日本語のノダ文だけでなく、他言語も含めた形式名詞や名詞化辞の変化に関する研究に新たな知見をもたらすことを目指す。

本論文は 4 部構成になっている。まず第 I 部は序論において、本研究の目的や位置づけ、取り上げる方言などについて述べる。第 1 章では、本研究で扱う用語の定義を行い、本研究の目的を述べる。第 2 章では、関連する先行研究を整理し、本研究をその中に位置づける。第 3 章では、先行研究や筆者が行った調査をもとに、日本語諸方言のノダ相当形式について概観し、大阪方言と石川方言を取り上げる理由を述べる。

第Ⅱ部および第Ⅲ部は各論である。第Ⅱ部では大阪方言を、第Ⅲ部では石川方言を取り上げる。どちらも現在のノダ相当形式の体系記述をする章と、その体系に至るまでの成立過程を明らかにする章で構成されている。

第Ⅳ部は結論である。第 8 章では、第Ⅱ部と第Ⅲ部で明らかにしたことをまとめて、大阪・石川両方言を対照することで、日本語におけるノダ相当形式の変化の法則を明らかにする。そして、一連の変化を関連する形式名詞・名詞化辞の変化と対照させることで、本研究で取り上げた変化の独自性を明らかにする。最後の第 9 章では、本研究で明らかにしたことをまとめ、本研究の今後の展望について述べる。

第Ⅰ部　序論

第Ⅰ部では、本論文の序論として、本研究の目的や位置づけについて述べる。第 1 章では、本研究で扱う用語を定義し、本研究の目的を述べる。第 2 章では、関連する先行研究の整理を行い、その流れの中に本研究を位置づけつつ、本研究の意義について述べる。第 3 章では、日本語諸方言におけるノダ相当形式を概観し、本研究で主に取り上げる大阪方言と石川方言の位置づけを確認する。

第1章　本研究の目的

1. はじめに

現代日本語（標準語）には、次のような「ノダ文」と呼ばれる表現がある。

（1）　A：どうして遅刻したの？

　　B：電車が止まっていたんだ。

この例において、下線を引いた「の」「んだ」が「ノダ」に当たり、他にも「んです」「んじゃない」「のだった」のように、様々な形をとる。これらはすべて準体助詞の「の」およびコピュラの「だ」から成るという点で「ノダ」とまとめられ、「ノダ」が付加された文は「ノダ文」と呼ばれる。現代日本語において、このような「ノダ」は様々な文脈で使用され、様々な意味を表す。これまで日本語学では、多くの研究者が「ノダ」の表す意味や使用条件などをめぐって、膨大な研究を積み重ねてきた。

一方、方言にも「ノダ」は存在する。標準語と同様に、方言の「ノダ」も「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっている。例えば、大阪方言では、準体助詞「ン」とコピュラ「ヤ」を組み合わせた「ン（ヤ）」が使用される。

（2）　A：なんで遅刻したン？

　　B：電車止まっとったンヤ。

（2）は（1）を大阪方言に翻訳したものである。下線部が「の」から「ン」に、「んだ」から「ンヤ」になっているが、単に形式が標準語形から大阪方言形に置き換わっただけである。準体助詞やコピュラには方言による形式的バリエーションがあるため、「ノダ」は「ガジャ」「トヤ」など、方言によって様々な形をとる。いずれにせよ、形が置き換わっただけで、「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっていることには変わりない。

しかし、方言によっては、「ノダ」に置き換えられるものの、「準体助詞（＋コピュラ）」という構成になっていない形式を使う場合がある。例えば、（2）の大阪方言の例は、次のように言うこともできる。

（3）　A：なんで遅刻したン？

　　B：電車止まっとっテン。

（2）と（3）を比べると、A は同じだが、B の発話が異なっていることがわかる。（2）では「止まっとったンヤ」となっているが、（3）では「止まっとっテン」となっている。この場面において、両者の間に大きな意味的の違いはないが、形式的には大きく異なる。上で述べたように、「ンヤ」は「準体助詞＋コピュラ」だが、「テン」にはそのような構成はない。

（4）　今忙しい｛ンヤ／ネン｝。後にしてくれるか。

（4）もまた大阪方言の例で、何か用事を頼まれてそれを断る場面である。この場面において、標準語で「忙しいんだ」と言うのと同様に、大阪方言では「忙しいンヤ」と言う。しかし、（4）に示したように、「忙しいネン」のように「ネン」を使って答えることもできる。この「ネン」には準体助詞もコピュラも含まれていない。

以上のような大阪方言の「テン」「ネン」は、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持つ「ンヤ」が変化したものとされており、形式と意味のどちらにおいても、「ンヤ」との異なりが見られる。このような変化は標準語には起こっておらず、同様の変化が起こった方言も少ない。そこで、本研究では、大阪方言の「テン」や「ネン」のような、「準体助詞＋コピュラ」が変化したノダ相当形式を持つ方言、具体的には、上で例を示した大阪方言と、石川方言を取り上げる。そして、その特徴を記述し、成立過程を明らかにすることで、日本語におけるノダ相当形式の変化とその結果がどのようなものかということを明らかにする。そのことにより、日本語のノダ文だけでなく、他言語も含めた形式名詞や名詞化辞の変化に関する研究に新たな知見をもたらすことを目指す。

本論文の冒頭となる本章では、本研究の目的を述べる。そして、本研究における重要なキーワードについて、その定義を述べる。以下、2 節で用語の定義を述べ、3 節で改めて本研究の目的を述べる。

2. 本研究で扱う用語の定義

本節では、本題に入る前に、本研究のキーワードとなる用語の定義を述べる。本節で取り上げる用語は以下のとおりである。

① 準体助詞（2.1 節）
② コピュラ（2.2 節）
③ ノダ相当形式（2.3 節）

これらの用語の関係は、①の「準体助詞」と②の「コピュラ」が組み合わさったものが③の「ノダ相当形式」である。そして、それがさらに変化した大阪方言の「ネン」や「テン」のようなものもここに含まれるが、これについては 2.4 節で説明する。

2.1. 準体助詞

準体助詞という用語は、橋本（1934）が初出とされており、その後、多くの研究者によって研究されてきた。その用語の指す範囲や定義については諸説あるが、佐治（1969）が指摘するように、以下のようなものを指して準体助詞と呼ぶことが多い。

(5) 私<u>の</u>は机の上にあります。　【格助詞（体言の省略）】
(6) 私が買った<u>の</u>は辞書です。　【準代名助詞】
(7) 私が辞書を買った<u>の</u>を知っていますか。　【狭義準体助詞】

（以上、佐治 1991:192）

いずれも形式は「の」だが、【　】内（用語は佐治 1969 によるもの）に示したように、その働きは異なる。

まず、(5) における下線部の「の」は、【　】内にも示したように、準体助詞というよりも（連体）格助詞である。つまり、この「の」は、「のもの」の意味であり、「の」に続く体言が省略されたものととらえられる。(5) のように言う場合、省略された「もの」が何を指すかは、文脈上話し手と聞き手で共有されているものである。これに対して、連体格助詞が

述語代用形としての「ダ」の連体形であると分析する奥津（1974）では、(5）のような「私の」は「私ノノ」から前の「ノ」(「ダ」の連体形）を削除したものであるという説明をしている。述語代用形はともかく、奥津の主張は、次のような方言の例を見るとよくわかる。

(8） 太郎ノガモ　花子ノガモ　ツイジャ（太郎のも花子のも同じだ）
〈愛媛県八幡浜市若山町方言〉

(9） ツギノアンニ　ノッテコ（次のに乗って行こう）〈新潟県岩船郡朝日村方言〉

(10）コノ　ボーシワ　ダレントナイ（この帽子は誰のだ）
〈福岡県宗像郡津屋崎町方言〉

（以上、大野 1983）

それぞれの例文において下線を引いた部分、つまり、(8）の「ガ」、(9）の「アン」、(10）の「ト」が準体助詞である。これらは、いずれも「ノ」や「ン」といった連体格助詞に後接しており、(6）と同じような代名詞で、それが動詞ではなく連体格助詞に続いているのだととらえられる。

しかし、準体助詞が連体格助詞ではなく名詞に直接ついている例も見られる。

(11）コレワ　ワシ｛ノガ／ガ｝ヨ、ソレワ　オマエ｛ノガ／ガ｝ヨ
（これは私ので、それはおまえのだ）　〈愛媛県八幡浜市若山町方言〉

(12）コレ　ダーアンダヤ（これは誰のだ）　〈新潟県岩船郡朝日村方言〉

（以上、大野 1983）

(11）は（8）と同じ愛媛県八幡浜市若山町方言だが、名詞「ワシ」には準体助詞「ガ」が直接つくこともできる。(12）は（9）と同じ新潟県岩船郡朝日村方言だが、「ダー」（誰）には準体助詞「アン」が直接つく。

以上のように、方言によっては、名詞に準体助詞が直接つくことを考慮して、本研究では、(5）のような名詞につく「の」も準体助詞として扱う。ただ、(11）や（12）と違って、(5）の場合は「の」が連体格助詞なのか準体助詞なのか区別がつかない。その場合は、両方の性質をあわせ持った形式であると考える[1)]。

次に、(6）のような「の」についてだが、これは（11）や（12）のような準体助詞と同じく、特定の名詞の代わりとして使われている代名詞と言える。ただし、特定の名詞を指しているとは言いがたい例もある。

(13）生きがいというのは、自分がさだめた目標なり自分に課した使命に一歩ずつ近づいていることを確めたときの充実感であると思う。　（佐治 1991:192）

(13）において下線を引いた「の」は、特定の名詞に置き換えることはできず、「まさに実のない、形だけ、機能だけの」（佐治 1991:193）形式である。

そして、(7）の「の」は、直前までを名詞節としてまとめる働きをしている。この「の」は、特定の名詞の代わりをしているわけではないという点で（6）の「の」と異なる。以下

1） この点は、今井（1993）と同様の考え方であるが、今井のように、「連体形＋ノ」のノを「準体助詞」ではなく「形式名詞」とする考えは採用しない。

のように、(6) の「の」は「本」に置き換えられるが、(7) の「の」は「本」や「辞書」といった特定の名詞に置き換えられない[2)]。

(14) 私が買った｛の／本｝は辞書です。

(15) 私が辞書を買った｛の／*本｝を知っていますか。

また、「の」を連体修飾構造における主名詞と考えた場合、(14) は「内の関係」になっているが、(15) は「外の関係」になっている。このことからも、(14) の「の」は代名詞として機能しており、(15) の「の」は名詞化辞として機能していると言える。

以上をまとめると、準体助詞と呼ばれる「の」でも、(5) は代名詞（および連体格助詞）、(6) は代名詞、(7) は名詞化辞というように、それぞれ果たしている機能が異なるということになる。本研究では、これらをすべて準体助詞とする。機能が異なる形式に同じ名前をつけるのは問題があるかもしれない。しかし、これらがすべて「体言化」としてとらえられるという分析（柴谷 2009、Shibatani 2013、Shibatani & Makhashen 2009）もあるし、日本語のほとんどの方言において、(5) (6) (7) の下線部すべてで同じ形式が使用される[3)] ことも明らかになっている（大野 1983）。以上のことから、これらが形式の面でも機能の面でも密接に関係していることがわかる。本研究では、これを変化という視点でとらえるため、これらを広く「準体助詞」として扱う。

なお、ここで問題にしている「の」は、「形式名詞」と呼ばれることもある。しかし、本研究では、「準体助詞」を「形式名詞」と区別する。その根拠として、新永・下地（2010）や坂井（2012）でも示されている、「修飾要素なしで名詞句の主要部を構成し得るか」という点に注目する。「もの」や「こと」といった形式名詞は、常に何らかの修飾要素を伴う非自立的な語であるとされているが、単独で使われることがまったくないわけではない（奥津 1974:204）。

(16) *<u>もの</u>がある。

(17) <u>物</u>は大切にしなければならない。

「もの」が形式名詞であるとする根拠として、(16) のような例が挙げられることが多いが、(17) のように単独で名詞句の主要部になることもできる。一方、以下に示すように、「の」にはそれができない。

(18) *<u>の</u>がある。

(19) *<u>の</u>は大切にしなければならない。

この背景には、「の」が「もの」と比べて、語彙的な意味をほとんど持っていないということがある。(17) のような「もの」は形式名詞ではなく普通名詞として別に考え、(16) と (18) を比べて「もの」と「の」は同じと考えることもできる。しかし、ここで重要なのは、「の」

2) 別の名詞に置き換えるとすれば「コト」が当てはまるが、坪本（1984）、工藤（1985）、橋本（1990,1994）といった先行研究で明らかにされているように、いつでも置換可能というわけではない。

3) (5) には、(8) (9) (10) のような連体格助詞に後接するものも含む。

が普通名詞として使うことが絶対にできないということである。ここに、両者の決定的な違いがある[4)]。

2.2. コピュラ

次に、「コピュラ」の定義について述べる。本研究におけるコピュラとは、名詞が述語になる際に用いられ、必要に応じて語形変化する形式のことを指す。具体的には、標準語において「断定の助動詞」「判定詞」「指定詞」「繋辞動詞」などと呼ばれる、「だ」「である」に相当するものを指す。方言においては、「ダ」「デャ」「ジャ」「ヤ」といった形式で実現される。

しかし、田野村（2006）が指摘しているように、「受付は午前 9 時からだ」「あまり無理をするからだよ」「あの子が勉強はさっぱりだ」のように、コピュラは名詞句以外にも後接する。田野村が指摘するように、これは、単にコピュラの前の部分が「名詞扱い」されているためだというだけでは説明として不十分である。

また、名詞述語だからといってコピュラが必ずしも現れるとは限らない。特に、文末で非過去の場合、例えば「今何時？」という問いに対して、「9 時だ。」と答えることもできるが、「9 時。」のようにコピュラなしで答えることもできる。つまり、この場合、述語は名詞である「9 時」だが、その後にコピュラをつけなくても述語になるということである。

以上のことを踏まえて、本研究では、コピュラを「任意の語句が述語としてみなされるために付加される形式」と定義する。「任意の語句」としたのは、名詞以外にコピュラがつくという事実への対応である。「9 時から」のような語句にコピュラがつくのは、それが「名詞扱い」されるからではなく、述語化するためであると考える。動詞や形容詞は、それ自体が語形変化することで述語であることを表すが、名詞をはじめとするそれ以外の語にはそれができないため、コピュラを付加することによって述語であることを表す。しかし、述語が文末に位置する日本語においては、言いさしの文などを除いて、文末に位置する語は基本的に述語であるとみなされる。そのため、コピュラを付加しなくてもそれが述語であるということはわかる。文末でコピュラが現れないことがあるのはそのためである。しかし、語形変化をするとなるとどうしてもコピュラが必要になるのである。

2.3. ノダ相当形式

次に、「ノダ相当形式」について述べる。冒頭の（1）にも示したように、日本語学において一般に言う「ノダ文」は、準体助詞「の」とコピュラ「だ」が組み合わさったものとその変異形を指すが、本研究ではそれよりももう少し広い範囲を指す。具体的には、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持っている形式、および意味的に置換可能な形式である。ただし、置換可能であっても、準体助詞から変化したと考えられる形式に限る。以下では、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持つノダ相当形式の形式と意味の特徴を詳しく述べる。

4） なお、秋田県や青森県などの方言には、標準語の「やつ」に相当する語に由来するノダ相当形式がある（田附 2006, 2013、近藤 2013）。

2.3.1. 形式面の特徴

既に述べたように、標準語におけるノダとは、準体助詞にコピュラが組み合わさったものである。ただし、単に準体助詞とコピュラが連続するだけでなく、その組み合わせが 1 つのモダリティ形式になった（助動詞化した）ものを指す。

（20）これは昨日買ったのだ。　　【準体助詞（代名詞）＋コピュラ】

（21）昨日辞書を買ったのだ。　　【ノダ】

例えば、（20）は、「これは昨日買ったものだ」と解釈できる。これは、「の」が「もの」相当の準体助詞であり、それを主名詞とした名詞句にコピュラ「だ」が後接して述語になっていると解釈されるためである[5)]。一方、（21）の場合、それと同様の解釈はできない。この両者の違いは、三上（1953）や野田（1997）、加藤（2010）が指摘するように、ガノ交替によっても明らかである。

（22）これは昨日彼｛が／の｝買ったのだ。　　【準体助詞（代名詞）＋コピュラ】

（23）昨日彼｛が／*の｝辞書を買ったのだ。　　【ノダ】

「買った」の動作主を表すのに、（22）では「が」と「の」が両方使えるのに対して、（23）では「が」しか使えない。このことは、（23）では「の」という主名詞に「昨日彼が辞書を買った」という連体修飾節がかかるのではなく、「昨日彼が辞書を買った」という文に「のだ」というモダリティ形式が付加されているということを示している。

他にも、ノダが一語化しているということの表れとして、「の」と「だ」の間に別の要素を挟むことができないという点が挙げられる。

（24）残っているのは昨日買ってきたのだけだ。　　【準体助詞（代名詞）＋コピュラ】

（25）*昨日辞書を買ってきたのだけだ。　　【ノダ】

（24）では、準体助詞の「の」とコピュラの「だ」の間に「だけ」が挿入されても不適格にはならない（もちろん、「だけ」の意味も適格性に関係する）が、（25）ではそれができない。このことからも、ノダが単純に「準体助詞＋コピュラ」の連続ではなく、その組み合わせが一語化しているということがわかる。

しかし、一語化とは言っても、完全に固定しているわけではない。以下の（26）（27）のように、ノダは「だ」「である」がコピュラと同じように活用するし、（28）のように疑問文を作る際には「だ」が現れない。

（26）昨日辞書を買ってきたのではない。

（27）昨日辞書を買ってきたのだった。

（28）昨日辞書買ってきた｛*のだ／の／のか／*のだか｝？

5）もちろん、（20）の「の」が「もの」としてしか解釈されないというわけではない。むしろ、「もの」として解釈されることを意図した場合、「の」ではなく「もの」や「やつ」といった形式名詞を使うのが自然だと思われる。ここでは、（21）と比較して、（20）の「のだ」が「代名詞＋コピュラ」とも「ノダ」とも解釈できるということを言っているのである。

このことから、ノダは単なる「準体助詞＋コピュラ」の連続とは違うが、組み合わさって完全に固定化した形式でもないということがわかる。

2.3.2. 意味面の特徴

次に、ノダ相当形式が持つ意味について述べる。ノダの意味については、これまでに日本語学や日本語教育の分野で多くの研究が積み重ねられてきた。中でも、田野村（1990）、名嶋（2007）、井島（2010）など、ノダの「本質的な意味・機能」を統一的に説明しようとした研究が多い。野田（1997）もそうしたアプローチの研究ではあるが、ノダを「スコープのノダ」と「ムードのノダ」の 2 つに大きく分けている点にその特色がある。さらに、「ムードのノダ」は「対事的ムードのノダ」と「対人的ムードのノダ」に分けることができる。本研究では、この「対事的」と「対人的」の区別を重視したいため、ノダの意味に関しては、野田（1997）の枠組みを援用する。以下、野田の枠組みについて説明する。

既に述べたように、野田はノダを「スコープのノダ」と「ムードのノダ」に大きく分けた。前者は、ノダの直前までの部分を名詞化することにより、否定や疑問などのスコープを広げるというものである。

（29）*悲しくて泣かなかった。

（30）［悲しくて泣いた］んじゃない。

（29）では、下線部の「悲しくて」を否定の焦点として解釈することはできない。つまり、「泣いたのは泣いたが、それは悲しかったからではない」という意味では解釈できない。それは、述語につく否定辞「ない」が、通常は述語で表される事態の実現しか否定できないからである。一方、ノダを用いた（30）では、「の」が直前までの「悲しくて泣いた」を名詞化することで、その名詞節全体まで否定のスコープを広げることができる。そのため、下線部の「悲しくて」を否定の焦点にすることができるのである。スコープのノダとは、このように直前までを名詞化することで、否定や疑問のスコープを広げるものを言う。

一方、「ムードのノダ」とは、文を名詞化することで話し手の心的態度を表すものである。この「ムードのノダ」は、先行発話や文脈と関連づけるかどうかと、聞き手目当てかどうかという 2 つの基準で以下のように十字分類される。

表 1-1　ムードのノダの分類（野田 1997:67）

	対事的ムードのノダ	対人的ムードのノダ
関係づけ	Pの事情・意味として Qを把握する	Pの事情・意味として Qを提示する
非関係づけ	Qを（既定の事態として） 把握する	Qを（既定の事態として） 提示する

（31）山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。　【対事的・関係づけ】

（32）そうか、このスイッチを押すんだ。　【対事的・非関係づけ】

（33）僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。　　【対人的・関係づけ】

（34）実は今度結婚するんだ。　　【対人的・非関係づけ】

表 1-1 において、P は先行発話や文脈を表し、Q はノダの直前までの内容を表す。つまり、典型的には「P。Q ノダ」の形をとっている。Q を P の事情や意味として表すのが「関係づけ」で、P に当たるものが特になく、Q を既定の事態として表すのが「非関係づけ」である。上の例文では、（31）と（33）が関係づけ、（32）と（34）が非関係づけに当たる。そして、対事的ムードと対人的ムードの違いは、話し手が Q を把握するか聞き手に提示するかという違いである。対事的ムードのノダは聞き手目当てではないが、対人的ムードのノダは聞き手が必要である。上の例文では、（31）と（32）が対事的ムードのノダで、（33）と（34）が対人的ムードのノダに当たる。なお、森山（1992）や幸松（2012）で指摘されているように、対事的ムードのノダは、比較的最近使われるようになった。

以上を踏まえて、本研究ではノダ相当形式の意味を〈対事〉と〈対人〉に分ける。この分類を用いるのは、複数のノダ相当形式を持つ方言においては、その使い分けの基準が〈対事〉か〈対人〉かという区別であることが多いからである。また、野田（1997）の〈対事〉と〈対人〉の区別は、主に平叙文を想定しているようだが、本研究では疑問文の場合についても以下のように〈対事〉と〈対人〉を区別する。

（35）（あの人が帰ったと聞いて）そうか、あの人、もう帰ったのか。　〈対事〉

（36）（相手に尋ねる）あの人、もう帰ったの？　〈対人〉

なお、「関係づけ」については、本研究では基本的に扱わない。この「関係づけ」がノダ相当形式の使用において重要な要因になっているとは思われるものの、「関係づけ」という用語で説明できることとそうでないことがあると判断し、ノダ全体に関わる要素として考えることはしない（第 4 章で少し言及する）。

2.4. 様々なノダ相当形式

最後に、2.3 節で整理したのとは異なるノダ相当形式について述べる。本章冒頭でも述べたように、ノダ相当形式の中には、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持っていないが、そこから変化してできたと考えられ、意味的に置換可能であるという形式が存在する。

（37）今から学校に行くガヤ。　　【石川方言】

（38）今から学校に行くゲン。　　【石川方言】

例えば、石川方言の例である（37）において、下線部の「ガヤ」はこの方言の準体助詞である「ガ[6]」とコピュラの「ヤ」から成っている。これは、2.3 節で整理したような「準体助詞＋コピュラ」のノダ相当形式である。一方、（38）の「ゲン」は、石川方言において準体助詞として使われることはなく、ノダ相当形式としてのみ使用される。また、コピュラも伴っていない。したがって、この「ゲン」は「ガヤ」とは少し異なっており、同じものとしてはとらえられない。しかし、（37）と（38）は意味的におおむね置換可能であり、新旧の関係

6）当方言の語中におけるガ行子音は鼻音である。

にある。したがって、(38)の「ゲン」のようなものも、「準体助詞＋コピュラ」とは異なった性質を持っているものの、「ノダ相当形式」とみなす。

以上のように、本研究で言う「ノダ相当形式」の中には、「準体助詞＋コピュラ」の構成をかつては持っていたものの、その構成をもはや失ったものも含まれる。しかし、「準体助詞＋コピュラ」の構成を失っているとは言っても、その失い方は一様ではない。

(39) 今日は用事があるんだ。
(40) 今日は用事あんネヤ。　【大阪方言】
(41) 今日は用事あるガ。　【富山方言】
(42) 今日は用事があるゲン。　【石川方言】
(43) 今日は用事がアリン。　【石川（能登）方言】

(40)から(43)は、(39)の標準語の文を各方言に訳したものである。(39)は標準語の例で、準体助詞「ん」とコピュラ「だ」に分けることができ、その構成を保っていると言える。しかし、「ん」は「の」の変異形と思われるが、準体助詞としての用法では「ん」にならない、つまり、「彼が走っているんを見た」のようには言わないのが普通である[7)]。この点において、(39)の「んだ」が単純に「準体助詞＋コピュラ」の連続ではないことがわかる。このことは、2.3.1節で述べた「一語化」と関係する。

次に、(40)は大阪方言の「ネヤ」の例である[8)]。この「ネヤ」は「ヤ」がコピュラと同形で、「ネヤッタ」のようにコピュラと同様に活用するが、「ネ」は準体助詞ではない。したがって、以下のように名詞句を作る際に「ネ」を使うことはできない。

(44) あの人走ってん｛ノ／*ネ｝見た。　【大阪方言】

また、「ヤ」がついているが、疑問文にはなれない。

(45) もう帰ん｛ノ／*ネ｝？　【大阪方言】

以上のように、(40)の「ネヤ」は、コピュラ「ヤ」の性質を残してはいるが、準体助詞は既に残っていない。このことから、(39)の「んだ」よりも「準体助詞＋コピュラ」から離れていると言える。

次の(41)は富山方言の例である。この例文は聞き手に問いかけているのではなく、聞き手に説明しているものである。ここでは、文末に準体助詞に「ガ」がコピュラなしで用いられている。この場合、コピュラはなく、「準体助詞＋コピュラ」とは言えないが、準体助詞の「ガ」が残っているし、語形変化する際には「ガヤッタ」コピュラの「ヤ」が現れる。したがって、この「ガ」は、文末言い切り・非過去の場合に限ってコピュラが現れていないだけであり、標準語の「の」も同様である。

(42)と(43)の例は、準体助詞もコピュラもその形を残していないタイプである。(42)は本章冒頭の(4)に示した大阪方言の「ネン」と同様に、準体助詞もコピュラも認められ

7) この音変化が実際に起こるかどうかについては、スタイルや標準語というものの位置づけにも関わる問題ではあるが、少なくとも「んだ」と同じレベルで起こる変化ではないと思われる。
8) 詳細は第4章で述べるが、大阪方言の「ネヤ」は、撥音の直後に現れやすい。(40)の「あんネヤ」の「あん」は、動詞「ある」が音変化したものである。

ない形式である。そして、(43) は、動詞の語幹につく形式で、-iN という接辞の形式をとっている（ar-iN)。ここには準体助詞もコピュラもない。

以上のように、ノダ相当形式とは言っても、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持っているものと、その性質を失っているものがあり、その中でも「準体助詞＋コピュラ」とどの程度かけ離れているかの度合いが形式によって異なることがわかる。本研究は、その度合いが方言によって、形式によってどのように異なり、それらがどのような関係にあるのかということを問題にする。それは、本研究が「準体助詞がコピュラと組み合わさって文法化した形式が、その後さらにどのような変化を遂げるのか」ということに注目するからである。2.1 節でも言及したように、準体助詞は「もの」や「こと」といった形式名詞とは違って、もともと語彙的な意味がほとんどなく、名詞化という機能を持っているのみである。そのような形式が談話的な機能を獲得し、それがさらなる変化を遂げるというのが、本研究が扱う変化である。

3. 本研究の目的

ここまで、本研究のキーワードとなる「準体助詞」「コピュラ」「ノダ相当形式」について述べてきた。最後に、改めて本研究の目的を述べておく。本研究では、日本語諸方言のうち、ノダ相当形式の変化が著しい方言として大阪方言と石川方言を取り上げ、それらについて以下のことを明らかにすることを目的とする。

① 大阪方言と石川方言では、どのようなノダ相当形式がどのように使用されているのか。
② 大阪方言と石川方言において、どのような過程を経て①で明らかにしたようなノダ相当形式の体系を持つに至ったのか。
③ 大阪方言と石川方言のノダ相当形式について、その変化の過程や結果にどのような共通点・相違点があるのか。
④ そのような体系や変化は、日本語諸方言や他言語のノダ相当形式と比べて、どのように位置づけられるのか。
⑤ 大阪方言や石川方言と、ノダ相当形式にそのような変化を起こしていない方言とでは何が違うのか。

①については、第 4 章と第 6 章で取り上げ、②については第 5 章と第 7 章で取り上げる。それらを踏まえたうえで、③④⑤の内容を第 8 章で考察する。

以上のことを明らかにするに当たって、本論文を以下の 4 部構成とする。

第Ⅰ部　序論
第Ⅱ部　大阪方言におけるノダ相当形式の発展
第Ⅲ部　石川方言におけるノダ相当形式の発展
第Ⅳ部　結論

第Ⅰ部では、序論として本研究の目的や位置づけについて述べる。また、本研究で主な対象とする 2 つの方言について記述する前に、他の方言についても概観しておく。第Ⅱ部と第Ⅲ

部はそれぞれ大阪方言と石川方言に関する記述であり、それぞれノダ相当形式の体系の実態記述とその成立過程の考察から成る。第Ⅳ部は本研究の結論であり、第Ⅱ部と第Ⅲ部の内容を踏まえて、両方言の対照や位置づけについて考察し、本論文の結論とする。

第2章　先行研究の概観と本研究の位置づけ

1.　はじめに

本章では、先行研究を概観し、本研究をその中に位置づける。第 1 章で述べたように、本研究は、日本語諸方言のうち、「準体助詞＋コピュラ」から変化したノダ相当形式を持っている方言に特に注目し、その変化のあり方を記述した上で、その個別性と一般性を明らかにしようとするものである。したがって、本章では、ノダ相当形式や形式名詞の変化を扱った先行研究を中心に取り上げることになる。

本章の構成は以下のとおりである。まず 2 節では、日本語における準体助詞やノダ文の先行研究を取り上げる。次の 3 節では、他の言語、特にアジアの言語における名詞化辞の機能拡張に関する研究を取り上げる。4 節では、関連する研究として、形式名詞の文法化に関する研究を取り上げる。そして、以上を踏まえて、5 節で本研究の位置づけについて述べる。

2.　日本語の準体助詞・ノダ文に関する研究

本節では、日本語の準体助詞やノダ文に関する研究を取り上げる。具体的には、第 1 章で挙げた佐治（1969）や野田（1997）を含む、現代語の記述的研究（2.1 節）と、歴史的研究を含む、変化に注目した研究（2.2 節）に分けて整理する。

2.1.　現代語の記述的研究

ここからは、現代語における準体助詞の記述的研究を整理していくが、ここで言う現代語とは、標準語だけでなく方言も含む。方言文法の他の分野にも言えることだが、方言の研究は標準語の研究成果に基づいていることが多く、ここで取り上げる準体助詞やノダ文についても例外ではない。それもあってか、標準語と方言とでは、研究の傾向が異なるところがあるので、以下では標準語の研究と方言の研究に分けて整理する。

2.1.1.　標準語

第 1 章でも述べたように、日本語学・国語学における「準体助詞」という用語は橋本（1934）が初出とされており、それ以降、準体助詞に関して様々な研究が進められてきた。佐治（1969, 1972）や今井（1993）のように、準体助詞の性質を記述したり文法の中に位置づけたりする研究も見られるが、「こと」と対照して、埋め込み文においてどちらが使用されるかという問題が扱われることも多い（坪本 1984、工藤 1985、橋本 1990, 1994 など）。

このように、標準語においては、準体助詞の記述的研究が古くから行われてきた。そして、ノダ文の研究については、さらに多くの蓄積がある。古くは国立国語研究所編（1951）や三上（1953）、林（1964）などによって、ノダ文の性質が広く明らかにされ、ノダ文が「説明」というとらえ方をされるようになった。そして、1980 年代から 90 年代にかけて、ノダの意味とは何かというテーマが主流になり、多くの論考が積み重ねられてきた（山口 1975、紙

谷 1981、奥田 1990、菊地 2000 など)。そして、その集大成とも言えるのが、田野村（1990）や野田（1997）といった著書である。これらは数あるノダ文研究の中でもまとまったものとして頻繁に引用されてきた。しかし、それ以降も、名嶋（2007)、藤城（2007)、井島（2010, 2011）など、ノダ文の意味に関する研究は行われている。

以上のように、標準語研究においては、名詞句を作る準体助詞とノダ文とは、別々に研究されてきた。もちろん、両者の関係については言及されることも多く、例えば野田（1997）は、文を名詞文にするというのを準体助詞の基本的な機能として、ノダ文は名詞文と平行的にとらえられるという姿勢でノダの意味を記述している。また、国広（1992）は「の」の意義素を設定し、そこから「のだ」「ので」「のに」といった派生形式の意味を説明するというアプローチをとっているし、坪根（1994b）や佐治（1972）は「の」を「もの」や「こと」と比較し、そこから「のだ」と「ものだ」「ことだ」との違いを明らかにするというアプローチをとっている。このように、準体助詞とノダ文が全く無関係に研究されてきたわけではないが、多くはやはりノダ文の意味・機能を明らかにするという研究である。

とはいえ、ノダ文の意味・機能を記述するとなると、文脈や発話場面といった語用論的な条件を考慮しなければならず、単に名詞を扱うのとは違ったアプローチが必要になるため、名詞句とノダ文の研究が別々に行われるようになったのも自然な流れと言える。しかも、ノダ文について多くの研究が行われた背景には、日本語教育への応用ということがある。日本語におけるノダは使用する場面が広く、かなり頻繁に使用されるため、「ノダとはこういう意味だ」と学習者に示すのが非常に難しいからである。

以上、標準語の準体助詞の記述的研究においては、ノダ文の意味記述がその中心であり、現在でも研究が進められているということを述べた。

2.1.2. 方言

方言における準体助詞の記述的研究では、ノダ文を別に扱うのではなく、「ノデ」や「ノニ」まで含めて 1 つの方言の準体助詞を記述するというものが多い。例えば、長崎方言（愛宕 1976)、高知市方言（上野 1992)、新潟県新津市古津方言（大橋 1988)、熊本市方言（坂井 2012）などがある。また、大野（1983）は、日本全国の方言を対象に、連体格助詞および準体助詞にどのような形式を用いるかを記述した。この記述は、大野（1984）において連体格助詞から準体助詞への変化を論じるためのものだったが、非常に多くの方言を対象としており、記述的研究としてもその価値は高い。全国方言の準体助詞の分布を扱った研究には、他に彦坂（2006a,b）や大西（2013）などがあるが、これらもやはり方言の分布から変化を説明づけるというアプローチをとっている研究である。

一方、標準語において盛んに行われているノダ文の意味・機能を記述するタイプの研究は、方言にもある。このタイプの研究で取り上げられている方言の多くは、複数のノダ相当形式を持つとされている方言である。京都市方言の「ノヤ」と「ネン」(松丸 1999)、富山県井波方言の「ガヤ」と「ガイ（ゲー)」(井上 2006a, b)、金沢方言の「ガヤ」と「ゲン」「ガン」など（新田 2004）のように、「ノヤ」「ガヤ」などの「準体助詞＋コピュラ」の構成を持った

形式と、「ネン」「ゲン」のようにそれとは少し異なった形式の違いを記述している。また、青森県五所川原市方言の「ンズ」（田附 2006, 2013）や秋田県男鹿方言の「-azi」（近藤 2013）のように、形式名詞の「奴」に由来しているとされるものもある。

井上（2006b）は、松丸（1999）による京都市方言の記述と村田（2003）による宮崎方言の記述をもとに、各方言のノダ相当形式対照して以下のようにまとめている。なお、この表 2-1 は井上のものに田附（2013）が五所川原方言を追加したものである。

表 2-1　各方言のノダ相当形式の機能分布（田附 2013:56）

<table>
<tr><td></td><td>共通語</td><td colspan="2">京都市方言</td><td colspan="2">井波方言</td><td colspan="2">宮崎方言</td><td colspan="2">五所川原市方言</td></tr>
<tr><td>実情説明</td><td rowspan="2">のだ。</td><td>ネン。</td><td rowspan="2">ノヤ。</td><td>ガイ(ゲー)。</td><td></td><td>ト。</td><td></td><td>ンズ。</td><td rowspan="2">ンダ。</td></tr>
<tr><td>実情理解</td><td></td><td></td><td>ガヤ。</td><td></td><td>チャ。</td><td></td></tr>
</table>

表 2-1 の「実情説明」と「実情理解」は、本研究における〈対人〉と〈対事〉におおむね対応する。これをもとに、井上は次のような仮説を立てている。

（1）「のだ」相当形式に、活用のある形式（例：井波方言「ガヤ」）と、活用のない形式（例：井波方言「ガイ」）とがある場合、活用のない「のだ」相当形式の意味は「実情説明」に特化される。（井上 2006b:153）

そして、この問題は、文法化の観点から見て興味深い問題であり、より多くの方言について調べる価値があると指摘している。また、新田（2004）も、金沢方言におけるノダ相当形式を整理した上で、若年層に起きている変化が文法化という観点からとらえ、注目に値すると指摘している。こういった井上や新田の問題意識は、本研究と非常に重なるものである。

以上のように、方言における準体助詞・ノダ文の記述的研究は、1 つの方言の準体助詞を詳細に記述する研究、歴史を明らかにするために準体助詞の全国分布を明らかにする研究、ノダ専用形式の意味記述を行う研究の 3 つに大きく分類でき、本研究は最後の意味記述に近い研究であると言える。

2.2. 準体助詞の変化に関する研究

次に、準体助詞の変化に関する研究について整理するが、まずは以下の 2 つに分ける。

① 準体助詞の成立に関する歴史的研究

② 共時態の体系から変化の過程を想定する研究

①は通時的な研究で、②は共時的な研究である。そして、本研究は②に近いが、準体助詞の文法化という現象を扱うに当たって、①については触れておく必要があるため、以下で簡単に述べる。

2.2.1. 準体助詞の成立に関する歴史的研究

第 1 章で述べたように、現代語における準体助詞は、名詞化という機能を中心に、様々な機能を持つ形式である。しかし、古代語にこの準体助詞は存在せず、用言の連体形が体言相

当の働きをしていた。

(2) 世界の男、[貴なる]も[賤しき]も、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、をとに聞きめでてまどふ。

(3) むかし、[月日のゆく]をさへ歎くおとこ…

(2)では、助詞「も」が後接していることからもわかるように、用言連体形の「貴なる」「賤しき」がそれぞれ単独で名詞として働いている。一方、(3)は「ゆく」という連体形が単独で体言として働いているのではなく、[ ]で囲んだ「月日のゆく」という句を1つの名詞句にする働きをしている。現代語では準体助詞「の」を後接させて表すが、古代語ではそれを用言の連体形が行っていた。このような構造は、石垣(1955)や近藤(2000)、山口(2000)などによって記述されてきた。

そして、日本語史の分野においては、(2)や(3)のような連体形準体法から準体助詞付加型の準体法への変遷が注目され、多くの研究が行われてきた。特に、準体助詞「ノ」がなぜ出現したのか(柳田 1993a,b、山口 2000、田上 1999 など)、準体助詞はどこから使われるようになったのか(吉川 1950、原口 1978、青木 2005 など)といった問題について盛んに議論されてきた。

これらの研究においては、主に名詞句を作る準体助詞を対象としており、ノダ文については周辺的な問題として扱われることが多かった。これには、山口(2000:105)が指摘するように、「ノダ」や「ノデ」「ノニ」を作る「ノ」は、名詞句を作る準体助詞とは別の役割を担っており、分けて考えるべきであると考えられていることがその背景にあるのだろう。しかし、現代語のノダに当たる、述部における準体助詞についても研究は行われている。福田(1998)、北原(1966)、高山(1990)、神田(2005)、青木(2011)などが主だったものだが、いわゆる「連体ナリ」との関係をどうとらえるかで見解が分かれている。

以上、日本語史における準体助詞の研究について、ごく簡単に概観した。本研究は、日本語史のような長いスパンの変化を問題にする研究ではないし、本研究の主たる対象は、準体助詞が成立してさらに変化を起こすという現象であるため、ここで概観した研究とは直接の関係はない。しかし、本研究で扱う新しいノダ相当形式も、あくまで準体助詞から変化してきたものであるという前提に立っているため、まずは変化の全体像をとらえるという意図で、歴史的研究を概観した。

2.2.2. 共時態の体系から変化の過程を想定する研究

この種の研究は、日本語史のような長いスパンのデータをもとに変遷を描くのではなく、現在の体系を記述し、そこから変化の過程を想定するというもので、本研究のとるアプローチに近い。特に、文法化の研究によく見られる手法である。日本語の準体助詞に関しては、Horie (1998) が挙げられる。Horie は、現代日本語の「ノ」の統語的機能とその意味に注目し、次のようにまとめた。

表 2-2　現代日本語における「ノ」の統語的・意味的多様性

統語的機能	形	名詞句の意味	例文
genitive	N ノ N	person-thing	先生ノ机
pronoun	N ノ	thing	その本は僕ノです。
	Pred ノ	thing	その赤いノをこっちにください。
sentential nominalizer	Pred ノ	event	タクシーが歩行者をはねるノを見た。
	Pred ノ	proposition	首相が逮捕されたノを知った。

Nは名詞、Predは述語のこと。　（Horie 1998:175をもとに作成）

これは、本論文の第 1 章 2.1 節で述べた準体助詞について詳細に分類したものである。「ノ」の文法化は、この表 2-2 の上から下へと順に進んでいくと想定した。そして、そのさらに下には「ノニ」「ノデ」といった接続助詞や、分裂文、主部内在型関係節、ノダなどが位置付けられる。

Horie はさらに、この文法化のあり方を、中国語や韓国語など、他の言語と対照し、中国語の de や韓国語の kes との類似点および相違点を指摘した。

（4）　*wo　de　chenshan*　　【中国語】
I　shirt
'my shirt'

（5）　*Youyong　de　hen　duo.*　　【中国語】
swim　very　numerous
'There are many people who swims.'

（6）　*wo　mei　xiangdao* (*de)　[*ni　zhu　zai　Niuyue*].　　【中国語】
I　NEG realize　you live in　New York
'I didn't realize you lived in New York.'　（以上、Horie 1998:176-7）

（4）（5）（6）はすべて中国語の例である[1)]。（4）では de が一人称代名詞の後について属格助詞として機能している。（5）では de が「人」という名詞の代わりをしており、直前の動詞と合わせて「泳ぐ人」の意味になっている。しかし、（6）では、[　] 内を名詞節としてまとめるために、直前に de を置くことはできない。つまり、中国語の de は、日本語の「の」が持つ、名詞節を作る機能は持っていないのである。

（7）[*Cheyksan wiey　issun　kes*]-*ul　cwuse-yo.*　　【韓国語】
desk　on　be-ADN:PRES　ACC give me-MOOD
'Please give me the one on the desk.'

1）　例文のグロスおよび訳は原文をそのまま引用したが、他の先行研究と合わせるために変更しているところがある。本論文で使用しているグロスについては、本論文の冒頭を参照されたい。なお、中国語の声調記号は省略した。

（8） *Na-nun* [*ku salam-ka piano-lul ci-nun kes*]*-ul tul-ess-ta*.【韓国語】
I-TOP that person-NOM piano-ACC play-ADN:PRES ACC hear-PST-MOOD
‘I heard him playing the piano.’ （以上、Horie 1998:178）

（7）と（8）は韓国語の例文である。（7）では kes が代名詞（机の上にある「もの」）として機能しており、（8）では[ ] 内を名詞節としてまとめる機能を果たしている。どちらも日本語の「の」と共通した使い方である。しかし、この kes は属格助詞としては機能しない。

（9） *Kim-sensayng* (*uy*) *chayk* 【韓国語】
Kim-teacher GEN book
‘Professor Kim’s book’

（10） **Kim-sensayng uy* 【韓国語】
‘Professor Kim’s’

（11） *Ceyil cohng ke-n nay-ke-mni ta* 【韓国語】
first good TOP I COP:HON MOOD
‘The best one is mine.’ （以上、Horie 1998:177-8）

（9）に示したように、韓国語の属格助詞は kes ではなく uy であり、これは省略されることが多い。逆に、（10）のように、uy が「～のもの」相当の準体助詞として機能することはできず、（11）のように kes を使う[2)]。

以上のような対照に基づき、統語的機能と言語による違いを次のようにまとめた。

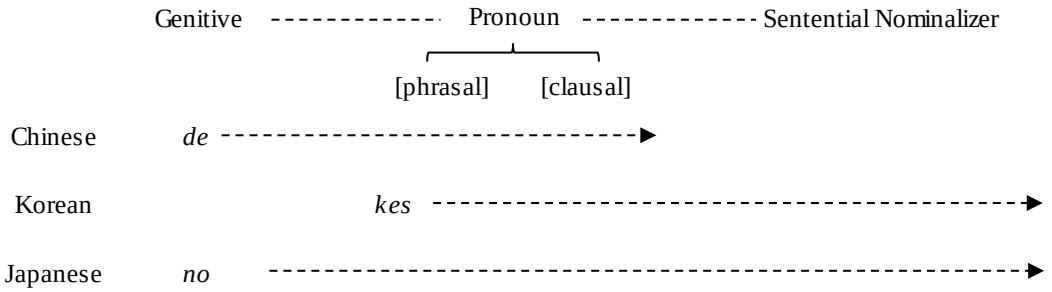


図 2-1　統語的機能の連続と言語間の違い（Horie 1998:178 を一部改変）

図 2-1 は、中国語の de、韓国語の kes、日本語の「の」の統語的機能を表したものである。これは先ほどの表 2-2 と対応しており、破線の矢印は、その形式が持っている機能を表している。これを見ると、de と kes は「の」の機能のそれぞれ一部を担当していることがわかる。そして、形式による切り分け方は言語によって異なるが、これら 3 つの機能は連続しているという仮説を立てた。そして、それを文法化という視点で見ると、図 2-1 の左から右へという変化が想定できるとした。

以上のように、Horie (1998) は、日本語史のような通時的なデータを用いてはいないが、

2） （11）の ke は kes の口語形である。

他言語と対照するなどの方法で、変化の方向性を考察することを試みた。このように、日本語以外の言語における準体助詞（名詞化辞）の研究もあり、日本語との類似点が数多く見られる。次節では、主にアジアの言語における名詞化辞の機能拡張に関する研究を整理する。

3. 他言語における名詞化辞の機能拡張に関する研究

ここまで述べてきたように、日本語の準体助詞は、名詞化だけでなく、モダリティや接続助詞など、様々な機能を持つに至っている。そしてそれは、Horie (1998) にみたように、日本語以外の言語にも見られる現象である。

そのような類似性が指摘される端緒となったのは、Matisoff (1972) である。Matisoff は、東南アジアで話されているラフ語において、名詞化の働きをする形式が、名詞化以上の機能を果たすということを指摘した。特に ve という形式は、従属用法（属格、関係節）、埋め込み節用法、主節末用法といった用法を持っている。

（12）*ŋà ve mí-chɔ*
I shoulder-bag
‘my shoulder-bag’

（13）*ɔ-šɨ tɔ̂ʔ la ve thà nɔ̀ mâ ɣa mɔ̀ lâ*
blood emerge come NMZ ACC you NEG get see Q
‘Didn’t you see that blood was coming out?’

（14）*vàʔ qhe chu ve Pîchɔ̂-pā ô tê ɣâ*
pig as fat NMZ Shan that one person
‘that Shan over there who’s fat as a pig’

（12）から（14）はいずれもラフ語の文である[3)]。（12）では、ve が属格助詞として機能している。（13）では、ve が直前までの *ɔ-šɨ tɔ̂ʔ la* を名詞節として統合し、補足節を形成している。このことは、直後に対格マーカーが続いていることからもわかる。つまり、属格助詞としても機能するラフ語の ve は、日本語の準体助詞と同様に名詞節を形成する機能を持っているということである。さらに、（14）における ve は、（13）と同じように、直前までの部分をまとめているように見えるが、後に続くのは格マーカーではなく名詞である。（14）においては、ve によって統合された節が、直後の名詞を修飾する関係節になっているのである。

以上のように、ラフ語では、名詞化の機能を果たす ve という形態素が、関係節を作るという機能も果たしている。これと類似の現象はアジアの諸言語に見られ、チャンテル語（Noonan 1997）、トゥルン語（Lahaussois 2003）、アンガミ語、ロタ語（アンガミ語、ロタ語ともに Herrig 1991）、中国語の潮州（Chaozhou）方言（Xu & Matthews 2011）など、多くの言語に共通して見られる。このことから、名詞化と関係節の関係について、盛んに議論されている。

3） Matisoff (1972) では詳細なグロスが付されていないので、Noonan (1997) から引用した。

しかし、名詞化の機能を持つ形式が機能を拡張させているのは、何も関係節化に限ったことではない。本研究のテーマとして扱うモダリティ化もそのひとつである。Yap et al (2011) などにおいてスタンスマーカー（stance marker）とされるのがそれに当たる。例えば、広東語の ge3 は文末でスタンスマーカーとして働くという（Sio 2011）。

（15）*hou2 sau3 ge3 zyu1*
very thin NMZ pig
'very thin pig (s) ' （Sio 2011:128）

（16）*hung5sik6 ge3 hai6 peng4wo2*
red NMZ COP apple
'The red ones are apples.' （Sio 2011:132）

（17）*Peter zung1ji3 sik6 lau4lin4 ge3*
Peter like eat durian NMZ
'Peter likes to eat durians.' （Sio 2011:135）

（15）は ge3 が修飾語句と被修飾名詞の間で使われている例で、前から後ろに修飾関係があることを表している。(16) は (15) の被修飾名詞がない構造とされており、「赤いの」の「の」に当たる代名詞の役割を果たしている。この場合、ge3 は名詞化の機能を果たしていると言える。しかし、この ge3 は（17）のように文末で使うこともできる。Sio (2011:135) によると、(17) の文は、ge3 を使わない場合に比べて、「命題内容が真だという話し手の確信が込められ」ており、「突然言うことはできない」という。また、「命題内容が文脈に関係のあることであるという含みを持つ」という。これはもはや名詞化という機能でとらえられるものではなく、モダリティ形式として位置付けられる。

同様に、名詞化の機能を持った形式が文末で特別な意味を表す例は他の言語にもある。例えば、マレー語の punya という形式は（18）のように代名詞としても（19）のように文末のスタンスマーカーとしても働くという（Yap et al 2004）。

（18）(*yang*) *koyak punya*
NMZ torn PN
'that which is torn'

（19）*Itu masuk punya*
DEM enter STANCE
'That/It was sure to go in.' （Yap et al 2004:158）

（19）の英語訳からもわかるように、文末で punya を使うと、命題内容に対する話し手の確信の強さを表す。詳細な意味はともかく、これは日本語のノダ文に通じるところがある。

ネパールのマガル語では、かつては生産的な名詞化辞だった-o が意外性（mirativity）を表すことがあるという（Grunow-Hårsta 2009）。

（20）*phe-nam-o*
CAUS?-flat-NMZ
'level ground ~ horizon' （Grunow-Hårsta 2009:39）

（21）*ka-yak-iŋ janai bu-mo sya jya-ke rʌ mudda ga-ke*
one-day-ABL sacred.thread wear-SEQ meat eat-NMZ and alcohol drink-NMZ
ma-ɕɦanɦ-o=le-a
NEG-become-NMZ=COP-PST
'In the old days, the members of the upper castes who wore a sacred thread did not use to eat meat or drink alcohol.' （Grunow-Hårsta 2009:39）

（22）*bɦoya-e bul-ke gɦon-a rʌ ma-jik-o=le*
younger.brother snake-DAT pick.up-PST and NEG-bite-NMZ=COP
(To my suprise) 'Younger brother picked up the snake and it didn't bite him!'
（Grunow-Hårsta 2009:40）

-o はかつては生産的な名詞化辞だったが、現在では（20）のような一部の語彙に化石的に残っているのみであるという。しかし、現在では（21）のように習慣（habitual）アスペクトを表したり、（22）のように、意外性を表すこともあるという。一方、-cyo（-cʌ）という形式は、生産的な名詞化辞として機能し、代名詞や関係節マーカーとして働く。

（23）*ɾam rʌ ʃita rup-cyo-ko ale*
Ram and Sita sew-NMZ-PL COP
'Ram and Sita are tailors.'

（24）[*ŋa-o bɦoya-ke dus-cʌ bɦormi*] *taɦ-raɦ-a*
1SG-GEN younger.brother-DAT help-NMZ person reach-com-PST
'The man who helped my younger brother arrived.'

（23）の-cyo は、動詞に後接して「〜する人」という意味の名詞句を作っている。一方、（24）では、-cʌ が関係節マーカーとして働いており、直後の名詞を主名詞として [ ] で示された名詞節ができている。

（25）*cituwa raɦ-a rʌ mi-ja-ke sat-a rʌ kher-ak-cʌ*
leopard come-PST and POSS-child-DAT kill-PST and run-CAUS-NMZ
'The leopard came, killed the baby and ran away with it!'

しかし、（25）のように、-cʌ は文末で話し手の意外性を表すのにも使われる。以上のような、-o や-cʌ が「意外性」を表すのは、日本語のノダの〈対事〉に関連すると思われる。

以上のように、名詞化辞が様々な機能を派生させるという現象は、アジアの言語を中心とした多くの言語に見られ、その過程に共通性も見られる。次の図 2-2 は、東アジアの諸言語における名詞化辞の文法化のルートを描いたものである。

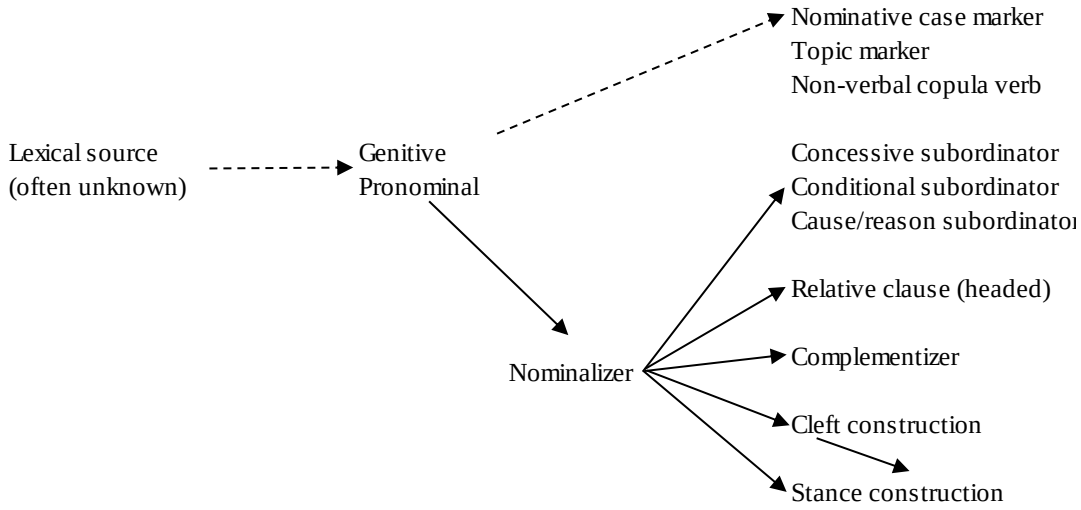


図 2-2　東アジアの諸言語における名詞化辞の文法化のルート（Yap & Matthews 2008:328）

これはあくまでモデルのようなものであり、すべての言語にこのルートが当てはまるわけではない。本研究で取り上げる大阪方言と石川方言におけるノダ相当形式の変化は、この図における Cleft construction および Stance construction に関係が深く、本研究で取り上げるノダ専用形式はその変化の先にあるものと思われる。

4. 形式名詞の文法化

第 1 章で述べたように、本研究では準体助詞というものを、「もの」や「こと」といった形式名詞とは区別する。しかし、日本語の形式名詞は、準体助詞と同様に、コピュラを伴ってモダリティ形式になるという文法化を起こしている。この変化は、準体助詞と平行的にとらえることができるため、ここで言及しておく。

標準語の「ものだ」「ことだ」「わけだ」といった形式名詞由来のモダリティ形式については、ノダ文と同様に、その意味を明らかにしようとする研究が多い。例えば、坪根（1994a）は、「ものだ」の用法を「本性・本質」「当為」「説明・解説」「過去の習慣・回想」「感情・感慨」の 5 つに分け、これらに共通する意味として、「一般性」という性質があると述べている。そして、坪根（1996b）では、「ものなら」「ものの」「ものを」といった表現にも、この性質が共通していると述べている。

「わけだ」についても同様に、統一的な意味記述を行う先行研究が多い（寺村 1984、劉 1996、北川 1995、横田 2001）。その主張の細部は異なるが、いずれの研究も、先行発話や文脈である P を前提として Q が導かれるということを表すのが「わけだ」の基本的な意味だとするという点はおおむね一致している。これはノダが表す意味に近く、両者を対照して、その意味の違いを考察している研究も多い（松岡 1987, 1993、野田 2002、益岡 1991, 2001 など）。

以上のように、日本語学においては、形式名詞＋コピュラからできているモダリティ形式の「基本的な意味」を記述することで、様々な「用法」を統一的に説明しようとする研究が

多い。しかし、形式や意味の面で少しずつ異なったものを統一的に説明するのではなく、それぞれを文法化の各段階に位置づけるという研究もある。例えば、坪根（1996a）では、「ことだ」を 5 つの用法に分類したうえで、形態変化の有無や主題の復元のしやすさという点で、次のようにまとめている。

表 2-3　「ことだ」の各用法の違い（坪根 1996a:59）

用法	大切・必要	理由・根拠	感嘆・感動	伝聞	言換・要約
主題復元	容易でない	容易でない	容易でない	比較的容易	容易
過去形	×	×	??	○	??
疑問形	×	×	×	×	○
否定形	×	×	×	×	○

○: できる　×: できない ??: 不自然

ここでいう「主題の復元」とは、「X は Y ことだ」という文型において、主題である X が復元できるかということである。以下、各用法の例文を挙げる。

（26）大学に入りたいのなら、一生懸命勉強することだ。　【大切・必要】

（27）彼も二度とこんなことはしないと言っていることだ。今回は許してやろう。　【理由・根拠】

（28）（遊んでいる子供を見て）本当に元気なことだ。　【感嘆・感動】

（29）田中さんが幸子さんと結婚するということだ。　【伝聞】

（30）中国では結婚しても妻が夫と同じ名字になるということはなかった。夫婦別姓ということだ。　【言い換え・要約】

表 2-3 のように示すことで、各用法が、形式名詞「こと」＋「だ」から助動詞化した「ことだ」への連続した線上のいろいろな位置に点在するということがわかる。そして、このことによって、「こと」の文法化がどのように進行するかが明らかになると考えられる。坪根は除外しているが、コピュラのとれた「こと」（レポートは来週必ず提出すること）をここに加えることで、終助詞化との連続をとらえることもできるだろう。

このように、形式名詞がコピュラと組み合わさってモダリティ形式になるという現象は広く見られ、その文法化の度合いは現在の体系からも見て取れる。他にも、「かたち」を分析した佐藤（2006）や「わけ」を取り上げた Suzuki (1998) など、同様の分析がある。このような形式名詞の文法化に関連する問題として、宮地（2007）がまとめている、形式名詞がモダリティだけではなくとりたてに変化するという現象や、文末名詞文（新屋 1989）や人魚構文（角田 2011）などと呼ばれる構文との関連性などが挙げられる。また、加藤（2010）が指摘するように、この文法化は複文が単文になるという変化ととらえることもでき、形式名詞＋コピュラという構造だけでなく、より広い視点からとらえることもできる。

以上、本節では、本研究にとっては直接関係のある分野ではないが、発展的な課題として考えられる形式名詞の文法化に関する研究を整理した。

5. 本研究の位置づけ

本章では、準体助詞やノダ文に関する先行研究について概観してきた。それを踏まえて、最後に本研究の問題のありかを改めて述べ、その位置づけを行う。

本研究の目的は、「準体助詞＋コピュラ」という構成のノダ相当形式をおおむねどの方言も持っている中で、そこからさらに独自の変化を起こした大阪方言と石川方言を取り上げ、その変化のあり方や結果がどのようなものであるかを明らかにすることである。そして、その 2 つの方言を対照し、ノダ相当形式の変化というものがどのような条件のもとでどのような過程を経て、どのように変化するかも明らかにしたい。

しかし、本章でまとめてきたように、この分野における方言研究は、標準語研究を援用したものであったり、日本語史研究において「古態の残存」が主張の根拠として使われたりと、中心的な位置にはない。また、方言研究だけで完結している感も否めない。したがって、例えば本研究で扱う大阪方言についても、「ノダに当たる言い方としてノヤの他にネンというのもある」という紹介にとどまり、ネンはノヤと何が違うのか、どのようにしてできたのか、といったことはごく一部で論じられるだけだった。

だが、本研究で取り上げる大阪方言と石川方言のノダ相当形式には、日本語のどの方言にもないような最先端の変化が起こっており、ノダ文の研究だけでなく、言語変化の観点からも注目に値すると言える。本研究では、そのような 2 つの方言の事例を記述することにより、方言が「古態の残存」としてだけではなく、最先端の変化のモデルにもなりうるということを示したい。

以上を踏まえて、本研究の意義を以下のようにまとめる。

① 大阪方言と石川方言のノダ相当形式における最先端の変化と、変化の結果である現在の体系を詳細に記述すること。

② その 2 方言の変化と体系のあり方をまとめて 1 つのモデルとすることで、今後他の方言にも起こりうる変化を予測したり、これまでは見落とされていた変化にも目を向けたりできるようになること。

①は、本研究の記述（第 4 章から第 7 章に当たる）そのものに意義があるということである。体系の記述と変化のあり方については、これまでも先行研究がいくつか存在するが、本研究ではそれらよりも正確で包括的な記述を目指す。

②は、本研究の成果が他の方言や言語の研究に貢献する点である。ノダ相当形式においては、大阪方言や石川方言のような変化が起こっている方言は、現時点では確認されていない（詳細は第 3 章で）。しかし、今後同様の変化が起こることも十分予想できる。その際、本研究で取り上げた 2 つの方言と同様の変化が起こることが予想されるし、変化のあり方が異なった場合でも、より一般化が進む。また、「これまでは見落とされていた変化」は、3 節でまとめたような他言語を想定している。図 2-2 のような文法化のルートは、おそらく 1 つの形式がいかに新たな機能を獲得していくかという点に注目して議論されている。したがって、本研究で取り上げる大阪方言や石川方言のノダ相当形式のように、形や体系を大きく

変えるような変化は視野に入れていない可能性がある。それは、先行研究の問題意識からすれば当然のことだが、本研究は、そのような研究の流れの中に、日本語の方言の立場から新たな視点を提供する。そのことにより、関係節マーカーや定動詞化が主要なテーマになりがちなこの研究分野を、モダリティ化の方向にもより発展させることが期待される。

以上のことから、本研究は、準体助詞からノダ文へという変化のさらに先をハイライトした研究であり、今後起こりうる変化の指針となりうる研究であると位置づけられる。

第3章　日本語諸方言におけるノダ相当形式

1.　はじめに

第 1 章で述べたように、本研究では、日本語諸方言のノダ相当形式に注目し、その体系や変化について記述することを 1 つの目的としている。その中でも、ノダ相当形式の変化が他の方言に比べて顕著な大阪方言と石川方言を中心に取り上げる。次の第 4 章からはこれらの方言を本格的に取り上げていくが、本章では、その準備段階として、標準語を含む日本語諸方言のノダ相当形式について、先行研究や筆者の調査をもとに概観し、本研究においてなぜ大阪方言と石川方言を取り上げるのかを述べる。第 2 章は研究そのものの位置づけのための先行研究概観だったが、この第 3 章は、方言のノダ相当形式という内容の位置づけのための先行研究概観である。

本章の構成は以下のとおりである。まず 2 節では、全国方言の準体助詞の分布を概観する。3 節では、方言のノダ相当形式に関する先行研究の記述をまとめる。4 節では、3 節の内容を踏まえて、本研究で扱う大阪方言と石川方言が他の方言とは異なるということを簡単に示す。

2.　準体助詞の全国分布

まずは、全国方言における準体助詞の分布を概観しておきたい。準体助詞の地域差については「準体助詞（「こと」「もの」の意味）は本州・四国の多くはノで（用助詞の前はンが多い）、秋田県・山形県でナ、会津・庄内・越後でアン、越後でガン・ガ、富山県・石川県・高知県でガ、大阪地方でノン、山口県でソ・ホ、九州でト、南九州でツ、首里でシという」（都竹 1986:143）のような概説が一般的である。大野（1983）では、談話資料をもとに下の図 3-1 のような分布図が示されている。

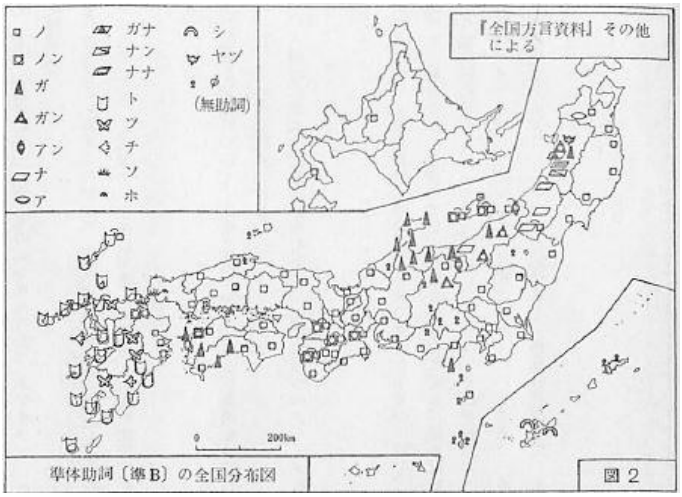


図 3-1　談話資料にもとづく準体助詞の全国分布（大野 1983:37）

なお、図 3-1 の「準 B」とは、用言につく準体助詞のことである（体言につくのは「準 A」）。大野は、このような全国分布と、各方言において準 A と準 B にそれぞれどのような形式が使われるかということから、連体格助詞から準体助詞への変遷のあり方を明らかにした。

他にも、『方言文法全国地図』（GAJ）には準体助詞が関係する項目がいくつかある。

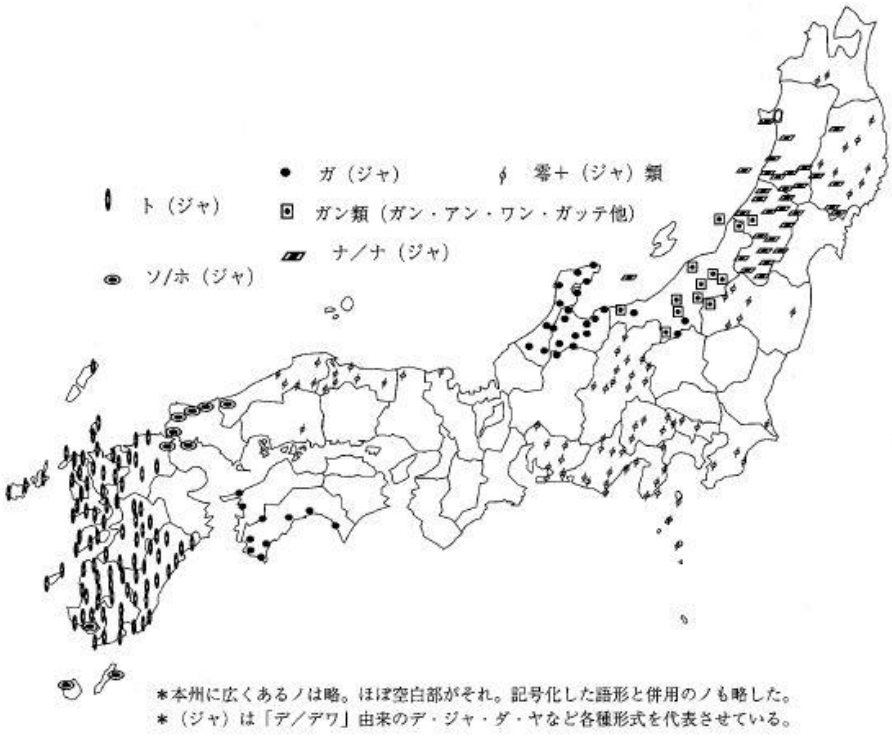


図 3-2　GAJ17 図「行くのでは（ないか）」より（彦坂 2006b:66）

この図 3-2 は、GAJ の 17 図をもとに彦坂（2006b）が作成したものである。本州に広く「ノ」が分布し（図中では省略されている）、九州に「ト」、石川・富山・高知に「ガ」、新潟に「ガン」、山形・秋田に「ナ」、山陰・東海・東北にφが分布しており、おおむね図 3-1 と同じであることがわかる。このうち、本研究で取り上げる大阪方言は「ノ」の地域、石川方言は「ガ」の地域である。

以上、本節では、準体助詞の全国分布を概観した。次節では、この分布に基づいて、準体助詞の形式ごとにノダ相当形式がどのように記述されているか概観していく。

3.　日本語諸方言におけるノダ相当形式

本節では、日本語の各地方言におけるノダ相当形式がどのように記述されてきたかを概観する。特に、バリエーションや変化という観点に注目する。以下では、図 3-2 で分類されている準体助詞の形式ごとにノダ相当形式を概観していく。具体的には、ノ類（3.1 節）、ト類（3.2 節）、ガ類（3.3 節）、ガン類（3.4 節）、φ類（3.5 節）である。

3.1. ノ類のノダ相当形式

ノ類はいわば標準語と同じで、図 3-2 を見ると、ノ類の準体助詞は本州の広い範囲に分布しているのがわかる。そのためか、このノ類の準体助詞が取り上げられることはあまりない。松丸（1999）では京都市方言の「ノヤ」が取り上げられているが、あくまで「ネン」と対比するためのものである。

一方、標準語においては、第 1 章や第 2 章で見たように、その意味・機能を記述する研究が中心である。バリエーションという観点からは、「ノ」の終助詞化が指摘されることがある。以下の例文における「ノ」は、いずれも「ノダ」に置き換えがたく、「ノダ」とは異なった意味を表す。また、「ノダ」との関係も不明であるとされている。

（1）そんなことしたら危ないじゃないノ。　（田野村 1990:137）
（2）同じことを何度も言わないノ。　（田野村 1990:137）
（3）手作りのミートパイですノ。　（田野村 1990:138）
（4）太郎のやつ、またシャツ出してやがんノ。　（田野村 1990:139）

こういった終助詞化した「ノ」が取り上げられることはあるが、こういったものは除外されることが多く、変化やバリエーションという視点で論じられることはほとんどない。

3.2. ト類のノダ相当形式

ト類の準体助詞は主に九州に分布しており、熊本市方言（坂井 2012）のように、「ツ」を使う地域もある。ト類の変化という点では、福岡市若年層方言において名詞に「ト」がつくようになる変化（陣内 1991、原田 2007）が取り上げられることがある。これは、伝統的な福岡市方言では準体助詞「ト」が名詞に後接しなかったのが、若年層の間では「雨ト？（雨なの？）」のような使われ方をするようになるという変化である。先行研究によると、この変化には「ト」がつく語によって違いがあるという。

また、ノダ相当形式の記述という点では、宮崎方言を取り上げた村田（2003）がある。村田は、宮崎方言ノダ相当形式として「チャ」と「ト」を取り上げ、両者の違いを以下のようにまとめた。

表 3-1　「のだ」と宮崎方言の「チャ」「ト」（村田 2003:120）

		チャ	ト
スコープの「のだ」	肯定文	×	○
	否定文	○	×
ムードの「のだ」	対事的「のだ」	○	×
	対人的「のだ」	×	○

○：置き換え可　×：置き換え不可

村田は基本的に野田（1997）の枠組みを援用しているので、「スコープ」や「ムード」は第1章で説明したのと同じである。以下、例文を挙げる。

(5) 悲しいから泣いてる｛んじゃない／ッチャナイ／*トジャナイ｝。

(6) 嬉しくて泣いてる｛んだ／*ッチャ／ト｝。　（以上、村田 2003:116）

(7) （友人が運転しているのを見て）
あ、あいつ、運転する｛んだ／*の／ッチャ／*ト｝。　（村田 2003:117）

(8) 私、明日は来ないよ。用事がある｛んだ／の／*ッチャ／ト｝。（村田 2003:119）

(5)と(6)はスコープの「のだ」の例で、(5)が否定文、(6)が肯定文の例である。否定文では「ト」が使えないが、肯定文では「ッチャ」が使えない。一方、(7)と(8)はムードの「のだ」の例で、(7)は対事的「のだ」、(8)は対人的「のだ」の例である。こちらも、「チャ」と「ト」が相補分布しているのがわかる。

このように、宮崎方言の「チャ」と「ト」は意味的に相補分布しているように見える。しかし、村田も指摘しているように、「チャ」というのは「ト」にコピュラ「ヤ」が後接して融合したものであり、肯定文と否定文について表3-1のような分布になるのはそのためであると思われる。また、ムードの「のだ」に関しては、コピュラつきの「チャ」が〈対事〉専用になっているが、これは富山方言など他の方言にも共通することである。

3.3. ガ類のノダ相当形式

ガ類の準体助詞は、石川・富山と高知に分布している。それぞれ先行研究はいくつかあり、高知は上野（1992）や野間（2013b）があり、富山は小西（2014）などで言及されている。いずれも準体助詞には「ガ」が使用され、基本的に標準語の「ノ」と置換可能であることが示されているが、ノダ相当形式のバリエーションという観点では、井上（2006a,b）による富山県井波方言の「ガヤ」と「ガイ」がある。

井上は、井波方言のノダ相当形式「ガヤ」と「ガイ」を取り上げ、両者の意味の違いを以下のようにまとめた。

表3-2　井波方言におけるノダ相当形式（井上 2006a:190-191）

		名詞述語文		「のだ」相当文	
平叙文	情報提供	名詞＋イ。	名詞＋ヤ。	…ガイ。	
	認識変化				…ガヤ。
疑問詞疑問文	問いかけ	WH＋ケ？ WH＋イ？		WH＋ガケ？ WH＋ガイ？	
	疑問発生		WH＋ヤ？		WH＋ガヤ？

「情報提供」は本論文で言う〈対人〉、「認識変化」は〈対人〉におおむね相当する。この表からわかるように、平叙文において、「ガヤ」と「ガイ」が相補分布していることがわかる。

(9) A：チョッコ　飲ミニ　イカンケ？（ちょっと飲みに行かない？）
B：ソンガ、今日　アンマ　時間　ナイ｛*ガヤ／ガイ｝。
（それが、今日はあまり時間がないんだよ。）　（井上 2006a:182）

(10) A：田中サン、就職　決マッタガヤト。（田中さん、就職が決まったんだって。）
B：ア、ソンナ｛ガヤ／*ガイ｝。就職　決マッタ｛ガヤ／*ガイ｝。
（あ、そうなんだ。就職が決まったんだ。）　（井上 2006a:183）

(9) は〈対人〉、(10) は〈対事〉の例である。「ガヤ」と「ガイ」が相補分布していることがわかる。このような「ガヤ」と「ガイ」の対立は、次のように疑問詞疑問文にも見られる。

(11)（知らない人が何かやっているのを見て）
アレ、アノ人　ナン　シトン｛ガヤ／*ガ／*ガケ／*ガイ｝？
（あれ、あの人、何をやってるんだ？）　（井上 2006a:187）

(12)（約束の時間にかなり遅れてやってきた相手に）
アンタ、ナン　シトッタ｛*ガヤ／ガ／ガケ／ガイ｝？
（あなた、何やってたの？）　（井上 2006a:188）

(11) は「疑問発生」の例で、話し手が独り言を言っているものである。この場合、「ガヤ」は使えるが「ガイ」は使えない（準体助詞に何も続かない「ガ」も、疑問の助詞がついた「ガケ」も同様）。一方、(12) は相手に問いかける発話である。この場合、「ガイ」は使えるが「ガヤ」は使えない。

(9)(10) の平叙文と (11)(12) の疑問詞疑問文を比べると、命題目当ての「ヤ」と聞き手目当ての「イ」という対立がうかがえる。「ガイ」の「イ」は名詞につく終助詞であり、「ガイ」は活用しない。このことから、他の方言を踏まえて井上 (2006b) では以下のような一般化が示されている。

(13)「のだ」相当形式に、活用のある形式（例：井波方言「ガヤ」）と、活用のない形式（例：井波方言「ガイ」）とがある場合、活用のない「のだ」相当形式の意味は「実情説明」に特化される。　（井上 2006b:153）

ちなみに、筆者の調査[1)]では、井波以外の富山方言でも同様の傾向が見られ、「ガヤ」と「ガ」で対立している。この一般化に関しては、本論文の第 8 章でも検討する。

以上、ガ類の準体助詞を使う方言の中では、富山県井波方言が終助詞「イ」と組み合わさった「ガイ」を持っており、「準体助詞＋コピュラ」で構成されている「ガヤ」と使い分けられているということを述べた。

3.4. ガン類のノダ相当形式

図 3-2 を見ると、ガン類の準体助詞は新潟県に分布している。ここでは、新潟県新津市古津方言の準体助詞を記述した大橋 (1988) の概略を述べる。古津方言では、準体助詞「ガン」のバリアントだった「アン」や「ワン」「ヤン」が「用言的な句の体言化」という用法で主

1) 若年層を主な対象として行った。インフォーマントの出身地は氷見市・高岡市・富山市・黒部市。

に使用されるという。ノダ相当形式もここに含まれ、「〜活用語連体形＋アン＋ダ（＋文末詞)」や「活用語連体形＋アン（＋文末詞)」という環境で使用されることが多いという。以下に例文を挙げる。

（14）イロイロト　アルアンダ　ガネー。
　　（色々と〈心づもりが〉あるのだわねえ。）
（15）ムイカニ　イグワンデス。（6 日に行くのです。）　　（以上、大橋 1988:604）
（16）ソコガ　マタ　イーヤンダ　イネー。（そこが、またいいのだよねえ。）
（17）エンブンガ　アル　トコ　ソダタネアン。
　　（塩分がある所〈は〉、〈松は〉育たないの〈だ〉。）　（以上、大橋 1988:605）
（18）イマッコロカラ　ウエルアン　カネ。（今頃から植えるのかね。）
（大橋 1988:608）

（14）から（16）はすべてコピュラの「ダ」を伴う例であり、「アン」「ワン」「ヤン」はバリエーションの関係にある。（17）は「アン」単独の例、（18）は疑問文で使用される「アン」の例である。

なお、この「アン」は以下のように準体助詞としても機能するが、この用法では「ガン」が主流であり、「アン」はあまり使用されないという。

（19）マラ　アタラシアンガ　シトツ　アルアン　ガ。
　　（まだ新しいのが、1 つあるのさ。）　　（大橋 1988:602）

このように、古津方言では、完全ではないものの、「ガン」は準体助詞、「アン」はノダ相当形式という棲み分けが見られる。しかし、これらは現在では使われなくなってきているようで、大橋（1988:616）は「中年層以下の年層にあっては、「アン」、ましてや「ガン」の生息は、各段に不振のありさまである。その分だけ「ノ」「ン」の勢力が一段と強まっているのである」と指摘している。古津方言においては、準体助詞の「ガン」が少し変化して「アン」がノダ相当形式で使われるようになったが、それも現在では衰退しているという。大橋論文が既に 30 年近く前のものなので、現在はどうなっているか不明だが、おそらくそのまま衰退していると予想される。

3.5.　φ類のノダ相当形式

φ準体助詞とは、有形の準体助詞がないことを言う。そのような方言では、「行くノダ」の「ノ」に当たる形式がないため、「行くダ」のようにコピュラが用言に直接つく。このような方言は山陰・東海・東北などに分布しており、日本語の古い形の残存したものだとされている。この種の方言では、準体助詞に当たる形式がないため、疑問文でもコピュラが現れる。以下の例は、筆者が調査した静岡県遠州方言の例である。

（20）今日は孫が来てるダ。
（21）どこか痛いダ？

（20）は平叙文の例、（21）は疑問文の例である。どちらにも「ダ」が現れており、準体助詞と同等のはたらきをしているように見える。

このようなことから、「ダダ」という形が使用されることがある。これは、1 つめの「ダ」が準体助詞に当たり、2 つめの「ダ」がコピュラに当たると考えられるもので、彦坂（2006a:9）では「共通語のノダがノによる句の統叙＝対象化を果たすのに対し、準体助詞が無いためにそれが出来ず、代わりにダ重複形式を取って「統叙→陳述」の連続性を表したものではないか」と指摘されている。以下に例文を挙げる。

（22）コドモニャー　ヨシ　オマエラ　イッテ　アソコデ　アソベッツナコト　コーユートコガ　ヒツヨーダダヨ。（子供には、よしお前ら行ってあそこで遊べと言うようなこと、こういう所が必要（なん）だよ。）　（木川 2010:67）

（23）トッテッテ　アリクダダー。（と言って歩くんだ）

（24）ココン　ハノガ　イーダダヤネー。（ここの方がいいのやらね）

（以上、彦坂 2006a:9）

（22）は静岡県賀茂郡松崎町池代方言、（23）は山梨県都留方言、（24）は島根県大東町方言の例である。このような「ダダ」の形は、他にも静岡県中川根方言（舩木・佐竹 2004）の事例も報告されている[2)]。

以上のように、φ準体助詞の方言では、ノダ相当のコピュラが「ダダ」のような独自の変化をしているが、それ以上の変化は見て取れない。この種の方言はやはり彦坂（2006a）のように日本語史との関係が論じられることが多いようである。

4. 本研究で取り上げる方言

前節では、各地方言のノダ相当形式について、主にバリエーションと変化の観点からまとめてきた。本節では、本研究で取り上げる大阪方言と石川方言がそれらの方言とは大きく異なっているということを示す。

まず、ノダ相当形式のバリエーションという点で言うと、宮崎方言の「チャ」と「ト」（3.2 節）、富山県井波方言の「ガヤ」と「ガイ」（3.3 節）、新潟県古津方言の「ガン」と「アン」（3.4 節）のように、複数の形式を持つ方言は他にも存在する。しかし、宮崎方言や井波方言はコピュラや終助詞の有無の問題に還元できる[3)]し、古津方言は大阪方言などとの類似性もあるが、形式によるノダと準体助詞の問題であり、それ以上の変化はない。

一方、大阪方言と石川方言のノダ相当形式は、コピュラや終助詞の有無の問題が絡むことはあるが、それらの問題に還元できるものではない。例えば、大阪方言におけるンヤとネンの使い分けに関して、コピュラの「ヤ」があるンヤが〈対事〉用法で使用されるというルールがあり、この点は宮崎方言や井波方言と共通しているが、ネンは単に〈対人〉というだけでなく、それ以上の意味合いを持つことがある。また、石川方言では、ガンのようなア段の形式を使うか、ゲンのようなエ段の形式を使うかで、疑問文か平叙文かが決まる。このよう

2） 大西（2013:65）には、談話資料において「ダダ」が見られた地域の分布図がある。

3） もちろん、これらの問題も重要なテーマではあるが、ノダ相当形式そのものの問題からは外れる。

な母音の違いによる文タイプの区別は他の方言には見られない。こういった点で、大阪方言と石川方言は他の方言とは一線を画しているのである。

また、変化という点でも、大阪方言と石川方言は他の方言にはない変化を起こしている。詳しくはそれぞれの章や第 8 章で述べるが、これらの方言のノダ相当形式は、非常に複雑な変遷過程を経ている。単にコピュラが落ちた、終助詞が後接した、子音が落ちたといった単純な変化ではないのである。この点においても、この 2 方言は他の方言と大きく異なっている。

以上のように、ノダ相当形式において、大阪方言と石川方言が他の方言と大きく異なるのは、これらが他の方言よりも進んだ変化をしているからである。具体的にどのような点が進んでいるのかということは第 8 章で述べるが、ノダ相当形式のバリエーションや変化という観点から見ると、これら 2 つの方言が日本語諸方言の中で非常に特徴的であることがごく簡単ではあるが示せたかと思う。次の第 4 章以降では、具体的に 2 つの方言を取り上げて、ノダ相当形式の記述を行う。

第Ⅱ部　大阪方言におけるノダ相当形式の発展

第Ⅱ部では、大阪方言におけるノダ相当形式を取り上げる。第 4 章では、大阪方言のノダ相当形式ンヤ・ネヤ・ネンヤ・ネンを取り上げ、これらの異同を記述する。そして、形式と意味のどちらの面においても、ンヤ→ネヤ・ネンヤ→ネンの順に終助詞化していることを指摘する。第 5 章では、近畿方言の談話資料および昔話資料をもとに、ノダ相当形式、特にネンとテンの成立過程を明らかにする。先行研究とは違い、ネンよりも先にテンが成立しており、テンからの類推でネンができたと指摘することで、ネンが過去形に後接できないことを説明する。

第4章　大阪方言におけるノダ相当形式

1. はじめに

本章では、大阪方言におけるノダ相当形式のバリエーションを整理し、その性質を記述する。具体的に、本章で取り上げる大阪方言のノダ相当形式には、以下のようなものがある。

（1）今から学校に行くンヤ。
（2）今から学校に行くネヤ。
（3）今から学校に行くネン。

これらの例文を標準語訳すると、「今から学校に行くんだ」となり、下線部はすべて「んだ」に置き換えることが可能である。本章では、このような「ンヤ」「ネヤ」「ネン」といった形式をはじめとする大阪方言のノダ相当形式のバリエーションを整理し、形式と意味の両面からその異同を明らかにする。

なお、本章では筆者（1987 年大阪府八尾市生まれ、男性。現在まで同市に在住）の内省をもとに分析を進めていく。したがって、本稿で考察の対象とするのは、厳密に言えば「大阪府八尾市の 20 代男性の話す方言」ということになる。

本章の構成は以下のとおりである。まず 2 節では、本章で記述の対象とする大阪方言の概要を述べる。3 節では、ノダ相当形式について記述する前に、準体助詞として「ン」「ノ」「ノン」という形式があり、ネヤやネンは準体助詞としては機能しないことを述べる。4 節では大阪方言のノダ相当形式にどのようなものがあるかを整理し、5 節と 6 節では大阪方言のノダ相当形式の形式と意味の特徴を記述する。最後の 7 節ではそれらのまとめとして、当該方言におけるノダ相当形式の体系がどのように特徴づけられるかを考察する。

2. 大阪方言について

まずは、本章で記述する大阪方言の概要を述べる。ここでいう大阪方言とは、大阪府で話される方言を指し、方言区画としては西部方言のうち近畿方言に属する。大阪府内の方言区画としては、旧国名をもとにした「摂津方言」「河内方言」「和泉方言」の 3 つに大きく分けられ、さらに図 4-1 のように分けられる（山本 1982）。特に、「摂津方言」「河内方言」「和泉方言」という 3 大分類はよく取り上げられ、その違いについて言及されることも多い。しかし、大阪府内の地域差とは言っても、山本（1982:199）で「府下どこへ行ってもさして異質のもの言いには接しない」と指摘されているように、それほど大きな地域差は存在しない。したがって、筆者の話す方言は「河内方言」、さらに言えば「中河内方言」に当たるが、本章では大阪府内における方言の地域差について特に言及するものではないので、単に「大阪方言」としておく。

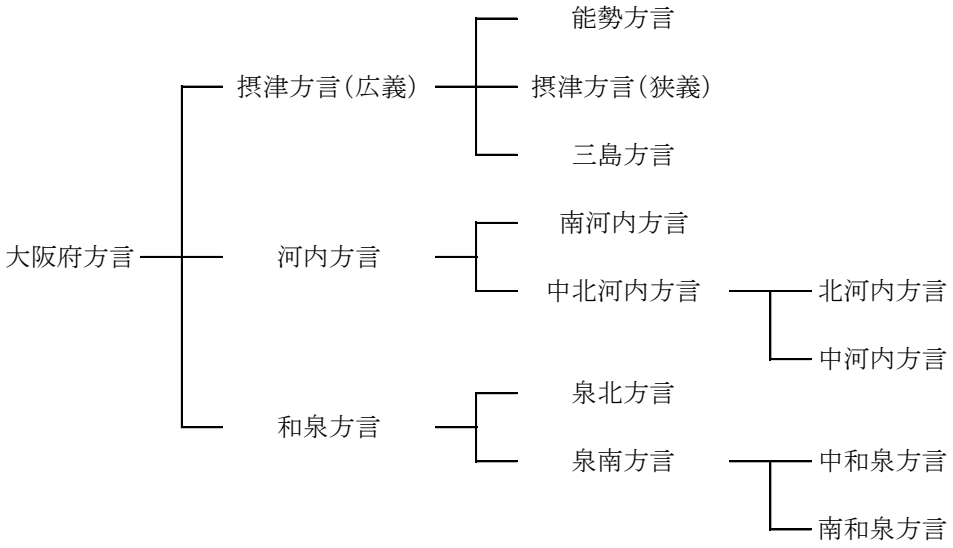


図 4-1　大阪府の方言区画（山本 1982:201）

ただし、本章で記述するノダ相当形式、特に「ネン」や「テン」といった形式については、地域差が存在するようである。大阪府内において「ネン」を使用するか否かを調査した岸江・中井・鳥谷（2001）では、以下のような結果を提示している。

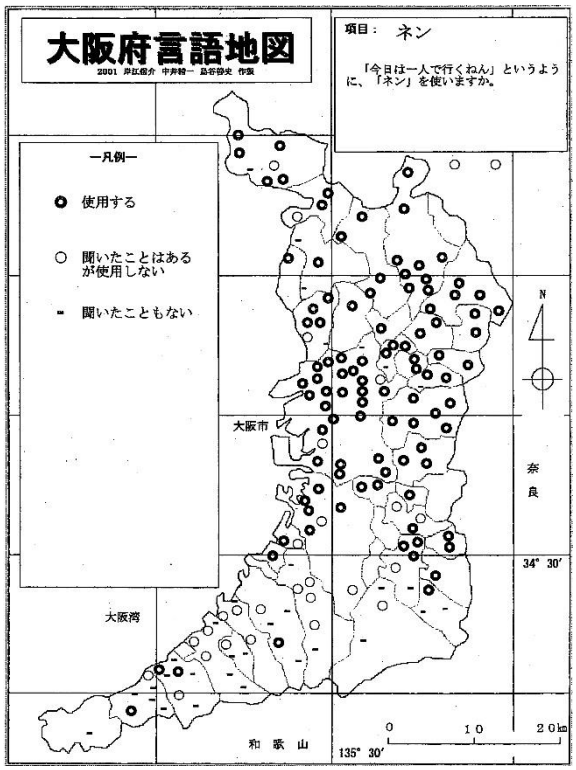


図 4-2　大阪府内における「ネン」の分布（岸江・中井・鳥谷 2001:142）

これを見ると、「ネン」は大阪府内全域で使用されているわけではなく、南部、特に泉南では使用されていないことがわかる。岸江（2000）が指摘するように、現在では「ネン」は南下し、泉南地域や和歌山市などでも使用されるようになっているという。したがって、「ネン」の使用に関する大阪府内での地域差は、現在ではほとんどなくなっていると言える。

ただし、大阪府南部地域では、他の地域とは明らかに異なった「ネン」の使い方がある。それは、述語の過去形に「ネン」が後接することである。岸江（2000）や小笠原（2014）で指摘されているように、大阪府南部では、「行ったネン」のような「タネン」が使用されている。本章で述べるように、筆者の内省では、このような表現は不適格であり、「行ったテン」のように「テン」を使うところである。このような「タネン」が大阪府南部で使用されるのは、「ネン」や「テン」をもともと使っておらず、後から「ネン」が北部から入ってきたためだと岸江（2000）は指摘している。

このように、「ネン」の使い方に関して、大阪府南部では他の地域と異なった特徴が見られるが、本章では基本的にこの地域については扱わない。「タネン」が八尾市出身の筆者の内省では不適格だということと、「ネン」などがどのような変遷過程をたどってきたのかを明らかにすることが本研究の目的の 1 つであるということが理由として挙げられる。「タネン」の発生と広がりという問題は非常に興味深いものだが、本研究で明らかにすることの先にあるものと位置づけているので、今後の課題としたい（第 5 章の 7.3 節で少し触れる）。

以上、本節では、大阪府方言の概要と、本章で記述対象とする形式の分布について簡単に述べた。次節からは、大阪方言の準体助詞およびノダ相当形式の記述を行う。

3. 大阪方言における準体助詞

本節では、大阪方言のノダ相当形式について記述する前に、当該方言の準体助詞について記述する。ここでいう準体助詞とは、第 1 章の 2.1 節で述べたような、名詞として働く、もしくは名詞化の機能を持つ形式のことを指す。

具体的には、3.1 節では大阪方言の準体助詞として「ン」「ノ」「ノン」という形式が主に用いられるということを示し、そのうち「ノン」だけ他の形式とは分布の規則が異なるということを 3.2 節で示す。そして、3.3 節では、本章冒頭の（2）や（3）におけるネヤやネンは準体助詞としては機能せず、準体助詞を含まない形式であることを示す。

3.1. 準体助詞の基本的な分布

すぐ上で述べたように、大阪方言における準体助詞は「ン」「ノ」「ノン」の 3 種類であり、これら 3 形式の使い分けには規則がある。この規則の適用は、「私のは机の上にあります」のような名詞もしくは連体格助詞につく場合（詳しくは第 1 章 2.1 節を参照）とそれ以外とに分かれるので、以下、分けて記述していく。

3.1.1. 名詞・連体格助詞につく場合

準体助詞が名詞もしくは連体格助詞につく場合、以下のようなルールが適用される。

(4) 名詞にはつかず、連体格助詞に「ン」が後接する。他の形式は使われない。

具体的には、以下のようになる。

(5) 俺｛*ン／*ノ[1)]｝は机の上にある。

(6) 俺の｛ン／*ノ／*ノン｝は机の上にある。

(5) は名詞「俺」に準体助詞が直接つく場合だが、「ン」であろうと「ノ」であろうと使えない。一方、(6) は名詞に連体格助詞「ノ」がついて、そこに準体助詞が後接するものである。この場合、「ン」が使えて「ノ」と「ノン」は使えない。なお、(5) において「ノン」が挙がっていないが、これは、(6) の「俺のン」と同じ形になるからである。つまり、(5) でも (6) でも「俺ノン」という形が使用されるが、「俺＋ノン（準体助詞)」ではなく「俺＋ノ（連体格助詞）＋ン（準体助詞)」であるということである。

この「ノン」が 1 つの準体助詞ではない理由を以下で述べる。まず、以下のように、連体格助詞に後接する名詞と「ノン」の「ン」が平行的にとらえられるという点が挙げられる。

(7) これは俺の本や。

(8) これは俺のんや。

(7) と (8) は、下線部の「本」と「ん」が異なっており、それ以外は同じである。(7) の下線部の「本」は、連体格助詞「の」に後接しうる名詞である。同様に、(8) の下線部「ん」もまた連体格助詞に後接している。以上のように、(8) の「ん」は名詞と同じ位置に立つことがわかる。また、(5) に示したように、当方言においては準体助詞が名詞に直接つくことが基本的に許されないことから考えても、(8) のような名詞につく「ノン」が 1 つの準体助詞であるとは考えにくい。次の 3.1.2 節で述べるように、当方言の準体助詞は「ン」が基本であり、名詞に後接する場合に限って「ノン」だけが使えるというのは考えにくい。

以上のことから、本研究では、(8) のような名詞につく「ノン」は「名詞＋連体格助詞」に準体助詞「ン」がついたものであると考える。そして、(4) に示したように、連体格助詞に後接できる準体助詞は「ン」のみである。

3.1.2. 用言につく場合

3.1.1 節において、「名詞＋連体格助詞」に後接する準体助詞が「ン」のみであると述べたが、これは例外のようなものであり、本節で述べる分布規則が「ン」「ノ」「ノン」の基本的な規則である。具体的には、以下のようにまとめられる。

(9) 準体助詞分布の原則

大阪方言の準体助詞は、基本的に「ン」を使用し、撥音の直後の場合は「ノ」および「ノン」を使用する。

つまり、大阪方言の準体助詞は「ン」を基本とし、特定の音環境において異形態である「ノ」と「ノン」が使用されるということである。以下の例文は、「ン」が使えて「ノ」と「ノン」が使えない場合である。

---

1) この場合、「ノ」もまったく使えなくはないが、標準語的である。

（10）昨日買った｛ン／*ノ／?ノン｝まだあった？

（11）私が辞書買った｛ン／*ノ／?ノン｝知ってる？

（10）は代名詞的用法、（11）は名詞節を作る用法だが、いずれも直前の音は撥音ではないので、「ン」を使う。

しかし、直前が撥音の場合、「*ンン」という音連続になってしまい、ンは使えない。準体助詞が使用される際に直前が撥音になるのは、主に 2 通りある。1 つは、次のように動詞非過去形の語尾の「ル」が「ン」になるいわゆる撥音便形に続く場合である[2)]。

（12）なんでもええからある｛ン／*ノ／?ノン｝持ってきて。

（13）なんでもええからあん｛*ン／ノ／ノン｝持ってきて。

（14）今日補講ある｛ン／*ノ／?ノン｝聞いた？

（15）今日補講あん｛*ン／ノ／ノン｝聞いた？

（12）と（13）は対になっていて、準体助詞の直前の動詞が、（12）では「ある」だが、（13）では撥音便形「あん」になっている。撥音便形でない（12）では、基本的に「ン」が使用されるが、撥音便形である（13）では、逆に「ン」が使えず、「ノ」か「ノン」を使う。（14）と（15）についても同様で、音便形の直後である（15）では「ン」が使えず、「ノ」と「ノン」が使われる。

準体助詞の直前が撥音になるもう 1 つの場合は、動詞否定辞「ン」「ヘン」が直前にくる場合である。

（16）どれでもええからいらん｛*ン／ノ／ノン｝ちょうだい。

（17）ちゃんと食べへん｛*ン／ノ／ノン｝は体によくない。

（16）は「いる（要る）」に否定辞「ン」が後接した後に代名詞用法の準体助詞が続いており、（17）では「食べる」に否定辞「ヘン」が後接した後に名詞節を作る準体助詞が続いている。撥音便形のときと同様に、撥音の直後ではンは使えない。

以上のように、大阪方言の準体助詞「ン」「ノ」「ノン」の分布は、（9）に示したように、ンを基本とし、撥音の直後のみンが使えずノとノンが使用されるというふうにまとめられる。しかし、「ノン」については、この原則だけでは説明できない場合もある。次節では、「ノン」の分布とその性質についてまとめる。

3.2. 「ノン」の分布と性質

前節の（9）に示したように、大阪方言の準体助詞は、基本的に「ン」を使い、「ンン」という音連続を避けるために「ノ」や「ノン」が使用されるというふうにまとめられる。しかし、その中でも「ノン」は（9）に当てはまらない分布を示すことがある。

（18）なんでもええからある｛ン／*ノ／?ノン｝持ってきて。　（（12）再掲）

（19）今日補講ある｛ン／*ノ／?ノン｝聞いた？　（（14）再掲）

2） 当該方言では、「ある」や「する」などの、基本形が「ル」で終わる動詞に/d, m, n/で始まる助詞や形式名詞が続く場合、動詞末尾の「ル」が「ン」になる（野間 2014b）。本章における「撥音便化」という用語は、この現象を指している。

これらはそれぞれ（12）と（14）の再掲であり、非過去形が「ル」で終わる動詞が撥音便化を起こさない場合のものである。上で述べたとおり、このような場合に「ノ」は使用されないので、例文では「*」の記号を付している。しかし、「ノン」に関しては、「*」ではなく「?」を付している。つまり、このような場合に「ノン」を使用するのは不適格とまでは言えない。このような場合、「アンノン」のように撥音便化するのが自然だが、そうでなくても不適格ではない。つまり、多少の不自然さは残すものの、「アルノン」は「アルノ」に比べて許容度が高いということである。3.1.2 節で述べたように、「ンン」という音連続を避けるために「ン」が「ノ」になっているというルールだけを考えれば、「ノ」も「ノン」も使用される環境が撥音の直後に限定されるはずであり、実際、「ノ」はそのようになっている。しかし、「ノン」の分布は音声的な条件だけでは説明できない。

このような「ノン」の分布は、「ノン」が「もの」「こと」といった「名詞」として解釈されやすいという性質によるものだと考えられる。

（20）道具はそこにあん｛ノ／ノン｝でなんとかしてください。

例えば、（20）において、「ノ」を使った場合と「ノン」を使った場合とでは、文の意味の解釈が異なりうる。「ノ」を使った場合、「そこにあるもので」という「準体助詞＋格助詞デ」の解釈も「そこにあるから」という「接続助詞ノデ」の解釈も成り立つのに対して、「ノン」を使った場合は前者の解釈しか成り立たない。つまり、「ノン」は「ノデ」の一部になって「ノンデ」となることはできないのである。

（21）そのこと知ってん｛ノ／ノン｝にびっくりした。

「ノニ」の場合も同様である。（21）において「ノ」を使用すると、「（話し手が）そのことをあらかじめ知っているにもかかわらず、（聞いて）びっくりした」という接続助詞としての「ノニ」の解釈と、「（別の人が）そのことを知っていることにびっくりした」という「名詞節＋ニ」の解釈の 2 通りが成り立つ。一方、「ノン」を使った場合、後者の解釈しか成り立たない。つまり、「ノニ」の場合においても、「ノン」はその一部になって「ノンニ」となることはできないのである。こういった背景には、「ノン」を使うと「もの」や「こと」と解釈されてしまうということがある。

このことは「ノダ」でも同様である。

（22）これは昨日買ってきた｛ン／ノン｝ヤ。

（20）や（21）同様、（22）で「ン」を使うか「ノン」を使うかで意味の解釈が異なる。「ン」の場合、「これは昨日買ってきたものだ」という形式名詞とみるものと、「ノダ」の一部として機能しているとみるものである[3)]。「ン」を使った場合はどちらの解釈もできるが、「ノン」は前者の解釈しか許さない。このことからも、「ノン」が「ン」や「ノ」に比べて形式名詞としての性質を強く持っていることがわかる。

そのためか、ノダ相当形式としての「ノンヤ」は、特に「ノンヤ」で言い切る場合、筆者の内省では少し不自然に感じられる。ただし、この許容度にはおそらく個人差があると思わ

3） （22）のような場合、どちらで解釈しても文脈上大きく意味が変わらないことが多い。

れる。というのは、各種資料には、「ノンヤ」という形が現れるからである[4)]。

（23）竹やぶの道を行ったらはよう上方へ行けるちゅうのんや。

【読みがたり・大阪「話を買う」】

（24）今書いとりますノンヤ。（牧村編 2004）

つまり、かつて「ノン」は「ノ」や「ン」と同様に汎用的な準体助詞として使用されていたが、それが筆者の年代までの間に分布を縮小・特化させてきたのではないかと考えられる。このことは、本章 3 節以降で述べる「ネヤ」や「ネン」といったノダ相当形式のバリエーションの発達と関係すると思われる。詳しくは 7.2 節で述べる。

なお、ノダ文であっても、次のような疑問文における「ノン」は不自然ではない。

（25）どこ行くノン？

（26）今日は仕事あんノン（カ）？

これは、「ノン」が形式名詞であることと直接関係のあることではなく、問いかけの発話において一定の談話的機能を持たせるためのものだと考えられる[5)]。他にも、疑問文で「ノンナ」という形で現れることもあるが、これについては野間（2014a）を参照されたい。

以上、大阪方言の準体助詞において、「ン」と「ノ」が（9）のルールに基本的に従うのに対して、「ノン」は形式名詞として解釈されやすいという特徴を持ち、そのために他の形式と分布が異なるということを述べた。このことは、7.2 節において大阪方言の準体助詞およびノダ相当形式の体系について考察する際に再び言及する。

3.3. ネヤ・ネンなど

ここまでに述べてきたように、大阪方言において代名詞になったり、名詞節を形成したりする準体助詞として機能するのは、「ン」「ノ」「ノン」の 3 つである。このうち「ン」と「ノ」は、本章冒頭の（1）などでも示したように、ノダ相当形式の一部にもなっている。

（27）今から学校に行くンヤ。（（1）再掲）

（28）今から学校あんノヤ。

（27）の「ンヤ」や（28）の「ノヤ」は「準体助詞＋コピュラ」という構成になっており、この点は標準語の「ノダ」と同様である。しかし、冒頭に掲げたノダ相当形式すべてが同様の性質を持っているわけではない。

（29）今から学校に行くネヤ。（（2）再掲）

4） なお、木川（2001:265）は、神戸市方言でも「ノンヤ・ノンデスが非文法的であるということではないが、数量的には、用法による偏りがあると考えられる」と述べている。

5） ここでいう「一定の談話的機能」が具体的にどのようなものかについては、ここでは詳しく議論しないが、神部（1996）では、撥音が「一定の待遇意識に支えられて」付加されているとされている。撥音が付加されると「やわらげ」のニュアンスが出るというのは、石川方言に関しても同様のようで、北國新聞社編（2005）では、若い世代で「ガ」ではなく「ガン」が使われるようになった要因の 1 つとして撥音の持つニュアンスを挙げている。なお、広島方言では、大阪方言と同様に疑問文の文末で「ノン」を使用することがあり、灰谷（2010）ではこの「ノン」の「ノ」は「疑問」、「ン」は「確認」のニュアンスを帯びるとされているが、大阪方言ではこの考え方はとらない。

（29）の「ネヤ」は、「ンヤ」や「ノヤ」と同様に「準体助詞＋コピュラ」という構成になっているように見えるが、以下に示すように、「ネ」は当方言において準体助詞としては機能しない。

（30）なんでもええからあん[6]｛ノ／ノン／*ネ｝持ってきて。

（31）今日補講あん｛ノ／ノン／*ネ｝聞いた？

このことは、冒頭の（3）で示した「ネン」でも同様である。

（32）*なんでもええからあんネン持ってきて。

（33）*今日補講あんネン聞いた？

以上のように、大阪方言のノダ相当形式のうち、「ネヤ」や「ネン」は準体助詞として働くことはなく、形の上で準体助詞を含むこともない。次節以下では、このような準体助詞を含まないノダ相当形式を中心として、その特徴を記述していく。

4. 大阪方言におけるノダ相当形式のバリエーション

本節からは、大阪方言のノダ相当形式の記述を行っていく。とはいえ、すべての形式を同様に取り上げるのではなく、各形式の形式的・機能的振る舞いの異同が明確なものを中心に取り上げていく。そこで、本節では、本格的に記述を行う準備段階として、大阪方言のノダ相当形式にどのようなバリエーションがあり、それぞれがどのようなものかということを簡単に整理する。そして、本章ではその中から「ンヤ」「ネヤ」「ネン」「ネンヤ」を中心に取り上げるということを述べる。

以下では、大阪方言においてノダ相当形式として使用される形式を列挙し（4.1 節）、その中で中心的に使用される形式として「ンヤ」「ネヤ」「ネン」「ネンヤ」を取り上げるということを述べる（4.2 節）。

4.1. 使用される形式

本章冒頭の（1）～（3）でも示したように、大阪方言のノダ相当形式には「ンヤ」「ネヤ」「ネン」といった形式が存在する。しかし、当方言のノダ相当形式のバリエーションはこれだけではなく、他にも以下のようなものが存在する。

（34）まるで、犬かネコを追いはらうように、はよ帰れといわんばかりのようすをとらはったんですって。　【読みがたり・大阪「ならずのナツメ」】

（35）そして、ふしぎなことに、わき出る水は、くめどもくめどもつきることなく、こんこんとわき出てきたんじゃ。　【読みがたり・大阪「ふしぎな井戸」】

（36）イカケ　テ　ドーユーイミカ　シランネケド　【ふるさと・大阪】

（37）アソーナンヤ。ソンナンデ　シラベンネンヤ。　（中西・沖 2011）

（38）ひとりの女のひとが、たずねてきはってん。　【読みがたり・大阪「鈴見の松」】

6）　ここで準体助詞が後接する述語を撥音便化した動詞にしているのは、ノダ相当形式である「ネヤ」が撥音の直後に使用されやすいためである。

（34）の下線部は「ンデス」という形をとっているが、これは標準語の「ノデス」と同様に、コピュラの「ヤ」が丁寧体になったものである。（35）の「ンジャ」は「ンヤ」の「ヤ」が「ジャ」になったものだが、この「ジャ」は当方言におけるコピュラの古い形である。これらはいずれも「ンヤ」のバリエーションとみなすことができる。一方、（36）～（38）の下線部は、3 節で挙げたような準体助詞（「ン」「ノ」「ノン」）を含まない形式である。（36）の「ネ」は、おおむね「ネン」のバリエーションと思われる形式である。音形も振る舞いも「ネン」に似ており、話し手の意識の中でも明確に区別されていない可能性がある[7)]。（37）の「ネンヤ」は、その形だけ見ると「ネン」にコピュラの「ヤ」が後接しており、「ンヤ」の「ン」の部分が「ネン」になっているように見える。しかし、様々な違いから、「ンヤ」と「ネンヤ」を完全に同列に論じることはできない。この「ネンヤ」の振る舞いについては、次節以降で詳しく述べる。そして、（38）の「テン」は、他の形式と大きく異なり、「過去」の意味を含んでいる。すなわち、「テン」を標準語に置き換えると「たのだ」になる。冒頭でも示した「ネン」は、「*行ったネン」のように過去形に後接できず、その場合は「行ったテン」のように言う。そのためか、母語話者の意識では、「テン＝タ＋ネン」とみなされているように思われる。なお、（37）の「ネンヤ」もまた過去形には後接できず、その場合は「シラベテンヤ」のように「テンヤ」を用いる。

以上のように、大阪方言におけるノダ相当形式には様々なものがあり、その形や振る舞いもそれぞれ大きく異なる。次節では、これらの形式を整理し、本章で主に取り上げる形式を決定する。

4.2. 本章で主に取り上げる形式

前節では、大阪方言のノダ相当形式にどのようなものがあるかということを概観した。本節では、それらを整理し、本章で主に取り上げる形式を絞り込む。

結論を先に述べると、本章で主に取り上げるのは、「ンヤ」「ネヤ」「ネン」「ネンヤ」の 4 つである。この 4 つを取り上げるのは、形式的・意味的にそれぞれ一定の違いがあるからであり、それよりも小さな違いしかないもの（例えば「ンヤ」と「ノヤ」）については、同じ形式のバリアントとして処理する。したがって、以下で議論する「ンヤ」には「ノヤ」や「ノデス」なども含まれることになる。そこで、これらを区別するために、個々の形式について言及する際（例えば、「ンヤ」と「ノヤ」を区別するような場合）には、形式をカッコでくくって表記し、それらの形式群を含めて言及する際（例えば、ンヤとネンの違いなど）にはカッコなしで表記することにする。

以下では、それぞれに含まれる形式について順に整理し（4.2.1～4.2.4 節）、ノダ相当形式の大まかな全体像を描く（4.2.5 節）。

7） 実際に使用されている音声を聞いても、「ネ」なのか「ネン」なのか判断がつかないことも少なくない。

4.2.1. ンヤ

ここに含まれるのは「ンヤ」および「ノヤ」である。また、「どこ行くン？」の「ン」のような、「ヤ」がないものも含まれる。この場合の「ヤがない」というのは、疑問文を作る際に「ヤ」が現れない（そして「カ」が付加される）ためである。疑問文ではなく平叙文で「ヤ」が現れずに「今から学校行くン」のように言う場合の「ン」はここに含まれない。というより、当方言にはそのような「ン」は基本的にない[8)]。

また、「ノンヤ」については、分類するとしたらこの「ンヤ」に含まれると考えられるが、以下では基本的に取り上げない。というのは、3.2 節で述べたように使用頻度が非常に低いことに加え、「ンヤ」と形式的・意味的に大きく異なるとは言えないからである[9)]。

以上をまとめると、この「ンヤ」には、準体助詞とコピュラから構成される形式が含まれるということになる。もちろん、「ンデス」のような丁寧体や、「ンジャ」のような「ジャ」を用いたものも含む[10)]。

4.2.2. ネヤ

ネヤに含まれるのは、「ネヤ」のみである。音形から判断して、「ネンヤ」も含まれそうだが、これはネンヤとして扱う。というのは、詳細は 5.1 節で述べるが、形式的な振る舞いが異なるからである。具体的には、どちらも直接過去形に後接できないという点では共通しているが、「ネンヤ」のほうは「行っテンヤ」のように「テンヤ」の形であれば可能である点である[11)]。このように、撥音の有無だけの違いに見えても、「ネンヤ」と「ネヤ」とは区別するのが妥当だろう。

4.2.3. ネン

ネンに含まれるのは「ネン」と「テン」である。両者は述語への接続のしかたが異なるが、4.1 節で既に述べたように、母語話者の意識では、形の面でも意味の面でも「テン」は「タ＋ネン」であり、「ネン」が過去形に後接できないことからも、両者は相補分布的な関係にあると言える。また、接続の違いとテンス的な意味の違いを除けば、「ネン」と「テン」の振る舞いは非常に似通っている。本章ではこの点を重視し、両者をネンとしてまとめて議論する[12)]。

8） 方言によってはこのような形式が存在する。詳しくは、第 3 章を参照されたい。

9） もちろん、「どこ行くン？」と「どこ行くノン？」の意味はまったく同じということはないが、その違いは本章では考察の対象外とする。

10）ただし、現在の大阪方言において、「ジャ」はコピュラとしての機能を果たし切っておらず、一定の待遇的ニュアンスを持ちつつ、文末に残っているのみである。例えば、「おまえジャ」のようには言うが、「おまえジャッタ」のようにはもはや言わない。

11）これは、「行ったネンヤ」が「行っテンヤ」に変化したという意味ではない。詳細は第 5 章で述べるが、本研究では、「テンヤ」が先にあって、それをもとにして「ネンヤ」ができたと考える。次の「ネン」と「テン」も同様である。

12）ただし、このことは、「タネン」が「テン」に変化したということを意味するのではない。「ネン」と「テン」の成立については、第 5 章で詳しく考察する。

4.2.4. ネンヤ

最後にネンヤだが、ここには「ネンヤ」と「テンヤ」が含まれる。この 2 つをネンヤとしてまとめるのは、先ほどの「ネン」と「テン」とまったく同様である。なお、「ネンヤ」は外見上「ネン」と「ヤ」に分けられるため、「ネン」にコピュラが後接したもののように見えるが、「ネンヤ」の振る舞いを見ると単純にそう判断することはできない（詳細は 5.1 節で述べる）ため、ネンヤというグループを立てた。

4.2.5. ノダ相当形式の全体像

以上、本章で主に取り上げるノダ相当形式の整理を行った。以下、5 節と 6 節では、これらの形式の形式的・意味的特徴について記述していくが、その前にこれらの形式がどのように使い分けられるのかを大まかに示しておく。詳細は次節以降に譲るが、大まかに示すと次のようになる。

表 4-1　大阪方言のノダ相当形式概観

文タイプ	述語の時制	用法	
		対人	対事
平叙文	非過去形	スルンヤ スルネヤ スルネン	スルンヤ スルネヤ スルネンヤ
	過去形	シタンヤ シテン	シタンヤ シテンヤ
疑問文	非過去形	スルン(カ)	スルン(カ)
	過去形	シタン(カ)	シタン(カ)

この表では、文タイプ・述語の時制・用法の 3 つの観点によって使用する形式を記してある。この表からは、以下のようなことがわかる。

① 平叙文で使う形式は多いが、疑問文ではいつでもンヤ[13] を使う。
② ネンとネンヤが〈対人〉と〈対事〉で対立している。
③ ネヤは非過去形にしか接続しない。

このうち、①は特に重要である。表 4-1 を見てわかるように、疑問文に使うのは基本的にンヤのみであり、このンヤは「準体助詞（＋コピュラ)」の構成を持った、標準語の「ノダ」と同様のものである。それに対して、平叙文においては複数の形式が 1 つのセルに入っている。これはつまり、ノダ相当形式のバリエーションの発達が平叙文に集中しているというこ

13）4.2.1 節でも触れたように、ンヤには「ン（カ)」も含むため、真偽疑問文では基本的に「ン（カ)」である。疑問文における「ヤ」の有無については 5.2.2 節および 5.3 節を参照されたい。

とである。このことは、第Ⅲ部で記述する石川方言とは対照的である。また、②と③も大きな特徴だが、これらについては以下の 5 節と 6 節で詳述する。

以上のように、大阪方言におけるノダ相当形式のバリエーションは、平叙文において特に発達している。したがって、以下では、平叙文の場合を中心に記述を進めていくことにする。

5. 形式的特徴

本節では、大阪方言のノダ相当形式であるンヤ・ネヤ・ネン・ネンヤの形式的特徴を、4 形式を対照するかたちで記述していく。具体的には、以下の点に注目する。

① 述語への接続（5.1 節）
② 「ヤ」の振る舞い（5.2 節）
③ 文タイプ（5.3 節）
④ 文中における位置（5.4 節）

以下、それぞれについて記述していき、5.5 節でまとめる。

5.1. 述語への接続

まずは、ノダ相当 4 形式の接続のあり方についてまとめる[14)]。

表 4-2 大阪方言のノダ相当形式が接続する述語とその形

	非過去形		過去形	
	動詞・形容詞	名詞・形容動詞	動詞・形容詞	名詞・形容動詞
ノヤ	行くンヤ	休みなンヤ	行ったンヤ	休みやったンヤ
ネヤ	行くネヤ	休みやネヤ	*行ったネヤ	*休みやったネヤ
ネン	行くネン	休みやネン	行ッテン *行ったネン	休みやッテン *休みやったネン
ネンヤ	行くネンヤ	休みやネンヤ	行ッテンヤ *行ったネンヤ	休みやッテンヤ *休みやったネンヤ

この表 4-2 は、ノダ相当形式が後接する述語の品詞および時制と、それぞれに接続したときの形を示したものである。動詞と形容詞については、どちらも接続のしかたに違いはないので、表中では 1 つにまとめて、語例は動詞で代表させている。

14）表には挙げていないが、当方言のノダ相当形式は、標準語とは違って、丁寧体の「デス」「マス」に後接することもできる。
（ア）学校に行きます｛ンヤ／ネヤ／ネン／ネンヤ｝。
（イ）今日は休みです｛ンヤ／ネヤ／ネン／ネンヤ｝。
ただし、村中（2009）によると、関西の 20 代から 50 代の人にとっては、このような表現はもはや日常的に使われるものではなく、「いわゆるコテコテ」のスタイルとして、いわば道具的に使用されているという。筆者にとってもそれは同じで、こういった表現を日常的に使うことはほとんどない。

さて、この表を見てもわかるように、述語が過去形の場合、ンヤ以外の形式はその接続に制限がある。4.2 節でも少し言及したが、ネヤは過去形に後接できず、ネンとネンヤは「タ」を取り込んで[15]「テン」「テンヤ」という形になる必要がある。つまり、品詞に関わらず非過去形と過去形の両方にそのまま接続できるのはンヤだけであり、それ以外の 3 形式は、述語が過去形の場合に、接続できなかったり形を変えたりと、何らかの制限があるということになる。

この表 4-2 でもう 1 つ注目したいのは、述語が名詞・形容動詞の非過去形の場合である。表中の下線を引いた部分、つまり、ノダ相当形式の直前のコピュラの部分を見ると、ンヤの場合は「ナ」であり、それ以外の場合は「ヤ」になっている。これらはそれぞれ連体形と終止形であり、コピュラにノダ相当形式が後接する場合、ンヤは連体形に、ネヤ・ネン・ネンヤは終止形に接続するというふうにまとめられる。これは、ンヤ以外の 3 形式が、接続の面でンヤよりも終助詞的になっていることの表れであると言える。当方言では、準体助詞が名詞・形容動詞に後接する際、次のようにコピュラは「ナ」になる。

（39）今日は学校休み｛ナ／*ヤ｝ン忘れてた。

（40）そうか、今日は学校休み｛ナ／*ヤ｝ンヤ。

（39）の「ン」は名詞節を作る準体助詞だが、これがコピュラに後接する場合、「ヤ」ではなく「ナ」になる。ノダ相当形式の「ンヤ」がコピュラに後接する（40）でも同様で、「ナンヤ」となる。一方、終助詞が名詞・形容動詞に後接するときは、「ヤ」に接続する。以下の例は、当方言の終助詞「デ」と「ワ」の例である。

（41）今日は学校休み｛*ナ／ヤ｝デ。

（42）今日は学校休み｛*ナ／ヤ｝ワ。

これらのことから、接続の面において、ネヤ・ネン・ネンヤは準体助詞ではなく終助詞に近い性質を持っていると言える。

5.2. 「ヤ」の振る舞い

次に、各形式における「ヤ」の振る舞いについて記述する。ここで取り上げているノダ相当 4 形式のうち、ネン以外のンヤ・ネヤ・ネンヤは「ヤ」を含む。この「ヤ」は当方言におけるコピュラに由来するが、すべてが同じ振る舞いをするわけではない。以下、本節では、「ヤ」の活用と潜在という 2 つの観点で「ヤ」の振る舞いを記述する。

15）繰り返すが、「ネン」「ネンヤ」が「タ」を取り込むというのは、「タネン」「タネンヤ」が融合を起こして「テン」「テンヤ」となったという意味ではない。これらは意味的にも過去のことを表すし、接続のしかたが「タ」と同様なので、まるで「タ」が融合してしまったかのように見えるだけである。成立過程については次の第 5 章で考察する。

5.2.1. 「ヤ」の活用

当方言のノダ相当 4 形式のうち、ネン以外の 3 つは「ヤ」を含み、この「ヤ」は名詞述語文におけるコピュラと同様に活用する。一方、ネンには「ヤ」が含まれないため、ネンそのものが活用することはない。まとめると以下のようになる。

表 4-3　大阪方言におけるノダ相当形式の活用

	否定形	過去形	推量形
ンヤ	ンヤナイ	ンヤッタ	ンヤロ
ネヤ	ネヤナイ	ネヤッタ	ネヤロ
ネンヤ	ネンヤナイ	ネンヤッタ	ネンヤロ
ネン	*ネンナイ	*ネンタ	(ネンヤロ)

「否定形」は「ナイ」が続く形[16] のことで、名詞述語文におけるコピュラと同様に「ヤナイ」の形をとる[17] が、「ヤ」のないネンは否定形にならない。「過去形」は「タ」を後接させたもので、「ヤッタ」の形をとるが、ネンに直接「タ」を後接させることはできない。なお、複文を作る「タラ」もこれと同様の活用をする。

（43）来る｛ンヤッタラ／ネヤッタラ／ネンヤッタラ／*ネンタラ｝電話して。

この場合にネンが使えないのは、従属節に入れないからではなく、活用しないからである。というのは、「カラ」や「ケド」なら問題なくネンが使えるからである。このことについては、5.4 節で述べる。

そして、「推量形」は「ヤロ」が後接した形である。ただし、この推量形に関しては少し注釈が必要になる。否定形と過去形に関しては、「ンヤ」「ネヤ」といった形式に「ナイ」や「タ」といった接尾辞が続いたときの形を示しているが、「ンヤロ」は「ンヤ」に「ロ」が後接したとは考えない。なぜなら、当方言で推量形を作る際には、（44）のように「ロ」ではなく「ヤロ」を使うからである。

（44）雨はもうすぐやむ｛*ロ／ヤロ｝。

16）当方言のコピュラは、主節末において標準語の「デアル」に相当する形をとることは基本的になく、「デモアル」のようにとりたてなどの要素を間に挟む場合に限られる。

17）「デナイ」という形も存在するが、高木（2005）で指摘されているように、この形は条件節などに用いられることが多く、主節末での使用は不自然に感じられる。

（ウ）これはいつも使っている｛??枕デナイ／枕ヤナイ｝。　［主節末］

（エ）いつも使っている｛枕デナイ／枕ヤナイ｝と眠れない。　［条件節］

（以上、高木 2005:75）

ノダ相当形式の場合、この「デナイ」という形をとれるのはンヤのみで、やはり主節末では不自然になる。

（オ）行きたくて行く｛ンヤナイ／?ンデナイ／*ネデナイ／*ネンデナイ｝。

（カ）行きたくて行く｛ンヤノーテ／ンデノーテ／*ネデノーテ／*ネンデノーテ｝、頼まれたから行くんや。

このように、ネヤとネンヤが「デナイ」の形をとれないという事実は、5.2.2 節で述べる「ヤ」の潜在と関係する。

（45）明日は雨ヤロ。

つまり、どの品詞にもつく付属語（接語）としての「ヤロ」が存在するため、名詞述語のときだけコピュラに「ロ」が後接すると考えるのは経済的ではない。このような状況の背景には、標準語の「だろう」と同様に、もとは「コピュラ＋推量の接辞」だったものが汎用的に使える形式になったという歴史的な経緯がある。このことを考慮して、本章では、名詞述語の場合、「ヤ」に「ヤロ」や「ロ」が後接すると考えるのではなく、「ヤ」が「ヤロ」に変化すると考えることにする[18)]。なお、表 4-3 においてネンの推量形がカッコつきで「ネンヤロ」になっているのは、「ネン」に接語としての「ヤロ」が後接したと考えれば、ネンの推量形も存在すると言える。しかし、「ネンヤロ」という形が「ネンヤ」が活用したものなのか、「ネン」に「ヤロ」が後接したものなのかという議論はここではしない。

以上のように、「ヤ」を持つンヤ・ネヤ・ネンヤはコピュラの「ヤ」と同様に活用するが、「ヤ」を持たないネンは活用しないということを述べた。

5.2.2. 「ヤ」の潜在

「潜在」という用語は田野村（2006）によるものだが、ここではそのうちの一部を指す。田野村は、「あれはタヌキか？」「うん、タヌキ」のように、「だ」「である」「です」などの有形のコピュラが現れないものの、意味的にはそれと等価なものを「潜在的なコピュラ」とした。潜在的なコピュラにはいくつかのパターンがあるが、ここで主に扱うのは、「あれはタヌキか？」のような、疑問文の文末言い切りの場合である。

（46）明日は休みヤ。

（47）明日は休み｛ϕ／カ／*ヤ／*ヤカ｝？

（46）は通常の名詞述語文で、（47）はそれを疑問文にしたものである。平叙文では名詞にコピュラの「ヤ」が後接するが、疑問文では「ヤ」が現れない[19)]。「カ」の付加は任意だが、

18）野間（2013a）では、「ヤ」に「ヤロ」が後接して「*ヤヤロ」となり、前の「ヤ」が脱落して「ヤロ」になると考えたが、ここではそのような考え方はとらないことにする。確かに、共時的な記述を行うためには、より経済的な一貫した説明が必要になるが、歴史的な経緯を考えると、少なくとも本章においては、「ヤロ」が「*ヤヤロ」なのか「ヤ」の活用なのかという議論にはそれほどの重要性を感じない。また、野間（2013）ではこの推量形の形成を「ヤの脱落」の問題ととらえたが、それに関して本章では「ヤ」がコピュラと同様の振る舞いをするかどうかについてンヤ・ネヤ・ネンヤの間で違いがあるということを中心に述べたいので、それに直接関係のない推量形の問題をそこで述べるべきではないと判断した。また、同様のことは「ヤン（カ）」についても言える。これもまたコピュラに由来する形式である。

19）野間（2013a）ではこの現象を「ヤの脱落」としていたが、ここではその用語を使わない。理由は、第 5 章でテンの成立過程について述べる際に、「テンヤ」が「テン」になったプロセスを「ヤの脱落」と呼んでおり、それと区別するためである。つまり、本研究では、「脱落」を通時的な変化を表す用語として使用し、「潜在」を共時的な分布を表す用語として使用するということである。

「*休みヤカ」のように「ヤ」と共起することはできない。このように、当方言では、真偽疑問文においてコピュラの「ヤ」は現れることができない[20)]。

一方、「ヤ」を持つノダ相当形式では、この点において名詞述語文と同様の振る舞いを見せるのはンヤのみであり、ネヤとネンヤの「ヤ」が潜在して「ネ」「ネン」とすることはできず[21)]、「カ」を後接させることもできない[22)]。

（48）学校行く｛ン／ンカ｝？

（49）学校行く｛*ネ／*ネカ｝？

（50）学校行く｛*ネン／*ネンカ｝？

（48）では、「ンヤ」の「ヤ」が現れずに「ン」となっているが、（49）と（50）のように、ネヤとネンヤではそれができない。

また、否定形を作る際にも「ヤ」の潜在が関係する。5.2.1 節で述べたように、当方言のコピュラ「ヤ」は「ヤナイ」という否定形をとるが、「違う」に由来する「（ト）チガウ」という形をとることもできる。このとき、以下に示すように、ンヤは「ン（ト）チガウ」という形をとれるが、ネヤとネンヤはそれができない。

（51）遊びに行くントチガウ。

（52）*遊びに行くネトチガウ。

（53）*遊びに行くネントチガウ。

これは、「（ト）チガウ」が「（名詞）と違う」に由来する形式であり、かなり語彙的な性質を保っている[23)]ことによると考えられる。すなわち、「（ト）チガウ」が後接するのは名詞であり、ノダ相当形式の中でそれができるのは、準体助詞を形式の中に持っているンヤのみだということである。

以上のように、同じ「ヤ」を持っているンヤ・ネヤ・ネンヤでも、名詞述語文と同様に「ヤ」の潜在を許すのはンヤのみである。これは、「準体助詞＋コピュラ」という構成を保っているのがンヤのみであり、ネヤとネンヤは準体助詞とコピュラが分けられず、ンヤよりも一語化が進んでいるということである。

なお、潜在という現象とは少しずれるが、「ヤ」を丁寧体の「デス」に置き換えられるのも、ンヤのみである。

（54）学校に行く｛ンデス／*ネデス／*ネンデス｝。

20）「あの人誰ヤ」のように、補充疑問文の場合、「ヤ」はあってもよい。これは、「どこ行くンヤ」のように、ノダ文でも同様である（ただし、「ヤ」の有無による意味の違いはある）。

21）「ネンヤ」から「ヤ」を脱落させたのが「ネン」であるという解釈も不可能ではないかもしれないが、本章ではそのような考え方はとらない。やはり「*ネンカ」という形が非文法的であるためである。

22）ただし、「聞き手が自分の話している内容に注目することを要求し、そのあとに続く発言へ導入する機能を持つ」（郡 1990:19）次のような「ネンカ」「テンカ」は、「ネンヤンカ」「テンヤンカ」の縮約と考えられるので、ここで問題にしているものとは異なる。

（キ）すっごいこわい目で私の顔見やんねんか。

（ク）そのときたまたま先生来てはってんか。

23）「違う」に由来する大阪方言の否定形式の諸特徴については、高木（2008）を参照。

以上、ノダ相当形式のうち、「ヤ」を持つンヤ・ネヤ・ネンヤに関して、「ヤ」の振る舞いについてまとめた。

5.3. 文タイプ

次に、4 形式の使用と文タイプとの関係についてまとめる。4.2.5 節の表 4-1 では、疑問文で使用されるのはンヤのみとなっているが、これはあくまで大まかな書き方であり、厳密には異なる。そこで、本節では、4 つのノダ相当形式が疑問文でどのように使用されるかについてまとめる。

5.2.2 節で既に述べたように、「ヤ」の潜在という制約のため、真偽疑問文ではンヤしか使えない。

（55）学校行く｛ン／ンカ｝？　　（（48）再掲）
（56）学校行く｛*ネ／*ネカ｝？　　（（49）再掲）
（57）学校行く｛*ネン／*ネンカ｝？　　（（50）再掲）

しかし、補充疑問文の場合、必ずしも「ヤ」が現れないとは限らないので、以下のように、ンヤ以外の形式も使える。

（58）どこ行く｛ン／ンヤ｝？
（59）どこ行く｛ネヤ／ネンヤ｝？
（60）どこ行くネン。

ただし、（59）と（60）で分けたように、補充疑問文で使われるとは言っても、ネヤ・ネンヤとネンはその性質が異なる。その違いは、上昇調の文末イントネーションをとれるかどうかである。当方言の疑問文では、文末の上昇調は必須ではなく、例えば（58）の文末は自然下降調でも上昇調でもよい（もちろん、意味は変わる）。このことは（59）のようなネヤとネンヤの場合にも当てはまるのだが、（60）のようにネンを使った場合は上昇調では発話できない。（60）において、文末の記号を「？」ではなく「。」にしたのはそのためである。それに伴って、（60）の意味は典型的な「問いかけ」[24)]とは解釈されないのが普通である。

（61）（夜中に出かけようとしている人に）
　　こんな時間にどこ行くネン。

（61）はネンを用いた疑問文の典型的なものだが、この発話は、単純に行き先を尋ねようとするものではなく、どこかへ行こうとすることを咎めているものである。

24）ここで想定している典型的な「問いかけ」とは、南（1985）、安達（1999）、日本語記述文法研究会編（2003）などで規定されている、以下の条件を満たす疑問文である（以下の文言は、安達 1999:12 からの引用である）。
a. 話し手には命題内容の真偽判断、あるいはその命題を構成する情報の一部が欠けている。
b. 話し手はそれを聞き手に問いかけることによって充足することを意図する。

森山（1989）が指摘するように、文が上昇調で発話されると、聞き手の反応を伺う意味を帯びるのが一般的である[25]。つまり、ネンが上昇調を取れないのは、聞き手の反応を伺うということがネンの意味とそぐわないからであると考えられる。

以上、「ヤ」の脱落が必須ではない補充疑問文においては、ネヤ・ネンヤ・ネンも使えるが、ネンだけは上昇調をとることができず、「問いかけ」をすることができないということを述べた。そして、このことは、ネンと他の形式との意味の違いにも関係しているということも示唆している。

5.4. 文中における位置

ここでは、各形式がどの従属節に現れるかについてまとめる。4 形式すべてに後接できる接続助詞は「カラ」と「ケド」である。これらは南（1974）の C 類に当たる[26]。

（62）今日は学校行く｛ンヤ／ネヤ／ネン／ネンヤ｝から早く起きろ。

（63）今日は学校行く｛ンヤ／ネヤ／ネン／ネンヤ｝けど準備もしてへん。

また、5.2.1 節でも触れたように、タラ節にはンヤ、ネヤ、ネンヤが入れるが、ネンは入れない。

（64）来る｛ンヤッタラ／ネヤッタラ／ネンヤッタラ／*ネンタラ｝電話して。

（（43）再掲）

（43）のところでも述べたように、これは文の従属度だけの問題ではなく、「ヤ」が「ヤッタラ」という形をとれるため、「ヤ」の有無によるものであると言える。

ここで注目したいのは、ンヤだけでなく、それ以外の形式もカラ節やケド節に入れることである。ネヤ・ネン・ネンヤは接続の面でンヤよりも終助詞的になっていると 5.1 節で述べたが、カラ節とケド節に入れるという点ではどれも同じである。もしンヤ以外の形式が終助詞化しているなら、「デ」のような終助詞がカラ節に入って「*学校に行くデから」などと言えないのと同じように、C 類の従属節には入れないはずである。つまり、ネヤ・ネン・ネンヤは、接続の面ではンヤよりも終助詞的だが、生起する従属節という点では特に変わらないということである。

5.5. 形式的特徴まとめ

ここまで、大阪方言のノダ相当形式の形式的特徴を記述してきた。ここで改めてポイントをまとめると、次の表のようになる。

25）イントネーションと意味の関係については方言差がある（木部 2010 など）が、筆者の内省の限りでは、上昇調が聞き手の反応伺いという意味を帯びるのは大阪方言も同様であると考えられる。

26）田窪（1987）によると、「カラ」には B 類の「行動の理由」を表すものと C 類の「判断の根拠」を表すものが存在するが、野田（1997）が指摘するように、「のだから」という形をとった場合、C 類の解釈しか許さない。

表 4-4　大阪方言におけるノダ相当形式の形式的特徴

	①接続		②ヤの振る舞い		③文タイプ	④従属節
	前接コピュラ	過去形に後接	活用	ヤの潜在	上昇調	カラ・ケド節内に生起
ンヤ	ナ	タンヤ	する	する	とる	する
ネヤ	ヤ	できない	する	しない	とる	する
ネンヤ	ヤ	テンヤ	する	しない	とる	する
ネン	ヤ	テン	しない	――――	とらない	する

――――の部分は、ヤがないために無関係であることを表す。

この表 4-4 は、4 節で記述してきた形式的特徴を順に並べたものである。ここまでは表を縦に見て、それぞれの特徴における形式ごとの違いを見てきたが、横に見ると、形式ごとの違いがより特徴づけられる。その違いがわかりやすくなるように表を改めると、次のようになる。

表 4-5　大阪方言におけるノダ相当形式の形式的特徴（改）

	カラ・ケド節内	上昇調	活用	ヤの潜在	前接コピュラ	過去形に後接
ンヤ	する	とる	する	する	ナ	タンヤ
ネヤ				しない	ヤ	できない
ネンヤ						テンヤ
ネン		とらない	しない	――――		テン

この表 4-5 では、「カラ・ケド節内」ではどの形式も「する」となっているが、上昇調をとるか否か、および活用するか否かという点においては、ネンとそれ以外に分かれていることがわかる。太線はその境目である。また、「ヤの潜在」と「前接コピュラ」においてはンヤとそれ以外に分かれている。このように、4 形式間の違いはそれぞれの特徴によって異なることがわかる。そして、この表の上にある形式ほど「準体助詞＋コピュラ」に近く、下のものほど遠い（終助詞に近い）ということがわかる。なお、過去形への後接については、準体助詞やコピュラの性質や構成を保っているか否かということとの関連が明確ではないため、別扱いとしている。

以上を踏まえて 4 つの形式を見ると、ンヤが最も「準体助詞＋コピュラ」に近く、ネンが最も遠いことがわかる。そして、ネヤとネンヤはその中間に位置づけられる。ただし、ネヤとネンヤの違いは、過去形に後接できるか否かということだけであり、他の形式的違いはない。この違いは、形式そのものの性質の違いというより、おそらく両形式の成立過程に関わっていると思われるので、このことは第 5 章でも再び取り上げる。

以上のように、形式面において、「準体助詞＋コピュラ」に最も近いンヤ、最も遠いネン、中間的なネヤ・ネンヤというふうに特徴づけられるということを述べた。

6. 意味的特徴

ここからは、ノダ相当形式の意味的特徴について記述していく。結論を先取りすると、意味面に関しては、ネンが他の 3 形式と異なった特徴を見せる。その違いとは、大まかに言うと、4.2.5 節の表 4-1 にも示したように、〈対人〉と〈対事〉の用法の違いであり、ネンは〈対人〉でしか使えない。

以下では、このような〈対人〉〈対事〉といった用法とノダ相当形式の使用について記述し（6.1 節）、ネンが使われやすい例と終助詞の関係について補足する（6.2 節）。なお、以下の議論では、本章で記述の対象としているノダ相当形式がすべて使用でき、意味的にも違いが出やすいということで、これらが平叙文の主文末で使用される場合に限って話を進める。

6.1. 用法による形式の使い分け

第 1 章でも述べたように、本論文で使っている〈対人〉〈対事〉という用法のとらえ方は、野田（1997）にもとづくものである。本節では、この枠組みを援用して大阪方言のノダ相当 4 形式の違いを説明するのだが、松丸（1999）が同様のことを近隣の京都市方言で行っているので、まずは松丸の記述について簡単に見ておきたい。

松丸は、京都市方言の「ノヤ」と「ネン」の用法の違いを以下のようにまとめた。

表 4-6　京都市方言におけるノヤ・ネンの用法（松丸 1999:69 を一部改変）

	スコープのノダ	ムードのノダ	
		対事	対人
ノヤ	○	○	○
ネン	×	×	○

○:使える　×:使えない

この表を見ると、「ノヤ」がすべての用法で使えるのに対して、「ネン」が〈対人〉用法に限られることがわかる。松丸はこれを踏まえて、「ネン」の意味・機能として「ムード形式である」「命題の真偽判断が話し手にとって「確定」であることを示す」「話し手が事態を把握した場合には用いられず、専ら事態の提示を担う」「したがって必ず聞き手を必要とする」といったことを挙げている。

以上の松丸の記述は、大阪方言話者である筆者の内省にもおおむね合致するものである。しかし、異なる部分も存在する。例えば、松丸（1999:69）では、〈対人〉用法に当たる次の文で「ノヤ」も「ネン」も使えるとされている。

（65）（母親に向かって）僕、今日は絶対徹夜す｛るンヤ／んネン｝。（松丸 1999:69）

だが、筆者の内省では、この場合にンヤを使うのは、少なくとも後に何も続かない場合は不自然である。

以下では、京都市方言話者である松丸の内省とのずれを踏まえたうえで、大阪方言のノダ相当 4 形式の用法について記述していく。

6 節冒頭でも言及したように、用法に関しては、ネンがンヤ・ネヤ・ネンヤと異なる。具体的には、京都市方言と同様に、〈対人〉のみで使用される。

（66）（聞き手に）あんなー、おれ今度東京に行くネン。

（67）（話題の人物がたばこを吸うのを見て独り言で）

へー、あの人たばこ吸う｛ンヤ／ネヤ／ネンヤ／*ネン｝。

（66）は「東京に行く」という話し手に関する情報を聞き手に提示している〈対人〉用法であり、ネンが使える。この例は、「あんなー」（標準語の「あのね」に相当）があることからもわかるように、特に前の文脈がなく、会話の最初に唐突に言うという状況を想定している。このような状況は、ネンが使用される典型的な場面である。他にも、「実は」のような表現とも相性がいい。一方、（67）は話し手が事態を把握したことを表す〈対事〉用法の例であり、この場合はネンが使えない。ただし、（67）にも示したように、ネンヤなら使用可能である。ネンとネンヤは、「ヤ」があるかどうかの違いで形式面にも様々な違いがあったが、意味の面においても大きな違いがあることがわかる。以上のように、大阪方言のネンは、京都市方言と同様に〈対人〉用法しか持っておらず、基本的に聞き手が必要になる。

一方、ンヤ・ネヤ・ネンヤは松丸（1999）の記述と少し異なる。表 4-6 では「ノヤ」が〈対人〉〈対事〉ともに使えるとされているが、〈対人〉では使えないこともある（（65）がその一例）。特に、次の（68）のように、当該の情報を聞き手に一方的に伝えようとするような場合はネンが使われるのが普通で、ンヤ・ネヤ・ネンヤは不適格とは言わないまでも、不自然になる。

（68）（聞き手に）あんなー、おれ今度東京に行く｛?ンヤ／?ネヤ／?ネンヤ／ネン｝。

しかし、〈対人〉用法でも自然に使える場合もある。例えば、次の例は談話資料からのものだが、筆者の内省でも、下線部の「ネヤ」は自然である。

（69）ソノ　ドンドンニ　オリマン<u>ネヤ</u>　ジャコ　フナトカ　ナニカガ

（そのドンドンにいるのですよ、雑魚や鮒とか何とかが）　【八尾市山畑】

このように、ンヤ・ネヤ・ネンヤは、〈対人〉用法で使いやすい場合と使いにくい場合があり、その違いは〈対人〉だけでは説明できない[27)]。

このように、ンヤ・ネヤ・ネンヤが〈対人〉用法で使いにくい傾向があるのは、これらの形式が文末で何も続かない形で使用されると、〈対事〉の解釈に傾きやすくなるからだと考えられる。

（70）あいつ今度東京行くンヤ。

（71）あいつ今度東京行くネン。

文脈に関する情報が特になくても、ネンを使った（71）は間違いなく〈対人〉として解釈される。一方、ンヤを使った（70）は、文脈が特になければ〈対人〉にも〈対事〉にも解釈で

27）この問題について、野間（2013a）では「命題処理度のスケール」というものを用いて説明している。本論文では、第 6 章で取り上げる石川方言とのバランスを考えて、このスケールについては割愛するが、別の視点として、6.2 節で終助詞との関係について考察している。

きるが、実際は〈対事〉の解釈をされやすい。〈対人〉で解釈させたければ、必ず〈対人〉で解釈されるネンを使えばいいのだから、そうしないでンヤを使うということは〈対事〉なのだろう、ということである。ただし、この傾向については、ある程度の個人差があると思われる。

以上、大阪方言のノダ相当 4 形式の用法について記述してきた。ネンが〈対人〉でしか使えないのは京都市方言と同様だが、他の「ヤ」のついた 3 形式、すなわちンヤ・ネヤ・ネンヤが〈対人〉で使えるかどうかには別の条件があり、その背景には、これらの形式が〈対事〉で解釈されやすいという事情があるということを述べた。次節では、その解釈にも関係するが、ノダ相当形式が表す意味と終助詞の関係について考察する。

6.2. 終助詞との関係

5.1 節では、ノダ相当形式の後に何も続かずに文が終わる場合に限定して用法の話を進めてきた。しかし、ノダ相当形式の後に終助詞が続く場合、少し状況が異なってくる。例えば、（67）のような〈対事〉用法において、後に何も続かない場合はネンが使えないが、終助詞「ナ」が続くと不適格ではなくなる。

（72）へー、あの人たばこ吸う｛*ネン／ネンナ｝。

本節では、このようなノダ相当形式の用法と終助詞の関係について記述する。以下、〈対人〉と〈対事〉に分けて記述する。

6.2.1. 〈対人〉と終助詞

4 形式のうち、ネンは〈対人〉でのみ使用され、他のンヤ・ネヤ・ネンヤは〈対事〉と解釈されて〈対人〉で使いにくいということを 5.1 節で述べたが、終助詞が続くと許容度が上がることがある。

（73）（聞き手に）あんなー、おれ今度東京に行く｛?ンヤ／ンヨ／ネン｝。

（73）は（68）と同じで、聞き手の知らない情報を特に前置きなく（むしろこの発話が前置きである）伝えようとする発話である。このような場合、ンヤを使うのは不適格とまでは言わないが、不自然さが感じられる。しかし、終助詞「ヨ」を使って「ンヨ」とすれば自然になる[28)]。一方、ネンは終助詞がなくても同様の意味を表せる。

このことが意味するのは、ネンとンヤの意味はまったく同じというわけではなく、「ンヤ＋α」がネンの意味であるということである。この「＋α」は、発話が聞き手に向けられているということを表す要素であり、（73）だと「ヨ」に当たる。つまり、ネンはンヤよりも積極的に聞き手目当てであるということを表す形式であり、〈対事〉で使えないのはこのためだと考えられる。このような違いが現れやすいのは、（73）のように聞き手に一方的に情報を伝えようとする発話であり、次のようなものもそれに当たる。

28）ただ、この「ンヨ」という表現は大阪方言本来のものではなく、他の方言から取り入れたものという印象を受ける。実際、この表現を周囲で聞くことはあるが、筆者はほとんど使わない。

（74）あんなー、おれ今度東京に行くネンヤンカー。でも金ないから夜行バスで行くねん。

「ヤンカ」は標準語の「ではないか」に当たる形だが、（74）の「ヤンカー」は標準語にはない使い方である。「ネン」や「テン」の後に「ヤンカー」（低低高低の音調をとる）をつけることで、「聞き手にとって未知な情報を持ちかける」（前川 2000:88）発話になる。（74）に即して言うと、「話し手が今度東京に行く」ということを聞き手は知らないので、それを聞き手に持ちかけると同時に、本題（夜行バスで東京に行くこと）の前置きとしているのである。前川（2000）も指摘するように、このときに聞き手の知らない情報を提示できるのは、ネンが使われているからであると考えられる。しかし、ネンではなくンヤを使って「行くンヤンカー」とするのは、少なくとも筆者にとっては不自然である[29)]。

（75）?あんなー、おれ今度東京に行くンヤンカー。でも金ないから夜行バスで行くねん。

一方、同じ「ヤンカ」が続く場合でも、次のような場合にはネンでもンヤでも変わりない。

（76）（来ないと言っていた人が来て）
なんや、結局来る｛ン／ネン｝ヤンカ。

（76）は、標準語の「んじゃないか」に置換可能のもので、この場合は「ンヤンカ」「ネンヤンカ」どちらも適格である。同じように「ヤンカ」がノダ相当形式に後接した場合でも、（75）と（76）とで適格性に差が出るのは、一方的に聞き手に情報を提示するということが、ネンにはできてンヤにはできないからだろう。

ただし、（75）のような「ンヤンカー」という言い方は筆者にとっては不自然だが、使う人も多い。実際、中井（1998）や日高（2014）の調査でもかなりの数の「ンヤンカー」が回答されている。しかし、これについては「ネンヤンカー」が先にあって、「ンヤンカー」が後からできたと考えたい。その理由としては、以下のようなことが挙げられる。

① 日高（2014）のアンケートでは、「ネンヤンカー」のほうが「ンヤンカー」よりも回答率が高い
② 1990 年代の関西（大阪・兵庫・奈良）若年層の談話では「ンヤン（カー）」の用例がほとんどない
③ 勝村（1991）や前川（2000）では「ネンヤンカ」「テンヤンカ」の記述はあっても、「ンヤンカ」には言及されていない

これらのことから、聞き手が知らないことを唐突に持ちかけるのは、ネンの性質を持った「ネンヤンカ」に限定されていたのが、「ンヤンカ」にも拡大され、両者の違いが中和されたのだと考えられる。このような中和が可能なのは、ネンやンヤの後に「ヤンカ」が続いており、文末ではないためだろう。この「文末ではないから中和される」というのは、次の 6.2.2 節で述べる〈対事〉の場合にも言えることである。

29）ただし、「行くネヤンカー」なら問題ない。これは、形の上では「ネヤ＋ヤンカ」だが、「行くネンヤンカー」の縮約とみなせる。

以上、本節では、ネンが「ンヤ＋終助詞」とでも言うべき意味を持っており、特に聞き手の知らないことを特に前置きなく一方的に提示する場面ではンヤ単独では置き換えられないことを述べた。ただし、聞き手の知らないことでなくても同様のことは起こる。

（77）（聞き手のおもしろくない言動を受けて）
いつも言ってるけど、おまえおもんない｛?ンヤ／?ネヤ／?ネンヤ／ネン｝。

（77）は、聞き手が何か笑わそうとしてやったことに対して、「おもしろくないんだよ」と非難している発話である。このとき、ネンは非常に自然に使えるが、他の 3 形式は不自然である。「いつも言ってるけど」からわかるように、聞き手が知らないことではないが、話し手が一方的に自分の意見を突き付けているという場面であり、ネンと非常に相性がいい。標準語に訳すと「おもしろくないんだよ」のように「よ」が付加されることからもわかるように、この場合もやはりネンは「ンヤ＋終助詞」の意味を表す。とはいえ、（77）も場面が違えばンヤなども使える。

（78）おまえは「はい」しか言われへんのか。だからおまえはおもんない｛ンヤ／ネヤ／ネンヤ／ネン｝。

（78）は、「「はい」としか言えない」ことを、話し手が「おもんない」と評価している。これは、「「はい」としか言えない」ことを「おもんない」と言い換えているのであって、いわゆる「説明」の構造である。このような構造が明らかな場合は、ネンでなくても言えるようである。野田（1997）によると、ノダが「説明」の機能を持っているのは、ノダ文が名詞文に準じた性質を持っていることと深い関係があるとされている。（77）のような例はもはや「説明」とは言えず、標準語で「んだよ」のように「よ」が必要なのもそのためだろう。一方、大阪方言のネンは終助詞を伴うことなく（77）で使用可能である。以上を合わせると、ネンはンヤ・ネヤ・ネンヤと違って[30]、もはや「説明」とは言えない機能を持っており、それが本節で言うところの「ンヤ＋終助詞」ということになるのだろう。

6.2.2. 〈対事〉と終助詞

6.2.1 節では、ンヤ・ネヤ・ネンヤだと終助詞が必要な場合でも、ネンは単独で使える場合があり、それがネンの意味に大きく関わっているということを述べた。本節では、それとは逆に、ネン単独では使えないが、終助詞がつくことで使用可能になる〈対事〉について述べる。

6.1 節では、ネンを〈対事〉用法で使うことはできないということを述べた。この規則は、ンヤ・ネヤ・ネンヤが〈対人〉で使いにくいことがある、というような文脈や個人差に左右される問題ではなく、かなり明確な性質である。そしてその背景には、6.2.1 節で述べたような、他とは異なるネンの持つ意味があると考えられる。しかし、これらのことはすべて文

30）準体助詞を形式の中に含んでいるンヤはともかく、準体助詞のないネヤやネンヤが「説明」の機能を持つというのは、ここの議論に合わないように思われる。しかし、それでもネヤ・ネンヤが「説明」の機能を持つのは、「ヤ」を持っていることが大きいのではないかと考えられる。

末に何も続かない場合に限ったことである。6.2 節冒頭の（72）にも示したように、「ナ」という終助詞が後に続いて「ネンナ」となった場合、〈対事〉用法でも使用可能である。

（79）へー、あの人たばこ吸う｛*ネン／ネンナ｝。　（（72）再掲）

（79）では、ンヤ・ネヤ・ネンヤに「ナ」が続いても同じである。つまり、「ナ」が続くことで、ネンとンヤ・ネヤ・ネンヤの意味的な違いが中和されているのである。

大阪方言の終助詞「ナ[31]」は、標準語のそれと意味的に大きく異なることはないと思われ、「ナ」を使用した発話は、必ずしも聞き手に向けられたものでなくてもよい。

（80）今日はええ天気やナ。

例えば、（80）は聞き手に同意を求める発話にもなるし、独り言にもなる。このことはネンがついても同じである。

（81）ほんまに行く｛ンヤ／ネン｝ナ。

（81）は「（誰かが）本当に行く」という事態を聞き手と共有しようとしている場面にも、話し手がひとりで把握している場面にもなる[32]。

これらのことから考えると、（79）で「ネンナ」が適格になるのは、「ナ」の働きによるものだと言える[33]。つまり、6.2.1 節の「ヤンカ」のところでも言及したように、ネンとンヤのような意味の違いは、後に続く要素によって中和されることがあるということである。ただ、この場合、「ンヤナ」と「ネンナ」が同時に使われ始めたのではなく、ネンが大阪方言に定着することで「ンヤナ」のンヤの部分にネンが入り込んだという可能性も考えられる。

7. まとめ：大阪方言におけるノダ相当形式の体系

ここまで、3 節では準体助詞の「ン」「ノ」「ノン」について、4 節から 6 節ではノダ相当形式のンヤ・ネヤ・ネン・ネンヤについて、その特徴を記述してきた。本節では、それらを整理して、大阪方言のノダ相当形式の体系や各形式がどのように特徴づけられるかということを考えてみたい。以下、5 節と 6 節で述べたことをまとめつつ、4 つのノダ相当形式特徴（7.1 節）と、準体助詞との関係（7.2 節）について考察する。

7.1. 4 つのノダ相当形式の特徴

5 節で述べた形式的特徴と、6 節で述べた意味的特徴をまとめると、以下のようになる。

31）ただし、「ナ」には「ナー」と伸ばすものや間投助詞など複数のものがあり、先行研究でもまだそれらの整理はなされていない。今後の課題としたい。

32）聞き手に「本当に行くのか」と確認している発話にもなりうるが、その場合は「ナ」で急激に上昇する音調をとり、ここで想定している〈対事〉とは異なるので、ここでは別に考えたい。

33）「ヤン」と「ヤンナ」の意味の違いについても同様のことが言えるかもしれない。

表 4-7　大阪方言におけるノダ相当形式の特徴

		ンヤ	ネヤ	ネンヤ	ネン
形式	カラ・ケド節内	○	○	○	○
	上昇調	○	○	○	×
	活用	○	○	○	×
	ヤの潜在	○	×	×	――――
	前接コピュラ	ナ	ヤ	ヤ	ヤ
	過去形に後接	タンヤ	×	テンヤ	テン
意味	〈対事〉	○	○	○	×
	〈対人〉	△	△	△	○

○：当てはまる　×：当てはまらない　△：場合により当てはまらない

この表 4-7 は、表 4-5 をもとにしているが、行と列を入れ替えており、表を縦に見ていくと、各形式の特徴がわかる。さて、この表からは様々なことがわかるが、この表をもとに 4 形式を分類すると、ンヤ、ネヤ・ネンヤ、ネンの 3 つに分けられる。そして、それらの特徴は以下の表のようにまとめられる。

表 4-8　ノダ相当形式の特徴まとめ

	形式	意味
ンヤ	標準語のノダと同様に、「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っている	終助詞なしの場合、〈対人〉で使えないことがある
ネヤ ネンヤ	準体助詞はないがコピュラを持っている。しかし「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っているとはいえない	終助詞なしの場合、〈対人〉で使えないことがある
ネン	準体助詞もコピュラもなく、終助詞のように振る舞う。しかし、完全に終助詞になったわけではない	終助詞なしの場合、〈対人〉でしか使えない。また、他の形式よりも対人的な機能が強い

以下、それぞれについて詳しく述べる。

7.1.1.　ンヤの特徴

ンヤは、標準語の「ノダ」と基本的には同じ形式で、形式的には「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っている。そのため、「ン」はあくまでも準体助詞（過去形にも後接できる、コピュラの連体形に後接する）だし、「ヤ」はあくまでもコピュラである（活用も潜在もある）。しかし、意味の面においては、標準語とは違って〈対人〉で使えないことがあるという特徴を持っている。これは、〈対人〉専用のネンの存在によるもので、〈対人〉用法はネンが担当しているため、相対的にンヤが使われなくなっているのだろう。このことはネヤ・ネンヤに関しても同様である。

このように、標準語の「ノダ」と同様の形式的特徴を持ちつつも、大阪方言独自のネンという形式のために、平叙文ではその分布を狭めているが、疑問文においては広く使われる。それは、他のネヤ・ネンヤ・ネンが「準体助詞＋コピュラ」の構成を持っておらず、疑問文を作るのに適していないからである。この点は、疑問文も新しい形式が担当するようになった石川方言（第 6 章参照）とは異なっている。

7.1.2. ネヤ・ネンヤの特徴

次に、ネヤとネンヤについて述べる。表 4-7 を見てもわかるように、この 2 つはただ 1 つを除いて、同じ振る舞いを見せる。そのただ 1 つの違いというのは、過去形に後接できるかどうかという点なのだが、その前にまずは共通点についてまとめる。

ネヤとネンヤは、ンヤとの共通点を多く有している。具体的には、「ヤ」を持っていること、その「ヤ」がコピュラと同じ活用をすること、上昇調をとれること、単独で〈対事〉用法で使えることなどである。しかし一方で、異なる点も存在する。具体的には、「ヤ」を脱落させることができないことと、コピュラに後接する場合、連体形ではなく終止形に接続することである。前者は、「ヤ」がンヤのように純然たるコピュラではなくなっていることを意味する。活用はするけれども脱落はしないという、コピュラとしての性質を一部失っている状態である。後者は、接続の面において準体助詞ではなく、終助詞のようになっているということを意味する。ンヤがコピュラの連体形に接続するのは、準体助詞の「ン」の接続のしかたを引き継いだものである。しかし、3.3 節で述べたように、「ネ」「ネン」といった形式は準体助詞としては働かないため、準体助詞とは異なる接続のしかたをするのだろう。

このように、ネヤとネンヤは、ンヤと多くの共通点を持ちながらも、相違点も持っており、「準体助詞＋コピュラ」の構成はもはや持っていないとまとめられる。そして、ネンになるとこの共通点はさらに減るため、ネヤ・ネンヤはンヤとネンのちょうど中間に位置づけられる形式であると言える。

以上のように、ネヤとネンヤは共通点を数多く有する 1 つのグループとしてまとめられるが、先にも触れたように、ただ 1 つの違いがある。それは、過去形に後接できるかどうかということである。どちらもンヤのように過去形にそのまま後接することはできないが、ネンヤの場合は、「タ」を取り込んだ「テンヤ」という形をとることができる。他の点はすべて同じなのに、このような違いがあるのはなぜだろうか。「ネンヤ」が「テンヤ」となるのは、「ネン」が「テン」になるのと平行的である。そして、なぜネンが述語のテンスによって形を変えるのかという問題は、これらの形式の成立過程に深く関係していると考えられる。具体的には、「ネン」ができる前に「テン」が存在し、そこからの類推で「ネン」ができ、その後に「ネンヤ」が作られたのだと考えられる。このような変化の視点からの考察は、次の第 5 章で詳しく考察するため、ここではこれ以上議論しない。

7.1.3. ネンの特徴

ネンは、4 形式の中で最も対人的モダリティ形式らしい性質を持っており、ンヤと異なる性質を多く持つ。表 4-7 を見るとわかるように、ンヤとネンの共通点は、カラ節などの従属節に入れるという点しかない。両者は相互に置き換えられることが多い（特に非文末の場合）が、相違点も多いことがここからわかる。その違いのほとんどは、ネンがンヤに比べて終助詞に近くなっているとまとめることができる。そもそも準体助詞もコピュラも持っておらず、活用もしないというのは、ネンが準体助詞やコピュラとは別の終助詞になっているととらえることができる。それに伴って、用法が〈対人〉に限定されたり、ンヤにはない対人的な意味を持っていたりと、意味面においても伝達のモダリティに近い特徴を持っている。ただし、カラ節などの従属節内に入れるなど、完全に終助詞になっているわけでもない。

以上のように、ネンが持つンヤとの相違点は、伝達のモダリティの特徴としてとらえられる。しかし、述語が過去形のときに「タ」を含んで「テン」となるのは、特に終助詞などと関係があるとも思えない。このことは、やはりネンの成立について考えなければ解決できないので、次の第 5 章で述べることにする。

また、ネンの他の 3 形式との関係については、ンヤとネンが最も遠く、ネヤ・ネンヤがその中間に位置づけられると 7.1.2 節では述べた。しかし、それはあくまで形式面に限ったことであり、用法の面については、表 4-7 を見るとわかるように、ンヤ・ネヤ・ネンヤとネンで大きく分けられる。この分類は、「ヤ」を含むかどうかによる分類と言い換えることもできる。つまり、〈対事〉用法で使えるかどうかは、コピュラを含むかどうかと相関していると言える。このことは他の方言についても当てはまることなので、第 8 章で再び考察する。

7.2. 準体助詞との関係

以上、7.1 節では、大阪方言のノダ相当形式の特徴とその位置づけについて述べた。本節では、それを踏まえて、当方言における準体助詞とノダ相当形式の関係についてまとめる。

2 節で述べたように、当方言の準体助詞は「ン」「ノ」「ノン」の 3 種類であり、これらがいくつかの条件で使い分けられている。そして、そのうちノダ相当形式としても使われるのは、基本的に「ン」である。「ノン」が「ノンヤ」の形であまり使われないのは 3.2 節で述べたとおりだが、「ノヤ」も「ンヤ」ほど自然に使われるわけではない。3.1 節で述べたように、準体助詞の「ン」と「ノ」には、「ン」が基本で直前の音が「ン」の場合に限って「ノ」になるという分布規則がある。しかし、この分布はノダ相当形式になったときに少し崩れる。

（82）（人だかりを見て）へー、結構人おるンヤ。

（83）（人だかりを見て）へー、結構人おん｛*ンヤ／ノヤ／ネヤ／ネンヤ｝。

（83）は（82）の「おる」を撥音便化させたもので、この場合は「ンヤ」が使えない。そこで、「ノヤ」が使われるわけだが、同時に「ネヤ」「ネンヤ」も使われる。むしろ、筆者の内省では、「ノヤ」を使うよりも「ネヤ」「ネンヤ」を使うことのほうが多いのではないかと思われる。特に「ネヤ」は直前が撥音の場合に使用されることが多く、そのせいで「ノヤ」があまり使われなくなっているように思える。具体的なデータに基づいた議論は次の第 5 章

で行うが、「ノヤ」が「ネヤ」に取って代わられているこの状況を考えると、当方言においては、少なくとも平叙文の文末では、準体助詞とノダ相当形式に別々の形式が割り当てられる傾向にあると言える。準体助詞の「ノン」が形式名詞としての解釈に偏るのもその 1 つと言えるだろう。このような準体助詞とノダ相当形式の乖離は、第Ⅲ部で記述する石川方言ではさらに大きくなる。

以上、大阪方言の準体助詞とノダ相当形式の関係において、両者に別々の形式が割り当てられる傾向にあるということを述べた。

7.3. まとめ

本節では、大阪方言のノダ相当形式ンヤ・ネヤ・ネン・ネンヤの 4 つを主に取り上げ、それぞれの特徴を記述しつつ、その共通点や相違点について考察してきた。要点をまとめると以下のようになる。

① 形式面については、ンヤが最も「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っており、ネヤ・ネンヤはその構成を少し失い、ネンになるとその構成は全くなくなり、終助詞のようになる。

② 意味面については、ンヤ・ネヤ・ネンヤとネンで違いがある。ネンは基本的に〈対人〉用法に限定されており、ンヤなどにはない対人的な機能も持つ。一方、ンヤ・ネヤ・ネンヤは〈対事〉用法で使えるが、〈対人〉用法ではいつでも使えるというわけではない。

③ 大阪方言にはノダ相当形式の種類が多いが、準体助詞と同じ形式が割り当てられているものは少なく、その現れとして、「ノヤ」や「ノンヤ」があまり使われないといったことがある。

しかし、以上の記述が「なぜそうなっているのか」ということに関して、本章では言及していない。その問いに答えるには、本章で取り上げた形式が、どのような変遷を経て現在の状態になったのかを考える必要があるからである。

そこで、次の章では、大阪方言のノダ相当形式、特にネヤやネンといった形式がどのような過程をたどって成立したのかを明らかにする。

第5章　近畿方言におけるネン・テンの成立

1. はじめに

第 4 章では、大阪方言のノダ相当形式であるンヤ・ネヤ・ネン・ネンヤを取り上げ、それらの特徴を記述した。第 4 章の最後にも挙げたが、そこで明らかにしたことの要点を、以下に再掲する。

① 形式面については、ンヤが最も「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っており、ネヤ・ネンヤはその構成を少し失い、ネンになるとその構成は全くなくなり、終助詞のようになる。

② 意味面については、ンヤ・ネヤ・ネンヤとネンで違いがある。ネンは基本的に〈対人〉用法に限定されており、ンヤなどにはない対人的な機能も持つ。一方、ンヤ・ネヤ・ネンヤは〈対事〉用法で使えるが、〈対人〉用法ではいつでも使えるというわけではない。

③ 大阪方言にはノダ相当形式の種類が多いが、準体助詞と同じ形式が割り当てられているものは少なく、その現れとして、「ノヤ」や「ノンヤ」があまり使われないといったことがある。

しかし、大阪方言のノダ相当形式の体系がいかにして現在のような状態になったのかということについては、第 4 章では特に言及してこなかった。特に、ネヤ・ネンヤ・ネンが過去形にそのまま後接できず、「ネン」が「タ」を取り込んで「テン」のようになるのはなぜかということは、ンヤからネンへの終助詞化というだけでは説明できない。

そこで、本章では、大阪方言のノダ相当形式の成立過程を明らかにすることで、これらの問題を解決することを目的とする。特に、先行研究でも諸説ある「ネン」と「テン」の成立過程を中心に扱う。なお、考察に際しては、近畿地方の昔話資料および談話資料をデータとして用いる。具体的には、以下のことを明らかにする。

① ネンとテンの使用には地域差があり、ネンは使わないがテンは使うという地域がある。

② このことから、ネンとテンはそれぞれ別の要因で成立したと考えられる。

③ テンはタンヤからの母音変化とヤの脱落によって成立し、ネンはノヤが変化してできたネヤがテンから類推を受けたことにより成立した。

④ ネンヤは、ネンよりも後にできたと考えられる。

⑤ このように考えることで、大阪方言においてネンが過去形に後接できず、意味的にテン＝タ＋ネンとなっている非対称的な現在の体系への説明になりうる。

大阪だけでなく近畿地方（2 府 4 県）の資料を使うのは、特に（A）を明らかにするためである。

本章の構成は以下のとおりである。まず 2 節でネンとテンの成立過程に関する先行研究をまとめ、問題のありかを述べる。3 節では調査概要を述べ、4 節ではその結果をまとめる。

そしてその結果を踏まえて、5 節でネンとテンの成立過程を考察する。6 節では、それを先行研究の説と比較し、妥当性を主張する。8 節は本章のまとめである。

2. 先行研究と問題のありか

本節では、ネンやテンがどのように成立してきたかを論じている先行研究をまとめ、問題のありかを明らかにする。多くの先行研究は、ネンとテンの成立過程を別々に論じている。本節でも、ネンの成立過程に言及している先行研究（2.1 節）と、テンの成立過程に言及している先行研究（2.2 節）に分けて整理していく。そして、それを踏まえて、本章における問題のありかを述べる（2.3 節）。

2.1. ネンの成立について

ネンの出自に関しては、前田編（1965）や神部（1996）など、多くがノヤにその源を求めている。前田編（1965）は、ノヤの変遷過程を次のように記述している。

（1）ノヤ→ネヤ→ネー→ネン→ネ

これに対して、神部（1996）は、ノヤからネヤへの変化に際して、「ヤ」が断定の意味機能を薄めるにつれて直前の「ノ」に同化し、そして、「ノ」から「ネ」に変化するのに「ヤ」が一定の役割を果たしたと述べている。また、尾上（1999）や、上方落語のデータを用いた小杉（2003）では、ノヤ→ネヤ→ネンというプロセスでネンが成立したと述べている。

木川（2001）は、これらの先行研究を踏まえた上で、ノヤからネヤへの変化は、ソヤ→セヤ（共通語の「そうだ」）という音変化と同様のものだとして認めているが、その先の変化については、(1) のような変化は考えにくいとしている。その先は様々な可能性が考えられるとして、木川は明確な結論を出していない。

しかし、中井（2014）はこれらのノヤ→ネヤ→ネンとは別の変遷過程を主張している。中井は、明治から大正を中心とした資料をもとに、ノエ→ネ→ネンという変遷過程を提示している。ノエは準体助詞「ノ」に京都方言の終助詞「エ」が後接したもので、京都では「ノエ」と「ネ」が併用されていたという。そして、その「ネ」を京都から借用した大阪方言では、タンヤのンなどからの類推でノ→ノンとともにネ→ネンという変化をしたのだという。また、ネヤは、ネとノヤが混交を起こした結果できたものだと述べている。

2.2. テンの成立について

テンの成立については、「タンヤ」からテンができたとする説（前田編 1965、神部 1996）と、過去マーカーの「タ」がネンからの類推によって形を変えたとする説（尾上 1999）の 2 つに大きく分けられる。

前田編（1965）はテンの成立過程を「タンヤ→テンヤ→テン」のように想定している。そしてその変化の要因として、主として女性が「『や』止め」「『た』止め」の物言いを避けようとするという事情が考えられるという。神部（1996）も、テンの出自をタンヤに求めている点は同じだが、前田編（1965）のように、タンヤとテンの間にテンヤを想定するのではな

く、「タンヤ→タン→テン」という過程を想定している。タンヤからタンになるときに「ヤ」が脱落することで、タンヤが内包していた断定性が、タンとテンでは希薄になっているという。

一方、尾上（1999:37）は、テンの出自に関して、次のように述べている。

> (2) 「ネン」という語形は、ノヤ→ネヤ→ネンというように、その由緒正しい生まれをたどることができるが、「テン」の方はそれができない。「あったノヤ」がどう転んでも「あっテン」という形にはならない。ではどうして「あってん」「行ってん」という形が生まれたのか。それはただ、「あった」「行った」の「タ」を、「ネン」の en 音にそろえて「テン」にしただけのことである。

つまり、テンの成立において、タンヤは関係なく、単に過去マーカーの「タ」が、ネンからの類推によってテンになったというわけである。木川（2001:273）も「タがテになったとは考えにくい」として、尾上の説を支持している。

なお、中井（2014:36）は、小杉（2003）のデータを補訂したデータをもとに、テンはネンよりも後に発生したと主張している。これらのデータにネンは現れるが、テンはそれよりも後になって初めて現れるからだという。

2.3. 問題のありか

以上、近畿方言のネン・テンの成立過程について言及している先行研究をまとめた。しかし、それらには次のような問題点が残されている。

① ネヤからネンができたとする説と、ネからネンができたとする説があるが、いずれにしても、ネヤ・ネからネンへはどのように変化したのかが明らかでない。

② テンの成立について、タンヤを出自とするという説と、ネンからの類推であるという説はどちらが妥当か明らかでない。

それぞれ 2.1 節と 2.2 節でまとめた先行研究の問題点である。さらに、どの説をとったとしても、以下のような問題点が依然残されている。

③ 大阪方言において、述語が非過去形のときは接語のネン、過去形のときは接辞のテンという非対称的な体系になっているのはなぜか。

第 4 章で述べたように、ネンとテンは接続のしかたが互いに異なっており、ネンが述語の終止形に接続するのに対して、テンはテンスマーカーの「タ」を含んだ接辞である。このことは先行研究でもよく言及されてはいるが、それがなぜなのかについては説明されていない。中井（2014）では、「ノ」と「ン」の分布が直前の母音とテンスによって異なるという説明がなされている。具体的には、直前の母音が a の場合、つまり、過去形の場合は「ノ」ではなく「ン」の系列の形式が使用されており、「ノヤ」からできた「ネン」も同様に過去形には後接できないという説明になる。確かに、本章で示すデータにもそのような傾向はある（4.2.1 節参照）が、直前が a の音で「ネン」が使えないなら、コピュラの「ヤ」に後接した「ヤネン」があって過去マーカー「タ」に後接した「タネン」がないのはなぜなのかという点が説明できない。小杉（2003）の上方落語のデータでも、「ヤネン」は大正後期には用例

があるが、「タネン」は一例もない。このように、先行研究では上記の③の問題を解決することができない。そこで、本章では、この非対称的な体系が、ネンよりも先にテンが成立したためだと考え、その根拠を大阪以外の周辺の地域の資料を用いることによって論証する。

以上に述べたような問題を明らかにすることを本章の目的とし、その手段として、昔話資料および談話資料を用いた調査を行う。次節では、その調査概要を述べる。

3. 調査概要

本節では、調査概要について述べる。本章でデータとして用いるのは、昔話資料と談話資料である。そのうち、主に使用するのは昔話資料のほうで、談話資料は補助的に用いる。というのは、すぐ後で述べるように、昔話資料はある程度まとまった量があり、多くの地点のデータがあるからである。

本章で使用する昔話資料は、『読みがたり各県のむかし話』（以下『読みがたり』）である。これは、1973〜1978 年に刊行された『各県のむかし話』の改訂版として 2004〜2006 年に刊行された（各県 1 巻、全 47 巻）。各県の国語教育関係者らによって編集された昔話集であり、大部分が方言で書かれているが、教育図書的な性格を持つため、差別的な表現を改めるなど、編者の手がかなり入っていると思われる。とはいえ、「話そのものだけでなく、方言もそのまま伝える」という全体方針はあり[1)]、少なくとも本章で用いる近畿 2 府 4 県のものは、ほとんど全編が標準語に改められているというようなことはない。

本章において、この『読みがたり』を主なデータとして使用するのは、本章の分析対象であるノダ相当形式が現れやすいと判断したからである。一般的に昔話は、語り手が聞き手に対して語って聞かせるというものであり、自然談話における雑談などとは異なったスタイルになると考えられる。日高（2013a, b）によると、昔話の「語り」において、文末に伝聞形式およびノダ相当形式が現れるかどうかには地域差があるという。そして、日高のデータによると、近畿地方ではおおむねノダがよく現れている。このことから、より多くのノダ相当形式の用例を集められるという点で適していると言える。一方、方言研究によく用いられる談話資料では、親しい人どうしが昔の習慣や思い出について話していることが多く、ノダ相当形式が現れにくい、もしくはむらがあることが多い。この点において、本研究において昔話資料を使用する意義はあると言える。

なお、本章では、全部で 47 都道府県ある『読みがたり』のうち、近畿 2 府 4 県（大阪・京都・兵庫・奈良・和歌山・滋賀）のものを用いる。これらの府県のデータの分量と地域区分を表 5-1 に示す。

表 5-1 の文の数を見ても、各府県とも 1500 から 1800 くらいの間に収まっており、大きなずれはないことがわかる。また、各府県の昔話は、採話地が 1 地点に偏っているのではな

1） 例えば、『読みがたり　大阪のむかし話』の「はじめに」には「話し手の語りくちを生かし、方言もそのままにしました」とある。

く、府県内のほぼ全域に散らばっていることがわかる[2)]。ただし、表 5-1 の地域区分については、本に書かれているものもあれば、そうでないものもある。後者については、採話地をもとに区分した。

表 5-1　各府県の『読みがたり』の分量（地の文のみ）

府県	地域	話数	文の数	府県	地域	話数	文の数
大阪	豊能	4	146	京都	丹後	18	564
	三島	6	189		丹波	10	409
	大阪市	6	256		京･山城	16	526
	北河内	13	397		合計	44	1499
	中･南河内	10	234	奈良	北和	29	642
	泉北･泉南	20	594		南和	31	1043
	合計	59	1816		合計	60	1685
兵庫	北播磨	8	202	和歌山	紀北	16	474
	中播磨	6	230		紀中	31	578
	西播磨	4	95		紀南	18	554
	但馬	13	556		合計	65	1606
	丹波	6	173	滋賀	湖北	20	403
	神戸	2	84		湖東	15	359
	阪神	7	160		湖西	14	452
	淡路	8	276		湖南	16	309
	合計	54	1776		合計	65	1523

なお、ここでいう「文の数」とは、地の文のみを数えたものである。これは、本章でデータとして用いているのが地の文のみだからである。昔話は物語なので、地の文と会話文の区別がある。地の文は語り手が話していることばである。したがって、その地域に住む話者のことばを反映していると言える。しかし、内容が物語である以上、述語は過去形であることが多くなる。実際に、4 節でも見るように、ノダ相当形式の用例は過去形が圧倒的に多い。用例を分析する際には、このことに注意する必要がある。

一方、会話文の場合、当該地域以外の人の台詞であることもあるし、話によっては動物や神様といった人物も現れる。このことから、参考として会話文の用例を出すことはあるが、本章では基本的に地の文のみを対象とする。

最後に、『読みがたり』をデータとして扱う上で注意するべきこととして、昔話のテキストがどの程度話し言葉を忠実に反映しているのかということについて言及しておく。

(3)　むかしむかしなあ。摂津のなにわというところに、子どものないおじいさんとおばあさんがすんでいやはったんやて。　【読みがたり・大阪「一寸法師」】

(4)　夜中、どんどをしていると、ブナの木のふたまたになっているところに、からの

2)　ただし、表 5-1 からもわかるように、地域ごとの分量には差がある。また、府県ごとにいくつの地域に分かれているかが異なる。これらのことは、『読みがたり』をデータとして用いる以上、望ましいことではないが、本稿において地域区分は論にさほど関係しないため、不問とする。

どえらい大入道がすわっていたそうや。【読みがたり・奈良「大入道とやまんば」】

例えば、(3) の下線部「という」は、大阪方言では「と」をつけずに「ゆう」と言うか「ちゅう」のように音変化するのが普通である。(4) でも、「ている」「ていた」という表現が使われているが、話し言葉ではこのような言い方をせず、「てる（とる)」「てた（とった)」のように言うのが普通である。つまり、語り手が話している言葉ではあるが、書き言葉的な表現が見られるのである。このように、話し言葉の写実性という点で問題があるデータであることは否めない。しかし、このような特徴も、結果を解釈する際に積極的に活用する。

なお、補助的に用いる談話資料は、国立国語研究所編『日本のふるさとことば集成』（以下『ふるさと』）および日本放送協会編『全国方言資料』（以下『全国』）である。どちらも収録時期は近いものの、『ふるさと』はある程度の分量はあるが各府県 1 地点のみであり、『全国』は収録地点数は多いが分量が少ない。そのため、本章では補助的な資料として用いる。とはいえ、これらの談話資料は、上で述べた『読みがたり』の写実性の問題を補う役割もある。

以上の概要で『読みがたり』の調査を行った。次節では、その結果を見ていく。

4. 昔話資料における近畿方言のノダ相当形式の特徴

本節では、昔話資料の調査結果をまとめる。まず 4.1 節で現れた形式を整理し、4.2 節でそれらに見られる特徴を述べる。

4.1. 昔話資料に現れた形式

6 府県の『読みがたり』に現れたノダ相当形式を、用例とともに以下に示す。

〈ノ系〉ノヤ・ノジャ・ノダ・ノデス・ノドス・ノ

(5) ところが、ふしぎなことに、どないしても、窓から首がぬけへんノヤ。
【読みがたり・奈良「化かされ太郎吉」】

(6) すると、土の下から井戸があらわれ、その井戸から清水がふき上げてくるノジャ。
【読みがたり・大阪「ふしぎな井戸」】

(7) 遠くのほうまでひびきわたるノダそうですわ。
【読みがたり・京都「犬のおつかい」】

(8) 夕べの鐘までに帰るというおしょうさんとの約そくが、かしこいシロの心をせめたてたノデスわなあ。 【読みがたり・京都「犬のおつかい」】

(9) なんしょ、コイをこうたのは大家さんとちがうのやさかい、たとえそのコイの腹の中から石が出てきたとしても、また、きょうのように小判が出てきたとしても、それは、コイをこうたもんがもらうのがあたりまえや、と言わはるノドス。
【読みがたり・京都「鯉山」】

(10) おどろいたお吉キツネに、おり悪しく、そこの家ののき下でねていた犬が、この音で目をさまし、ほえかかったノよ。 【読みがたり・滋賀「お吉キツネ」】

〈ン系〉ンヤ・ンジャ・ンダ・ンデス・ンダス・ンドス・ン

（11）むかしな、あるところに、ふたりの男が住んでいたンヤ。

【読みがたり・和歌山「徳さん夢みて角さんもうけた」】

（12）全身の力をふりしぼって、お日さまに命令したンジャ。

【読みがたり・兵庫「朝日長者」】

（13）なんぼ言うても、庄ヱ門さんが歩きだそうとすると、強い力で引っぱられるンダげな。

【読みがたり・京都「庄ヱ門さんの話　たった一本ださかい　こらえとくれ」】

（14）すると、ひとりの男が、のみで金色にかがやくりっぱな仏さまの手をもぎっているところやったンデス。　【読みがたり・大阪「泣いた仏さま」】

（15）この山車を出す順番が村人たちのきょうみのまとやったンダス。

【読みがたり・大阪「安威のとのさん」】

（16）あんまり毎晩のことやし、それがとうとう夫の九右衛門にわかってしもたンドスわ。　【読みがたり・滋賀「小女郎が池」】

（17）むかし、上神野の庄屋に、ひとりの美しいむすめがあってよ、おとうさんとふたりっきりでくらしていたンよ。　【読みがたり・和歌山「おいつぼ」】

〈ノン系〉ノンヤ・ノンジャ・ノン

（18）竹やぶの道を行ったらはよう上方へ行けるちゅうノンヤ。

【読みがたり・大阪「話を買う」】

（19）だれが、こんなよい声でうとうておるのんかと、そうっと声のする方へ近づいていきなはると、なんと、サルがうとうとるノンジャ。

【読みがたり・兵庫「サルむこ入り」】

（20）けつがやりこいと、けつをぬかれてまうノンよ。

【読みがたり・兵庫「吉さんとガッタラ」】

〈ネヤ系〉ネヤ・ニャ・ンニャ・ネンヤ・テンヤ

（21）ははあ、わしのところでは石ていうねけど、こらまあ、都では石のことを、えっさっさていうネヤな、とこれ一つおぼえはった。

【読みがたり・滋賀「くすりをいっぷくしょけはい」】

（22）むかしなあ、うちのおじいさんがなあ、そう式に行かはったニャわ。

【読みがたり・滋賀「死人にばけたキツネ」】

（23）なんやろう、と思うとるうちに、こけが美しいきものにかわったンニャと。

【読みがたり・奈良「化かされ太郎吉」】

（24）はじめのうちは、あさいとこでパチャ、パチャやってもな、だんだんおもしろのうなって、泳げるとこはないかいうて、だんだん深いとこさがして、みんな、このうるしが渕に集まってくるようになんネンヤ。

【読みがたり・兵庫「うるしが渕のカッパ」】

（25）そしたら、何かうめてあったテンヤと。　【読みがたり・奈良「宝の化け物」】

〈ネン系〉ネ・ネン・テン

（26）おしょうさん、何がほんなにたくさんあんネなとおもてひょいと見やはったら、かさの中に、ゆげの上がった馬のふんがいっぱいあった。

【読みがたり・滋賀「おしょうさんと小僧さん」】

（27）そのころになると、キツネが出てきよってな、ニワトリをいっぺんに、四羽も五羽もとりよりますネン。　【読みがたり・大阪「キツネの目じるし」】

（28）そこで、ヒキガエルは、大喜びでそのもちをとって食いよっテン。

【読みがたり・奈良「サルとウサギとヒキガエル」】

ここでは、現れたノダ相当形式を「ノ系」「ン系」「ノン系」「ネヤ系」「ネン系」の 5 つに分けている。このうちノ系、ン系、ノン系は「準体助詞＋コピュラ」の構成を持っており、準体助詞がノかンかノンかという違いである。一方、ネヤ系とネン系は、第 4 章におけるネヤ・ネンヤとネンに当たる。

ネヤ系はその名のとおりネヤを含む形式だが、ここには音形の似ているニャも入る。また、ニャとは別にンニャという形式もある。さらに、ネンヤとテンヤもここに入る。これらに共通するのは、コピュラの「ヤ」が含まれ、かつ準体助詞が含まれないということである[3)]。

そして、ネン系にはネ、ネン、テンが含まれる。「ネ」の用例である（26）はノダ相当形式のネとして扱って問題がないと考えられる例だが、非常に判断に困るものも存在する。

（29）ほいたら、菜種をみな引いとっきょったネ。

【読みがたり・滋賀「ちょよもんさん」】

（29）の下線部の「ネ」は、昔話を語って聞かせる場面で用いられているため、「ネン」とよく似ているが、過去形に後接しているという点で、「ネン」のバリエーションとは考えられない。終助詞のネであるという解釈も可能である。特に文末では、「ネ」なのか「ネン」なのかの聞き取りが難しく、それに関しての編者の判断がわからないという事情もある[4)]。

4.2. 各形式の分布

ここでは、近畿 2 府 4 県の『読みがたり』からノダ相当形式を拾った結果を次ページの表 5-2 に示す。集計は府県ごとに行っており、いずれも前接する述語の時制で分けている。ここでは、テンとテンヤは過去形に接続するものとして集計している。各セルには数字が 2 つ書かれているが、左が実数、右が比率である。比率は、各府県の「非過去」「過去」それぞれで 100%になるように計算している。

さらに、参考までに、『ふるさと』の調査結果も表 5-3 に示す。

3）「ニャ」はこの条件をすべて満たすわけではないが、音形が「ネヤ」に似ていることなどから、ネン系よりもネヤ系に近いと判断した。

4）中井（2014:34）でも、「ネン」に近い「ネ」と、標準語にもある「ネ」とが、文字では区別がつきにくいため、書き言葉では前者を「ネン」で表記してしまうことが多いと指摘されている。

表 5-2　『読みがたり』に現れたノダ相当形式（地の文）

		大阪				京都				兵庫			
		非過去		過去		非過去		過去		非過去		過去	
ノ系	ノヤ	30	28.8%	20	3.6%	31	34.1%	11	4.3%	15	14.4%		
	ノジャ	3	2.9%	15	2.7%	3	3.3%	4	1.6%	6	5.8%	4	1.0%
	ノダ			1	0.2%	2	2.2%	2	0.8%	1	1.0%		
	ノデス	1	1.0%	1	0.2%	1	1.1%	1	0.4%				
	ノドス					1	1.1%						
	ノ	2	1.9%	4	0.7%	4	4.4%	6	2.4%	3	2.9%	1	0.2%
ン系	ンヤ	36	34.6%	469	84.2%	16	17.6%	183	72.3%	51	49.0%	274	66.7%
	ンジャ	1	1.0%	20	3.6%	16	17.6%	21	8.3%	14	13.5%	58	14.1%
	ンダ			1	0.2%	13	14.3%	16	6.3%	3	2.9%	13	3.2%
	ンデス			6	1.1%	3	3.3%	7	2.8%	3	2.9%	11	2.7%
	ンダス			1	0.2%								
	ンドス												
	ン			7	1.3%	1	1.1%	2	0.8%	2	1.9%	48	11.7%
ノン系	ノンヤ	9	8.7%										
	ノンジャ									1	1.0%		
	ノン									2	1.9%		
ネヤ系	ネヤ			*	*			*	*	1	1.0%	*	*
	ニャ												
	ンニャ												
	ネンヤ			*	*			*	*	1	1.0%	*	*
	テンヤ	*	*			*	*			*	*		
ネン系	ネ												
	ネン	22	21.2%	*	*			*	*	1	1.0%	*	*
	テン	*	*	12	2.2%	*	*			*	*	2	0.5%
合計		104	100.0%	557	100.0%	91	100.0%	253	100.0%	104	100.0%	411	100.0%
総数		661				344				515			

		奈良				和歌山				滋賀			
		非過去		過去		非過去		過去		非過去		過去	
ノ系	ノヤ	23	23.5%	6	0.9%	22	18.6%	1	0.2%	43	30.7%	43	6.7%
	ノジャ	4	4.1%			1	0.8%						
	ノダ												
	ノデス												
	ノドス												
	ノ	3	3.1%	6	0.9%	6	5.1%	2	0.3%	7	5.0%	6	0.9%
ン系	ンヤ	37	37.8%	454	71.4%	67	56.8%	600	91.2%	67	47.9%	553	86.4%
	ンジャ	20	20.4%	106	16.7%	7	5.9%	21	3.2%	1	0.7%	1	0.2%
	ンダ												
	ンデス												
	ンダス												
	ンドス											1	0.2%
	ン	2	2.0%	5	0.8%	15	12.7%	14	2.1%			2	0.3%
ノン系	ノンヤ												
	ノンジャ												
	ノン												
ネヤ系	ネヤ			*	*			*	*	3	2.1%	*	*
	ニャ									8	5.7%	13	2.0%
	ンニャ	2	2.0%	10	1.6%							3	0.5%
	ネンヤ			*	*			*	*			*	*
	テンヤ	*	*	1	0.2%	*	*			*	*		
ネン系	ネ	3	3.1%							9	6.4%	10	1.6%
	ネン	4	4.1%	*	*			*	*	2	1.4%	*	*
	テン	*	*	48	7.5%	*	*	20	3.0%	*	*	8	1.3%
合計		98	100.0%	636	100.0%	118	100.0%	658	100.0%	140	100.0%	640	100.0%
総数		734				776				780			

空欄は、当該の用例が出現しなかったことを表し、*はその環境では出現しえないことを表す。

表 5-3　『ふるさと』に現れたノダ相当形式

		大阪				京都				兵庫			
		非過去		過去		非過去		過去		非過去		過去	
ノ系	ノヤ	1	1.5%			1	2.2%			1	1.6%		
	ノジャ												
	ノダ												
	ノデス					1	2.2%						
	ノドス												
	ノ	6	8.8%			4	8.7%			1	1.6%		
ン系	ンヤ	1	1.5%	2	22.2%			5	35.7%	36	59.0%	28	58.3%
	ンジャ												
	ンダ											1	2.1%
	ンデス	25	36.8%	6	66.7%	24	52.2%	5	35.7%				
	ンドス					1	2.2%	1	7.1%				
	ン	3	4.4%			3	6.5%	3	21.4%	10	16.4%	16	33.3%
ノン系	ノンヤ												
	ノンジャ												
	ノン	1	1.5%										
ネヤ系	ネヤ			*	*			*	*	10	16.4%	*	*
	ニャ					3	6.5%			2	3.3%		
	ンニャ									1	1.6%		
	ネンヤ			*	*			*	*			*	*
	テンヤ	*	*			*	*			*	*	2	4.2%
ネン系	ネ	3	4.4%			4	8.7%						
	ネン	28	41.2%	*	*	5	10.9%	*	*			*	*
	テン	*	*	1	11.1%	*	*			*	*	1	2.1%
計		68	100.0%	9	100.0%	46	100.0%	14	100.0%	61	100.0%	48	100.0%
総計		77				60				109			

		奈良				和歌山				滋賀			
		非過去		過去		非過去		過去		非過去		過去	
ノ系	ノヤ	3	4.3%							3	5.6%		
	ノジャ												
	ノダ					1	2.0%						
	ノデス	1	1.4%										
	ノドス												
	ノ	13	18.8%	1	4.3%	4	8.0%			3	5.6%		
ン系	ンヤ	17	24.6%	5	21.7%	17	34.0%	19	34.5%	2	3.7%	10	30.3%
	ンジャ												
	ンダ	1	1.4%										
	ンデス	3	4.3%	1	4.3%	10	20.0%	4	7.3%	1	1.9%	1	3.0%
	ンドス												
	ン	10	14.5%	14	60.9%	9	18.0%	10	18.2%			1	3.0%
ノン系	ノンヤ												
	ノンジャ												
	ノン												
ネヤ系	ネヤ	8	11.6%	*	*			*	*	8	14.8%	*	*
	ニャ												
	ンニャ												
	ネンヤ			*	*			*	*			*	*
	テンヤ	*	*	1	4.3%	*	*	3	5.5%	*	*	5	15.2%
ネン系	ネ	10	14.5%			9	18.0%			7	13.0%		
	ネン	3	4.3%	*	*			*	*	30	55.6%	*	*
	テン	*	*	1	4.3%	*	*	19	34.5%	*	*	16	48.5%
計		69	100.0%	23	100.0%	50	100.0%	55	100.0%	54	100.0%	33	100.0%
総計		92				105				87			

空欄は、当該の用例が出現しなかったことを表し、*はその環境では出現しえないことを表す。

この結果について、特に以下の点に注目したい。

① 述語が過去形の場合、ノダ相当形式はン系に集中する

② ネンは使わないがテンは使うという地域がある

①は主にノヤとンヤの分布に関わることであり、本章で考えるテンの成立過程に大きく関係する。②はネンよりも先にテンが成立していたことを示唆する結果である。以下、それぞれについて詳しく述べていく。

4.2.1. ノ系とン系の偏り

表 5-2 と表 5-3 を見ると、過去形におけるンヤの割合が非過去形に比べて非常に高くなっていることがわかる。同時に、過去形に後接するノ系の割合が非常に低くなっている。このような偏りをもたらすのは、「アルノヤ」が「アンノヤ」になるような撥音便形や否定辞が前接して前接音が「ン」のときにン系が後接できないということが背景にあると考えられる。

（30）足もとに、一ぴきのかえるが、じっとうずくまって動こうとしいひんノヤ。

【読みがたり・京都「蟹満寺の話」】

（30）は、ノヤの前が否定辞「ヒン」であり、「ン」で終わっているので、ここでン系を使うことはできない。「*しいひんンヤ」のように撥音が続いてしまうからである。一方、ノ系にはそのような制約はない。そのため、ノ系は撥音に後接する場合に偏って使用されるようになったと考えられる[5)]。

中井（2014:28）はン系の形式がノ系から変化したものだとしており、その変化について「最初、時制ではなく前の母音の種類によって起こり、後に結果として時制が関わるようになった」と説明し、「母音 a ノヤ・ノドス→母音 a ンヤ・ンドス」の変化が起こったとしている。必ず「ン」で終わる動詞否定形や、「ル・ス」で終わる動詞の場合、「ンン」の音連続が許されないので、変化から取り残されたという。「ル・ス」で終わる動詞は数が多いため、結果として非過去形にノ系、過去形にン系という対立が生じるようになったとしている。

ただ、「非過去形にノ系、過去形にン系」とは言っても、ン系については直前が撥音でなければどこにでもつく。実際、表 5-2 と表 5-3 でも、非過去形につくン系も一定数存在する。むしろ、ここで注目したいのは、述語が過去形の場合はノ系ではなくン系が後接するのがほとんどであるということである。特に『ふるさと』では、過去形に後接するノ系は、奈良県の 1 例だけである。『読みがたり』では過去形に後接するノ系もそれなりにあるが、これは、3 節で言及した昔話資料の写実性に関係すると思われる。

以上のように、例外も多いが、近畿方言のノダ相当形式においては、過去形に後接するのはノ系ではなくン系がほとんどであると言える。そして、この傾向は、タンヤからテンが成立する大きな要因となったと考えられる。

5） この分布は筆者の内省にも合う。詳しくは第 4 章の 3 節を参照されたい。

4.2.2. ネンとテンの差

次に、「ネン」と「テン」の使用状況について見てみよう。ノ系やン系の形式に比べると使用頻度が低いことがわかる。表 5-2 を見ると、大阪の「ネン」が 21.2%と最も高いが、その他はすべて 10%にも満たない使用率の低さである。一方、表 5-3 を見ると、『ふるさと』ではその使用率が上がる。最も大きいのは滋賀の「ネン」（55.6%）で、10〜40%のものが一定数存在する。この違いの背景には、データの分量の違いや、『読みがたり』において編者の手が入った可能性などもあると考えられる。しかし、「ネン」や「テン」が昔話よりも談話資料に現れやすいという結果を積極的に解釈すると、人から聞いたことや言い伝えられてきたことを語るよりも、個人的なことを語るのに「ネン」や「テン」が使われやすいということが考えられる。第 4 章の 6.2.1 節で述べたように、ネンはンヤやネヤよりも談話的な性質が強く、聞き手の知らないことを唐突に伝えるような場面でよく使用される。このような場面では、伝える内容は個人的なことであることが多く、ネンとの相性がいい。このことを検証するには今回のデータでは不十分であり、また、本章の目的からも外れるため、これ以上は今後の課題としたい。

以上のように、「ネン」と「テン」の使用に関して、資料による使用頻度の違いはあるものの、共通点も多い。ここで注目したいのは、表 5-2 の大阪・奈良・和歌山の結果である。中でも、奈良と和歌山において「ネン」よりも「テン」の使用が優勢であることに注目したい。そこで、この 3 府県におけるネン系の形式の使用状況について詳しく見ていくことにする。

大阪では、「ネン」の使用頻度が最も高く、「テン」もある程度使用されている。「ネン」がよく使われているのは表 5-3 でも同様である。このことは、大阪において「ネン」が定着していることを示していると言える。さらに、『読みがたり』と『ふるさと』の両方に言えることだが、大阪の「ネン」は、以下のように丁寧体と共起しているものが多い。

（31）見ていた村人たちも、なにかひそひそと話しながら、みんな帰らはったそうでんネン。　【読みがたり・大阪「ならずのナツメ」】

（32）アノ　オーサカベンオー　モー　バッカリ　ベッタリ　ヤルノー　オーサカベン　ズクズクヤ　イーマンネン。
（あの、大阪弁を、もう大阪弁ばかりべったりとやるのを「大阪弁ズクズクだ」と言うんです。）　【ふるさと・大阪】

「ネン」の直前の「でん」「まん」は「デス」「マス」が音変化したものであり、「デスネン」「マスネン」という形でも使用する。このような丁寧体と共起した「ネン」が多いのは、「デスネン」「マスネン」が大阪方言に特有の言い回しとして定着しているということの表れだと考えられる。このような特徴は、他の 5 府県には見られなかった。

次に、奈良と和歌山のデータを見てみよう。こちらは大阪と違って、「ネン」よりも「テン」のほうが優勢な地域である。表では奈良県・和歌山県としてまとめてあるが、県内でも「テン」の使用に地域の偏りがある。

表 5-4　『読みがたり』奈良県におけるネン系の用例数

	北和		南和	
	非過去	過去	非過去	過去
ネ	1　3.6%		2　2.9%	
ネン	4　14.3%	*　*		*　*
テン	*　*	39　17.0%	*　*	10　2.5%

表 5-4 は、表 5-2 の奈良県のデータのうち、ネン系の形式のみを取り上げたものである。割合は他の形式も合わせたものなので、表 5-4 だけでは 100%にはならない。この表を見ると、「テン」の多くが北和地域で使用されていることがわかる。また、「ネン」の用例も北和にのみ存在する。なお、『ふるさと』の収録地域は五條市であり、北和地域に当たる。

次に、和歌山のデータを見てみる。和歌山は「紀北」「紀中」「紀南」の 3 地域に分けており、ネン系の用例数は以下のとおりである。

表 5-5　『読みがたり』和歌山県におけるネン系の用例数

	紀北		紀中		紀南	
	非過去	過去	非過去	過去	非過去	過去
ネ						
ネン		*　*		*　*		*　*
テン	*　*		*　*		*　*	20　8.5%

この表から明らかなように、和歌山県の『読みがたり』におけるネン系は「テン」のみであり、紀南地域でしか使用されていない。なお、表 5-3 の『ふるさと』の結果でも和歌山のネン系には「テン」しかないが、この収録地点も紀南地域の田辺市である。以上のことから、和歌山県の紀南地域では、「テン」は使うが「ネン」は使わないということがわかる。このことは、筆者が 2010 年に和歌山県上富田町（紀南地域）で行った面接調査の結果と一致する。

以上のように、「ネン」と「テン」の使用に関して、大阪のようにどちらも使う地域もあるが、奈良県（北和）や和歌山県（紀南）のように、「テン」は使うが「ネン」は使わないという地域も存在する。次節では、奈良や和歌山のような「テン」のみを用いる地域に注目し、「ネン」よりも「テン」のほうが先に成立したのではないかという主張を展開する。

5.　ネンとテンの成立過程

本節では、4 節で述べた調査結果をもとに、近畿方言におけるネンとテンの成立過程について考察する。以下、ネンとテンの成立過程の概要について述べたうえで（5.1 節）、テンの成立過程（5.2 節）とネンの成立過程（5.3 節）に分けて述べる。そして、最後に 5.4 節でネヤとネンヤの成立について補足する。

5.1. ネンとテンの成立過程の概要

4.2.2 節で述べたように、ネンを使わないがテンを使うという地域が近畿地方にはある。このことは、ネンとテンの成立過程が別のルートによるものであり、ネンよりも先にテンが成立した可能性を示唆する。それを踏まえて、本稿では、ネンとテンの成立過程を、以下のように想定する。

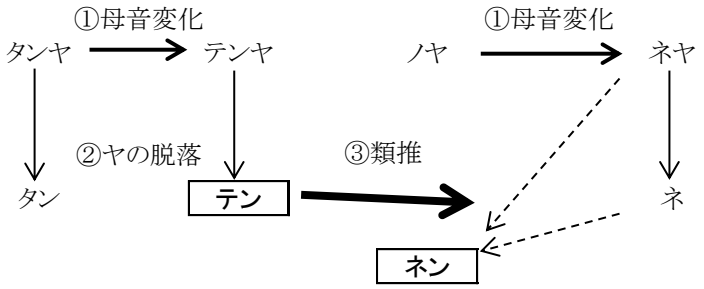


図 5-1　ネンとテンの成立過程

図 5-1 におけるネンとテンの成立過程は、大きく以下の 3 つの段階に分けられる。

① 母音変化

② ヤの脱落

③ テンからネンへの類推

③からわかるように、ネンよりもテンのほうが先に成立しており、テンがネンの成立に関わっているというのが、本章の主張である。以下、テンとネンに分けて成立過程を考察する。

5.2. テンの成立過程

まずは、テンの成立過程について考察する。図 5-1 によると、テンは、タンヤが①母音変化と②ヤの脱落という 2 つのプロセスを経て成立したものと言える。

①の変化は、/ a / から / e / への母音変化による、タンヤからテンヤへの変化を指す。この変化をもたらすのは、後接するヤの半母音 / j / である。また、狭母音 / i / や / e / が前接する場合にもこの変化は起こりやすい。特に、丁寧体の場合は、狭母音の直後という環境のもと、「マシタンヤ」から「マシテンヤ」の変化が起こる。昔話資料の中にも丁寧体にテンが接続している例が多く、過去形に独自の変化が起こりやすい理由の 1 つであったと考えられる。さらに、/j/ からの逆行同化を裏付ける現象として、「*テンカ」が不適格である点が挙げられる。「カ」は疑問を表す文末詞で、「タンカ」は適格だが、「*テンカ」は不適格である。

（33）もうごはん｛食ベタンカ／*食ベテンカ｝。

つまり、タンヤからテンヤへは変化するが、タンカからテンカへは変化しないということである。両者の違いは、ヤが後接しているかどうかである。

このように、タンヤからテンヤの変化において、後接するヤが変化に大きな影響を与えて

いると言える。ヤの有無という音韻的条件は、平叙文と疑問文の区別という統語的条件とも関係している。つまり、「タンヤ／タン（カ）」という平叙文と疑問文の区別がもともとあり、そこから平叙文のみが独自の変化を遂げたということである。現在でも、テンが疑問文では使えないのはそのためだと考えられる。このことを図示したのが次の図 5-2 である。

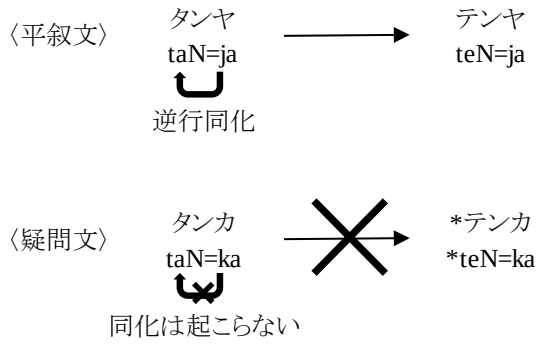


図 5-2　タンヤからテンヤへの変化

次に、②の「ヤの脱落」である。2.2 節で挙げた前田編（1965）が指摘するように、この背景には、「ヤ」で文を言い終わるのを避けるという事情があったと考えられる。高木（2002）が指摘するように、大阪方言のコピュラ「ヤ」は、「話し手が命題を真であると考えている」ということを積極的に表すマーカーと考えることができる。もしそうだとすれば、文が「ヤ」で終わる発話を聞き手に提示するのは、「命題は真である」ということをことさらに示すことになる。しかし、話し手の知っていることを聞き手に提示するという文脈では、情報の真偽よりも、その情報を聞き手に知らせることに重点が置かれているため、「命題は真である」ということをことさらに示すのは避けられる傾向にあったのではないだろうか。このことは、変化の動機として 7 節でも考察する。

今回調査した昔話資料の中で、平叙文において「ン」で言い切る形が見られた。そしてその多くが兵庫県淡路地方に集中している。

（34）あるとき、ほうぼうに看板を出しといたン。

【読みがたり・兵庫「頭のええ若いし」】

（35）タヌキのこっちゃ、銭も、きもんもお手のものや、すぐ浪速行きの船に乗れたン。

【読みがたり・兵庫「柴右衛門ダヌキ」】

今回の資料において、このような用例が近畿の他の地域に見られなかったのは、（34）や（35）のような「タン」が、淡路島以外では疑問文における「タン（カ）」との同音衝突によって用いられなくなったからだと思われる。淡路島に集中して現れるのは、かつてはもっと広く分布していたと考えられるこの種の「タン」が、近畿の周辺部に残存しているものだと考えられる[6)]。このような「タン」が広く使用されるようになったことで、テンヤからテンが成

6）　なお、『読みがたり』の岡山県と香川県のデータにも、以下のような「タン」が見られる。

立しやすくなったと言える[7)]。

5.3. ネンの成立過程

次に、ネンの成立過程について考察する。ネンの成立過程には、図 5-1 からわかるように、①母音変化と、③テンからの類推が関わっている。

母音変化は、ノヤからネヤへの変化における、/ o / から / e / への変化である。これは、2.1 節でも言及した、「ソヤ」から「セヤ」への変化と同様のものである（木川 2001）。この変化を引き起こしたのは、タンヤからテンヤへの変化と同様に、後続する半母音 / j / によるものだと考えられる。これに関しては、(33) で示したのと同様のことが言える。次の (36) のように、「ノカ」は適格だが「*ネカ」は不適格である。これは、ノからネへの変化に際して、「ヤ」が後続することが条件になっているということである。

（36）もうごはん食べへん｛ノカ／*ネカ｝？

これを図 5-2 と同様に図示すると次のようになる。

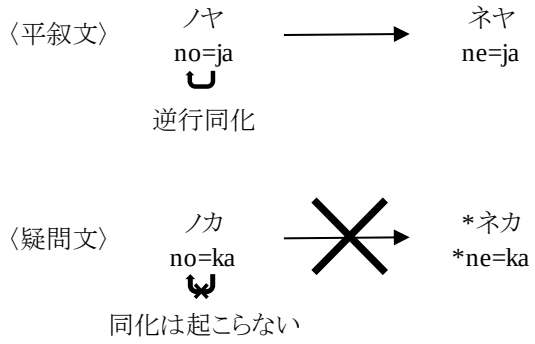


図 5-3　ノヤからネヤへの変化

なお、ネンの成立過程において、②ヤの脱落が起こったかどうかは定かではない。ネという形式も用いられていることを考えると、ノヤから変化したネヤからもヤが脱落し、ネとなったと考えることもできる。ただし、表 5-2 からわかるように、ネは使用頻度が低い。そのため、次に述べるネヤからネンへの変化が、ネを介して起こったか、ネヤから直接ネンがで

・しばらくして、はっと気がつくと、もう龍宮に着いとったン。
【読みがたり・岡山「金のなる木」】

・ほいだら、じゅんじゅん、琴平の町へ入って来たン。
【読みがたり・香川「タヌキのよめ入り」】

7) 表 5-2 と表 5-3 からわかるように、テンヤは今回のデータには少ししか出てこなかった。このことは、テンヤからテンができたという本稿の主張に合致していないように思える。しかし、特に前接音が狭母音の場合は、タンヤとテンヤが非常によく似た音に聞こえる。だからこそこの変化が起こったのだと推測されるが、『読みがたり』では、タンヤかテンヤか聞き取りがはっきりしない場合は、文字化担当者がタンヤにしたのではないかと思われる。ここには、タンヤのほうが共通語の「タンダ」と 1 対 1 で対応するという事情も影響しているだろう。

きたかは、今回のデータからは判断できない。図 5-1 においてネンを指している矢印が破線になっているのはそのためである。

そして、③の類推が起こり、ネンが成立する。先ほど述べたように、ネヤからネンになったのか、ネからネンになったのかはわからないが、どちらにせよ、ネンという音形になるのに、同化などの音変化は考えにくいし、テンのほうが広い分布を示すことも考えると、先にテンが成立しており、そこからの類推が働いたと考えられる[8)]。

なお、ネンが名詞述語に後接する場合、コピュラのヤを介して「学校ヤネン」のようになるが、この形は「学校ナノヤ」から変化したものではない。なぜなら、第 4 章でも指摘したように、ネンが成立したとされる大阪方言では、「*ナノヤ」という形が不適格だからである。また、『読みがたり』のデータにも該当する用例は見られなかった。したがって、名詞につくネンは、他の品詞と同じタイミングで成立したものではなく、まず動詞述語（特に撥音便形や否定形）においてノヤからネンへの変化が起こり、それが名詞述語にもつくようになったと考えられる（ネヤについても同様）。一方、テンの場合は、名詞述語は「学校ヤッタンヤ→学校ヤッテン」という変化のため、他の品詞と同じように変化を起こしたと考えられる。なお、名詞述語につくネンが「ナ」ではなく「ヤ」につくのは、この「ヤッテン」をモデルにしたからではないかと考えられる。

では、なぜ過去形をモデルにしてテンからの類推が行われたのだろうか。1 つには、テンという表現が、その出自であるタンヤよりも意味が制限されており、対人的機能に特化されるようになった（第 4 章参照）からということが考えられる。尾上（1999:37）が述べるように、大阪方言においてネンやテンという表現は、「やわらかく、親しく、手の内を開いて話しかける調子が出る」表現であり、コミュニケーションにおいて使いやすく、多用される。先に成立していたテンがそのような意味合いを持つ表現であったため、非過去形でも同様の表現が求められたのではないか。また、第 4 章でも述べたように、ネンやテンが対人的機能に特化されていると同時に、その元になったノヤは命題めあての機能に偏りつつある。こういった機能分担をするうえでも、過去形のテンだけでなく、非過去形のネンも必要だったと推測できる。

5.4. ネヤとネンヤの成立過程について

ここまで、ネンとテンの成立過程について考察してきたが、最後にネヤとネンヤについても言及しておきたい。ネヤについては、5.3 節で述べたように、ノヤが母音変化を起こしてネヤになったと考える。その妥当性については、すぐ後で検討する。

8） 表 5-3 を見ると、大阪や兵庫ではネンは使われているのにネヤが使われていない。これは今回の資料にネヤがたまたま出てこなかっただけではないかと考えたい。明治後期からの上方落語を調査した小杉（2003）によると、ネヤという形式は明治後期から既に使用されているという。また、木川（2001）の談話データ（兵庫県神戸市・相生市、京都府京都市・山城町）にもネヤは現れている。これもまた、文字化の過程でネヤがノヤになったことが考えられる。

一方、ネンヤについては特に言及していない。また、図 5-1 の中にテンヤはあるがネンヤはない。それは、ネンヤが成立するのはネンよりも後だと考えているからである。おそらく、ネンが成立してネンとテンの対立ができた後、「ネン：テン＝x：テンヤ」という類推から、「x＝ネンヤ」を生み出したのではないかと考えられる。第 4 章で述べたように、ネヤとネンヤはほとんどの振る舞いが同じだが、過去形への後接という点においてのみ異なっていた。具体的には、ネヤもネンヤも「*行ったネヤ」「*行ったネンヤ」のように過去形に直接接続できないが、ネンヤは「行っテンヤ」のように「テンヤ」の形をとることができるという違いである。ネヤとネンヤの類似性に注目して、「ネヤ→ネンヤ→ネン」という過程を想定することもできる。しかし、これだと、過去形に後接できないネヤがネンヤになったことにより「テンヤ」と形を変えたことになるが、なぜそのようなことができるようになったのか説明がつかない。本章でネンヤがネンよりも後に成立したと考えるのには、そのような理由がある。

6. 先行研究との比較

ここまで、近畿方言のノダ相当形式、特にネンとテンの成立過程について考察してきた。本節では、その自説と先行研究を比較し、自説の妥当性を改めて主張する。以下、6.1 節で自説の妥当性について、6.2 節で問題点について述べる。

6.1. 自説の妥当性

ここまで何度も触れてきたが、大阪方言のノダ相当形式の成立過程を考えるに当たって、筆者が最も重視してきたのは、なぜネンは過去形に接続できず、テンになるのかということである。したがって、筆者の説はすべてその問題意識が背景にある。そのことを踏まえて、先行研究との具体的な比較を行っていく。

2.1 節で述べたように、中井（2014）は「ノエ→ネ→ネン」という変遷過程を主張している。確かに、「ノ」が過去形に後接しにくいことを考えれば、ネやネンが過去形に後接しないことにも説明がつく。しかし、「ネ→ネン」という変化がなぜ起こったのかが明確ではない。中井は「タンヤのン等からの類推で」と述べているが、具体的にどのような類推なのか判然としない。また、ネは京都から大阪への借用で、ネンは大阪から京都への借用と中井は考えているが、京都では「ノエ→ネ」の変化が起こったのに、そこからネンにならなかったのはなぜかという説明がつけにくい。また、ネヤの成立に関して、中井はネとノヤの混交によるものだと主張しているが、それだと、第 4 章で述べた、ノヤとネヤの違い（ヤの潜在の可否など）がなぜ生じたのか説明できない。一方、筆者の説だと、ネヤのヤが潜在できないのは、ノヤからネヤへの変化にはヤが重要な条件だったからだという説明が成り立つ。以上のことから、「ノエ→ネ」という変化はありえるかもしれないが、ネヤやネン、テンに関しては、中井説を支持しない。もちろん、大阪方言と京都方言を別々に考えるべきかもしれない。

次に、テンの出自に関して、尾上（1999）説を検討してみる。2.2 節の（2）に挙げたよう

に、尾上はテンスマーカーの「タ」がネンからの類推で「テン」に変わったのだと主張している。以下にその記述を再掲する。

（37）「ネン」という語形は、ノヤ→ネヤ→ネンというように、その由緒正しい生まれをたどることができるが、「テン」の方はそれができない。「あったノヤ」がどう転んでも「あっテン」という形にはならない。ではどうして「あってん」「行ってん」という形が生まれたのか。それはただ、「あった」「行った」の「タ」を、「ネン」の en 音にそろえて「テン」にしただけのことである。（尾上 1999:37）

しかし、これだと、テンができるまでに「*タネン」という形が存在している、もしくはテンと併存していたと考えられる。ネンの成立とテンの成立にさほど時間差がなかったと考えることも可能かもしれないが、「*タネン」がまったくないのは不自然だし、「「タ」を、「ネン」の en 音にそろえて「テン」にしただけのことである」と尾上は述べているが、到底「だけ」とは言えない変化である。尾上はこの変化を「融通無碍の造語法」とし、それが許されるのが大阪の文化であると述べているが、やはり無理のある変化だろう。

6.2. 自説の問題点

以上、大阪方言のノダ相当形式の成立過程に関して、先行研究と比較しながら自説の妥当性を主張してきた。しかし、やはり問題点もあるので、ここで言及しておきたい。

本章の主張の最大の問題点は、成立過程と言いながらも、ネンやテンが成立したとされる明治～大正期のデータを扱っていないことである。この点においては、小杉（2003）や中井（2014）のほうが説得力がある。本章で扱ったデータとの時間差があるとはいえ、第 4 章で記述した現在の体系が念頭にあり、どうしてもそれだけが説明の基準になりがちである。そのため、明治～大正期から現在までの変化を見落としているおそれもある。

しかし、その代わりに、大阪だけではなく周辺の府県のデータをもとに論証している点は、本論文の独自性だと考えている。もちろん、当時の資料にあたることが非常に重要であるのは言うまでもないが、本章で採用した方言学的なアプローチは、それと補い合う関係にあると言える。特に、文献が少なく、消滅しつつある方言については、本章で使ったような昔話資料や談話資料は、変化を考えるうえでも非常に重要なデータとなるだろう。

7. 考察

ここまで、近畿方言の昔話資料および談話資料を手がかりに、大阪方言のノダ相当形式の成立過程について考察してきた。本節では、それが意味するところについて考察していく。具体的には、本章で明らかにした変化がどのように位置づけられるか（7.1 節）、なぜこのような変化が起こったか（7.2 節）、今後どのような変化が起こりうるか（7.3 節）といったことについて考察する。

7.1. 変化の位置づけ

本章で明らかにした大阪方言のノダ相当形式の成立過程は、「タンヤ→テンヤ→テン」というテンのルートと「ノヤ→ネヤ→ネン」というネンのルートがあり、ネヤからネンへの変化に当たってはテンが影響したとまとめられる。2 つの別々のルートを経ているが、「ンヤ」「ノヤ」という「準体助詞＋コピュラ」の構成を持つ形式が「テン」「ネン」になってそのような構成を失い、意味の面でも異なった特徴を持つにいたったという点ではどちらも共通している。

第 4 章では、大阪方言のノダ相当形式の特徴を以下のようにまとめた。

表 5-6　大阪方言におけるノダ相当形式の特徴まとめ（表 4-8 再掲）

	形式	意味
ンヤ	標準語のノダと同様に、「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っている	終助詞なしの場合、〈対人〉で使えないことがある
ネヤ・ネンヤ	準体助詞はないがコピュラを持っている。しかし「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っているとはいえない	終助詞なしの場合、〈対人〉で使えないことがある
ネン	準体助詞もコピュラもなく、終助詞のように振る舞う。しかし、完全に終助詞になったわけではない	終助詞なしの場合、〈対人〉でしか使えない。また、他の形式よりも対人的な機能が強い

第 4 章ではこれを踏まえて、ンヤが「準体助詞＋コピュラ」の構成を持った形式で、ネンが最も終助詞に近く、ネヤとネンはその中間に位置づけられると述べた。形式面についてみると、ネヤ・ネンヤはンヤと違って「準体助詞＋コピュラ」に分けられず、ネンになるとコピュラがなくなっている。意味面についてみると、ネンは他の 3 形式と違って〈対人〉用法に特化され、より対人的な機能が強くなっている。このことを踏まえると、「ンヤ→ネヤ・ネンヤ→ネン」の順に終助詞化していると言える。そして、ネンヤを除けば、この順は本章で明らかにした変化の順序と一致する。つまり、ンヤ（ノヤ）からネンができるまでの変遷は、「準体助詞＋コピュラ」を構成要素とするモダリティ形式からより談話的な機能に特化されたモダリティ形式への変化であると言える。第 4 章で記述した大阪方言のノダ相当形式の各形式の異同が、変遷過程の違いによるものであることが本章で示せたのである。

第 2 章でも言及したように、形式面では固定化や無活用化を起こし、意味面では命題ではなく聞き手に対する機能に特化されるようになるという変化は、「もの」「こと」「わけ」といった形式名詞にも起こっている。その点において、大阪方言のノダ相当形式もそれらと同様の変化として位置づけられる。しかし、異なる点もある。

最も大きいのは、変化のあり方である。本章で主張してきたのは、多くの先行研究が指摘するような「ノヤ→ネヤ→ネン」といった一本道の変化ではなく、テンができたことによってネンもできたというものである。コピュラが脱落することで終助詞のように振る舞うよ

うになるというのは形式名詞の場合にも起こっているが、過去形の場合に先に変化が起こり、それによって非過去形の側の変化が進むというのは例がない。

以上のように、本章で明らかにした大阪方言のノダ相当形式の変遷過程は、命題に関わるモダリティ形式から聞き手に関わるモダリティ形式へという、ある種終助詞化の典型としてとらえられる。しかし、その変化のあり方は「ノヤ→ネヤ→ネン」といったような単純なものではなく、2 つのルートのうちの一方がもう一方に影響して「テン」と「ネン」が成立したという特徴的な変化であると言える。

7.2. 変化の要因

次に、本章で明らかにした一連の変化がなぜ、どのような動機によって起こったのかについて考えてみたい。大阪方言における変化は遅くとも明治後期には起こっていたとされるため、筆者の内省は及ばないが、先行研究で指摘されていることを手がかりに考えてみたい。

前田編（1965）では、「タンヤ→テンヤ→テン」という変化が起こった要因として、主として女性が「「や」止め」「「た」止め」の物言いを避けようとしたことを挙げている。また、神部（1996）は、「タンヤ」と「テン」の意味機能を比べると、「タンヤ」は「断定・判断の意味作用」が勝っており、「テン」は「説明・告知の意味作用」を強く示すと指摘している。さらに、尾上（1999:34-45）では、ネンの持つ意味に関して、次のような指摘をしている。大阪の商家では昔から丁稚に対して「ネンが足らんは念が足らん」と言い聞かせており、それは「ネン」が文末につくと「当たりがやわらかくなる」ためだという。そして、「当たりがやわらかくなる」理由として、「「ネン」ということばは、相手と自分の間にある扉を開いてこちらの手の内を相手に見せるという姿勢を持っている」からであると説明している。そして、このような「ネン」が「垣根をはずして、うちあけてものを言う」という大阪の人が愛用する表現方法であるとまとめている。

以上の先行研究の指摘と、第 4 章および本章で述べてきたことを踏まえると、「ネン」や「テン」が成立した背景として、以下のようなことが想定できる。高木（2002）が指摘するように、大阪方言において、コピュラの「ヤ」は「話し手が命題内容を真だと考えていること」を積極的にマークする機能を持っており、「ヤ」で文が終わるのは、命題内容に関する話し手の態度を表明することにつながる。これは、神部（1996）の言う「断定・判断の意味作用」に当たる。しかし、聞き手の知らないことを打ち明けるような場合、命題内容の真偽よりも、その内容を聞き手に伝えることが最も重要になる。そのような場合、「ヤ」で終わるような言い方は避けられ、神部（1996）の言う「説明・告知の意味作用」の強い表現が求められることになる。「テン」や「ネン」ができた背景には、そのような動機があったと思われる。「「ネン」ということばは、相手と自分の間にある扉を開いてこちらの手の内を相手に見せるという姿勢を持っている」という尾上（1999）の指摘も同様である。第 4 章で述べたが、以下のように、聞き手が知らないことを一方的に言うような場合、ンヤやネヤよりもネンのほうがより自然に使用される。

（38）あんなー、おれ今度東京に行く｛?ンヤ／ネン｝。

ネンが〈対事〉用法で使えないのもこれと関係している。ネンは命題の真偽に対する話し手の態度を積極的には表さず、表すとすれば、松丸（1999）が指摘するように、「確定」であるということだけである。

以上、大阪方言の「ネン」や「テン」が成立した動機について、命題めあてではなく聞き手めあての表現の需要があったということを述べた。しかし、なぜそのような需要があったのか、その背景にはどのような社会言語学的な状況があったのか、といったことについては、変化が起こったのが遅くとも明治後期であり、本研究ではこれ以上明らかにはできない。

7.3. 今後の変化

本章では、大阪方言のノダ相当形式に起こった変化の内実とその要因について考察してきた。最後に、当方言のノダ相当形式に今後どのような変化が起こりうるかということについて言及しておきたい。

第 4 章の 2 節でも言及したように、「ネン」や「テン」といった形式は、大阪府でも全域で使用されているわけではなく、特に南部では使われていない地域が多い。また、本章で明らかにしたように、大阪府の周辺の地域でも、使われている地域とそうでない地域がある。使われている地域でも、和歌山のように「テン」をその地域独自で持っている場合もあるが、京都のように大阪から伝播した場合もある。むしろ、近畿地方においては、大阪から「ネン」が広まったという地域のほうが多いのではないだろうか。

そのような状況において起こるのが、「ネン」の汎用である。岸江（2000）では、岸和田以南の地域の若年層が「ネン」を受容した際に、「ネン」が過去形にも後接して「行ったネン」のように言うようになったと指摘されている。また、小笠原（2014）では、熊取町、貝塚市、岸和田市、泉大津市、堺市といった大阪府南部地域や和歌山市などの大学生を中心として「タネン」という言い方がされているという報告がある。このように、「ネン」や「テン」が本来なかった地域に、これらの形式が取り入れられることによって、「ネン」が時制に関係なく汎用されるようになるという現象は、大阪府南部地域や和歌山市だけでなく、他の地域でも起こっているようである。「タネン」という言い方がどの地域のどの世代に広まっているのかということは、まだ把握されていないが、かなり広がっている、あるいは広がっていくと考えられる。時制によって「ネン」と「テン」を使い分けるよりは、「ネン」のみを使うほうがルールとして単純であるからである。一方、「ネン」と「テン」を本来的に使い分けている話者にとっては、「タネン」という言い方は非常に不自然であり、容易に受容できるものではない。このように、近畿においては、「ネン」の汎用を推し進める地域と「ネン」「テン」の使い分けを維持する地域とに分かれていると言え、それらの地域がどのように影響しあうのかといったことにも今後注目していきたい。

8. 本章のまとめ

以上、本章では、昔話資料をもとに、近畿方言におけるネンとテンの成立過程について考察した。そして、以下のことを明らかにした。

① ネンとテンの使用には地域差があり、ネンは使わないがテンは使うという地域がある。
② このことから、ネンとテンはそれぞれ別の要因で成立したと考えられる。
③ テンはタンヤからの母音変化とヤの脱落によって成立し、ネンはノヤが変化してできたネヤがテンから類推を受けたことにより成立した。
④ ネンヤは、ネンよりも後にできたと考えられる。
⑤ このように考えることで、大阪方言においてネンが過去形に後接できず、意味的にテン＝タ＋ネンとなっている非対称的な現在の体系への説明になりうる。

話者の直感から、また、意味の面から、テン＝タ＋ネンとみなされることが多かったが、その成立過程は別々のものだということを本章では主張した。

この第Ⅱ部では、大阪方言を主たる対象として、ノダ相当形式のバリエーションを記述し、その成立過程を考察した。第 4 章では、ンヤ、ネヤ・ネンヤ、ネンの順に「準体助詞＋コピュラ」の性質を失い、終助詞のようになっていく様子を描くことができたが、本章では、その背景を変化の面から説明することを試みた。特に、上記の（E）、すなわち、なぜンヤ以外のノダ相当形式は接続する述語のテンスに制限があるのかという問題について 1 つの解答を提供できた。

この第 4 章と第 5 章で記述した大阪方言のノダ相当形式がどのように位置づけられるかは、第Ⅳ部で考察する。次の第Ⅲ部ではその考察の材料として、石川方言のノダ相当形式を取り上げる。

第Ⅲ部　石川方言におけるノダ相当形式の発展

第Ⅲ部では、石川方言のノダ相当形式を取り上げる。第 6 章では、石川県若年層方言のノダ相当形式の体系を記述する。石川県若年層方言のノダ相当形式は、多くの形式が存在するが、ガンとゲンのような母音の違いによって文タイプが区別される整然とした体系になっている。第 7 章では、現在のようなノダ相当形式の体系になるに至った変遷過程を明らかにする。先行研究とは逆に、-aN・-eN からガン・ゲンができたと考えることで、接続制限や機能分担も説明できる。

第6章　石川方言におけるノダ相当形式

1. はじめに

ここまで、第 4 章と第 5 章では、大阪方言のノダ相当形式を取り上げてきた。本章と次の第 7 章では、同じくノダ相当形式がさらなる変化を起こしている方言として石川方言を取り上げる。

伝統的な石川方言では、準体助詞「ガ」を使って、「ガ（ヤ）」というノダ相当形式を使用する。

(1) たかし：どうしたがや？　ひどそうな　顔して。
（どうしたの？　つらそうな顔をして。）
ふみこ：なーん、風邪　ひいてしもたがや。今朝から　ものて、ものて。
（いやぁ、風邪をひいてしまったのよ。今朝からつらくて、つらくて）
たかし：起きとって、だんないがかいや？　今、はやっとるさけなー。
（起きていて大丈夫なの？今、はやっているらしいからねえ。）

（加藤 2007:16、下線は筆者による）

(1) は金沢方言の教材として書かれた加藤（2007）で紹介されている、金沢方言の会話例である。この中で、「がや」「が」という形式が使用されている。このように、伝統的な石川方言では、標準語の準体助詞「の」に相当する「ガ」と、コピュラ「だ」に相当する「ヤ」から成る「ガ（ヤ）」というノダ相当形式を使う。

しかし、加藤（2007）でも指摘されているように、現在の若年層は「ガ（ヤ）」ではなく、以下のように「ゲン」などの形式を使用する。

(2) Y：最近、夜、全然電話に出んけど…どうしたン。
X：ちょっと言いにくいけど、笑わん？（Y：おお）　ほんとに笑わん？
Y：おお、笑わんよ。
X：実はわたし、今、社交ダンス、習っとるゲンけど…。
Y：へぇ、そーナンヤ。
X：ジルバやろ、タンゴやろ、モダンやろ、これで、なっかなか、難しいゲンヨ。
Y：ほんとに、そんなもん、踊れランかいや。
X：そりゃ、簡単にはいかんけど…。難しいところがまたいいゲンて。

（新田 2004:166-167）

(2) は新田（2004）で挙げられている金沢市若年層話者による会話例である。この中で下線を引いているものがノダ相当形式だが、(1) に見られたような「ガ（ヤ）」は 1 つもなく、「ン」や「ナンヤ」のように大阪方言と同形の形式や、「ゲン」「ラン」といった伝統方言にはない形式が見られる。本章では、若年層を中心に使用されるこれらの新形式のバリエーションを整理し、その特徴を記述する。

本章の構成は以下のとおりである。まず 2 節では調査概要をまとめ、3 節では準体助詞について記述する。4 節では、ノダ相当形式の概略を示し、どのような形式が使用されるかを簡単に整理する。続く 5 節と 6 節では、当方言のノダ相当形式の形式と意味の特徴について記述する。そして、7 節では、当方言のノダ相当形式の体系を特徴づける。8 節は本章のまとめである。

2. 調査概要

第 4 章では、筆者の母方言が大阪方言のため、筆者の内省をもとに記述を進めたが、石川方言の記述は面接調査の結果をもとに行う。以下、本節では、調査地の概要（2.1 節）とインフォーマント（2.2 節）についてまとめる。

2.1. 調査地について

調査対象である石川方言は、西部方言のうちの北陸方言に属し、県内の方言は以下のように区分される。

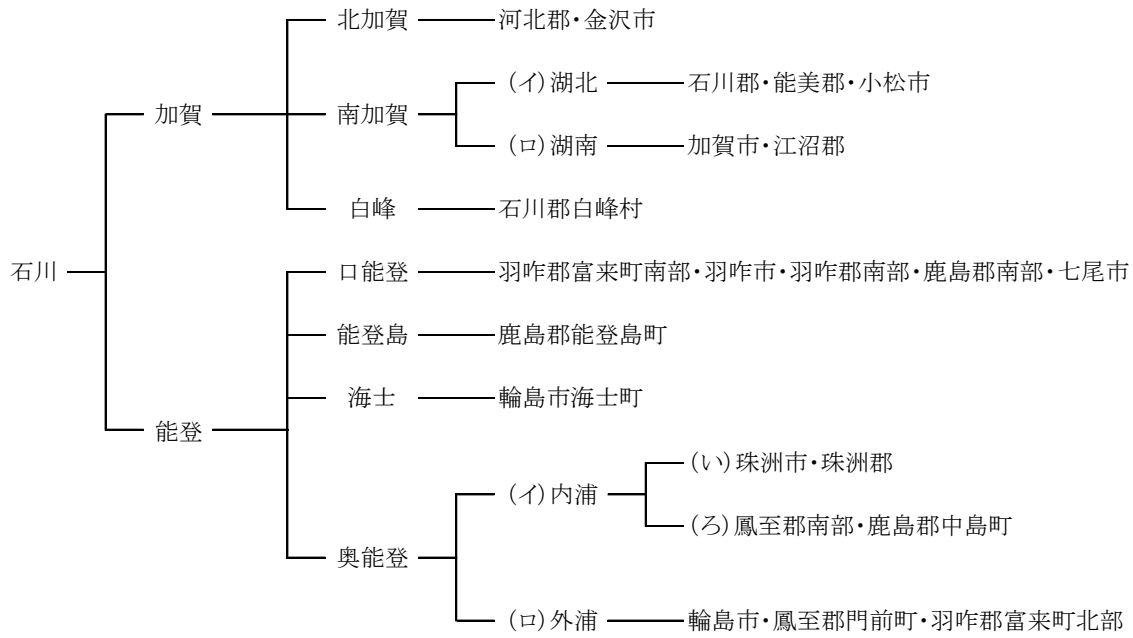


図 6-1　石川県の方言区画（川本 1983:341）

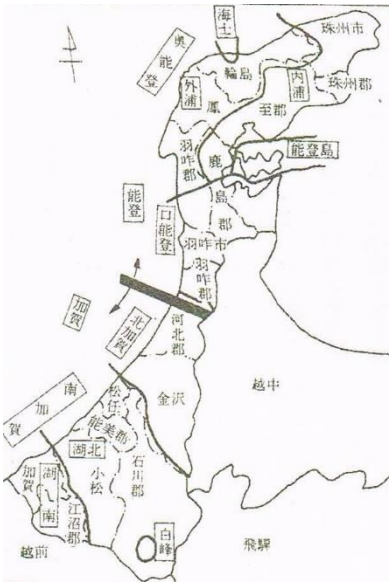


図 6-2　石川県の方言区画地図（川本 1983:342）

図 6-1 および図 6-2 は川本（1983）から引用したものなので、地名は当時のものである。どちらの図からもわかるように、石川方言は南部の加賀方言と北部の能登方言に大きく分かれる。その下位区分のうち、白峰・能登島・海士は「言語の島」とされ、それを除けば基本的に北加賀と南加賀からなる加賀方言と、口能登と奥能登からなる能登方言に分けられることが多い。

石川県内における方言の地域差はあるが、準体助詞に関しては、「一般にカ゜となるが、南加賀の湖南ではカ゜を用いずノやンになる」（川本 1983:354）とされている。3 節で述べるように、現在の若年層は「ガ」をほとんど使わないため、この地域差は現在ではほとんどないと思われる。ただし、2.2 節の表 6-1 にも示したように、インフォーマントの出身地はいずれも小松市よりも北であるため、ここでいう南加賀地域の方言は本研究の対象には入らない。

2.2.　インフォーマントについて

調査は、原則として言語形成期を石川県で過ごした話者の中で、主に 20 代を中心とした若年層を対象とした。若年層を主な対象としたのは、新田（2004）や加藤（2007）などの先行研究でも指摘されているように、石川方言におけるノダ相当形式の変化は、若年層を中心に広がっており、様々なバリエーションを最も頻繁に使用しているのもまた若年層であると考えられるからである。

調査にご協力いただいたインフォーマントに関する情報は、表 6-1 のとおりである。話者 ID の最初のアルファベットは年代を表しており、それぞれ若年層（L）、中年層（M）、高年層（H）を表す。年代の区別は便宜的なものであり、20 代までを若年層、30 代～50 代までを中年層、60 代以上を高年層としている。また、最後のアルファベットは性別を表す（M：

男性、F：女性)。2 桁の番号は通し番号であり、調査した順に機械的につけている。この表のうち、本章における記述の主な対象となるのは、若年層の話者である。石川県内でもインフォーマントの出身地は様々だが、若年層インフォーマント間の個人差や地域差について議論するのは本章の主眼ではない。個人差や地域差、世代差に少し言及することはあるが、本章で記述しようとしているのは、個人や地域に関係なく、ほとんどの話者に共通していることである（地域差や個人差が見られる形式については 4.2.1 節で取り上げる)。なお、石川県内の地名と位置関係については、図 6-3 を参照されたい。

調査は、調査票を用いた面接調査という形で行った。調査者が用意した例文を方言翻訳してもらい、場合によっては語形を提示してその使用可否を尋ねるという方法もとった。

表 6-1　石川方言インフォーマント情報

話者ID	年齢	性別	居住歴
L01F	21	女性	0-21: 白山市（旧松任市）
L02F	22	女性	0-18: 白山市（旧松任市） 18-22: 大阪府吹田市
L03F	21	女性	0-18: 小松市 18-21: 京都府京都市
L04F	21	女性	0-18: 川北町 18-21: 兵庫県宝塚市
L05M	21	男性	0-18: 金沢市 18-21: 兵庫県宝塚市
L06M	23	男性	0-18: 金沢市 18-23: 大阪府豊中市
L07M	24	男性	0-24: 金沢市
L08M	24	男性	0-18: 金沢市 18-21: 富山県富山市 21-24: 金沢市
L09F	27	女性	0-18: 志賀町（旧富来町） 18-19: 金沢市 19-20: 志賀町（旧富来町） 20-23: 金沢市 23-27: 東京都府中市
L10F	20	女性	0-18: 七尾市（旧中島町） 18-20: 富山県富山市
L11F	22	女性	0-19: 内灘町 19-22: 富山県富山市
L12M	20	男性	0-18: 志賀町 18-20: 大阪府豊中市
L13F	26	女性	0-21: 志賀町（旧富来町） 21-26: 七尾市
L14M	20	男性	0-18: 珠洲市 18-20: 富山県富山市
L15F	21	女性	0-18: 羽咋市 18-21: 富山県富山市
L16F	20	女性	0-18: 志賀町 18-20: 富山県富山市
L17M	22	男性	0-18: 七尾市 18-22: 富山県富山市
L18F	20	女性	0-18: 七尾市（旧能登島町） 18-20: 富山県富山市
M19M	57	男性	0-57: 川北町
M20F	56	女性	0-18: 志賀町 18-24: 金沢市 24-56: 川北町
M21F	50	女性	0-50: 金沢市
M22F	34	女性	0-6: 大阪府枚方市 6-18: 七尾市（旧能登島町） 18-24: 京都府京都市 24-34: 七尾市（旧能登島町）
M23F	56	女性	0-18: 七尾市（旧能登島町） 18-21: 愛知県名古屋市 21-28: 大阪府 28-56: 七尾市（旧能登島町）
M24F	36	女性	0-18: 金沢市 18-25: 大阪府高槻市 25-27: 中国 27-36: 大阪府堺市
H25F	84	女性	0-20: 白山市（旧松任市） 21-84: 川北町

年齢は調査時のもの。



図 6-3　石川県の行政区分（2014 年現在）

3. 石川方言における準体助詞

ノダ相当形式について記述する前に、本節では石川県若年層方言における準体助詞について簡単に記述しておく。2.1 節で引用した川本（1983）などでも指摘されているように、南加賀地方の一部を除いて、石川県では伝統的に準体助詞に「ガ[1)]」が使われ、これは富山県方言と共通する。

(3) 「こぞう、こぞう、寺の茶がま穴あいとるさかい、一つ新しいがこうとけ。」
【読みがたり・石川「カンチン茶がま」】

(4) ムスィロ　オルカ゜モ　ヤッパ　オソエテモロテ（筵を織るのもやっぱり教えてもらって　【ふるさと・押水】

(3) の下線部は代名詞として働く準体助詞で、(4) の下線部は名詞節を作る準体助詞である。いずれも「ガ」が使われており、標準語の「ノ」と基本的に置換可能である。

しかし、現在の若年層では、この「ガ」はあまり使われず、「ノ」や「ン」を使用する[2)]。名詞に後接する場合は、「ノ」のみを使用する。つまり、準体助詞とも連体格助詞ともとれる。

(5) 私｛ノ／?ノガ｝を貸してあげる。
(6) ここにある｛ン／?ガ｝が私の本だ。
(7) 昨日買った｛ン／?ガ｝は冷蔵庫にある。
(8) もう少し小さい｛ン／?ガ｝を取って。
(9) 彼が走っている｛ン／?ガ｝を見た。
(10) 宿題があった｛ン／?ガ｝を忘れていた。
(11) 私は暑い｛ン／?ガ｝が嫌いだ。

(5) は名詞に後接する場合、(6) ～ (11) は用言に後接する場合である。いずれの場合も「ガ」は使用せず、「ン」を使うのが一般的である。これらの場合において「ガ」を使うのは不適格とは言わないが、石川県若年層話者にとっては「古臭い」「年寄りが使う」といったイメージ、もしくは「富山の人が言う」というイメージがあるようである。

しかし、「ン」だけでなく、人によっては「ガン」を使うこともある。ただし、「ガン」の使用に関しては個人差が大きく、1 人の中でも使える場合とそうでない場合があるようである。

(12) ここにあるガンが私の本だ。
(13) もう少し小さいガンを取って。
(14) 彼が走っているガンを見た。

---

1) 語中におけるガ行子音は少なくとも中年層以上では鼻音の [ŋ] で実現するが、本論文では基本的に破裂音と区別せずに「ガ」と表記する。ただし、談話資料などを引用する際に、原典において「カ゜」のように表記されているものに関しては、原典のまま表記する。

2) 音環境にもよるが、「ン」よりも「ノ」のほうが高いスタイルで使用されるようである。したがって、以下では、撥音の直後以外では「ン」で代表させる。

例えば、L11F（内灘町出身）は上記の（12）～（14）をすべて適格と判断したが、L01F、L02F、L05M はいずれも不適格と判断した。また、「ガ」なのか「ガン」なのか特に区別していないというインフォーマントも少なくなかった。

このように、「ガン」の使用に関しては個人差が大きいが、ノニ用法になると、「ガン」を使った「ガンニ」の許容度が上がる。

（15）あの人はあんなに食べる｛ン／ガン｝ニ、やせている。

（15）において最も自然に使用される形式は「ン」だと思われるが、「ガン」も許容できるようである。上の（12）～（14）では「ガン」が使えないと答えた話者もいたが、そのような話者でもこの「ガンニ」は言えると判断することが多かった。これは、「ニ」がナ行音であることが関係していると思われる。

さらに、-aN[3] もある。これは、動詞の語幹に接続し、「タベラン（tabe-raN[4]）」のようになるものである。この形式が準体助詞として機能するということは、新田（2004）でも指摘されているが、この使用に関しても個人差がある。

（16）彼がハシットラン見た。

（17）あの人はあんなにタベランニやせている。

（16）の「ハシットラン」は「走っているの」の意味で、（17）の「タベランニ」は「食べるのに」の意味である。このような言い方は、それほど新しいものではない。面接調査において、「自分は使わないが、親や祖父母なら言うかもしれない」とコメントしたインフォーマントが何人かおり、中・高年層話者からも「言う」という回答があったからである。また、談話資料にも以下のような用例があった。

（18）ホイテー　ヨノ　アケラン　マットッテ（それで、夜が明けるのを待っていて）
【ふるさと・押水】

このように、新田（2004）では-aN が若い世代の話者が使用するものとされていたが、筆者の調査ではむしろ古い形である可能性があることがわかった。このことは、第 7 章で-aN の成立過程について考える際に再び言及する。

以上、石川県若年層方言の準体助詞について簡単に記述してきた。伝統的な方言形である「ガ」を若年層はもはや使わず、基本は「ン」を使い、人によっては「ガン」や-aN を使うことがあるというふうにまとめられる。

4. 石川方言におけるノダ相当形式のバリエーション

ここからは、石川県若年層方言におけるノダ相当形式の特徴について記述していく。本節では、詳細な記述に入る前に、本章で記述する形式にはどのようなものがあり、どのように使い分けられているのかを概観する。まずは 4.1 節で形式を概観し、4.2 節では本章で取り上げる形式を整理する。

3） 形の上では、疑問文で使用されるノダ相当形式と同じである。
4） 5.1.1.2 節で後述するが、-raN は-aN の異形態である。

4.1. 使用される形式

若年層話者が使用する主要なノダ相当形式は、述語の品詞・述語のテンス・文タイプの 3 つの基準で使い分けられ、具体的な形は以下のようにまとめられる。

表 6-2　石川方言におけるノダ相当形式の使い分け概要

文タイプ	品詞	対人		対事	
		非過去形	過去形	非過去形	過去形
平叙文	用言	イクゲン イケン イキン	イッテン	イクンヤ イクゲンヤ イケンヤ イキンヤ	イッタンヤ イッテンヤ
	体言	休みネン	休みヤッテン	休みナンヤ 休みネンヤ	休みヤッタンヤ 休みヤッテンヤ
疑問文	用言	イクガン(ケ) イカン(ケ)	イッタン(ケ)	イクガン(ケ) イカン(ケ)	イッタン(ケ)
	体言	休みナン(ケ)	休みヤッタン(ケ)	休みナン(ケ)	休みヤッタン(ケ)

表 6-2 では、用言「行く」と体言「休み」を例に、それぞれの時制・文タイプ・用法ではどのような形をとるかが示されている。同じセルに併記されている語形は、バリエーション関係にある、もしくは使用に個人差がある形式である。疑問文における「ケ」は基本的に使用が任意なので、カッコに入れて表記している。ここから、ノダ相当形式を取り出すと以下のようになる。

表 6-3　石川方言におけるノダ相当形式

文タイプ	品詞	対人		対事	
		非過去形	過去形	非過去形	過去形
平叙文	用言	ゲン -eN~-iN	テン	ンヤ ゲンヤ -eNja~-iNja	タンヤ テンヤ
	体言	ネン	テン	ナンヤ ネンヤ	タンヤ テンヤ
疑問文	用言	ガン(ケ) -aN(ケ)	タン(ケ)	ガン(ケ) -aN(ケ)	タン(ケ)
	体言	ナン(ケ)	タン(ケ)	ナン(ケ)	タン(ケ)

ただし、ここに挙げた形式は、述語への接続について様々なものを含んでいる。

（19）今から学校に行くゲン。

（20）今から学校に行ケン。

（21）昨日学校行っテン。

（22）明日学校休みネン。

（23）昨日学校休みやっテン。

例えば、（19）の「ゲン」は動詞「行く」の終止連体形に接続しているが、述語が過去形になると、（21）のように「行っテン」となる。この「テン」は過去の意味を含んだ接辞で、いわゆる連用形に接続する。また、（20）の「行ケン」は、動詞「行く」の語幹「ik-」に「-eN」が接続したものである。一方、体言述語のほうも、（22）の「ネン」が名詞に直接つくのに対して、過去形の場合は（23）のようにコピュラの「ヤ」に「テン」が接続する。以上のように、表 6-3 に挙げた形式は接続の面だけを見ても不揃いである。しかし、あえてそれらを同じ表に入れたのは、本章で記述するノダ相当形式の体系が、異なった性質を持つ様々な形式から成るものであるということを示すためである。例文を挙げたような接続などの各形式の詳細な違いに関しては、5 節以降で記述する。

また、表 6-3 の形式を文タイプごとに見ると、平叙文で使用されるゲン・-eN・テン・ネンといった形式はすべて母音がエ段であるのに対して、疑問文で使用されるガン・-aN・タン・ナンといった形式はすべて母音がア段であることがわかる。そして、述語の品詞とテンスが同じで文タイプが異なる場合、ガンとゲン、ナンとネンのように、母音だけが異なる対立を成している。これは、新田（2004）が指摘するように、母音の対立によって文法的性質の違いが表されているのである。本研究でもこの分類を重視し、新田にならってア段の形式群を A 群、エ段の形式群を E 群と呼ぶ。なお、〈対事〉用法の欄にあるンヤはこの対立をなしていないため、どちらにも入らない（本章におけるンヤの扱いについては、4.2.2 節で後述する）。

以上の点に注意しつつ、以下では、本章で取り上げる形式を整理する。

4.2. 本章で取り上げる形式

本章では、表 6-3 に挙げた形式を取り上げるが、すべて同じように取り上げるわけではなく、〈対人〉用法の形式を主に取り上げる。というのは、表 6-3 には〈対人〉と〈対事〉両方に使用される形式を列挙したが、その中でもバリエーションが豊富なのは〈対人〉用法であり、〈対事〉用法の形式は〈対人〉と同じか、それをもとにできたと考えられるからである。例えば〈対事〉の平叙文で使用される「ゲンヤ」なら〈対人〉の「ゲン」に「ヤ」がついたものと考えられる。もちろん、「ヤ」が何なのか、どういった性質を持つのかということは記述するが、〈対人〉と共通するところは適宜省略していく。

このことも含めて、表 6-3 に挙げた形式の扱いについて断っておく必要があるものについて、以下で補足する。具体的には、使用に地域差・個人差のある形式と、「ンヤ」および「ン（ケ）」に関することである。

4.2.1. 使用に地域差・個人差のある形式

2 節でも述べたように、本章では、石川県内における地域差や世代差といった問題は基本的に扱わず、そういった個人差がない事象を中心に扱う。しかし、表 6-3 の中には、使用に

地域差や個人差のある形式も含まれる。筆者が行った調査では、主に以下のような個人差が確認されている[5)]。

① -eN や-aN のような非過去の接辞の形式を使うか

② -eN を使うか-iN を使うか

③ 〈対事〉用法で「ゲンヤ」「ネンヤ」などを使うか

以下、それぞれについて説明する。

4.2.1.1. 非過去の接辞形式の使用

ここでいう「非過去の接辞形式」とは、表 6-3 における-eN と-aN のことである（-iN については次の 4.2.1.2 節で述べる）。これらは、それぞれゲンとガンのついた形式が縮約したものとされている[6)]。「行く」を例にとると、「イクゲン」の縮約したものが「イケン」であり、「イクガン」の縮約したものが「イカン」ということになる。このように、縮約形という意識があってか、「イケン」「イカン」はぞんざいな言い方であるとか、若い人の言い方であるといった指摘をする人も多かった。

しかし文末ではなく、後に何か続く場合は使えると回答する人が多くなる。

（24）明日は仕事アルゲン。

（25）明日は仕事アレン。

（26）明日は仕事アルゲンロ。

（27）明日は仕事アレンロ。

例えば、（24）と（25）のカタカナ部分はどちらも「あるんだ」という意味の言い方だが、（24）の「アルゲン」という言い方はほとんどの人がすると答えたのに対して、「縮約形」である（25）の「アレン」は「自分は言わない」と答える人も少なくなかった。一方、（26）と（27）はこれらが推量形をとって「あるんだろう」の意味になっているのだが、これは「アルゲンロ」も「アレンロ」も言えると答える人がほとんどだった。（25）のような言い方をしないと答えた人でも、（26）よりも先に（27）を答えるというようなこともあった。

このように、-eN や-aN の使用に関しては、一部個人差が見られるものの、ゲンやガンの縮約形として石川県若年層方言の中で使われていると言える。したがって、これらの接辞形式も本章でノダ相当形式として取り上げる。ただし、いつでも「縮約」できるわけではないので、別個のものとして扱う。

なお、「過去」の接辞形式であるテンについても、「イッテン」が「行ったゲン」の縮約形とみなされており、新田（2004）でもそのように扱われているが、これに関しては-eN や-aN とはまた別だと考えたい。というのは、第 7 章でも再び取り上げるが、「*イッタゲン」が認められないからである。ゲンと-eN の関係については、「イクゲン」と「イケン」の両方の形

5） もちろん、個人差は他にもあるが、ここではある程度大きな傾向としてとらえられるもののみを挙げている。

6） これらは新田（2004）では「融合形」とされており、調査でも、「イクゲンを短く言うとイケン」と答えるインフォーマントは少なくなかった。

が存在するのに対して、「イッテン」に関しては、そのもとになった形とされる「*イッタゲン」が使われていないのである。このように、-eN・-aN とテンはいずれも接辞だが、その性質は異なっているのである。

4.2.1.2. -eN と-iN

先ほど、4.2.1.1 節で、-eN を用いた「イケン」という形が「イクゲン」の縮約形とみなされていることを述べたが、表 6-2 を見るとわかるように、この形には「イケン」以外にも「イキン」という形もある。これは、-eN と同様に、動詞の語幹に-iN という接辞が後接している（ik-iN）とみなせる。

しかし、この-iN の使用には-eN 以上に個人差があり、能登地方に限って使用されるようである。さらに、能登地方でも、-eN を使う人と-iN を使う人に分かれており、能登地方における明確な地域差を確認することはできなかった[7)]。いずれにせよ、-eN と-iN は同じ振る舞いをしており、単純にバリエーションの関係にあると言える。したがって、本章では、両形式の違いを問題にする場合を除いて、これらを-eN とまとめて扱うことにする。

4.1 節で述べたように、表 6-3 の諸形式は A 群と E 群という母音の違いによって対立しており、それが文タイプの違いに反映されている。-eN と-iN もまた母音だけが異なる形式の組み合わせだが、アとエの対立ではないし、機能の違いもない。では、-eN と-iN の母音の違いは、どのように考えたらいいだろうか。おそらくこれは、イ段とエ段の混同という能登方言の特徴（岩井 1983:8）によるものだろう。現在の若年層ではそのような混同もないが、この-iN ができた頃にはまだイ段とエ段の混同が起こっていたと考えられる。つまり、-eN と-iN は能登方言の音韻体系を背景とした音声的なバリエーションの関係にあるということである。同様の関係にある形式として「ゲ」と「ギ」があるが、このことは、成立過程に大きく関係するため、詳しくは第 7 章で述べる。

4.2.1.3. 〈対事〉用法におけるゲンヤなど

次は、平叙文の〈対事〉用法で使用されるゲンヤ・ネンヤ・テンヤ・-eNja である。これらはその外形からわかるように、E 群の形式のうち〈対人〉用法で使用されるゲン・ネン・テン・-eN に「ヤ」がついたものである。具体的には、以下のように使用される。

（28）（人だかりを見て）へー、まだ結構人｛おるゲンヤ／オレンヤ｝。

（29）（人がたくさん来たと聞いて）へー、そんなにキテンヤ。

（30）（天気予報を見て）へー、明日雨ネンヤ。

これらはすべて話し手が事態を把握したことを表す〈対事〉用法であり、「ヤ」をとると〈対人〉用法になる。

ただし、（28）～（30）のような言い方には個人差があり、言えないと判断するインフォーマントも少なくない。傾向としては、使えると答えたのは能登地方のインフォーマントに

7） 能登地方の中でも奥能登、つまり北部ほど使う傾向があり、筆者が調査した限りでは志賀町や七尾市よりも北で使用されるようである。

集中している。また、「ヤ」を「ゲンヤッタ」「テンヤロ」のように活用させられるかどうかには、さらに個人差がある[8)]。このことから、このような形式は比較的新しいものであり、〈対人〉専用の形式を発達させた後に、そこに「ヤ」をつけることで〈対事〉用法としたものだと考える[9)]。したがって、接続などの形式的特徴は基本的に「ヤ」をつける前の形式と同じなので、5 節では基本的に〈対人〉の形式を取り上げる。「ヤ」をつけることと〈対事〉用法で使用されることの関係については、6 節で述べる。

4.2.2. 「ンヤ」と「ン（ケ）」について

ここまでは、使用に個人差がある形式の扱いについて個別に説明してきたが、本節では、個人差があるわけではないが、その分布について断っておくべき「ン」に関する形式についてまとめる。

ここで問題にしている「ンヤ」と「ン（ケ）」は本来同じものであり、ンヤとまとめることができる。そして、そのンヤは新田（2004:168）では「地方共通語」とされており、調査でも「他県の人と話すときに使う」というコメントをするインフォーマントが多く、高いスタイルで用いられる形式であることがわかる。しかし、単純にンヤは共通語的な形式であると言うことはできない。もしそうだとすると、表 6-3 のすべてのセルにンヤが入ることになるはずだが、そうはなっていない。これは、共通語的に使うンヤと方言として使うンヤがあると考えているからであり、表 6-3 に書いてあるのは方言として使うンヤである。

ここで、表 6-3 におけるンヤの表記のしかたについて言及しておく必要がある。過去形の「タン（ケ）」と名詞につく「ナン（ケ）」は、その形を見ると、「タ＋ン（ケ）」「ナ＋ン（ケ）」のように分けられると考えられる。「タ」は用言につく過去マーカーで、「ナ」はコピュラの連体形である。にもかかわらず、表 6-3 において「タ」や「ナ」をンヤと結び付けて一単位として書くのは、方言としてのンヤが使用されるのがこれらの後に続く場合に限られるからである[10)]。また、「タン」「ナン」はそれぞれ「テン」「ネン」と母音の違いによる対をなしており、それを重視したいと考えているからである。このことは、第 7 章で考察する成立過程にも大きく関係する。

本節では、共通語的な形式とされるンヤだが、過去形につく場合と名詞につく場合はもはや方言として使用されるンヤであるということを述べた。したがって、このようなンヤ（実際は「タン」「ナン」として扱う）は本章での記述の対象とし、「どこ行くン？」のようなものは地方共通語と考え、本章では扱わない。

8） 5.2 節で詳しく記述するが、ゲンやテンなどの形式が活用する際には、「ゲンタ」「テンロ」のように「ヤ」を挟まない形になる。

9） このような、コピュラで終わると〈対事〉と解釈されるというのは、第 3 章で言及した富山方言などと同様の傾向である。

10）〈対事〉用法の平叙文の非過去形につく「ンヤ」は例外的なものである。というより、〈対事〉用法で「ンヤ」を使うのは、ノダ相当形式が〈対人〉用法を中心に発達したことの裏返しである。このことは 6 節で詳しく述べる。

以上、石川県若年層方言のノダ相当形式を概観し、本章で記述する形式を整理した。基本的には表 6-3 に従うが、細かいことについては本節で述べたとおりである。次節からは、ここまでの内容を踏まえた上で、各形式の特徴について記述していく。

5. 形式的特徴

本節では、石川県若年層方言におけるノダ相当形式の形式面の特徴を記述していく。表 6-3 のところで既に触れたが、接続をはじめとして、形式面の特徴は非常に多様である。本節では、以下の点について記述する。

① 述語への接続（5.1 節）
② 活用（5.2 節）
③ 文タイプ（5.3 節）
④ 文中における位置（5.4 節）

このうち、①と③については、その概略が既に表 6-3 に示されているが、より詳しい記述を行う。

5.1. 述語への接続

既に 4.1 節で言及したが、接続する述語の種類や接続のしかたは、形式によって様々である。ここでは、述語のテンス[11)] によって以下のように形式を分類する。

（a）述語が非過去形の場合：ゲン・ガン・ネン・ナン・-eN・-aN
（b）述語が過去形の場合：テン・タン

これを見ると、述語が過去形の場合は形式が限られている（しかも文タイプによって使用する形式が決まる）のに対して、非過去形の場合は多くの形式が使用されることがわかる。また、非過去形と過去形の両方に接続できる形式はないこともわかる[12)]。したがって、以下では、非過去形の場合と過去形の場合とに分けて整理する。

11）ここで言う「述語のテンス」とは、大まかに言えば、ノダ相当形式が接続してできた形式が「するのだ」と解釈できるか「したのだ」と解釈できるかの違いである。なぜこのようなことを断るのかというと、同じノダ相当形式という用語でくくっているが、既に指摘したように、その接続のしかたは様々であり、何がテンスを表し分けているのかが形式によって異なるからである。例えば、「行くゲン」の場合、「行く」が「行った」とテンスにおいて対立する非過去形であり、それがノダ相当形式ではなくその前の述語によって表されている。一方、「イケン」は「行く」の語幹「ik-」に「-eN」が接続した「ik-eN」と分析される。この場合、動詞語幹はテンスを標示できず、「イケン」となって初めて「非過去」の意味を持つことが表される。つまり、「行くゲン」は「動詞の非過去形」に「ゲン」が後接していると言えるが、「イケン」はそうとは言えないのである。このことを踏まえつつも、本章では便宜的にこれらをまとめて「述語が非過去形の場合」とする。

12）もちろん、ナンとタンをそれぞれ「ナ＋ン」「タ＋ン」と分析すれば、「ン」は非過去形と過去形の両方に接続できることになる。しかし、4.2.2 節で述べたように、ここでは「ナン／ネン」「タン／テン」という対立を重視したいので、このような分け方はしない。

5.1.1. 述語が非過去形の場合

述語が非過去とは言っても、述語への接続のあり方は様々であり、以下のようにまとめられる。

表 6-4　述語が過去形の場合における各形式の接続

	ゲン	ガン	-eN	-aN	ネン	ナン
動詞・形容詞の終止連体形	○	○				
動詞語幹			○	○		
名詞					○	○

○:接続可

この表を見ると、形式は 6 つ、接続環境は 3 種類あるが、それぞれの接続環境につき 2 つずつの形式（ゲンとガン、-eN と-aN、ネンとナン）が当てはまり、それぞれのペアが E 群の形式と A 群の形式の組み合わせになっていることがわかる（文タイプに関しては表 6-3 および後述の 5.3 節を参照）。このことから、述語が非過去形の場合、使用されるノダ相当形式は 6 つもあるが、非常に整然とした体系であることがうかがえる。以下、それぞれについて記述する。

5.1.1.1. ゲン・ガン

まずはゲンとガンについてまとめる。当方言の動詞・形容詞は、標準語と同じで、終止形と連体形の区別がなく、同じ形であるため、ここでは「終止連体形」としている。なお、終止形と連体形が形の上で区別されるのは形容動詞およびコピュラだが、ここで挙げるゲンとガンは動詞と形容詞にしか接続できないので、ここで扱う形式が接続するのは「終止連体形」である。

動詞・形容詞の終止連体形に接続するのは、ゲンとガンである。これらは、接続のしかたについてはどちらも同じであり、異なるのは使用される文タイプである。

（31）学校に行くゲン。

（32）今日は寒いゲン。

（33）どこに行くガン（ケ）？

（34）そんなに厚着して、寒いガン（ケ）？

（31）と（32）はゲンの例で、（33）と（34）はガンの例である。それぞれ動詞と形容詞に後接している。すぐ上で述べたように、ゲンとガンが後接するのは動詞・形容詞の非過去形であり、名詞やコピュラに後接することはできない。

（35）今日は休み｛*φ／*ナ／*ヤ｝ゲン。

（36）今日は休み｛*φ／*ナ／*ヤ｝ガン？

（35）と（36）はそれぞれゲンとガンが名詞に接続した例だが、直接名詞につくこともできないし、連体形であろうと終止形であろうと、コピュラを介してつくこともできない。

5.1.1.2. -eN・-aN

次に、-eN と-aN について述べる[13)]。これらは表記のしかたを見てもわかるように、拘束形式に接続する接尾辞である。そのため、動詞の終止連体形や名詞のような独立形式にはつかず、動詞の語幹につく。

（37）学校にイケン（ik-eN）。

（38）どこにイカン（ik-aN）（ケ）？

（37）は-eN が、（38）は-aN が「行く」の語幹についたものであり、それぞれ平叙文と疑問文である。このような「イケン」「イカン」という形は、（31）の「行くゲン」や（33）の「行くガン」を短くしたものと話者は考えているようである。新田（2004）でもそのように記述されており、「イクゲン」「イクガン」がさらに変化を起こして「イケン」「イカン」となったとされている（この変化に関しては第 7 章で議論する）。

なお、上記の例では子音語幹動詞である「行く」を例にとったが、「食べる」のような母音語幹動詞にも-eN や-aN は接続する。ただし、その場合、新田（2004:169）によると、以下のように「五段化」が起こる。

表 6-5 「するのだ」の変遷（新田 2004:169）

（1）		（2）		（3）
何するガンヤ	→	何するガン	→	何すラン
su-ru-gaNja		su-ru-gaN		sur-aN
		何するゲンて	→	何すレンて
		su-ru-geN-te		sur-eN-te

この表 6-5 は（1）から（3）へと変化したことを示しており、（2）の段階から（3）の段階に移る際に、「する」の語幹が「su-」から「sur-」になっており、いわゆるラ行五段化を起こしている。つまり、-eN や-aN は子音語幹動詞ならそのまま語幹につくが、母音語幹動詞の場合は子音語幹化した後につくということである。ただし、本章では表 6-5 のように、（1）から（3）への変化の中で「五段化」が起こったとは考えず、-eN、-aN の異形態として-reN と-raN があると考える。その理由は、表 6-5 のような変遷過程は考えないからということと、「五段化」が当方言には認めにくいからである[14)]。前者の理由については第 7 章で詳しく述べる。

13）既に 4.2.1.2 節で述べたが、-iN は-eN と同じ振る舞いをするので、ここでは-eN で代表させる。

14）例えば、母音語幹動詞の否定形も「タベラン」のようにはならない。

最後に、-eN と-aN が後接するのは動詞の語幹のみであり、形容詞の語幹やコピュラなどには後接しないことを確認しておく。

（39）*今日は寒エン（samu-eN）。

（40）*今日は寒アン（samu-aN）？

（39）と（40）は、形容詞「寒い」の語幹「samu-」にそれぞれ-eN と-aN を後接させたものであるが、どちらも不適格である。このように、-eN と-aN が後接するのは動詞の語幹のみであり、形容詞の語幹にはつかない。また、新田（2004）では、過去マーカーの「タ」に-eN が後接したものがテンであり、-aN が後接したものがタンであるとされているが、本章では、これらは別個の形式と考え、5.1.2 節で扱う。

5.1.1.3. ネン・ナン

ネンとナンはどちらも名詞に直接つく。

（41）明日は休みネン。

（42）明日は休みナン（ケ）？

（41）はネン、（42）はナンの例である。どちらも、名詞に直接ついており、間にコピュラを挟むことはできない。

（43）明日は休み｛*ナ／*ヤ｝ネン。

（44）明日は休み｛*ナ／*ヤ｝ナン？

これは、ナンの「ナ」がもともとコピュラの連体形であり、ネンはその母音を変えて作ったものだからである（詳しくは第 7 章で）。ネンというのは大阪方言では動詞や形容詞にもつくが、当方言ではそうはならない。もちろん、ナンも同じである。

（45）*学校に行くネン。

（46）*どこに行くナン？

同じネンという形式でも、このように振る舞いが異なるのは、その成立過程が異なるからだと考えられる。

5.1.2. 述語が過去形の場合

次に、述語が過去形の場合に使用される形式について整理する。とは言っても、非過去形の場合には 6 つあったが、こちらはテンとタンの 2 つしかない。また、この 2 つはゲンとガンのペアのように、文タイプが異なるだけで接続に関しては性質を共有している。

（47）学校にイッテン。

（48）どこにイッタン？

また、これらは動詞だけでなく形容詞やコピュラにも接続する。

（49）昨日サムカッテン。

（50）昨日サムカッタン？

（51）昨日休みヤッテン。

（52）昨日休みヤッタン。

（49）と（50）は形容詞、（51）と（52）はコピュラの例だが、すべてテンとタンが接続している。非過去形の場合は述語の品詞によって接続する形式が異なっていたが、過去形の場合は必ずテンかタンのどちらかになる。

5.2. 活用

次に、ノダ相当形式の活用について記述する。表 6-3 中の主要な形式を、活用の有無で分けると以下のようになる。

活用する　：ゲン・-eN・ネン・テン

活用しない：ガン・-aN・ナン・タン

これを見ると、E 群の形式は活用し、A 群の形式は活用しないということがわかる。そして、5.1 節の接続においてペアをなしていたゲン・ガン、-eN・-aN、ネン・ナンがそれぞれ活用するものと活用しないものに分かれていることもわかる。

では、活用する形式がどのように活用するかについて記述していく。これらは、以下のような形をとる。

表 6-6　ノダ相当形式の活用

	基本形	過去形	推量形
ゲン	イクゲン	イクゲンタ	イクゲンロ
-eN	イケン	イケンタ	イケンロ
ネン	休みネン	休みネンタ	休みネンロ
テン	イッテン	イッテンタ	イッテンロ

表 6-6 は、動詞「行く」、名詞「休み」を例にとって、過去形および推量形がどのような形をとるかを示したものである[15]。この場合、ノダ相当形式そのものの活用を表しているので、過去形は「のだった」、推量形は「のだろう」に相当する形である。表中で下線を引いたように、どの形式においても、過去形は「タ」、推量形は「ロ」を後接させることで作ることができる。これは、当方言におけるノダ相当形式の伝統形式「ガヤ」や、第 4 章で記述した大阪方言のンヤなどと違って、コピュラの「ヤ」が活用しているのではなく、「タ」や「ロ」がノダ相当形式に直接ついているのである。

しかし、「タ」はともかくとして、「ロ」というのは、推量形を作る形式として当方言では一般的ではない。当方言では、推量形を作る際には「行くヤロ」「寒いヤロ」のように「ヤロ」を使うのが普通で、「*行くロ」「*寒いロ」とはならない。では、この「ロ」とは何なの

15）活用形というと、他にも否定形などがありうるが、これらの形式はいずれも否定形をとることはできず、「行くんじゃない」のような否定形は、「ンヤナイ」「ンジャナイ」のように、標準語もしくは地方共通語を使って言うしかない。なお、伝統形式であるガヤの場合、否定形は「ガデナイ」もしくは「ガンナイ」という形になる。

か。これは、これらエ段の形式のもとになったと思われる「ゲ」の性質を引き継いだものと思われる。

（53）そしてなんじゃ、その寺あれ行くが道がそんな近いがんなかったんやろ。二里も三里もあったげぇろ。　【加賀の昔話「肉附面」】

（53）は昔話の用例だが、下線部の「げぇろ」は「ゲ」の推量形である。そもそもこの「ゲ」は「ガヤ」が「ガイ」に変化してそれがさらに母音変化を起こしたものである。つまり、（53）の「げぇろ」は「がやろ」が変化したものであり、「ロ」という形態素を取り出す必要はないのである。変化の詳細については第 7 章で議論するが、「ゲンロ」などの背景にはこのような変化があるということだけ確認しておく。

ちなみに、-eN の使用に関して個人差があるというのは 4.2.1.1 節で述べたとおりだが、そこでも言及したように、-eN で言い切るよりも過去形や推量形のほうが許容度が上がる傾向がある。

（54）明日は仕事アレン。　（（25）再掲）

（55）明日は仕事アレンロ。　（（27）再掲）

この例で言うと、（54）は言わないと判断する人でも、（55）になると自然に回答されるようになる。これは、文末言い切りよりも後に何か続いたほうが融合しやすくなるということだと思われる。このことは第 7 章でも触れる。

5.3. 文タイプ

次に、文タイプと使用する形式の関係について整理する。このことは既に表 6-3 にまとめてあるが、改めて以下に整理する。

平叙文：ゲン・-eN・ネン・テン

疑問文：ガン・-aN・ナン・タン

この分類は、5.2 節で述べた活用の有無による分類と一致する。つまり、活用する形式は平叙文で使用し、活用しない形式は疑問文で使用するという関係にあり、非常に整然とした体系であることがここからもうかがえる。

しかし、ここで言う「文タイプ」とは、「ケ」が後接するか否かと、上昇イントネーションをとるか否かを基準にしている。すなわち、「ケ」が後接することができ、上昇イントネーションをとりうる文を疑問文とし、そうでないものを平叙文としている。

（56）どこ行くガン？

（57）どこ行くガンケ？

例えば、（56）には「ケ」がないが、（57）のように「ケ」を後接させることは可能なので、どちらも疑問文である。

（58）どこ行くゲンテ[16)]。

16）ここに「テ」がついているのは、「どこ行くゲン」のように「ゲン」で言い切ると不自然だという内省をするインフォーマントがおり、「テ」をつけると自然になるという人が多かっ

（59）*どこ行くゲンケ。

一方、（58）はゲンを用いた補充疑問文のように見えるが、（59）のように「ケ」をつけることはできないので、疑問文ではないと考える。

とはいえ、（58）のように補充疑問文においてゲン・ネンなどが使用されることはよくある。新田（2004）が指摘するように、推量形で現れたり、（58）のように終助詞「テ」を伴ったりすることが多い。

（60）あそこのトーちゃん、どこ行くゲンロ。　（新田 2004:177）

（61）あの人、一体誰ネンテ。

（60）は「疑い」の文で、「どこに行くんだろう」と問いを表出しているだけの文である。これは、次のように聞き手に問いかけるような文にはならない[17)]。

（62）*あんた、どこ行くゲンロ。

また、（61）は「あの人が誰か」を単純に問いかけるのではなく、聞き手が知りえた情報を確認したり、詰問したりする場合に言う。したがって、次のような連続も可能である。

（63）どこ行くガン。（相手は答えず、行こうとする）だから、どこ行くゲンテ。

（新田 2004:178）

（63）の最初のガンは、行き先を単純に尋ねているものだが、次の「ゲンテ」では、答えない聞き手に対して強く迫っている。

このように、平叙文専用のゲン・ネンなどが疑問文で使用されているように見えることがあるが、これは単純な「問いかけ」ではなく、「ケ」をとれない、上昇イントネーションをとれないという点でガンやナンなどの疑問文専用の形式とは異なっている。このことからも、やはりゲン・-eN・ネン・テンは平叙文専用の形式と言えるのである。

5.4. 文中における位置

形式的特徴の最後は、ノダ相当形式が文中のどの位置に現れるかについて述べる。具体的には、「カラ[18)]」「ケド」といった C 類の従属節（南 1974）に現れるか否かを記述する。結論から言うと、E 群であるゲン・-eN・ネン・テンは従属節に入ることができるが、A 群であるガン・-aN・ナン・タンは基本的に主節末にしか現れない。

（64）今日は人が来る｛ゲン／*ガン｝から、片づけて。

（65）今日は人が｛クレン／*クラン｝から、片づけて。

（66）今日は休み｛ネン／*ナン｝から、ゆっくりしようよ。

（67）せっかく｛キテン／*キタン｝から、楽しもうよ。

これらはそれぞれ、ゲン・-eN・ネン・テンがカラ節に入っている例文だが、ガン・-aN・ナン・タンは入れない。ケド節も全く同じである。

たためである。この「テ」は標準語の「って」に相当する引用マーカー由来の終助詞であり、引用以外の意味も表す。

17）ただし、「あんた、学校行くゲンロ」なら問題なく使える。これは問いかけではなく確認要求である。

18）当方言の場合、「カラ」ではなく「シ」を使うことも多い。

また、タラ節についても同様のことが言える。第 4 章の大阪方言では、コピュラの「ヤ」が活用して「ヤッタラ」となっていたため、「*ネンタラ」のような形は不適格だったが、当方言では、以下のようにエ段の 4 形式すべてに「タラ」が後接可能である。

（68）来る｛ゲン／*ガン｝タラ、電話しろよ。

（69）｛クレン／*クラン｝タラ、電話しろよ。

（70）明日休み｛ネン／*ナン｝タラ、遊びに行こう。

（71）仕事が｛オワッテン／*オワッタン｝タラ、飲みに行こう。

これは、5.2 節で述べたように、ゲンなどの元の形式が「ゲ」であることと関係があると思われる。詳細は第 7 章で述べる。

以上のように、E 群の形式は C 類の従属節に入ることができるが、A 群の形式はそれができず、主節末にしか現れることができない。

5.5. 形式的特徴まとめ

ここまで、石川県若年層方言のノダ相当形式の形式的特徴について記述してきた。ここで、その内容をまとめておきたい。ここまでに何度か触れてきたが、活用・文タイプ・文中における位置については、8 つの形式を大きく 2 つに分けることができ、その 2 分類がすべて一致している。具体的には、以下のようになる。

表 6-7　形式的特徴まとめ

		活用	文タイプ	従属節
E群	ゲン・-eN・ネン・テン	する	平叙文	入る
A群	ガン・-aN・ナン・タン	しない	疑問文	入らない

新田（2004）も指摘しているように、また、4.1 節でも既に言及したように、このような E 群と A 群の 2 分類は各形式の母音の違いによる対立である。この表からは、活用する形式は平叙文で使用され、従属節の中にも入るという含意関係が読み取れる。また、活用しない形式は疑問文で使用され、従属節には入らないという含意関係も読み取れる。大阪方言では、活用する形式が疑問文で使用されており、活用しないネンは平叙文でしか使用されなかった（詳細は第 4 章を参照）が、当方言ではそれが逆になっている。

そして、接続に関しては、述語の種類とテンスによって形式を使い分けるようになっている。その際、ゲンとガン、-eN と-aN、ネンとナン、テンとタンはそれぞれペアをなしており、同じ環境で接続する。つまり、それぞれの接続環境に対して、A 群と E 群の形式が用意されているのである。接続環境に関しては種類が多く複雑だが、それ以外の特徴については 2 つに分かれており、非常に整然とした体系であることがわかる。

ただし、4.2 節でも断ったように、ここまで記述してきたのはあくまでも〈対人〉用法で使用する形式が中心である。次の 6 節では〈対事〉用法についても扱うが、〈対人〉用法ほ

どの変化は進んでいないと言える。

6. 意味的特徴

ここからは、ノダ相当形式の意味的特徴について記述していく。形式と用法の関係は既に表 6-3 に示したとおりなので、本節では、〈対事〉用法で使用される形式について整理し（6.1 節）、〈対人〉用法と終助詞の関係について考察する（6.2 節）。

6.1. 〈対事〉用法で使用される形式

既に何度か言及したが、5 節で記述した形式的特徴は、〈対人〉用法で使用される形式のものである。それは、表 6-3 を見るとわかるように、〈対人〉の形式に「ヤ」を足したものが〈対事〉であるという関係になっており、形式的特徴は基本的に共通していたからである。

しかし、〈対事〉用法でどのような形式が使用されるかということは記述しておく必要があるので、ここで記述する。表 6-3 には、ゲンヤ・-eNja・ネンヤ・テンヤという、〈対人〉の E 群の形式に「ヤ」をつけたものがあるが、4.2.1.3 節で言及したように、これは使用に地域差・個人差があり、主に能登地方で使用される。具体的には、以下のように使用される。

（72）へー、あの人たばこ吸うゲンヤ。
（73）へー、結局イッテンヤ。
（74）へー、そうネンヤ。

このような言い方はおそらくゲン・ネンなどができた後に〈対事〉の形式として作り出したものだと思われる。というのは、これらの形式を使わない人は、〈対事〉用法では次のように「ンヤ」を使うからである。

（75）へー、あの人たばこ吸うンヤ。
（76）へー、結局行ったンヤ。
（77）へー、そうなンヤ。

既に触れているが、この「ンヤ」は地方共通語のようなものであり、〈対人〉のタンやナンなどとは区別される。〈対人〉用法ではゲンやネンなどの新しい形式を使う人が、〈対事〉だと共通語的な表現を使うのは、他に表現がないからである。伝統形式を使うなら「ガヤ」となるだろうが、それは使わないし、かといってゲンやネンを使うと〈対人〉と区別できなくなる。そこで、「ヤで終われば〈対事〉と解釈される」ということを利用して、〈対人〉の形式に「ヤ」をつけた「ゲンヤ」などを作ったと思われる。使用に地域差があるのは、これらが比較的新しい形式であるからだろう[19)]。

このように、ノダ相当形式における新たな変化は、〈対事〉よりも〈対人〉用法で先行しており、〈対事〉用法がその後を追う形になっている。これはやはり、独り言でも成立する〈対事〉よりも、相手が存在する〈対人〉のほうが新しい形式の需要があるからだろう。このことは、第 8 章でも議論する。

19）加藤（2014）によると、ゲンなどが成立する変化を先導したのは、石川県内でも能登地方や加賀地方周辺部だという。

6.2. 〈対人〉用法と終助詞

第 4 章では大阪方言のノダ相当形式であるンヤ・ネヤ・ネン・ネンヤの 4 つについて記述したが、その際、ンヤやネヤだと終助詞を伴わなければ不自然になる場合でも、〈対人〉用法に特化されたネンなら終助詞を伴わずに言うことができるということを述べた。

（78）あんなー、おれ今度東京に行く｛?ンヤ／ンヨ／ネン｝。

（78）は第 4 章の 5.2.1 節から再掲したものである。この発話は、特に前置きなどはなく唐突に聞き手に対して発せられたものだが、この場合、ンヤ単独では不自然であり、「ンヨ」のように終助詞を伴う必要がある[20]。一方、ネンの場合、特に終助詞を伴わなくても自然な発話になる。これは、ネンが他の形式に比べて強い対人的な機能を持っているからではないかと述べた。

では、石川県若年層方言ではどうだろうか。平叙文の〈対人〉専用のゲンなどは、（78）のような場合に単独で使えるのだろうか。面接調査の結果に基づくため、言い切ることはできないが、多くのインフォーマントは、やはり何かしら終助詞などがあったほうが自然であると考えているようである。

（79）おれ今度東京に行く｛?ゲン／ゲンヨ／ゲンテ｝。

（79）に示したように、「ゲン」単独よりも、「ヨ」や「テ」などの終助詞を伴ったほうが自然のようである。面接調査において、「ゲン。」で止めた言い方を提示されると「使わない」と答える人も、「ゲンヨ」のように何か続くと「使う」と答えるということが非常に多かった[21]。

以上のように、石川県若年層方言においては、平叙文の〈対人〉に特化された形式でも、大阪方言のネンのように強い対人的機能を持つということはない。これは、平叙文の中で〈対人〉に特化したネンという形式を作り出した大阪方言に対して、石川方言では〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別するということに力点を置いた変化であるということが背景にあると考えられる。このことは第 8 章でも議論する。

7. 石川県若年層方言のノダ相当形式の体系

ここまで、石川県若年層方言のノダ相当形式についてその特徴を記述してきた。本節では、それを踏まえて当方言のノダ相当形式の体系がどのように特徴づけられるかを述べる。

まず、既に 5.5 節でも触れたように、母音の違いによって平叙文と疑問文を表し分けることに力点を置いた体系であるということが指摘できる。新田（2004:172）も指摘しているように、ガンとゲンのような違いは母音の違いだけの最小対立だが、文法的な意味に関しては小さな対立ではないと言える。

20）ただし、この「ンヨ」は他の方言から取り入れたものの可能性があり、使用には個人差がある。

21）終助詞の他に、「行くゲンケド」のように、複文にすると言いやすくなるという意見も多かった。これもやはり「ゲン。」が文末でないことと、「ケド」がつくことで、その後の発話が本題であるということが聞き手に伝わりやすいということが大きいだろう。

ただし、このような整然とした体系が保たれているのは、〈対人〉用法においてのみであり、〈対事〉用法は〈対人〉の後を追うかたちになっている。この背景には、〈対事〉用法が比較的新しい用法である（幸松 2012）ことと、独り言でも成立する〈対事〉よりも聞き手がいる〈対人〉のほうがコミュニケーションにおいて重要であるということがある。そして、〈対人〉の中でも、相手に伝えているのか尋ねているのかという区別はさらに重要である。A 群と E 群の対立がこれほど明確に区別されている背景には、やはりコミュニケーション上の必要性があるのだろう。

また、これほど多様な形式の成立を可能にした要因として考えられることの 1 つに、準体助詞の伝統形式「ガ」を若年層話者が使わなくなったことがある。3 節で記述したように、石川方言の準体助詞は伝統的には「ガ」だが、現在の若年層話者はこの形式を使わず、主に「ン」を使用している。準体助詞の「ガ」による「縛り」がないため、「ガ」から離れたノダ相当形式をどんどん作り出すことができたのだろう[22)]。一方、若年層話者でも準体助詞「ガ」を使っている富山方言では、石川方言のように多様なノダ相当形式はなく、基本的に「ガ（ヤ）」に一本化されている。伝統形式である「ガ」を共有しており、地理的にも隣接している石川県と富山県とで、ノダ相当形式がこれほどまでに異なっているのは、様々な要因があると考えられるが、その 1 つに「ガ」をどれだけ使うかということがある。

以上、〈対人〉用法において多様な形式を発達させている石川県若年層方言のノダ相当形式の体系は、平叙文か疑問文かという区別に力点を置いた、整然とした体系であると特徴づけられることを述べた。そして、その背景として、伝統方言の準体助詞「ガ」を使わなくなったことがあるということも述べた。次の第 7 章では、本章で記述したような体系になるに至ったプロセスはどのようなものだったかということを考察する。

8. まとめ

本章では、先行研究および筆者が行った調査に基づいて、石川県若年層方言のノダ相当形式の特徴を記述し、その体系を特徴づけた。本章で明らかにしたことは、以下のようにまとめられる。

① 〈対人〉用法においては、接続する述語の種類とテンスによって使用する形式が異なるが、どのような場合でも平叙文の形式（ゲン・-eN・ネン・テン）と疑問文の形式（ガン・-aN・ナン・タン）があり、そのどちらかを選ぶようになっている。

② 〈対事〉用法は〈対人〉用法に比べて変化が進んでおらず、地方共通語の「ンヤ」を使うか、〈対人〉用法の形式をもとに作った形式を使うしかない。このように、当方言のノダ相当形式においては、〈対人〉用法の中で優先的に変化が起こっている。

③ 当方言のノダ相当形式の体系は、〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別することに力点を置いた体系であると言える。伝統形式である「ガヤ」からこれほどまでに

22）七尾市出身の L17M は 20 代の大学生だが、準体助詞「ガ」をよく使うと回答しており、ノダ相当形式として「ガヤ」も使うと答えている。ただし、ゲンなども使用するようで、他の若年層話者よりも伝統的な体系を残していると言える。

変化した要因の 1 つとして、石川県若年層方言話者が準体助詞「ガ」をほとんど使わないということが考えられる。

本章では「若年層方言」として扱ったが、本章で記述したことの多くは中年層以上にも共通する。変化を先導したのはおそらく若年層だが、上の世代にも広がり、ゲンなどの形式はかなり広い世代に使用されるようになっている[23)]。

次の第 7 章では、どのようなプロセスを経て本章で記述したようなノダ相当形式の体系になるに至ったのかを考察する。

23）筆者が行った調査でもこのことは確認できたし、加藤（2014:93）でも「現在の 60 代以下では「〜げん」の使用が優勢となっている」とされている。

第7章　石川方言におけるノダ相当形式の変遷過程

1.　はじめに

前の第 6 章では、石川県若年層方言におけるノダ相当形式のバリエーションを整理し、その性質について記述した。第 6 章の最後にも挙げたが、そこで明らかにしたことの要点を、以下に再掲する。

① 〈対人〉用法においては、接続する述語の種類とテンスによって使用する形式が異なるが、どのような場合でも平叙文の形式（ゲン・-eN・ネン・テン）と疑問文の形式（ガン・-aN・ナン・タン）があり、そのどちらかを選ぶようになっている。

② 〈対事〉用法は〈対人〉用法に比べて変化が進んでおらず、地方共通語の「ンヤ」を使うか、〈対人〉用法の形式をもとに作った形式を使うしかない。このように、当方言のノダ相当形式においては、〈対人〉用法の中で先行して変化が起こっている。

③ 当方言のノダ相当形式の体系は、〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別することに力点を置いた体系であると言える。伝統形式である「ガヤ」からこれほどまでに変化した要因の 1 つとして、石川県若年層方言話者が準体助詞「ガ」をほとんど使わないということが考えられる。

本章では、上記のことを踏まえて、第 6 章で記述したようなノダ相当形式のバリエーションがどのような過程を経て成立したのかを明らかにする。それによって、なぜ現在のような体系になったのかということを明らかにしたい。なお、第 5 章では大阪方言のネンやテンの成立過程を明らかにするために、大阪だけでなく周辺の近畿方言のデータも使用したが、本章で使用するデータは基本的に石川方言のものである。というのは、当該の形式は石川県以外では基本的に使われないためである。

本章の構成は以下のとおりである。まず 2 節で、先行研究と問題のありかについて述べる。3 節では調査概要として、使用する資料について述べる。そして、4 節では、本論文の考えるノダ相当形式の変遷過程を考察する。5 節では、それと先行研究とを比較して、本章で主張する変遷過程の妥当性について検討する。6 節では、本章で明らかにした変化の位置づけについて考察する。最後の 7 節はまとめである。

2.　先行研究と問題のありか

まずは、石川方言におけるノダ相当形式のバリエーションの成立過程に関する先行研究を整理し、その問題のありかを述べる。

2.1.　先行研究

石川方言のノダ相当形式の変遷過程について言及している先行研究はいくつかあるが、その中でも新田（2004）が最も詳細に述べている。そのため、ここでは新田（2004）の述べる変遷過程をまとめる。

新田は、金沢市方言におけるノダ相当形式のバリエーションの成立過程を、活用する語につく類と活用しない語につく類に分けてまとめた。

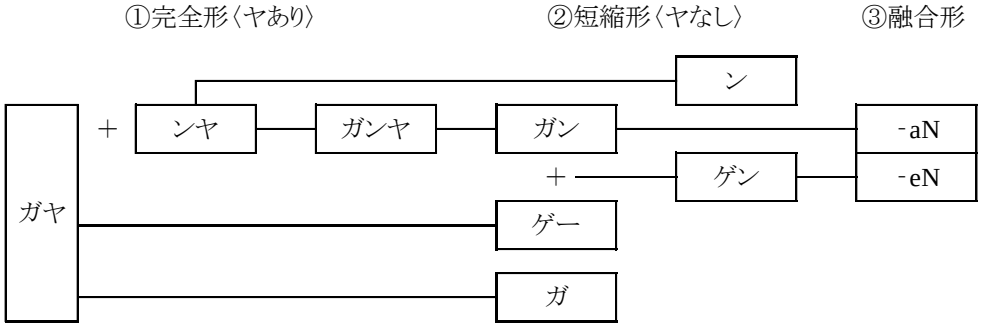


図 7-1　活用する語につくノダ相当形式（新田 2004:168）

図 7-1 は、活用する語につく形式の変遷過程である。図の左から右へ向かって変化しており、直線は、左の形式が右の形式に変化したことを表す。また、各々の形式はその形態的特徴によって「完全形」「短縮形」「融合形」の 3 つに分類されている。

完全形とは、形式の中にヤを含む形式であり、上記のガヤ、ンヤ、ガンヤが当てはまる。当該方言の伝統的なノダ相当形式であるガヤと、地方共通語であるンヤの混交によってガンヤができた。

次に、短縮形とは、完全形からヤが取れたものを指す（疑問文においてヤが現れないのとは別である）。ガンヤからヤが落ちてガンに、ガヤからヤが落ちてガになり、ガヤが母音変化を起こしてゲーができた。さらに、ガンとゲーが合わさってゲンが成立し、地方共通語であるンヤからも同様にヤが落ちてンができた。ガン、ゲー、ガ、ゲン、ンの 5 つがこの短縮形に当てはまる。

そして、融合形とは、接辞として語幹につく形式を指す。短縮形のガンとゲンからそれぞれ子音が落ちて-aN と-eN ができたという。

以上が図 7-1 のあらましである。なお、「行っテン」のような「テン」がこの図の中にないが、これは、過去マーカーの「タ」に-eN が後接したのが「テン」であると新田が考えているためである。

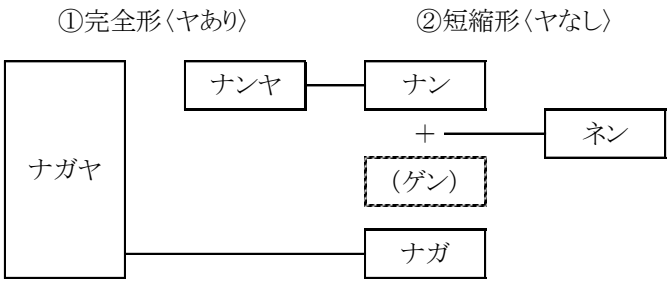


図 7-2　活用しない語につくノダ相当形式の変遷過程（新田 2004:170）

一方、図 7-2 は活用しない語につくノダ相当形式の成立過程である。ナガヤは当該方言の伝統形式で、ナンヤは地方共通語である。「ナ」はコピュラの連体形だと考えられる。そのナガヤとナンヤからヤが取れて短縮形になったのがナガとナンである。そして、ナンヤからできたナンと、活用する語につく類のゲンとの類推でできたのがネンである。これは、図 7-1 でも触れたが、活用する語につく類のほうでガンとゲンの対立があり、それをもとにして、ナンと対立する形式としてネンを作ったということである。したがって、ネンは関西方言から直接借用したものではないという。

以上が図 7-2 のあらましである。図 7-1 よりもシンプルだが、基本的には同様の変化をしていると考えていることがわかる。次の 2.2 節では、以上のような新田（2004）の説の問題点を指摘する。

2.2. 問題のありか

前節では、新田（2004）の述べるノダ相当形式の成立過程についてまとめた。しかし、本研究では、その成立過程には問題があると考える。具体的な問題のありかは以下のとおりである。

① ガンとゲンの接続制限について

② ガンの成立と機能について

①は、ガンとゲンが過去形に後接できないのはなぜかという問題である。第 6 章で述べたように、ゲンやガンは「*イッタゲン」「*イッタガン」のように過去形に後接できず、「イッテン」「イッタン」のように言うことになる。新田（2004）では「イッテン」を「イッタ＋ゲン」が「イッタ＋eN」を経て融合したものと考えており、「イッタン」も「イッタ＋ガン」が「イッタ＋aN」を経て融合したものとしている。この考えをとると、「イッタゲン」や「イッタガン」が存在していたということになるが、このような言い方は、現在の中年層や高年層でも見られない。つまり、「イッタゲン」の痕跡がない以上、「イッタゲン」が「イッテン」に直接変化したとは考えにくいのである。また、非過去形の場合は非融合形の「イクゲン」と融合形の「イケン」がどちらも使えるのに、過去形になると融合形しか使えないというのも、単純に音声的な融合というだけでは説明できない。

②は A 群と E 群の機能分担（文タイプの違い）に関わる問題である。2.1 節で述べたように、新田（2004）は「ガヤ」と「ンヤ」の混交として「ガンヤ」ができ、そこから「ヤ」が落ちて「ガン」ができたと指摘している。一方、北國新聞社編（2005:214）では、「ガン」の出自に関して、「「ガ」だけでは音の響きが良くないと感じて、「ガ」と同じく共通語の「の」にあたる「ン」を加えることで全体にやさしい響きを持たせようとしたのかもしれない」という加藤和夫氏の見解を紹介している。新田と加藤の見解は必ずしも一致するものではないが、ガンが「ガ＋ン（ヤ）」という組み合わせによってできたものであるという点は一致している。確かに、「ン」を付け加えることで柔らかい響きになり、待遇上の一定の機能を果たすだろうと思われる。だが、そうだとしても、なぜガンが若年層において疑問文の文末でのみ使用されるのかという点が説明されていない。たとえ新田の言うようにガンヤから

ガンができたのだとしても、現在の若年層がガンヤを使っていないのはなぜなのかという点も説明されていない。そして、この問題は、なぜ「ゲン」が平叙文専用の形式なのかということの裏返しでもある。

以上のように、新田（2004）が主張するノダ相当形式の変遷過程においては、ガンやゲンの接続や機能の制約に関する説明が不十分であると言える。本章では、このような問題意識に基づき、新田とは別の成立過程を考える。

3. 調査概要

ここからは、前節で述べた問題意識をもとに、先行研究に代わる成立過程を考えていくのだが、その根拠となるデータについてここで説明しておく。第 6 章で述べたように、当方言における当該の変化は、近畿方言に比べてかなり最近になって起こった変化である。そのため、第 6 章で記述した現在の若年層の体系と、それよりも上の世代の体系を対照することで、どのような変化が起こったのかを明らかにしたい。そのためのデータとして、筆者が行った調査の結果を使うことはもちろんだが、第 5 章と同様に、昔話資料や談話資料も活用する。というのは、第 6 章の最後でも触れたように、石川方言における新しいノダ相当形式は、もはや若年層だけが使用するものではなく、中年層以上にも浸透しており、新しい形式ができる前のデータが必要だからである。

以下、本節では、本章で用いる資料の概要を説明する。筆者が行った調査については、第 6 章を参照されたい。

3.1. 昔話資料

本章で主に用いる昔話資料は以下のとおりである。

表 7-1　本章で用いる昔話資料

略号	資料名	収録年	地域	特徴
読みがたり	『読みがたり石川県のむかし話』	1977	県内全域	収録地域が広く、まとまった分量がある。子供向けのため、改められている部分が多いと思われる。
加賀	『日本の昔話26　加賀の昔話』	1973~1975	金沢市 一部石川郡	「語り手より直接テープに収録したものを語りのまま忠実に翻字したもの」（p.10）
七尾	『七尾地方の方言集』	1981より前	七尾市	著者の夫が生前語ったものを文字化したもの。分量は少ない。

「略号」は本文中で言及する際に使うものである。各資料の詳細な書誌情報については、本論文の末尾を参照されたい。以下、それぞれの資料の特徴について簡単に述べる。

『読みがたり』は、第 5 章の近畿方言のところでも使用したものと同じシリーズのものである。県内各地の昔話を収録しており、分量も多い。ただし、石川県の『読みがたり』の場合、南加賀・北加賀・口能登・奥能登という地域区分はあるものの、それぞれの話が具体的

にどこで収録されたものかという情報は欠けている。また、子供向けの絵本として出版されていることから、様々な点において手が加えられていると思われる。

『加賀』は加能昔話研究会の編集による 1 冊の本である。金沢市の犀川・浅野川・森本川上流地域において採集した昔話が収録されており、一部石川郡鳥越村・吉野谷村・尾口村（いずれも現在の白山市）のものも含まれている。表 7-1 で引用したように、録音したものをできるだけ忠実に文字化しているという点に特徴があり、『読みがたり』よりも方言的要素が多い。特に、本章で問題とするノダ相当形式の用例が多く、本章では何度も『加賀』から用例を引用することになるだろう。

最後の『七尾』は、新田露子氏（明治 44 年生まれ）による方言集で、資料とする昔話はその付録として収録されているものである。そのため、昔話は全部で 4 編と少ないが、その割にノダ相当形式の用例が多く、有用な資料であると思われる。ただし、収録年については情報がなく、以下のように書かれているのみである。

> (1) 著者の夫である新田竹が、生前（昭和 56 年死去）孫に語ったものの録音から原稿を起こしたものである。能登島町の出身で、小さい頃よく語ってもらっていた話だそうである。偶然残っていた録音テープを発見したので、貴重だと思い、ここに掲載する。七尾弁の微妙な味わいは、文字にするとなかなか難しいものがあって、少々不備な表現もあると思う。(p.234)

したがって、収録した時期も文字化した時期もわからないが、この本が 1996 年に出版されたことを考えると、両者にある程度の開きがあることは確かである。このことに注意して扱っていきたい。

以上が本章で使用する昔話資料である。分量も地域も不揃いだが、(おそらく) 同時期に収録された資料で、収録地点も県全域・加賀・能登とバランスよく揃っており、1 つの地域の偏っているということはない。

3.2. 談話資料

本章で使用する談話資料は、以下のとおりである。

表 7-2　本章で用いる談話資料

略号	資料名	収録年	地域	特徴
押水	『日本のふるさとことば集成』	1977	羽咋郡押水町字宝達（現宝達志水町）	話者3人による会話。 収録時間は21分26秒。
志雄	『方言録音資料シリーズ9』	1967	羽咋郡志雄町字荻市（現宝達志水町）	話者2人と司会者1人による会話。 収録時間は47分40秒。
小松	「石川県小松市符津町方言の自然談話」	1998	小松市符津町	話者4人による会話。 収録時間は32分30秒。
NHK	『全国方言資料』	1956~1962	県内5地点	NHKによる談話資料。1地点あたりの収録時間は短いが地点数が多い。

『押水』は『日本のふるさとことば集成』シリーズの 1 つで、話者 3 人による会話を収録している。この地域は現在の宝達志水町に当たり、能登地方の南端である。『志雄』はそれよりも 10 年前に収録したものだが、地理的には『押水』に近く、どちらも現在では宝達志水町になっている。『押水』はカナカナで、『志雄』は音声記号で文字化されているが、どちらも標準語訳がついている。本文中で引用する際は、標準語訳もあわせて引用する。また、『志雄』については、カナカナに改めて引用する。

3 つめの『小松』は、加藤和夫氏による方言談話文字化資料であり、収録地点は南加賀地方である小松市である。ただ、この談話資料では本章でいう変化がほとんど起こっていないと考えられるため、あくまで参考程度に引用する。

最後の『NHK』は、日本放送協会による談話資料で、1 地点あたりの収録時間が短いが、地点数が多い。石川県は輪島市名舟町、石川郡白峰村白峰（現白山市）、河北郡内灘村大根布（現内灘町）、輪島市海士町、鹿島郡能登島町向田（現七尾市）の 5 地点である。この資料にも標準語訳がついている。なお、この『NHK』以外の談話資料では、ガ行子音が破裂音か鼻音かを区別して表記しているが、『NHK』では表記上の区別はない。以下で用例を引用する際は、鼻濁音を表記上区別している資料の場合は「カ゜」のように表記し、それ以外の場合は区別せず「ガ」のように表記する。

4. ノダ相当形式のバリエーションの成立過程

本節では、3 節でまとめた各種資料や筆者が行った調査をもとに、新田（2004）の主張するノダ相当形式の変遷過程（2 節参照）とは別の変遷過程を考える。

詳しくは以下で述べていくが、本章で提示する成立過程のあらましについて先に述べておく。本章で提示するノダ相当形式のバリエーションの成立過程は以下のとおりである。

① ガヤ→ガイ→ゲの音変化
② 動詞とガヤ・ガイ・ゲの融合
③ -aN と-eN の析出による A 群と E 群の対立の成立
④ 過去形や名詞への広がり
⑤ 動詞の形を復元するためにガン・ゲン成立

①は新田（2004）と同様の考えだが、②以下は大きく異なっている。特に、ガン・ゲンから -aN・-eN ができたのではなく、-aN・-eN が先にあって、そこからガン・ゲンができたと考えるのが、先行研究との大きな違いである。以下、①から⑤の各プロセスについて用例を挙げながら詳しく説明する。

4.1. ガヤ→ガイ→ゲの音変化

この変化は、伝統的なノダ相当形式である「ガヤ」の母音が変化を起こして「ガイ」となり、それがさらに「ゲ」と変化したものである。これらの形は各種資料に見られる。

(2) アキバサン　アッタカ゜ヤレド　ハジメ　アカ゜ラナンダカ゜ヤ
（アキバ山（秋葉社）はあったのだが、はじめはあがらなかったのだ。）

チーサイ　コンナ　オドーノ　アキバサンヤッタカ゜イ

（小さいこんなお堂のアキバ山だったのだ。）　【志雄 p.24】

(3)　シューノ　スモ　チュータラ　セー　モノスコ゜イ　セーダイナ　モンヤッタケ゜（子浦の角力といったらものすごい盛大なものだったのです。）【志雄 p.11】

(2) では、「ガヤ」が 2 例見られるが、文末には「ガイ」も見られる。そして、(2) と同じ話者による (3) では、「ゲ」も使用されている。標準語訳がノダ文になっていることから考えても、この「ゲ」は「ガヤ」から変化したものと考えてよいだろう[1)]。

このような「ガイ」「ゲ」は加賀地方にも見られる。以下は昔話資料からの例である。

(4)　あのう、木挽きさんのう、ま、爺さんと婆さんとおったがやといね。ほた婆さんのそのう、爺さんに弁当作って、木挽きに、木樵り。ほしてぇ、山へ持たしてやったがいて。　【加賀「鳥呑爺」】

(5)　ほして、こいて節穴からおっと覗いたげといね。　【加賀「雉子の恩返し」】

(6)　そしてなんじゃ、その寺あれ行くが道がそんな近いがんなかったんやろ。二里も三里もあったげぇろ。　【加賀「肉附面」】

(4) では、「ガヤ」と「ガイ」が使われており、(5) では「ゲ」が使われている。そして、(6) の下線部「げぇろ」は、「ゲ」の推量形であると考えられる。第 6 章の 5.2 節でも触れたが、「ゲ」はもともと「ガヤ」であり、「ガヤ」の推量形である「ガヤロ」は「ガイロ」「ゲ（ー）ロ」となる。(6) では「ゲ」に「ロ」がついているように見えるが、あくまでも「ヤロ」なのである。

なお、ここでは「ガヤ」が「ガイ」「ゲ」に変化したと書いているが、必ずしもはっきりと「ガイ」「ゲ」と発音されるとは限らない。

(7)　オマチャ　メロヤカラ　ワカランガェ

（おまえたちは女だからわからないのさ。）　【NHK・内灘 p.167】

(7) の下線部は「ガェ」となっているが、これも「ガヤ」の母音が変化したものだろう。

また、能登地方では、「ゲ」が「ギ」となっていることもある。

(8)　おやじのかみなりは、つづけてたいこをたたいたぎと。ゴロゴロ、ドドドドドン、とっくりさかさにすりゃ、中から水が、ザァサァたきのように出てきたぎと。銀一は、すぐさまおぼえたちょうしでしてみたぎと。なんかいもしてみたぎと。しまいには、おもしろうなってむちゅうになったぎと。

【読みがたり・奥能登「かみなりのむこいり」】

(8) では、「ギ」が引用マーカーの「ト」と一緒に「ギト」という形で多用されている。『読みがたり』においてこのような「ギ」が出てくるのは奥能登の昔話に限られており、他の資料には出てこなかった。第 6 章でも触れたが、この「ギ」は、イ段とエ段を混同するという能登地方の伝統方言の性質（岩井 1983）によるものだと考えられる。つまり、「ゲ」が「ギ」と発音された、もしくは文字化者にそう聞こえたのだろう。

---

1)　『志雄』では、(3) に注釈がついていて、「-ŋe は-ŋai←ŋaja（のだ）よりもていねいな形。-ŋe（です）と訳しておく」とある。

このように、ガヤ→ガイ→ゲという変化は石川県のほぼ全域で早い段階から起こっていたことがわかる。ちなみに、『小松』には「ガヤ」の用例は一定数あるものの、「ガイ」と「ゲ」は一例もなかった。その原因としては、南加賀地方（湖北）である小松市方言では「ガ」が本来使用されないということと、話者の世代が他の資料よりも若いということが考えられる。なお、『小松』におけるノダ相当形式の用例数は以下のようになっている。

表 7-3　『小松』におけるノダ相当形式の用例数

	非過去	過去
ノ系	2	
ン系	26	36
ガ系	18	26
計	46	62

「ノ系」とは、「ノヤ」「ノジャ」「ノ」などを含んだ総称であり、「ン系」「ガ系」も同様である。これを見ると、ン系とガ系の数にそれほどの偏りはなく、むしろン系のほうが多いことがわかる。ちなみに、『加賀』におけるノダ相当形式の用例数は以下のとおりである。

表 7-4　『加賀』におけるノダ相当形式の用例数

	非過去	過去
ノ系	2	
ン系	28	332
ガ系	235	234
その他	21	41
計	286	607

なお、表 7-4 において、「ガイ」と「ゲ」は「ガ系」に入れている。表 7-3 と表 7-4 を比べると、『小松』と『加賀』の非過去形に接続するガ系の使用頻度の違いがわかる。『加賀』の過去形においてン系の用例数が半分以上を占めていることについては、また別に議論する必要があるが、少なくともこれらの表からは、ガ系のノダ相当形式の使用頻度が北加賀と南加賀では異なるということがわかる。

以上、例外の地域もあるが、石川県において、ガヤ→ガイ→ゲという変化が早い段階から起こっていたことを確認した。

4.2.　動詞とガヤ・ガイ・ゲの融合

ガヤ・ガイ・ゲができた次に起こるのは、動詞非過去形にこれらが接続したときに起こる融合である。融合というのは、具体的には「アルガイ」が「アライ」になるような音変化を指す。例えば、次の用例では、融合が起こっている。

（9）　「こらこら、何で魚食べらい（食べるのか）」　　【加賀「魚に因を含める」】

（10）その向こうの家の床の床柱に穴があいとらんやて。　【加賀「馬の尻に花立」】

（9）の「食べらい」は「食べるがい」の「がい」が融合したものであり、（10）の「あいとらんや」は「あいとるがんや」が変化したものである。この変化は、動詞の終止連体形の末尾音[u]と[ŋ]が連続することで[uŋ]が脱落するというものである。（9）を例に示すと以下のようになる。

（11）taberuŋai　→　taberai

下線を引いた uŋ が脱落しているのがわかる。

このように、ガ行鼻音とその前の音が脱落することで融合するというプロセスは、ガヤ・ガイ・ゲのすべてで起こっている。例えば、「ある」を例にとる[2)]と、「アルガヤ」「アルガイ」「アルゲ」が融合して形を変える。「アルガイ」については上の（9）と同じで「アライ」となる。では「アルガヤ」と「アルゲ」はどうなるのかというと、「アランヤ」と「アレン」になると考えている。

しかし、（11）と同じルールだと、「アルガヤ」は aruŋaja→araaja なので「アラーヤ」となり、「アルゲ」は aruŋe→are で「アレ」となるはずである。（11）のルールを適用すると、「アランヤ」となるのは「アルガンヤ」（（10）も同じ）であり、「アレン」となるのは「アルゲン」であると考えられるはずである。

では、なぜ「アルガヤ」が「アランヤ」に、「アルゲ」が「アレン」になったと考えるのか。まず「アランヤ」についてだが、「アランヤ」という形自体は一定数見つかるものの、その融合前の形と思われる「アルガンヤ」は 1 例も見つからないのである。これに対して、「アルガイ」と「アライ」は両方一定数見つかる。

（12）ほいて、障子ひとつ向こうの部屋の、旦那さんとこうして寝とる向こうの部屋で何かムチャムチャムチャムチャと食べとる音がするがいて。そして何を食べとるもんかなあと思て、行って、先の出て行ったみんな婿さんも見るがいて。ほいた、白ぅいその死人、亡者ちゅう、死人をけずっては食べとらいて。

【加賀「死人食い」】

（12）では、話の流れを説明しているが、「～るがいて」と「～らいて」の両方が使われている。ここから、「～るがいて」の融合形が「～らいて」であると考えられる。しかし、「アランヤ」の元の形と想定される「アルガンヤ」は用例がないし、「アルガヤ」に（11）のルールを適用して想定される「アラーヤ」もほとんどない[3)]。そこで、「アルガヤ」に（11）の規則を適用して「アラーヤ」になったのが「アランヤ」になったと考えるのはどうだろうか。長音が撥音になるという変化だが、もともとあった「ガ」の子音が鼻音であることを考えると、長音に鼻音性があってそれがまた鼻音になったと言うこともできる。

2）　融合は語幹末子音が r の場合に起こりやすい傾向があるようなので、以下では「ある」を例として説明する。

3）　次のような「聞いとらぁや」という用例が『加賀』に 1 例だけあった。

（ア）この下の四十万のお寺にぃ、その豆の木で太鼓を作った太鼓があるて、そんな伝説を聞いとらぁや、ふん。　【加賀「継子と千石豆」】

次に「アルゲ」の融合だが、これが（11）の規則によって変化したと想定される「アレ」の用例はないし、「アレン」の元の形とされる「アルゲン」も、かなり最近にならないと用例はない。さらに、『加賀』と『押水』では、「アルゲン」の形がないのに「アレン」の形が使われている。

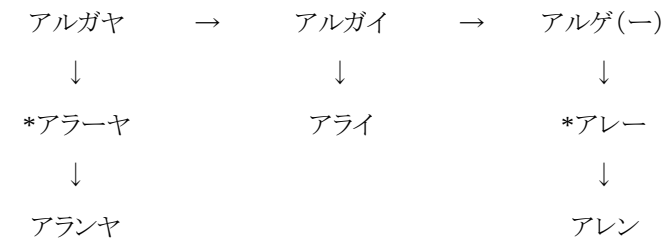
（13）ある池に一本の団栗の木があったと。池のそばに。ほいて、その団栗の木、団栗がいっぱいなっとったんやと。ほいて、その団栗が風がそよそよと吹くと、ポチャーンと落ちれんと。ほいたまた風がそよそよと吹くとまた、ポチャーンと落ちれん　【加賀「果てなし話〈団栗落ち〉」】

（14）ソノ　ワラシコ゜トオ　シタ　ハナシオ　シテモライタイ　ト　オモテー　オレン。（その藁仕事をした話をしてもらいたいと思っているんだ。）　【押水】

（15）ホーイトユンデ　ヒョーバン　ナッテー　オレン。
（そういうので評判になっているのだ。）　【押水】

多くはないものの、このような-eN の用例は確実にある。一方、同じ資料に「ゲン」は出てこない。このことを踏まえると、「アルゲン」よりも「アレン」のほうが先に成立していたのではないかと考えられる。そして、その「アレン」はどこから来たのかというと、「アルゲ」が融合してできたのである。「ゲ」と表記しているが、元が「ガヤ」だったことから、「ゲー」と長呼されることも少なくない。例えば、（6）では「げぇろ」と表記されており、「ゲー」と長呼されていたことがわかる。とすると、「アルガヤ→アラーヤ→アランヤ」と同様に、長音が撥音に置き換わるという変化がここでも起こったと想定することができる。つまり、「アルゲー→アレー→アレン」である。

以上の変化をまとめると、次のようになる。



*は用例がほとんどなく、理論的に想定した形

図 7-3　ガヤの音変化とその融合

左から右への変化は、ガヤ→ガイ→ゲ（ー）という母音変化であり、縦の変化は動詞とノダ相当形式の融合による変化である。「アルガイ」は融合して「アライ」となっているが、「アルガヤ」と「アルゲー」は融合と同時に長音の撥音化という変化が起こり、「アランヤ」「アレン」となっている。「アライ」に同様の変化が起こらなかったのは、長音がないからだと考えられる。そして、2 段階の変化が起こった「アランヤ」と「アレン」のペアが、この後に続く変化の端緒となる。

ちなみに、形容詞の場合、この種の融合は起こらない。形容詞の終止連体形の末尾音は[i]または[e]であり、[iŋ]や[eŋ]という音連続は脱落しなかったと考えられる。第 6 章で記述したように、現在でも-aN や-eN が形容詞に接続できないのはそのためだろう。

4.3. -aN と-eN の析出による A 群と E 群の対立の成立

前節では、「アルガヤ」「アルガイ」「アルゲ」から「アランヤ」「アライ」「アレン」ができたことを述べた。この後に起こるのは、「アランヤ」と「アレン」によるア段とエ段の対立の完成である。「アランヤ」はもともと「アルガヤ」が変化したものだが、「アランヤ」という形から、「アラン＋ヤ」と再分析された可能性がある。再分析とまで言わなくても、そもそも「アランヤ」の「ヤ」はコピュラなのだから、「アルガヤッタ」は「アランヤッタ」となり、「アルガヤロ」は「アランヤロ」となるように、融合形も「ヤ」を活用させていたのだと思われる。

（16）オヤト　コノ　エンオ　ムスンデ　ホノ　オタカ゜イニ　シヌマデ　マー　エー　チカラオ　アワイテ　キョーリョクオ　スル　ト　ユー　コトネ　アンデ　ケッキョクワ　ナ　ナランヤロネー　ウン　イミカ゜。（親と子の縁を結んで、その、お互いに死ぬまで、まあ、ええ、力を合わせて協力をするということにあれで結局はなるのだろうね、うん、その意味が。）　【押水】

（16）の下線部「ナランヤロ」は「なるのだろう」という意味であることが標準語訳からわかるが、これはまさに「ナルガヤ」から「ナランヤ」となって、「ヤ」が活用したものであろう。

また、コピュラの「ヤ」は疑問文では現れず、疑問の助詞である「ケ」や「カ」付加されることがあるが、同様のことが「アランヤ」でも起こっていた。

（17）「さんにょもんどん、さんにょもんどん。本当に見えらんかぃね？」　【七尾「天狗の太鼓」】

（18）“屁いらんかねー”と聞こえるがで、みんな、何すらんかと思うて集まって来たと。　【七尾「チロリンプイの屁の話」】

（17）や（18）のように、「アラン（ヤ）」は疑問文でも使えるのである。

一方、「アルゲ」からできた「アレン」は、もともとコピュラを中に持っているので、「*アレンヤ」のようにはならない[4)]。したがって、「*アレンケ」のように疑問文で使うこともできないのである。

このように、「アラン（ヤ）」は平叙文でも疑問文でも使えるのに対して、「アレン」は平叙文でしか使えないという状況がある程度続いたと思われる。そして、「アレン」が平叙文専用だから、「アラン（ヤ）」は相対的に疑問文専用になり、「アラン」となった。この段階

4） ただし、『押水』に 1 例だけ「レンヤ」の用例があった。
（イ）ソノ ビニールカ゜　カラゲ゜タッタ　トコロカ゜　ソノ　ホソイ モンジャサカ
その ビニールが　縛り付けてあった ところが　その　細い　もんだから
ポキーント オレレンヤッテァ。
ぽきんと　折れるんだって。　【押水】

で「アラン」「アレン」という、母音の違いによって文タイプも異なる対立ができたのである。そして、ここから-aN と-eN という接辞が析出され[5)]、疑問文の A 群と平叙文の E 群という対立ができたのである。ここまでを図示すると以下のようになる。

	平叙文	疑問文	
アランヤ	○	○	アランヤロ・アランケのように活用
アレン	○	×	コピュラが切り離せない

↓

	平叙文	疑問文	
アラン	×	○	平叙文はアレンに任せて疑問文に
アレン	○	×	

↓

-aN(ア段)	疑問文	母音の違いによる機能分担が成立
-eN(エ段)	平叙文	

図 7-4　ア段とエ段の機能分担ができるまでの流れ

この図では「アランヤ」と「アレン」しか取り上げられていないが、「アルガイ」から変化した「アライ」はどうなったのかというと、音連続が異なるため対立に入れなかったのだと予想される。「アラン」と「アレン」が対立をなすに至ったのは、「動詞語幹＋母音＋撥音」という音連続になっており、そのうち母音だけが異なるというミニマルペアをなしていたためである。しかし、「アライ」はどちらともミニマルペアになっておらず、対立を作れなかったのだろう。

ここまで、「アランヤ」と「アレン」の対立から、ア段とエ段の違いによる機能分担が成立したことを述べた。この対立は、この後の変化にとって非常に重要な位置を占めるようになり、動詞非過去形以外の場合にも広がっていくことになる。

4.4.　過去形や名詞への広がり

前節で述べたような母音の違いによる対立は、動詞非過去形にとどまらず、過去形や名詞非過去形にも広がることになった。そして、「アッタン」と「アッテン」、「休みナン」と「休みネン」という対立ができることになる。実際、各種資料においては、以下のようなテンの用例が一定数存在する。

（19）バーチャンカ゜ネーエ　ヤマエ　イッテネ　ククッテン（おばあちゃんがね、山へ行ってね、括ったのよ）　【押水】

5）　接辞の析出自体はもっと早い段階で起こっていたかもしれない。

（20）ある若い兄さがぁ、兄まがまぁ、田んぼへ行っとってんと。ほいた、蛇が蛙呑んどった。ほいて蛙を呑んどってんと。ほいたら、その蛙を可哀想で、キュウキュウキュウキュウ泣いとるもんやさけぇ、
「おいおい、そのぎゃわず逃がいてやれ。わしゃ嬶にしてやるわいや」て言うてんと。 【加賀「鷲の卵」】

しかし、名詞につくネンの用例は見られなかった。過去形よりも名詞のほうが変化が遅かったと思われる。

このようなテンやネンができるプロセスには 2 種類が考えられる。1 つは、[aŋa]という音連続が融合を起こして、それに対立するエ段の形式を作ったというもので、もう 1 つは「アラン」と「アレン」の対立をもとに、類推して過去形や名詞でもア段とエ段の対立を作ったというものである。どちらの可能性もあると考えられるが、本章では後者の考えをとる。なぜなら、「アランヤ」「アレン」のほうが「アッタン」「アッテン」よりも先に成立したと考えられるからである。

その根拠は、第 6 章で述べた-iN にある。能登地方の一部では、「アレン」ではなく「アリン」と言うことがあるが、「アリン」と言う人でも、「*アルギン」のような言い方をせず、「アルゲン」と言う。また、過去の形も「*アッティン」ではなく「アッテン」である。また、-iN というのは、-eN においてエ段とイ段の混同が起こった結果できたものだと考えられるが、「*アッティン」や「*アルギン」のような言い方がないことを考えると、「アラン」「アリン」の対立ができてから「アッタン」「アッテン」の対立ができるまでの間に、能登地方においてイ段とエ段が区別されるようになったと考えられる[6)]。つまり、「アッテン」よりも「アレン」のほうが先に成立していたのである。

したがって、本研究では、-aN・-eN の対立をもとにタン・テン、ナン・ネンの対立を類推によって作ったと考える。第 6 章でも言及しているように、「タン」はそもそも「タ＋ン」だが、それを「タン」と再分析させてしまうほど、タン・テンという対立が重要視されていたのだろう。以上の流れを図示すると以下のようになる。

テンス	品詞	平叙文	疑問文
非過去	動詞	**アレン**	**アラン（ケ）**
	形容詞	サムイガヤ	サムイガ（ケ）
	名詞	休みナガヤ	休みナガ（ケ）
過去	動詞	アッタガヤ	アッタガ（ケ）
	形容詞	サムカッタガヤ	サムカッタガ（ケ）
	名詞	休みヤッタガヤ	休みヤッタガ（ケ）

→

テンス	品詞	平叙文	疑問文
非過去	動詞	**アレン**	**アラン（ケ）**
	形容詞	サムイガヤ	サムイガ（ケ）
	名詞	**休みネン**	**休みナン（ケ）**
過去	動詞	**アッテン**	**アッタン（ケ）**
	形容詞	**サムカッテン**	**サムカッタン（ケ）**
	名詞	**休みヤッテン**	**休みヤッタン（ケ）**

図 7-5　ア段とエ段の対立の広がり

6） もちろん、「*アッティン」がないのは「ティ」という音節がその当時にはなかったからと考えることもできる。

この図の左側のように、最初は動詞非過去形の場合にのみア段とエ段の対立があったのが、それをもとに名詞と過去形にもそれを適用したのが右の図である。もちろん、左から右への変化が一気に起こったというわけではない。その変化がどこから起こったのかは本章ではこれ以上明らかにできないので、今後の課題としたい。

さて、図 7-5 のゴシックで表示されたのは新しくできた形式だが、これを見ると、すべての述語の過去形と、動詞・名詞の非過去形の場合にノダ相当形式がア段とエ段の対立を持つことになったことがわかる。しかし、まだゴシックになっていない、つまり、ア段とエ段の対立を持つに至っていないものがある。それが、形容詞非過去形と、図にはないが、動詞否定形である。

4.5. 動詞の形を復元するためにガン・ゲン成立

ここまでの変化により、形容詞非過去形と動詞否定形以外はノダ相当形式がア段とエ段の対立を持つようになった。これらが対立を持っていないのは、ア段とエ段のミニマルペアが作れないからである。例えば動詞の否定形だと、ア段かエ段かというのは動詞の活用の種類によるものなので、そこに疑問文と平叙文の区別を持ち込むのは非常に困難だと予想される。

また、この対立を持つきっかけになったのは、-aN と-eN だが、これらがついた「アラン」「アレン」は、もとの動詞である「アル」が外見からでは復元できない形をとっている。ア段とエ段の対立は確固たるものだが、動詞の元の形が復元できないのもまた問題である。そこで、ア段とエ段の対立を守り、かつ、動詞の形を復元するために、-aN・-eN からガン・ゲンを作った。これによって、形容詞の非過去形や動詞否定形にもガンとゲンをつけてア段とエ段の対立を作れるようになった。なお、この変化が起こったのは動詞非過去形においてのみである。なぜなら、過去形の場合、「アッタン」と「アッテン」の対立だが、「アッタン」は「アッタ」が形の上で復元できるので、「アラン」を「アルガン」にするような復元は必要なかったからである。名詞の場合も、そもそも名詞は形がそのままなので、復元する必要はない。現在の石川方言において、ガンとゲンが過去形に後接できないのはそのためであると考えられる。

2.1 節でまとめたように、先行研究では、ゲンが変化して-eN に、ガンが変化して-aN になったと考えられていたが、本研究ではそれを逆に考えて、-aN と-eN からガンとゲンができたと考えた。

では、なぜそのように考えたのかというと、既に用例を挙げたように、-aN や-eN の用例は談話資料と昔話資料の両方で見つかるのに対して、ガンやゲンの用例はほとんど見当たらないからである。また、先ほど触れた-iN の問題も同様である。もし「ゲン→-eN」と変化したのなら、-iN は「*ギン」からできたはずである。しかし、そのような形は存在しないため、ゲンと-eN の順番が逆なのではないかと考えたのである。

4.6. 成立過程まとめ

ここまで、順を追ってノダ相当形式の成立過程について考察してきた。ここでは、本節のまとめとして、もう一度変化の全体像を振り返る。ここまでに述べてきた成立過程を図示すると、以下のようになる。

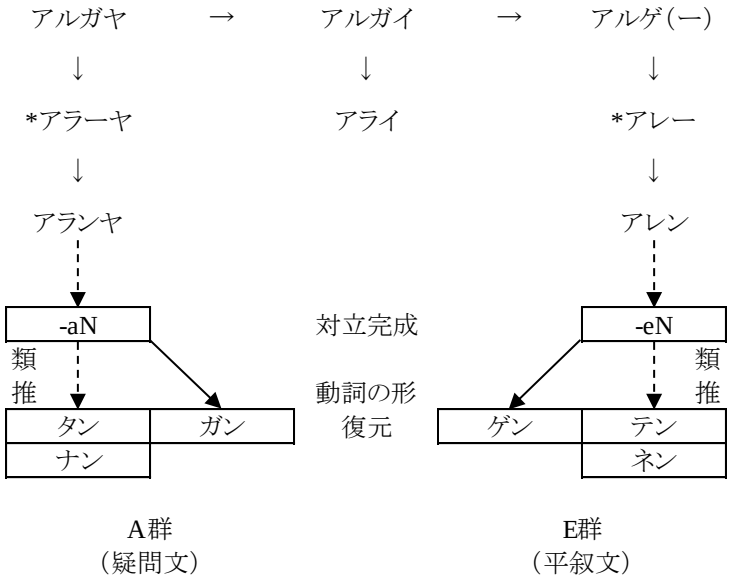


図 7-6　石川方言におけるノダ相当形式の変遷過程

図中において、四角で囲んだ形式は、第 6 章で主に取り上げた形式である。この図を見ると、一連の変化は-aN と-eN の対立が完成したことが端緒となって起こっている。また、その対立は、「ガヤ」「ゲ」との融合がきっかけになっている。第 5 章で述べた大阪方言とは異なるが、融合した接辞が先にあって、そこから新たな形ができるというのは共通している。このような大阪方言と石川方言の変化における共通点と相違点については、第 8 章で改めて議論する。

5. 先行研究との比較

ここまで、石川方言のノダ相当形式が多様なバリエーションを持つに至った過程を、各種データを挙げながら明らかにしてきた。ここからは、ここまで述べてきた自説の妥当性を示すために、本章の分析の利点を述べていく。つまり、「この説だとこういうことが説明できるようになる」というものである。具体的には、以下のことが説明できる。

（a）ガン・ゲンが過去形の接続制限について
（b）A 群と E 群の機能分担について
（c）E 群の形式の活用について

（a）と（b）は 2.2 節で述べた先行研究の問題点である。以下、それぞれについて説明する。

5.1. ガン・ゲンの接続制限について

これについては既に 4.5 節で述べたが、改めて説明する。この問題に対する答えは、以下の 2 点にまとめられる。

（a-1）ガン・ゲンよりも先にタン・テンがあったから

（a-2）ガン・ゲンができるきっかけになった「動詞の形の復元」を、過去形ではする必要がなかったから

（a-1）は非常にシンプルである。ガン・ゲンが過去形に接続できないのは、過去形の席が先に埋まっていたからである。そして、（a-2）に示したように、ガン・ゲンはもともと「動詞の形を復元する」という目的があってできたのであって、「アッタン」において「アッタ」が既に見えており、復元する必要のなかった過去形にガンとゲンが入る必要もなかったのである。「アッテン」のほうは「あった」が復元できないが、「アッタ」のほうでそれがわかるし、ア段とエ段の対立を守るということもする必要があったため、「アッタン」と「アッタゲン」の対立ではアンバランスだったのだろう。

このように、なぜガンとゲンが過去形に後接できないのかという問いに対して、本研究では（a-1）と（a-2）という回答を提示した。（a-1）は第 5 章の大阪方言と同様だが、石川方言の場合、ガン・ゲンの成立過程が大阪方言よりも複雑なので、（a-2）のような回答も必要になったのである。また、以上のことから、先行研究で言われている「行ったガン→イッタン」「行ったゲン→イッテン」という変化も否定できる。「イッタン」はむしろ「行った-aN」であり、「イッテン」は「行った-eN」である。とはいえ、「行った-aN」が直接「イッタン」になったわけでもなければ、「行った-eN」が直接「イッテン」になったわけでもない。ただ、ガンやゲンからできたと考えるよりは本研究の考え方に近い。

5.2. A 群と E 群の機能分担について

これは、A 群と E 群の対立ができた過程を考えると説明できる。この対立は、平叙文と疑問文の両方で使える「アランヤ（-aN）」と平叙文専用の「アレン（-eN）」の対立がもとになっており、平叙文でしか使えない「アレン」に対して、「アランヤ」が疑問文専用になったことからできたと考えられる。この流れを図示すると図 7-7 のようになる（図 7-4 再掲）。

この図の 1 段目において、-aN は疑問文にも平叙文にもなれたが、-eN は平叙文にしかなれないというアンバランスな体系があった。そのままでも特に支障はなかったわけだが、-aN と-eN で文タイプを区別することになった。ここには、平叙文か疑問文かを区別したいという需要があったのだろう。それが以降の変化の糸口になったと考えられる。従属節に入れるのが E 群だけというのも、疑問文専用になった A 群にそれができなくなったためだろう。また、次の 5.3 節で述べるように、活用できなくなったというのも理由としてあるかもしれない。

先行研究のように、ガヤとンヤの混交によってガンヤができ、そこからガンができたと考えても、なぜガンが疑問文専用になったのかが説明できない。しかし、本章のように考えると、この問題も解決する。

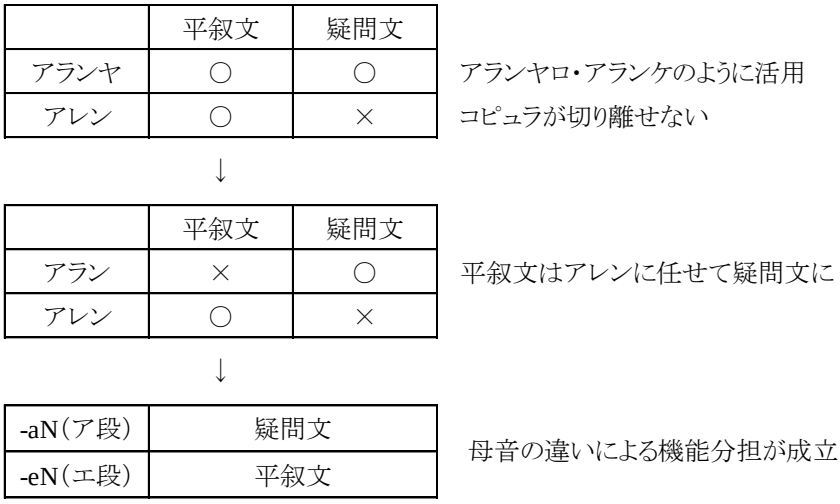


図 7-7　ア段とエ段の機能分担ができるまでの流れ（図 7-4 再掲）

5.3.　E 群の形式の活用について

これは 4.1 節でも触れたが、E 群の形式はもともと「アルゲ（ー）」であり、それが融合したことによって「アレン」となったのである。「ゲ（ー）」は「ガヤ」が変化したものであり、「ゲ（ー）」にはコピュラが含まれている。そのため、「ゲ（ー）」にコピュラがつくことはない。したがって、「アレン」が「アレンタ」「アレンロ」のように活用する際も、コピュラと同じように活用しているのだが、そのコピュラを中に含みこんでいるので、「タ」や「ロ」が直接ついているように見えるのである。また、-eN からの類推によってできたテンやネンも同様の性質を引き継いでおり、「テンタラ」「ネンタ」のように活用するのもそのためである（詳細は第 6 章を参照されたい）。

一方、ガンなどの A 群の形式が活用できないのは、-aN と-eN の対立ができたときに、「アランヤ」から「ヤ」を切り離したためだと考えられる。つまり、「ヤ」がついているおかげで平叙文でも疑問文でも使えていた「アランヤ」だが、「ヤ」を切り離したことで活用を失い、疑問文専用になったのである。大阪方言のネンは活用を失っても平叙文専用になったが、石川方言の場合は「アレン」が平叙文になるしかなかったため、「アラン」が疑問文専用になったのである。

6.　考察

ここまで、石川方言のノダ相当形式のバリエーションがどのようなプロセスを経て成立してきたかということを考察してきた。そしてその結果、2.1 節で述べた先行研究とは異なり、「ガヤ」「ガイ」「ゲー」が動詞と音声的に融合したものが変化の出発点となり、先行研究では最も変化が進んだ形式とされている-aN や-eN のほうが先にできていたということが明らかになった。

では、ここで明らかになったことは、どのように意味づけられるだろうか。本節では、このことについて考えてみたい。具体的には、一連の変化は、どのような変化として特徴づけられるか（6.1 節）ということと、このような変化の要因となったのは何か（6.2 節）ということである。特に前者は、新田（2004）が指摘する「文法化」との関係について検討する。最後に、石川方言のノダ相当形式に今後起こりうる変化についても考えてみたい（6.3 節）。

6.1. 変化の位置づけ

新田（2004）では、一連の変化を文法化という視点でとらえようとしている。その根拠となっているのが、以下のような特徴である。

（ア）語形の短縮化
（イ）E 群では用法が「提示」に限定される
（ウ）A 群が「のだ」のモーダルな性質を失っている
（エ）新しい「短縮形」「融合形」が否定形と過去形を消失している

（ア）は、「ガヤ」が「ガ」になったり、「ゲン」が「-eN」になったりという変化を指していると思われる。（イ）と（ウ）は「意味の漂白化（semantic bleaching）」に当たり、（エ）は「脱範疇化（decategorization）」に当たるとされている。しかし、（エ）に関しては、「ゲンタ」のような過去形が最近類推によって作られており、「一度失った過去テンスと「把握」の用法を、限定付きながら復活させたものである」（p.180）としている。そして、それを踏まえて、「類推による新しい語形成が文法化とは異なる振る舞いをする事例として、これからも注視すべきものと考える」と指摘している。

このように、ノダ相当形式の変化を文法化ととらえようとする考えは、第 2 章でも述べたように、井上（2006b）にも共通しており、方言のノダ相当形式の研究の 1 つの流れとしてとらえられる。しかし、本章で述べてきたことを踏まえると、石川方言のノダ相当形式の変化が、必ずしも文法化とは言えないのではないだろうか。上記の（ア）～（エ）は新田（2004）の記述に基づいたものであり、それとは異なった主張を提出した以上、その位置づけについても再検討する必要があるだろう。以下、語形の短縮化（ア）、意味の漂白化（イ・ウ）、脱範疇化（エ）について検討していく。

6.1.1. （ア）語形の短縮化

まず（ア）について、新田の言う「語形の短縮」とは、「ガヤ」が「ガ」になったり、「ゲン」が「-eN」になったりといった変化を指すと思われる。「準体助詞＋コピュラ」からコピュラが脱落し、それがさらに変化を起こして接辞になるというのは、一貫した語形の短縮と言えるだろう。しかし、本研究で示した図 7-6 では、そのような一貫した変化が見られない。「ガヤ」が動詞と融合して「-aN」となる過程は、確かに「短縮」と言えそうだが、その後の変化は「短縮」とは言えない。接辞から接語（付属語）を生み出しており、むしろ語形が長くなっている。また、「ガヤ」が「ガ」になるような変化は、本章では想定していない。この「ガ」は新田の言う「短縮形」であり、疑問文ではなく平叙文で使用されるものである。

第 3 章で触れたように、富山方言においてはこのような使い方をする「ガ」はあり、石川方言にはかつてはあったと考えられるが、一連の変化に直接の変化を及ぼしたとは考えにくい。なぜなら、平叙文と疑問文の区別というのが変化の最大の原動力と考えられる以上、文脈とイントネーションがなければ平叙文と疑問文の区別ができない「ガ」は新形式に淘汰されたと考えたほうが自然だからである[7)]。以上のように考えると、（ア）の「語形の短縮化」は、一連の変化の中で起こりはしたが、変化の中で一貫して語形が短くなっていったというわけではなく、文法化の過程における典型的な「短縮化」ではないと言える。ただし、融合が変化の端緒になったと考えると、この「短縮化」は重要なプロセスだったと言える。

6.1.2. （イ・ウ）意味の漂白化

次に、新田が「意味の漂白化」として挙げている（イ）と（ウ）だが、これを「意味の漂白化」と呼ぶべきかについては検討の余地があると思われる。本論文の第Ⅱ部で取り上げた大阪方言のように、ネンがンヤに比べて命題に対する意味を失っており、聞き手に対する「提示」に力点を置くようになっているのは、「意味の漂白化」としてとらえることができるだろう。一方、石川方言においては、ガヤからゲンへという変化のみを想定すれば、確かに「意味の漂白化」と言えるかもしれない。しかし、新形式が「提示」だけを担っている大阪方言と違って、石川方言では「問いかけ」にも新形式が割り当てられている。以上を踏まえると、これは意味の漂白化というよりは、疑問文を担当する A 群と平叙文を担当する E 群の機能分担と考えるべきだろう。もちろん、ガヤが持っていた〈対人〉と〈対事〉のうち、〈対人〉に特化したという点は「意味の縮小」ととらえられる。しかし、1 つの形式が変化の中で意味を縮小させていくというものではなく、変化の途中で複数の形式に分かれ、体系が大きく変化したという点こそが、この変化の特徴であると言える。

また、（ウ）の「モーダルな性質を失っている」指摘について、「モーダルな性質」とは何かが判然としない。新田（2004:172）は、「A 群の形式が形式名詞として機能することや、それ以外はもっぱら疑問文に現れ、疑問文のマーカーの一種になっているということから、これらが「のだ」のもつモーダルな性質をほとんど失っている」と述べている。また、その傍証として「「～のに」、「～のか」、「～のなら」のような本来従属節の内部でモダリティを含まない従属節で A 群が現れ、E 群が現れないのに対して、「～のだから」、「～のだけれど」のような独立性が高くモダリティを含みうる従属節で E 群が現れる」ということを指摘している。しかし、疑問文のマーカーであることと、「モーダルな性質」を失っていることは無関係ではないだろうか。疑問とモダリティの関係をどのように規定するかによって、このことに対する考え方は異なってくるだろうが、少なくとも A 群の形式が単なる「疑問文のマーカーの一種」になっているとは思えない。「のだ」の「モーダルな性質」には平叙文の

7） もちろん、「ケ」をつけることで疑問文であることを表せるが、「ケ」の有無で発話の意味は変わるので、別の方法も必要だったのだろう。もちろん、富山方言のように「ガ」を文脈とイントネーションで区別する方言もあるが、石川方言はそうではなかったということである。

側面と疑問文の側面があり、A 群の形式はそれを疑問文に特化したもの、E 群の形式は平叙文に特化したものととらえることができる。したがって、「モーダルな性質を失っている」という（ウ）の記述は不適切だろう。

以上のように、（イ）と（ウ）の現象は積極的に「意味の漂白化」とは言えず、単なる「縮小」のようにとらえるよりも、平叙文と疑問文の「分担」ととらえるべきだと言える。大阪方言のように、もとの形式から新しい形式ができて、それが特定の機能に偏るという変化とは異なり、新しくできた複数の形式が機能を分担し、もとになった形式は使われなくなっているという点にこの方言の特徴がある。

6.1.3. （エ）脱範疇化

最後の（エ）に関しては、記述そのものが筆者のものと異なる。新田は、「ゲン」に否定形や過去形がなく、「ゲンタ」という形は 1980 年あたりから使用されるようになったものだという。「ゲン」に否定形や過去形がないのは、「ガヤ」から「ゲン」に至る過程で、「ヤ」が脱落したことで活用の基盤を失ったからだという。そのため、このような「ゲンタ」は「限定付きながら復活させたもの」としている。

しかし、本章で主張する変遷過程を踏まえると、「ゲンタ」が「限定付き」とは言えない。5.3 節でも述べたように、「ゲン」をはじめとする E 群の形式に「ゲンタ」「ネンロ」などの過去形や推量形が存在するのは、そのもとになった「ゲ（ー）」が「ガヤ」から変化したものであり、内部に「ヤ」を含みこんでいるからである。また、筆者が行った面接調査においても、これらの過去形や推量形の語形が非常に自然なものであるという回答が非常に多く、「限定付き」とは考えにくい[8)]。

このように、E 群の過去形や推量形の使用に関して、新田（2004）の記述と筆者とでずれがあるのはなぜだろうか。まず考えられるのは、新田論文と筆者の調査との間の 10 年ほどの間に当該の語形が中年層にまで浸透したということが考えられる。石川方言のノダ相当形式における一連の変化は、ここ数十年の間に起こっており、新しい語形が浸透する速度もかなりのものである。そのことを考えると、10 年でノダ相当形式の体系が大きく変わっているということも十分考えられる。

他の要因として考えられるのは、地域的な問題である。新田が記述しているのは金沢市方言であり、「ゲンタ」などに関して参考にしているのもまた金沢市方言を対象にした卒業論文である。しかし、加藤（2014:93）において、「ゲン」は金沢市よりも周辺地域で先に成立しており、内的変化と周辺からの入り込みによって金沢市でも使われるようになったと指摘されている。これを踏まえると、金沢市では石川県内の他の地域に比べて変化が遅く、新田（2004）の記述は変化の途中だったとも考えられる。ただし、新田（2004）の記述が何に基づいているかが明らかではないので、あくまで推測である。

8） 若年層だけでなく中年層でもこの傾向は同じである。

以上のように不明瞭な部分はあるが、第 6 章で記述した現在の若年層の体系から考えると、E 類の形式の過去形や推量形が「限定付き」ではないことは明らかである。これに関して、新田（2004:180）に「類推による新しい語形成が文法化とは異なる振る舞いをする事例として、これからも注視すべきものと考える」という指摘があるが、必ずしも「類推による新しい語形成」とは言えない。類推も関わっているが、「ゲンタ」のような過去形が使われるのは、その成立過程を考えると、非常に自然なものだったのである。したがって、ゲンなどの E 群の形式に活用の消失という「脱範疇化」はなく、むしろ活用を失ったのはガンなどの A 群の形式である。ガヤからガンへの変化を想定すれば、その変化においては活用の消失という「脱範疇化」があったと考えることができる。しかし、6.1.2 節でも述べたように、1 つの形式が変化の中で脱範疇化を起こすというのではなく、変化の中で体系が大きく変化するという点に特徴があると考えられる。なお、「文法化とは異なる振る舞いをする～」という新田の記述に関しては、筆者も同意見である。

ちなみに、E 群の否定形がないのは、「ヤ」の否定形の作り方が過去形や推量形と異なるからであると考えられる。中年層以上では、「行くのではない」に当たるのは「イクガデナイ」「イクガンナイ」、もしくは融合形の「イカンナイ」である。『方言文法全国地図』17 図「行くのでは（ないか）」においても、石川県はほぼ全域に「イクガデ」が分布しており、他には「イカン」「イクガデワ」がある。つまり、「イクガヤナイ」は比較的新しい形であり、「ヤ」の否定形に「ヤ」は含まれなかったのである。したがって、「*イクガイナイ」「*イクゲーナイ」といった形もありえないため、「*イケンナイ」とはならなかったのである。

6.2. 変化の要因

ここまでに述べてきたように、石川方言においては、非常に短期間でノダ相当形式が大きな変化を起こしてきたわけだが、このような変化を引き起こした要因やその背景にあるものは何なのだろうか。特に、地理的に隣接しており、準体助詞に「ガ」という同じ形式を使用する富山方言との違いは非常に大きい。本節では、その変化の要因を、特に富山方言と対照することで考えてみたい。大阪方言やその他の方言との対照は第 8 章で行う。

まず、若年層における石川方言と富山方言の違いは、準体助詞「ガ」を使用するか否かということである。準体助詞の伝統形式は石川・富山ともに「ガ」だが、第 6 章で述べたように、石川県若年層ではこの「ガ」をほとんど使わない。もちろん個人差はあるが、「祖父母と話すときに使うかもしれない」というインフォーマントのコメントもいくつかあった。一方、富山方言では、家族や地元の友人と話すときならば「ガ」を使うというインフォーマントがほとんどだった。石川県の話者にとって、「ガ」を使って話すのは「富山の人」というイメージがあるというコメントも調査でよく耳にした。

このような、準体助詞「ガ」の使用における両県の違いが、ノダ相当形式の違いに関係していると考えられる。石川県の若年層は、方言形である「ガ」を使わなくなったが、単に標準語形を使うのではなく、伝統的な方言形とも標準語形とも異なる新しい形式を生み出したのである。標準語形は、県外の人と話すときや、あらたまった場面において使用される。

一方、富山の若年層話者は、インフォーマルな場面では「ガ」、あらたまった場面では「ン」を使用するという、（伝統）方言か標準語かという軸で使い分けを行っている。

では、なぜ隣り合った石川県と富山県で、「ガ」の使用に関してこのような違いが出るのだろうか。北國新聞社編（2005:213-215）では、金沢の若年層において「ガ」ではなく「ガン」が頻繁に使用されるようになっているということが紹介されている。そこでは、その要因として、若年層で「ガ」が鼻濁音で発音されなくなったために「ガ」が耳につくようになったということが考えられるという加藤和夫氏の見解が紹介されている。確かに、筆者が行った調査でも、「ガ」を使った例文を使うかどうか聞いたときに、「「ガ」だときつく聞こえる」と指摘したインフォーマントが少なくなかった。このことを考えると、若年層においてガ行子音が鼻音から破裂音になっているという変化と、「ガ」の衰退、そして新しいノダ相当形式の発生は、おそらく密接に関係しあっているのだろうと思われる。

しかし、必ずしもそれだけが要因とは考えられない。というのは、石川県の若年層でも、ガ行子音を鼻音で発音する人と破裂音で発音する人がいて、両者が使用するノダ相当形式に大きな違いがないからである。また、富山県の若年層でも、鼻音と破裂音の両方が聞かれる。では、他にどのような要因が考えられるだろうか。

そこで考えたいのが、社会言語学的な要因である。若年層が伝統形式を使わなくなるというのは、日本全国で起こった標準語化（共通語化）と同様のものだと考えられるが、ここで扱っている事象は、単純に標準語形を取り入れるのではなく、新たな形式を作ってしまうというものである。これと類似した現象は、関西若年層を対象とした高木（2006）で既に指摘されている。関西では、標準語との接触によって若年層話者が単に標準語を使うようになるのではなく、言語項目によって標準語形を受け入れたり、伝統形式を維持したり、両者を混交させて新たな形式を作ったりと、標準語化とは異なる独自の変化を起こしていることが高木によって明らかにされたが、本章で明らかにした石川方言のノダ相当形式に起こった変化もまた、標準語化とは異なるものである。本研究では接触という視点をとってはおらず、社会言語学的な調査はできなかったが、今後進めていきたいと考えている。

6.3. 今後の変化

最後に、この第Ⅲ部で取り上げた石川方言のノダ相当形式が今後どのような変化をするかを考えてみたい。第 5 章の 7.3 節では、大阪府南部などにおいてネンが過去形にも後接して「行ったネン」のように使用されることについて触れたが、石川方言のゲンにも同様のことが起こる可能性があると考えられる。近畿方言の場合、ネンを使わない人が接触によってネンを取り入れ、それをテンスの区別をせずに汎用したことによる「タネン」が広がりつつある。

では、石川方言ではどうだろうか。今後、近畿方言と同様の「ゲンの汎用」が起こるとしたら、おそらくそれは富山方言話者によるゲンの使用ではないかと考えられる。既に述べたように、石川県と隣接している富山県では、若年層でも準体助詞の伝統形式「ガ」を使っており、ノダ相当形式も伝統方言と同様に「ガ（ヤ）」である。実際、筆者の調査でも、富山

方言話者はゲンなどの新形式を使っておらず、「石川の人のことば」として意識されている。石川の側でも、「ガを使って話すのは富山の人」という意識があり、富山の人と話すときはゲンなどは使わないというコメントも少なくない。このように、石川方言と富山方言は共通するところも多く、接触もあるが、ノダ相当形式に関しては話者の中で明確に区別されているようである。このような状況が続くとすれば、「ゲンの汎用」のような現象も起こらないと考えられる。

しかし、石川方言のノダ相当形式が新しくなったのは比較的最近の話であり、新たな変化が起こるのにはもう少し時間がかかるのかもしれない。また、北陸におけるメディアのあり方や人の動きといった社会言語学的な要因が大きく作用する可能性もある。これについてはやはり本研究では触れられなかったので、今後の課題としたい。

7. まとめ

以上、石川方言のノダ相当形式の成立過程について考察してきた。そして、本章で主張する成立過程は、5 節で述べたとおり、先行研究の問題点を解決できることが明らかになった。本章で明らかになったことの要点は以下のとおりである。

① ガン・ゲンから-aN・-eN ができたのではなく、動詞非過去形と「ガヤ」「ゲ」との融合形からできた-aN・-eN のほうが先にあり、動詞の形を復元するためにガン・ゲンができたのである。

② -aN・-eN のア段とエ段の違いという対立が成立したことによりタン・テン、ナン・ネンといった形式が次々にできていった。

③ 以上のように考えることで、ガン・ゲンが過去形に接続できないのはなぜか、A 群と E 群の機能分担はいかにしてできたかといった先行研究が説明できなかった問題を解決することができる。

そして、一連の変化の位置づけと要因について、以下のことを指摘した。

④ 先行研究で指摘されていた、意味の漂白化や脱範疇化といった文法化の特徴は積極的には見いだせず、単純に文法化と言うことはできない。しかし、A 群と E 群の対立を原動力として、短期間のうちに非常に大きな変化を起こしていることは、注目に値する。

⑤ 石川県のノダ相当形式にこれほどの変化が起こったのは、若年層が準体助詞「ガ」を使わなくなったことや、ガ行子音が鼻音ではなく破裂音になったことが要因として考えられる。また、関西との言語接触などの社会言語学的な要因も考えられ、今後明らかにしていくべき問題である。

第Ⅲ部では、石川方言のノダ相当形式にどのようなものがあり、どのような特徴を持っているかということを記述し（第 6 章）、どのような過程を経て様々なノダ相当形式ができたのかということを考察してきた（第 7 章）。最後の第Ⅳ部では、第Ⅱ部と第Ⅲ部で述べてきたことをまとめ、2 つの方言のノダ相当形式の体系とその変遷過程が日本語や他言語の中にどのように位置づけられるかということを議論する。

第Ⅳ部　結論

第Ⅳ部は、本研究の結論である。第 8 章では、第Ⅱ部と第Ⅲ部の内容を踏まえて、大阪方言と石川方言のノダ相当形式を対照する。そして、それを他方言や他言語の中に位置づけ、本研究の意義を改めて述べる。第 9 章では本研究で明らかになったことをまとめ、今後の研究の展望を述べる。

第8章　方言におけるノダ相当形式のバリエーションと成立

1.　はじめに

本論文では、第Ⅱ部で大阪方言を中心とした近畿方言を、第Ⅲ部で石川方言を取り上げ、そのノダ相当形式のバリエーションの成立と広がりについて記述してきた。第 3 章でも述べたように、これらの方言のノダ相当形式は、日本語の中でも非常に特徴的で、最先端の変化をしている。そこで、本章では、この 2 つの方言におけるノダ相当形式のバリエーションとその変化がどのように一般化でき、日本語のノダ文の中でどのように位置づけられるかということについて考察していく。

本章は、以下の順で進めていく。まず、2 節では、ここまでに述べてきたことのまとめとして、大阪方言と石川方言のノダ相当形式の概略をまとめる。3 節ではそれを踏まえて、両方言を対照し、その相違点と共通点を明らかにする。そして、4 節では、両方言を他の方言と対照し、日本語のノダ文の中でどのように位置づけられるかについて検討する。最後の 5 節はまとめである。

2.　大阪方言と石川方言のノダ相当形式概略

まずは、第Ⅱ部と第Ⅲ部の繰り返しにはなるが、3 節以降の議論の準備として、本論文でここまでに述べてきた大阪方言と石川方言のノダ相当形式について、その体系と成立過程を簡単に振り返っておきたい。

2.1.　大阪方言のノダ相当形式とその成立

大阪方言のノダ相当形式は、主にンヤ・ネヤ・ネンヤ・ネンの 4 種類で、大まかな使い分けは以下のようになっている。

表 8-1　大阪方言のノダ相当形式概略（表 4-1 再掲）

文タイプ	述語の時制	用法	
		対人	対事
平叙文	非過去形	スルンヤ スルネヤ スルネン	スルンヤ スルネヤ スルネンヤ
	過去形	シタンヤ シテン	シタンヤ シテンヤ
疑問文	非過去形	スルン(カ)	スルン(カ)
	過去形	シタン(カ)	シタン(カ)

この表は、述語のテンス・用法・文タイプという 3 つの観点で分類されており、この分類によって使用する形式が異なることがわかる。大阪方言のノダ相当形式はンヤ・ネヤ・ネンヤ・

ネンの 4 種類と述べたが、ンヤ以外は述語のテンスによって接続制限がある。ネヤは過去形には一切接続できず、ネンヤとネンは「タ」を含みこんで「テンヤ」「テン」となる。また、ネンは〈対人〉用法に特化されており、他の形式は条件つきではあるが〈対事〉でも〈対人〉でも使える。そして、これらの形式が主に使用されるのは平叙文であり、疑問文が問題なく作れるのはンヤのみである。補充疑問文に限りネヤ・ネンヤ・ネンも使用可能だが、制約もある。

以上のように、大阪方言のノダ相当形式は、述語のテンス・用法・文タイプによって使い分けられており、特に「ネン」と「テン」が最も変化を起こして終助詞に近い性質を持っている。このような体系になったのは、その変遷過程が要因となっていると考えられる。第 5 章で述べたノダ相当形式の変遷過程は以下のとおりである。

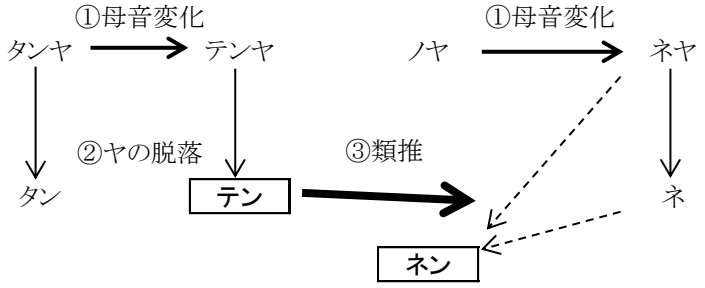


図 8-1　大阪方言におけるノダ相当形式の変遷過程（図 5-1 再掲）

図 8-1 にあるように、この変化は母音変化・ヤの脱落・類推という 3 種類のプロセスを踏んでおり、テンとネンは別の要因によって成立した。まずは過去形に「ノヤ」のようなノ系ではなく「ンヤ」のようなン系が頻繁に後接するようになった。そして、「タンヤ」が母音変化を経て「テンヤ」となり、そこから「ヤ」が脱落して「テン」となった。一方、非過去形では「ノヤ」が母音変化により「ネヤ」となり、それが（「ネ」への変化の有無はともかく）「テン」からの類推で「ネン」となった。「ネンヤ」はそれよりも後にできた形式である。この考え方の特徴は、ネンよりも先にテンが成立していたと考えることで、ネンが過去形に接続できず、「テン」となるのはなぜかという問題に対して一定の説明を与えられることである。

2.2.　石川方言のノダ相当形式とその成立

次に、第Ⅲ部で述べた、石川方言のノダ相当形式について振り返る。石川方言のノダ相当形式は、〈対人〉用法において豊富なバリエーションを有しており、以下のように述語のテンス・述語の品詞・文タイプの 3 つの観点で分類される。

表 8-2　石川方言におけるノダ相当形式概略（表 6-2 再掲）

文タイプ	品詞	対人		対事	
		非過去形	過去形	非過去形	過去形
平叙文	用言	イクゲン イケン~イキン	イッテン	イクンヤ イクゲンヤ イケンヤ~イキンヤ	イッタンヤ イッテンヤ
	体言	休みネン	休みヤッテン	休みナンヤ 休みネンヤ	休みヤッタンヤ 休みヤッテンヤ
疑問文	用言	イクガン（ケ） イカン（ケ）	イッタン（ケ）	イクガン（ケ） イカン（ケ）	イッタン（ケ）
	体言	休みナン（ケ）	休みヤッタン（ケ）	休みナン（ケ）	休みヤッタン（ケ）

形式の種類は多いが、3 つの基準で明確に使い分けられるため、整理はしやすい。新田（2004）も指摘しているように、母音によって平叙文専用形式と疑問文専用形式が分かれている。「ゲン」「テン」「ネン」のようにエ段の形式は平叙文で、「ガン」「タン」「ナン」のようにア段の形式は疑問文である。また、述語が過去形の場合、「ゲン」や「ガン」は使わず、「テン」や「タン」のように過去マーカーを含みこんだ形を使う。そして、述語が非過去形の場合、用言か体言かで使用する形式が異なる。体言の場合、コピュラを介さずに[1] そのままつく。

以上のような体系を持つに至った背景には、以下のようなノダ相当形式の変遷過程があったと思われる。

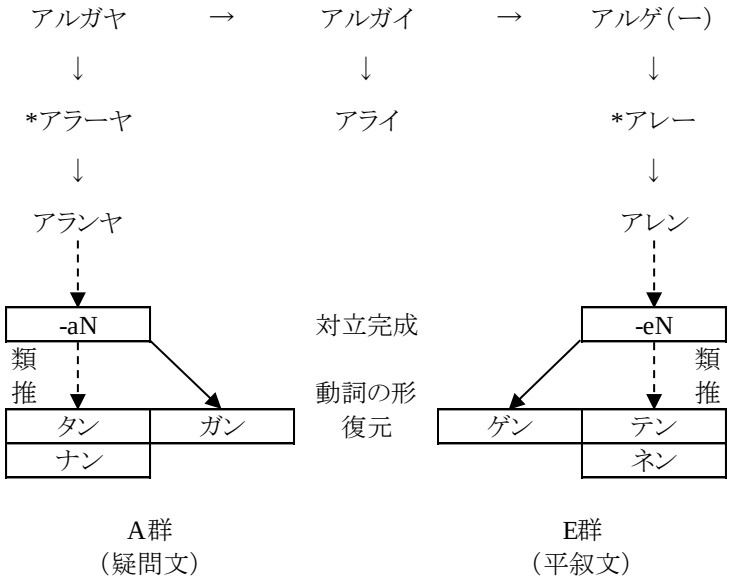


図 8-2　石川方言におけるノダ相当形式の変遷過程（図 7-6 再掲）

1）　「ナン」の「ナ」はコピュラの連体形と分析できるが、次に述べる変遷過程においては、「ナン」で 1 つと分析されたと考えられる。詳しくは、第 7 章を参照されたい。

図 8-2 の変化では、次のようなことが起きている。

① ガヤ→ガイ→ゲの音変化
② 動詞とガヤ・ガイ・ゲの融合
③ -aN と-eN の析出による A 群と E 群の対立の成立
④ 過去形や名詞への広がり
⑤ 動詞の形を復元するためにガン・ゲン成立

この変化のポイントは③において A 群と E 群の対立ができたことである。この対立をもとに、様々な形式ができていったのである。先行研究では、ガン・ゲンが動詞に融合したものとして-aN・-eN が位置づけられていたが、本研究では、それを全く逆に考えた。

以上、第 4 章から第 7 章の内容を簡単にまとめた。次節では、それを踏まえて大阪方言と石川方言のノダ相当形式を対照していく。

3. 大阪方言と石川方言のノダ相当形式対照

本節では、本論文で取り上げた 2 つの方言におけるノダ相当形式について、その体系（3.1 節）と変化（3.2 節）を対照し、その共通点と相違点を明らかにする。

3.1. 体系の対照

まずは、第 4 章と第 6 章の内容、つまり、現在の体系を対照していく。対照するに当たって具体的に注目するのは、体系の特徴（3.1.1 節）、伝統形式との関係（3.1.2 節）、個々の形式について（3.1.3 節）の 3 項目である。以下、それぞれについて記述する。

3.1.1. 体系の特徴

大阪方言と石川方言のノダ相当形式の体系における大きな違いは、大阪方言が平叙文の中で〈対人〉用法に特化した形式が発達した体系になっているのに対して、石川方言では〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文の区別をすることに力点を置いた体系になっていることである。大阪方言では、ネンやテンといった形式が平叙文に特化された形式として発達したため、もとの形式であるンヤがそれ以外の部分、すなわち疑問文などを担うようになった。一方、石川方言では疑問文専用の A 群と平叙文専用の E 群の対立を保つことによって、一見多様な形式で雑然としているようで、よく見れば整然とした体系になっている。述語が動詞か名詞かによって接続する形式は異なるが、それよりもア段かエ段かという区別に重きを置くのである。

しかし、一方で、共通点もある。大きな共通点としては、いずれの方言においても〈対人〉用法において様々な形式が発達していることである。この背後には、コミュニケーションにおいて対人場面というのは非常に重要であり、新たな表現もまた対人場面において求められるものであるということが要因としてあるのだろう。特に、自分が相手に情報を提示している（平叙文）のか、相手に問いかけている（疑問文）のかという区別は非常に重要であり、

石川方言ではその区別を中心にした体系となっている。大阪方言でも、対立を明確にしているわけではないが、平叙文専用のネン・テンを発達させることで、結果的に疑問文との違いを際立たせている。

3.1.2. 伝統形式との関係

また、伝統形式を使用するか否かという点にも両方言の違いがある。大阪方言では、ンヤ（ノヤ）から変化が始まってネヤやネンなどの形式ができたが、もとになったンヤは現在の若年層話者も使う。一方、石川方言では、伝統形式であるガヤを使うのは中年層以上の話者であり、少なくとも 20 代の話者はほとんど使わない。また、準体助詞としての「ガ」も使わない。大阪方言のンヤは、疑問文や〈対事〉用法で使われており、体系内においてネンと棲み分けているが、石川方言では、伝統形式であるガヤが、新形式であるガンやゲンに淘汰されている。大阪方言では、疑問文でネンが使えないため、ンヤがそこを埋めたかたちになっているが、石川方言では疑問文も新形式が担当しているため、伝統形式は体系から押し出されている。また、〈対事〉用法には、地方共通語である「ンヤ」、もしくはさらに新しいと思われる「ゲンヤ」などが入っている。以上のことを図示すると以下のようになる。

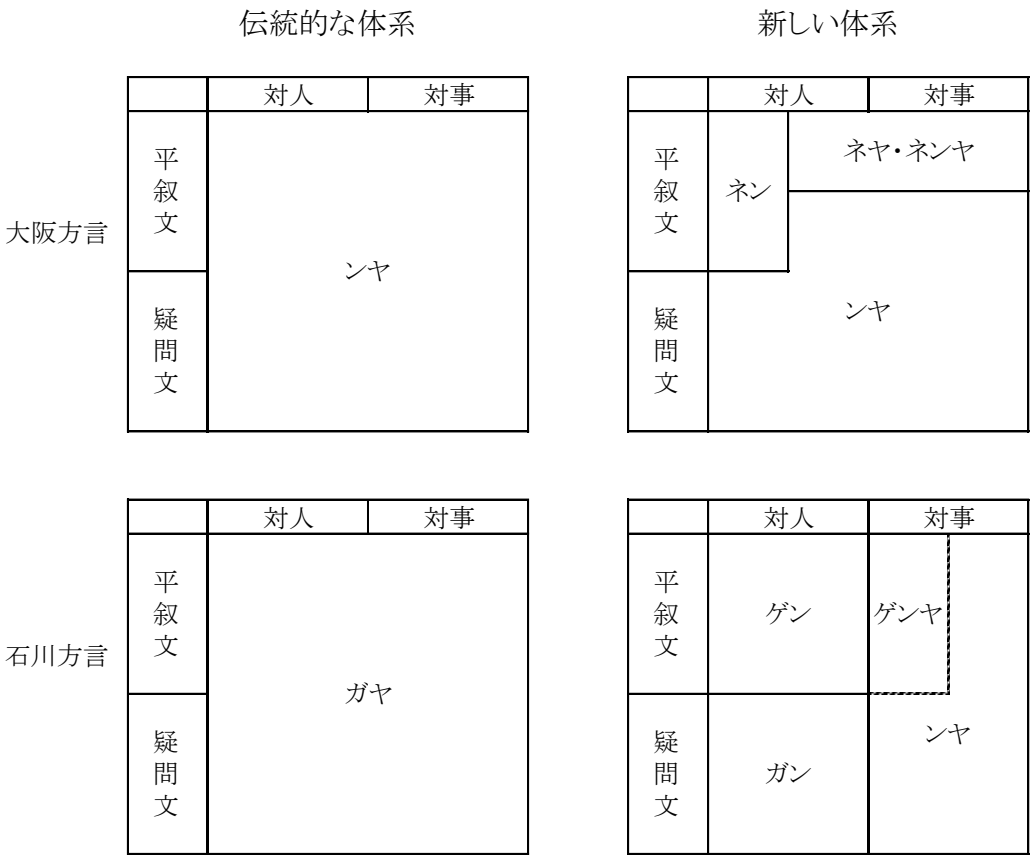


図 8-3　大阪方言と石川方言のノダ相当形式における新旧体系の比較

この図 8-3 は、平叙文か疑問文か、〈対人〉か〈対事〉かという観点で、それぞれの場合に使用されるノダ相当形式をまとめたものである。そして、伝統的な体系と新しい体系を比較している。なお、この図は新旧それぞれの体系における伝統形式の位置づけを比較するためのものなので、述語の品詞やテンスによる形式の違いは特に考慮せず、動詞非過去形（終止連体形）につく場合を想定している。

伝統的な体系を見ると、大阪方言はンヤ、石川方言はガヤのみを使っていることがわかる。しかし、新しい体系のほうを見ると、伝統形式の位置づけが両方言で異なることがわかる。大阪方言では、伝統形式であるンヤの一部をネヤ・ネンヤ・ネンが担当するようになっているが、ンヤはどの文タイプ・用法でも使える。一方、石川方言では、表の左半分、つまり〈対人〉用法の枠を平叙文と疑問文できれいに分割し、それぞれに新形式を割り当てている。〈対事〉の側は、地方共通語であるンヤが割り当てられており、人によってはゲンヤという形式を使う（破線になっているのは、この形式の使用に地域差や個人差があるためである）。伝統的なノダ相当形式であるガヤは、体系のどこにもない。

大阪方言のような体系は、古い形式と新しい形式が機能を分担して併存しているというもので、Hopper (1991) の言う「重層化（layering）」に当てはまると考えられる。しかし、石川方言のような、もとになったと思われる形式が残っておらず、体系内がすべて新形式に置き換わっているというのは、それほど頻繁に見られることではない。しかも、その変化が数十年という非常に短い間に起こっており、旧形式と新形式が併存した結果、旧形式が使われなくなったということも確認できない。

3.1.3. 個々の形式について

最後に、大阪方言と石川方言の個々のノダ相当形式について対照してみたい。具体的には、「テン」について（3.1.3.1 節）、〈対人〉の形式の意味（3.1.3.2 節）、コピュラとの関係（3.1.3.3 節）について対照する。

3.1.3.1. 「テン」について

まず、どちらの方言にも、テンスマーカーの「タ」を含んだ「テン」という形式が存在するという共通点がある。しかも、どちらも平叙文の〈対人〉用法で使用される形式である。これを単なる偶然の一致として処理することもできるが、ここではこの共通点の意味するところを積極的に考えてみたい。「テン」という 1 つの形式がテンスも表し、しかもそれが過去の場合のみというのは、非対称的であり、非常に不安定な体系であると考えられる。岸江（2000）や小笠原（2014）が指摘しているような（第 5 章の 7.3 節）、近畿方言における「タネン」の出現はその不安定な体系を単純化する方向の変化だと考えられるが、「タネン」が不適格であるとする体系はまだ強く残っている。

しかし、大阪方言と石川方言のモダリティに関わる言語変化としては、単純化しようとする動きが目立つ。例えば、大阪方言の同意要求形式「クナイ」（高木 2009）は、「寒くない」のような形容詞の否定形から同意要求に特化された形式として「クナイ」が析出され、それ

が「できるクナイ」のように形容詞以外にも「クナイ」のまま接続するようになった変化である。また、金沢方言では、「マッシ」の接続の単純化（新田 2004、北國新聞社編 2005）が知られている。これは、敬語「まさる」の命令形である「マッシ」が五段動詞に接続する際、伝統方言では「読むマッシ」のように終止連体形に接続していたのが、「読みマッシ」のように連用形に接続するようになった変化である。これは、他の種類の動詞が「食べマッシ」「起きマッシ」「しマッシ」のように連用形に接続するのに合わせたものと考えられている。

このように、モダリティに関わる言語変化については、単純化の傾向が目立つ。もちろん、それぞれの変化には様々な背景や要因が絡んでいるため、上記のような変化を引き合いに出すのはいささか的外れかもしれないが、「テン」のように過去の場合だけテンスマーカーを含んだ別の形を使用するという現象は大阪・石川どちらの方言においても非常に珍しい。特に、石川方言の場合、非過去形の「スレン」と過去形の「シテン」であれば、-(r)eN と-(i)teN というテンスを含んだ対立であるが、そこに「スルゲン」ができたために、テンスの対立がアンバランスになった。テンス対立のバランスを崩してまでも「ゲン」を生み出そうとする力が強かったと推察される。

いずれにせよ、ノダ相当形式において他の方言にはない独自の変化をしている大阪方言と石川方言において、過去形の場合にのみ使用される「テン」があるというのは、注目すべきだと考える。なぜ「テン」という形式が存在するのかという問いに対しては、本研究では変遷過程にその答えを求めたわけだが、その過程自体、類推を介した非常に複雑なプロセスである。そう考えると、ノダ相当形式のさらなる変化において、テンスを含んだ形式の成立や、その背景にある複雑な変化ということが条件となっているのかもしれない。

3.1.3.2. 〈対人〉形式の意味

次に、〈対人〉形式の表す意味について考える。ここでいう〈対人〉形式とは、平叙文に限ったものである。具体的には、大阪方言のネンと石川方言のゲンのことである。この 2 つの形式は、平叙文の〈対人〉用法に特化されており、音声的にも非常に似ている。しかし、重なるところは多いものの、表す意味は異なる部分がある。第 4 章で記述したように、大阪方言のネンは、ンヤやネヤなどの他のノダ相当形式とは単純に置き換えのできない場面で使われることがある。それは、前置きなしに聞き手に情報を提示するといった、次のような発話である。

(1) （聞き手に）あんなー、おれ今度東京に行く｛?ンヤ／ンヨ／ネン｝。

(1) において、終助詞を伴わないンヤは非常に不自然に感じられ、「ンヨ」のように終助詞を続けるか、「ケド」や「ヤンカ」などを続けるのが普通である。一方、ネンの場合、特に終助詞などを伴うことなく、自然な発話として成立する。これは、ンヤ以上の「対人的な意味」をネンが持っているからだと考えられる。

これに対して、石川方言のゲンにこのような性質はなく、(1) のような場合は「ゲンヨ」「ゲンテ」のように終助詞を伴うのが普通である。このような違いは、ネンとテンがどのような体系に位置づけられているかによるものだと考えられる。すなわち、大阪方言では、〈対

人〉用法の平叙文の中で、元の形式であるンヤから対人的機能に特化したネンができたととらえられるが、石川方言では、〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別するために A 群と E 群ができたと言える。つまり、石川方言のゲンは、ガンとの対立において、平叙文であるということを示せればいいのである。もちろん、この違いは、成立過程の違いからくるものである。このことについては 3.2 節で述べる。

3.1.3.3. コピュラとの関係

最後に、コピュラとの関係について言及しておく。どちらの方言でもコピュラは「ヤ」だが、ノダ相当形式における位置づけが異なる。大阪方言では、「ヤ」を含まない形式がネンだけであるのに対して、石川方言では〈対人〉で使用される形式すべてに「ヤ」が含まれない。〈対人〉に特化された形式がコピュラを持たないという点では両方言とも共通しているが、「ヤ」が含まれないということの意味は、大阪方言と石川方言で異なる。大阪方言では、ネヤからネンへの変化において、「ヤ」がとれたと考えられるが、石川方言では、E 群の諸形式のもとになった「ゲー」の中に「ヤ」が含まれており、「ヤ」がなくなったのではなく、見えないだけなのである。したがって、大阪方言で「ネンタ」が言えなくて石川方言で「ゲンタ」が言えるのは、「間に合わせ」ではなく、ゲンの成立過程に起因することなのである。このように、ノダ相当形式において、コピュラの有無は活用の有無に直結する問題だが、必ずしも「ヤ」という形を保っている必要はないことがわかる。

また、特に文末において、コピュラの有無は、用法の解釈にもつながる。大阪方言において、ネンが〈対人〉専用の形式として存在するため、ンヤやネヤが〈対事〉で使用されやすいということを第 4 章で述べた。また、石川方言の場合、〈対事〉用法で使用されるノダ相当形式は、地方共通語の「ンヤ」か、E 群の形式に「ヤ」をつけた「ゲンヤ」などの形式である。以上のことから、「ヤ」を見える形で持つ形式が〈対事〉用法に偏る傾向があるということがわかる。先ほど、活用に関してはコピュラが必ずしも「ヤ」という形をとっている必要はないということを述べたが、〈対事〉用法に関しては事情が異なる。たとえその出自の上でコピュラを内に含んでいるとはいえ、ゲンが〈対事〉用法で使われることはない。これは、「ヤ」がいわば〈対事〉マーカーとして機能していると言える。大阪方言においても、〈対人〉専用であるネンに「ヤ」をつけた「ネンヤ」がある。これもまた、〈対事〉マーカーとしての「ヤ」であると言える。以上のような、コピュラのついた形式が〈対事〉用法に偏るという性質は、大阪方言や石川方言に限ったことではなく、他の方言にも当てはまることである。詳しくは、4 節で述べる。

3.2. 変化の対照

次に、両方言におけるノダ相当形式の変化のあり方について対照する。具体的には、体系変化の方向性（3.2.1 節）、変化のプロセス（3.2.2 節）、変化の背景（3.2.3 節）について対照する。

3.2.1. 体系変化の方向性

大阪方言と石川方言とで、ノダ相当形式の体系が似てはいるものの、考え方が異なることは 3.1.1 節で見た。では、その体系に至るまでの過程はどうだろうか。

大阪方言では、ンヤという汎用的なノダ相当形式から、テン・ネンという平叙文の〈対人〉に特化された形式ができ、その性質は終助詞に近づいていく。これは、語彙的な要素から文法的な要素へ、文法的な要素からより文法的な要素へと変化する文法化（grammaticalization）としてとらえられる。語彙的な要素からの変化ではないが、ンヤがネンになるにつれて、活用しなくなり、終止形に接続するようになり、対人的な終助詞の意味を含むようになるという変化は、まさに文法化である。

表 8-3　大阪方言におけるノダ相当形式の特徴（表 4-7 再掲）

		ンヤ	ネヤ	ネンヤ	ネン
形式	カラ・ケド節内	○	○	○	○
	上昇調	○	○	○	×
	活用	○	○	○	×
	ヤの潜在	○	×	×	————
	前接コピュラ	ナ	ヤ	ヤ	ヤ
	過去形に後接	タンヤ	×	テンヤ	テン
意味	〈対事〉	○	○	○	×
	〈対人〉	△	△	△	○

○: 当てはまる　×: 当てはまらない　△: 場合により当てはまらない

表 8-3 は第 4 章で示したものと同じだが、この表から、特に形式面の特徴から、実際の変遷過程はともかく、ンヤ→ネヤ・ネンヤ→ネンの順に終助詞のような特徴を持つようになっていることがわかる。意味の面に関しては、グラデーションとまでは言えないものの、ネンが〈対人〉用法に特化されており、ネンが最も文法化した形式であることがうかがえる。

一方、石川方言はというと、第 7 章で指摘したように、一方向的な文法化とはとらえにくい。例えば、ガン・ゲンは接辞である-aN・-eN が変化してできたものであり、より小さくなるという文法化の典型的な変化とは逆である。また、形式と意味のどちらにおいても、表 8-3 に示した大阪方言のようなグラデーションは見られず、母音の違いによる機能分担を変化の原動力としているため、そこには特に方向性は見られない。新田（2004:179-180）が指摘した「意味の漂白化」や「脱範疇化」についても、積極的には認められないということを第 7 章で示した。

このように、体系変化の方向性を比べると、両方言は大きく異なることがわかる。大阪方言は一方向的な文法化としてとらえられるが、石川方言はそれとはまったく異なった変化としてとらえられる。このような石川方言におけるノダ相当形式の体系変化は、単純な終助詞化や文法化ではない、ノダ相当形式における新たな変化として、非常に興味深い変化であると言える。中でも特徴的なのは、A 群と E 群の対立である。伝統方言ではコピュラおよび

疑問の助詞の分布、もしくはイントネーションによって区別していた平叙文と疑問文の別を、母音の違いという全く別のルールに変えてしまったところである。しかも、その変化が短い間に若者だけでなく広い世代に浸透しているという点は非常に興味深い。この点は社会言語学的な調査がさらに必要となるだろう。

3.2.2. 変化のプロセス

次に、変化のプロセスについて対照する。図 8-1 と図 8-2 からわかるように、どちらの方言においても、成立過程の中に母音変化と類推による変化がある。母音変化については、大阪方言に「タンヤ→テンヤ」「ノヤ→ネヤ」という変化が、石川方言には「ガヤ→ガイ→ゲー」という変化がある。しかも、これらはいずれも変化の初期段階に起こっている。一方、類推については、大阪方言では「テン」をもとにした「ネン」の成立が、石川方言では「-aN」と「-eN」をもとにした「タン／テン」「ナン／ネン」「ガン／ゲン」の成立がそれぞれ当てはまるが、このプロセスはいずれも母音変化よりも後に起こっている。以上を踏まえると、大阪方言や石川方言におけるノダ相当形式の変化のプロセスには、以下のような共通点があることがわかる。

① 変化の初期段階で母音変化を起こす
② 接辞形式からの類推で新たな形式ができる

①はいわば変化の準備段階であり、この変化だけなら他の方言でも起こりうる。そして、②は両方言における一連の変化において重要なポイントとなるプロセスだと思われる。ここで言う「接辞形式」とは、大阪方言の「テン」、石川方言の「-aN」および「-eN」のことであり、②は「テン」から「ネン」が、「-aN」と「-eN」から A 群と E 群の対立ができたことを指している。

しかし、①から②へのプロセスは、大阪方言と石川方言とで異なる。大阪方言では、「タンヤ→タン」「テンヤ→テン」という「ヤの脱落」というプロセスが入るが、石川方言では、「動詞との融合（および撥音の付加）」「対立の完成」が入る[2)]。両方言を比べると、石川方言のほうがより複雑なプロセスを経ていることがわかる。動詞との融合とは「アルガヤ」が「アランヤ」になるような変化だが、この変化の背景には、「ガ」の子音が鼻音であるということがある。そして、ア段とエ段の対立が完成して「-aN」と「-eN」ができることで、②の類推を起こした。

このように、上記の①と②の間に入る変化には両方言で違いがあり、その違いが②の「接辞形式」の違いにつながる。大阪方言では、過去形の「テン」をもとに非過去形の「ネン」を作ったが、石川方言では非過去形の「-aN」と「-eN」がもとになって過去形の「タン」「テン」などが作られた。このように、大阪方言と石川方言では、②のプロセスが一見逆に思えるが、石川方言では、非過去形（-aN・-eN）から過去形（タン・テン）、さらに非過去形（ガ

2) 「ヤの脱落」に関しては、石川方言でも「アランヤ→アラン」という変化があるが、これは平叙文専用の「アレン」に対して「アラン（ケ）」が疑問文専用になったためであり、「テンヤ→テン」という変化とは異なる。

ン・ゲン）という、両方の類推変化を経ている（もちろん、タン・テンから直接ガン・ゲンを作り出したわけではない）。いずれにせよ、接辞をもとに接語を作り出し、もとになった接辞も併用されているという点で大阪方言と石川方言は共通している。

以上のように、大阪方言と石川方言のノダ相当形式の変遷過程においては、上記の①②のような変化の初期段階と最終段階が共通しており、その間のプロセスが異なることがわかった。大阪方言では、「ヤの脱落」という比較的単純なプロセスを経ているのみだが、石川方言では、融合という音声的な変化とア段とエ段の対立完成という体系変化という非常に複雑な変化を遂げている。

3.2.3. 変化の背景

大阪方言と石川方言のノダ相当形式における変化には、共通点も相違点もあることが明らかになったが、その変化の要因や背景についてはどうだろうか。何度か触れてきたが、両方言では変化の起こった時期が異なる。大阪方言の「ネン」は、遅くとも明治後期の上方落語で使われている（小杉 2003）が、石川方言の「ゲン」をはじめとする新たな体系が整ったのは比較的最近のことであり、ここ数十年の間だと思われる。このような変化の時期の違いは、変化の動機の違いと関係する。第 7 章で述べたように、石川方言における一連の変化のきっかけは、若年層が準体助詞「ガ」を使わなくなったことが考えられる。かといって単に標準語化するわけではなく、伝統方言とも異なる新たな形式を作り出していったのがこの方言の大きな特徴であった。

一方、第 5 章の 7.2 節で述べたように、大阪方言における変化の要因としては、尾上（1999）が指摘している、「ネン」が文末につくと「当たりがやわらかくなる」ということが考えられる。尾上によれば、「「ネン」ということばは、相手と自分の間にある扉を開いてこちらの手の内を相手に見せるという姿勢を持っている」のであり、このような「ネン」が「垣根をはずして、うちあけてものを言う」という大阪の人が愛用する表現方法であるという。しかし、なぜそのような表現が必要とされたのだろうか。尾上の言う「相手と自分の間に壁を作るまいとする傾向」は感覚的なもので、説得力に欠ける。とはいえ、ネンやテンが使用されはじめた当時の大阪方言やそれを取り巻く社会言語学的な状況がどのようなものであったかは、本研究で扱う範囲を超えるものである。したがって、ここでは尾上の指摘を踏まえて、「ノヤ」とは異なる「当たりのやわらかい」便利な言い方として「ネン」が成立したとひとまずは考えておくことにする。

以上のことから、大阪方言と石川方言とでは、ノダ相当形式に変化が起こった時期も動機も異なることがわかる。ただし、具体的にいつから変化が始まったかは、どちらの方言でも明確にはわかっていない。大阪方言に関しては、明治期や大正期よりも古い文献にあたる必要がある。石川方言に関しては変化と浸透のスピードが速すぎて、変化の過程を実時間で描くことそのものが困難である可能性がある。いずれも本研究ではできなかったので、今後の課題としたい。

4. 大阪方言と石川方言のノダ相当形式の位置づけ

ここまで、大阪方言と石川方言を取り上げ、ノダ相当形式の体系およびその成立過程を対照してきた。本節では、そこで対照してきたことの意味づけを考えてみたい。まずは 4.1 節で、標準語も含めた日本語諸方言の中での位置づけを考え、4.2 節では第 2 章で言及した名詞化辞や形式名詞の文法化の中での位置づけを考える。

4.1. 日本語の中での位置づけ

本研究では、ノダ相当形式の変化を見るために、大阪方言と石川方言を取り上げた。第 3 章で述べたように、これらの方言では、ノダ相当形式が「準体助詞＋コピュラ」からさらに変化を起こしており、本章の 3 節で述べたように、様々な共通点と相違点がある。では、日本語諸方言の中で、ノダ相当形式に起こったこれらの変化は、どのように位置づけられるのだろうか。また、このような変化が他の方言に起こっていないのはなぜなのだろうか。本節では、そのような問題について考察する。以下、3 節で述べたことを踏まえて、大阪方言と石川方言が他の方言と何が違うのかということを明らかにする。それによって、この 2 方言を特徴づける。具体的には、体系の位置づけ（4.1.1 節）、変化の動機とプロセス（4.1.2 節）について考察する。

4.1.1. 体系の位置づけ

ノダ相当形式の体系に関して、大阪方言と石川方言は他の方言とは明らかに異なった特徴を持つ。それは、複数のノダ相当形式を持つということである。

複数のノダ相当形式を持つということで言えば、第 2 章で引用した富山県井波方言（井上 2006a,b）や宮崎方言（村田 2003）も当てはまると思われるが、これらは大阪方言・石川方言とは性質が異なる。井波方言のノダ相当形式は「ガヤ」と「ガイ（ゲー）」だが、この 2 つは「ガヤ」と「ガ」の関係だと言える。井上（2006a:181）によると、「ガイ」の「イ」は終助詞であり、標準語の「よ」に近い意味を表すという。つまり、「ガヤ」は標準語の「のだ」、「ガイ」は「のよ」に相当するのであり、「ガヤ」と「ガイ」が異なる 2 つの形式とは言えない。しかも、「ガイ」が「ガ」と「イ」に分かれず、一語化しているのであれば「ガ」とは異なる形式だと言えるだろうが、井波方言では「ガ」だけで使うこともできるため、第 3 章で簡単に記述した富山県の他の地域の方言と基本的には同じと考えられる。また、宮崎方言についても「チャ」と「ト」が 2 つの形式として挙げられているが、「チャ」は「トヤ」、すなわち「準体助詞＋コピュラ」が音変化したものであり、井波方言と同じと言える。

それに対して、大阪方言と石川方言では、準体助詞とコピュラに分けられないほど変化が進んでおり、明らかに井波方言や宮崎方言とは使用されている形式が異なっていることがわかる。

ただし、秋田県男鹿方言の「-azi」（近藤 2013）や青森県五所川原市方言の「ンズ」（田附 2006, 2013）のように、形式名詞「やつ」に由来する形式がノダ相当形式として使われてい

る方言もある。大阪方言や石川方言とは違ったかたちで複数のノダ相当形式を持つ方言であり、似て非なるものである。

このように、大阪方言と石川方言は異なったノダ相当形式を複数持っており、それを用法や機能に応じて使い分けているという点で、他の方言と異なっている。一方、標準語も含めた他の方言では、「準体助詞＋コピュラ」の構成を持った形式をもとに、コピュラや終助詞の有無、イントネーションなどによって意味を表し分けている。例えば、富山方言では「ガ。」で〈対人〉を、「ガヤ。」で〈対事〉を表している。

このことを踏まえて、井上（2006b）から以下の記述を再引用する。

(2)　「のだ」相当形式に、活用のある形式（例：井波方言「ガヤ」）と、活用のない形式（例：井波方言「ガイ」）とがある場合、活用のない「のだ」相当形式の意味は「実情説明」に特化される。（井上 2006b:153）

これを受けて、田附（2013）では青森県五所川原市方言の「ンダ」と「ンズ」にも同様のことが当てはまるとして、複数の方言を以下のようにまとめている。

表 8-4　各地方言におけるノダ相当形式の用法（田附 2013:56）

	共通語	京都市方言		井波方言		宮崎方言		五所川原市方言	
実情説明	のだ。	ネン。	ノヤ。	ガイ(ゲー)。		ト。		ンズ。	ンダ。
実情理解					ガヤ。		チャ。		

この表において、「実情説明」（本研究における〈対人〉）に特化されている「ネン」「ガイ」「ト」「ンズ」はいずれも活用しない形式で、もう一方の形式はいずれも活用する。しかし、第 6 章で記述したように、石川方言の E 群は「ゲンタ」「ゲンロ」のように活用するが、ここでいう「実情説明」に特化されており、(2) の一般化には当てはまらない。そこで、(2) を以下のように修正する。

(3)　平叙文の文末において、ノダ相当形式がコピュラなしで使用された場合、意味は「実情説明」に限定される。ただし、終助詞が後接した場合はこの限りではなく、終助詞の意味に左右されることがある。

本章の 3.1.3 節で述べたように、文末においてコピュラで終わるノダ相当形式は〈対事〉用法で使用され、コピュラのない形式は〈対人〉用法で使用されるという傾向がある。このことは大阪方言・石川方言でも同様で、「ネンヤ」「ゲンヤ」といった形式についても 3.1.3 節で言及した。(2) において「活用のない形式が実情説明に特化される」とされているのは、これと同様のことを言っているのだと考えられるが、石川方言のような事例がある以上、活用ではなく外形上コピュラを含んでいるか否かが重要であると改める必要がある。また、(2) の「活用のある形式と活用のない形式とがある場合」という文言は、上で述べたように、井波方言の「ガイ」と大阪方言の「ネン」ではその位置づけが異なるため、削除した。最後の「ただし、終助詞が後接した場合」以下の記述は、大阪方言の「ネンナ」（第 4 章 6.2.2 節）を考慮したものである。

（3）のように一般化を修正すると、「ノダ相当形式が複数ある方言」のように最初から限定するのではなく、コピュラの有無の問題に還元することで、この一般化がより多くの方言に適用できるようになる。例えば、表 8-4 の井波方言において、準体助詞「ガ」に終助詞「イ」が後接した「ガイ」を活用のない形式としてみなさなくても、コピュラの有無として処理できる。宮崎方言も同様である。他にも、山口県東周防方言（舩木 2014）や標準語にも当てはまる。

このように、コピュラのないノダ相当形式が〈対人〉に特化されるのは、〈対事〉用法が比較的新しい（幸松 2012）ことと、〈対事〉の解釈を決める要素として、「カ」や「ナ」などが存在するからであると考えられる。そもそも〈対事〉用法がなかった頃は、話し手が命題の事態を把握したことをノダ相当形式によって表す手段は、「ノダナ」や「ノカ」であり、「ナ」や「カ」の意味によるところが大きかった。そのような体系の中では、後に何も続かない「ノ」は聞き手に向けられた発話であることを表していたと考えられる。幸松（2012）の記述によると、〈対事〉の用法はおそらく「ノダナ」がもとになっており、そこから「ナ」がとれたものが〈対事〉の「ノダ」である。したがって、後に何も続かない「ノ」は〈対人〉に特化されるのである。この議論は名詞述語文におけるコピュラの有無という問題とも関わってくるが、本研究の中心的な対象からは外れるので、今後の課題としたい。

少し話を戻すと、(3) のように一般化することで、本研究で取り上げた大阪方言と石川方言のノダ相当形式が日本語諸方言から見ても非常に特徴的であるということが際立つ。これまで表 8-4 のように各地方言のノダ相当形式が対照されてきたが、井波方言の「ガイ」や宮崎方言の「ト」は、大阪方言の「ネン」や石川方言の「ゲン」は明らかに形式的特徴や出自が異なる。「ガイ」や「ト」は終助詞やコピュラの問題に還元できるが、「ネン」や「ゲン」はそれ以上の変化を経たものである。

以上、ノダ相当形式の体系に関して、大阪方言と石川方言が他の方言とは異なるということを示した。具体的には、複数のノダ相当形式を持つと言えるのはこの 2 方言だけで、井波方言や宮崎方言などはその他の方言と同様で、「準体助詞＋コピュラ」をもとにコピュラや終助詞の有無、イントネーションなどによって意味を表し分けているに過ぎないということを指摘した。また、先行研究で指摘されていた、ノダ相当形式と意味の一般化を修正し、やはり大阪方言と石川方言は諸方言の中でも変化を先に進めている非常に特徴的な事例であるということを改めて述べた。このような事象を記述したことにより、本研究は名詞述語文やコピュラの研究にも新たな知見を提供できると考えられる。

4.1.2. 変化の動機とプロセス

前節では、大阪方言と石川方言のノダ相当形式の体系が他の方言とは明らかに異なっているということを示した。では、なぜこの 2 方言だけそのような特殊な体系を持っているのだろうか。本節ではその理由を、変化を起こすに至る社会言語学的な動機と、具体的に起こった変化のプロセスに求めてみたい。

まず、社会言語学的な動機について検討する。3.2.3 節で述べたように、大阪方言では「相手に自分の手の内を開いて見せる」機能を持つ形式が必要とされたこと、石川方言では若年層が準体助詞「ガ」を使わなくなったことが変化の動機として考えられる。では、他の方言ではこのような変化の動機がなかったのだろうか。「相手に自分の手の内を開いて見せる」云々に関しては言語行動や談話論の問題に踏み込むため本研究では扱えないが、同様の欲求はあったはずである。また、若年層が伝統方言を使わなくなるというのは、石川方言だけでなくどの方言でも起こっていることである。にもかかわらず、大阪方言と石川方言のみでノダ相当形式に大きな変化が起こっているのはなぜだろうか。

その答えの 1 つとして、これらの社会言語学的な動機は変化の必要条件ではないということが考えられる。同じような動機があったとしても、それがどのような結果につながるかは方言によって異なる。「のだ」よりも聞き手志向性の強い形式が必要ならば、井波方言のように準体助詞に終助詞を付加することでその目的を果たすという方法もある。〈対人〉と〈対事〉の区別をしたければ、コピュラの有無で区別したり、秋田や青森の方言のように別の形式名詞を使ったりすることで解決できる。また、若年層が伝統方言形式を使わなくなったら、多くの場合は標準語形に取って代わられる。もちろん、大阪方言や石川方言の変化において、社会言語学的な動機が無関係であるというわけではない。既に述べたように、方言接触の観点から分析する必要もある。

とはいえ、大阪方言や石川方言のような変化を起こすには、言語内的な条件があると考えられる。それはおそらく、類推による変化ではないだろうか。3.2.2 節で指摘したように、大阪方言と石川方言とでは、変化の初期段階と最終段階のプロセスが共通している。それを以下に再掲する。

① 変化の初期段階で母音変化を起こす
② 接辞形式からの類推で新たな形式ができる

このうち、①はいわば変化の準備段階であり、環境さえ整えば他の方言でも起こりうる。例えば、井波方言では「ガイ」が「ゲー」と発音されることがあるし、京都方言の「ニャ」なども同様だろう。一方、②は環境が整っただけでは起こらない。既に言及したように、富山方言では、〈対人〉用法の場合はコピュラをつけずに「ガ。」で言い終わるか、後に終助詞を続ける。これによって〈対事〉と〈対人〉の区別はできており、疑問文は「ケ」の付加や上昇イントネーションで表すことができる。このように、他の方言においては、終助詞との組み合わせやコピュラの有無によって用法を区別することはあるが、そこに類推による変化というプロセスは一切介在しない。

このように考えると、大阪方言や石川方言のように、ノダ相当形式に大きな変化を起こす要因として考えられる中で最も有力なのは、母音変化を経た後に類推による変化をすることであると言える。しかも、接辞形式からの類推という条件がさらにつく。もともと接語だったものが接辞になり、それがさらに別の形で接語になるという目まぐるしい変化も条件の 1 つとなるだろう。つまり、本研究で取り上げた大阪方言と石川方言のノダ相当形式における一連の変化は、日本語の中でもそれほど珍しいということである。とはいえ、このよう

な複雑な変化を受容するには、話者やそれを取り巻く環境の側にそれなりの要因があることもまた事実だと思われる。それが具体的に何なのかは今後の研究で明らかにしていきたい。

では、本研究で取り上げた大阪方言や石川方言の他に、同様の変化を起こす方言が今後現れるだろうか。確かなことは言えないが、十分あり得ることだと考えられる。上記の①の母音変化は井波方言のように他の方言でも既に起こっているし、②が起こるきっかけは様々だろう。他にも、②が起こらなくても、例えば井波方言において「ガイ」のバリエーションである「ゲー」が終助詞となって新たな意味を獲得するといった変化の可能性もある[3)]。

また、石川方言の新形式が、伝統方言を使わなくなった若年層が生み出した新たな方言であることを考えると、他の方言においてもこれから若年層が新たな変化を起こすことが十分に予想される。ただし、内的な変化だけではなく、方言接触によって広がることもまたあり得る。例えば、筆者が調査した富山県若年層方言では、ほとんど全員が「ガ」を使用していたが、石川県に隣接する氷見市出身の話者は、「ゲン」などは使わないものの、「テン」は使うと答えた。これが地理的な要因によるものか、石川方言話者との接触の結果なのか、それとも自律的な変化の萌芽なのかは現時点では判断できないが、いずれにせよ富山県でもノダ相当形式の変化が起こる兆候はあるということである。同様のことは、近畿地方でも言える。大阪で成立した「ネン」「テン」は京都などの隣接地域に広がっているし、和歌山では自律的な変化が起こっている。

以上、本節では、大阪方言と石川方言のノダ相当形式が変化した動機とプロセスを、他の方言と対比しながら考察した。社会言語学的な動機は本研究ではほとんど明らかにできなかったが、大阪方言と石川方言にあって他の方言にはない変化のプロセスは、母音変化を経た後の類推による変化だということが明らかになった。このことがノダ相当形式のさらなる変化の条件として適切かどうかを明らかにするには、他の方言のノダ相当形式にも変化が起こる必要がある。大阪や石川との接触や伝播も今後観察していきたい。

4.2. 言語変化の位置づけ

前節では、大阪方言と石川方言のノダ相当形式およびその変化のあり方を、日本語諸方言の中に位置づけた。本節では、日本語だけでなく、他言語も視野に入れて、この変化を特徴づけてみる。具体的には、第 2 章で紹介した、名詞化辞や形式名詞の文法化である。そこでも述べたように、アジアの諸言語、特にチベット・ビルマ諸語においては、名詞化の機能を持つ形態素が、属格や関係節のマーカーとしても機能し、言語によってはある種のモダリティ形式としても使用されることがある。

3) そもそも、文末の「ガ」と「ト」と「ノ」がどれも同じ意味なのかということに関する議論が必要ではある。本研究では、そのような意味の違いよりも、目に見えやすい違いを取り上げたことになる。

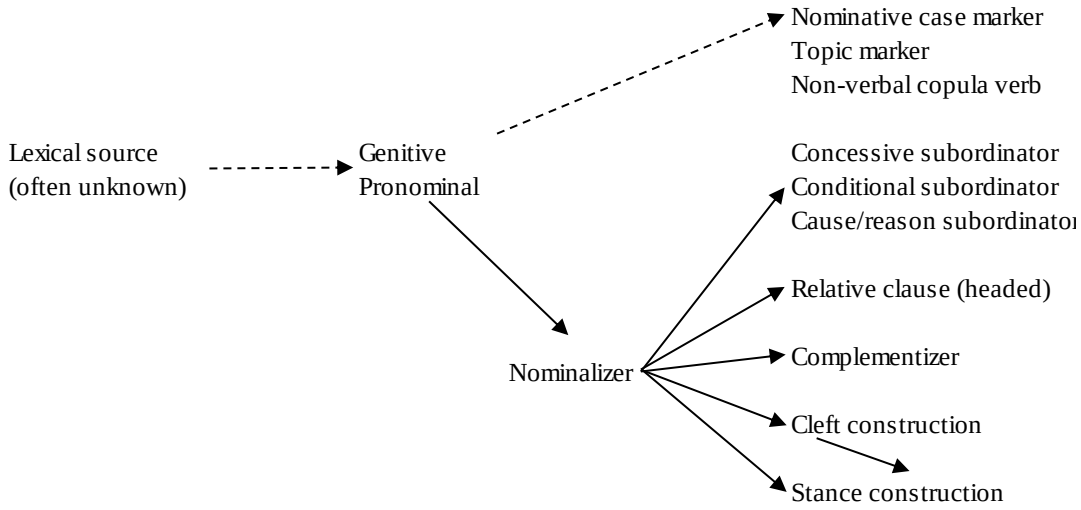


図 8-4　東アジアの諸言語における名詞化辞の文法化ルート（Yap & Matthews 2008:328）

図 8-4 は、日本語を含む東アジアの諸言語において見られる名詞化辞の多機能性を文法化としてとらえ、その文法化のルートを描いたものである。あくまでモデルのようなものであり、すべての言語にこのルートが当てはまるというわけではない。本研究で取り上げているノダ相当形式というのは、この図の下から 2 つ Cleft construction と Stance construction に当たり、大阪方言や石川方言のような方言は、ここからさらに先の変化を遂げたものとして位置づけられる。

上記の Stance construction において使用されている名詞化辞の例としては、広東語の ge3（Sio 2011）、マレー語の punya（Yap et al 2004）、マガル語の-o（Grunow-Hårsta 2009）などを第 2 章で引用した。こういった先行研究では、同じ形式が複数の機能を果たしているという点に注目しているため、形態的なバリエーションなどを考慮しているものは少ない。しかし、以下に示すように、マレー語の punya においては、スタンス用法のときのみ mya や mia という形をとるという。

（4）　*Jaga-jaga　kau　punya　barang*
look.after　2SG GEN　thing(s)
‘Look after your stuff.’

（5）　*Jangan　sentuh aku　punya*
do.not　touch　1SG POSS.PN
‘Don’t touch mine (< ‘my one’).’

（6）　*Ibu　(pasti)　akan　marah　punya/mya/mia*
mother　certainly FUT　be.angry STANCE
‘Mother will (surely) get upset (I can assure you)’　(Yap 2011:645)

（4）から（6）はいずれもマレー語の例である。（4）では punya が属格助詞として使用されており、（5）では代名詞として使用されている。一方、（6）ではスタンスマーカーとして機能しており、‘trust me’ or ‘I’m telling you’ type assertion になる（Yap 2011:645）という。この

場合に限って、mya や mia という形をとることがある。このようなスタンスマーカーの punya は、次の（7）のような補足節マーカーから派生したとされている。

（7） *Aku pasti* [*dia akan datang punya*]
1SG certain 3SG FUT come NMZ/SFP
'I'm sure that he will come.'

（8） *Dia akan dating punya*
3SG FUT come SFP
'He will come (I assure you).' (Yap 2011:647)

（7）の punya は、[ ] で示された節が補足節であることをマークする名詞化辞だが、ここから主節の aku pasti が省略されたのが（8）である。補足節だったものが主節になり、punya が終助詞と解釈されていることがわかる。このようにして終助詞化した punya が、mya や mia といった短い形になったのである。このように、終助詞化する中で形を変えていくというのは大阪方言のノダ相当形式に起こった変化と類似している。マレー語の punya・mya・mi の 3 つの間に意味の違いがあるかどうかは先行研究からはわからないが、あるとすれば、大阪方言とますます共通してくる。

一方、石川方言のノダ相当形式に起こった変化は、大阪方言のように終助詞化と言えるものではなく、平叙文と疑問文を区別するのに新しい形式を作り出したというものである。この変化はどのように位置づけられるだろうか。細かいプロセスに違いはあるだろうが、名詞化された述語が再主節化されて定動詞になったり、名詞化辞がテンス・アスペクト・ムードの標識になったりするという変化（DeLancey 2011 など）に近いものとして位置づけられるのではないだろうか。石川方言において、ガンなどの A 群とゲンなどの E 群の違いは問いかけ（疑問文）か述べ立て（平叙文）かというものであり、少々乱暴な言い方ではあるが、ムードの標示と考えることもできる。また、「スレン」と「シテン」の対立は非過去・過去というテンスの対立であり、これらはテンスの標示をしていると言うこともできる。ただ、これらの形式は単純にムードやテンスをマークしているのではなく、あくまで「ノダ」の表す意味に付随しているものである。したがって、方向性は似ているものの、石川方言のノダ相当形式の変化は、定動詞化とは少し異なる。

このように、本研究で取り上げた大阪方言や石川方言のノダ相当形式の変化は、アジアの諸言語における名詞化辞の文法化と共通する部分も少なくないが、同列にとらえるのも難しい。大阪方言の場合はマレー語の punya に似ているが、punya が mya や mia になるのに大阪方言のテンやネンのような変化を経ているとは考えにくいし、同類の変化とひとくくりにしてしまうことはできない。また、石川方言の場合は名詞化辞から TAM マーカーへの変化に似ているが、テンスやムードといった文法的な意味だけを表すものではない。

では、大阪方言と石川方言のノダ相当形式は、こういった研究の中でどのように位置づけられるだろうか。おそらく、図 8-4 のような、1 つの形式が多機能化するというアプローチではとらえられないだろう。本研究で扱った 2 つの方言のノダ相当形式は、この図の中に収まらないほど大きく変化してきたからである。これほどの変化は先行研究でもほとんど見

られないため、その変化の事例を詳細に記述したという点に、本研究の意義がある。また、このような珍しい事象を記述できた背景には、日本語に「ノダ」という表現が発達しているということがある。日本語は他の言語に比べて「ノダ」がより広い文脈で使用されると言われている（野田 1997、大竹 2009）が、そのような「ノダ」が発達した日本語は、名詞化辞の文法化に関する研究の中でも中心的に扱われているとは言えないスタンスマーカー化の問題に関して、大きく貢献できると考えられる。その日本語の中でも、最先端の変化を遂げている大阪方言と石川方言は、諸言語の名詞化辞や日本語のノダ相当形式に今後起こりうる変化を予測する手がかりを提供できると言える。ただし、まだ事例が 2 つなので、予測と言うほど確実なことは言えないが、今後の変化を観察・記述する指針にはなると思われる。

以上、本研究で取り上げた大阪方言や石川方言のノダ相当形式は、日本語の中だけでなく、アジアの諸言語においても非常に珍しいケースであることを述べた。その共時態と成立過程を詳細に記述した本研究は、一般言語学や言語類型論にも貢献しうると言える。

5. まとめ

本章では、第Ⅱ部と第Ⅲ部の内容を踏まえて、大阪方言と石川方言のノダ相当形式とその成立過程を対照した。明らかにしたことの要点は以下のとおりである。

(a) どちらも〈対人〉用法に特化した形式を発達させているが、体系のあり方には両方言で違いがある。大阪方言は平叙文の中で〈対人〉に特化したネンなどを発達させているのに対して、石川方言では〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別することに力点を置いている。（3.1.1 節）

(b) 新形式のもとになった伝統形式を使用するか否かに違いがある。大阪方言では、ネンやネヤなどの新形式とともに伝統形式ンヤも使用するが、石川方言では伝統形式ガヤが使われなくなっている。（3.1.2 節）

(c) 個々の形式にも方言間の異同がある。例えば、どちらの方言にも過去マーカーを含んだ「テン」という形式が存在し、テンスの対立において非対称的な体系を形成している（3.1.3.1 節）、「ネンヤ」「ゲンヤ」など、コピュラの「ヤ」を見える形で持っている形式は〈対事〉用法で使用される（3.1.3.3 節）といった共通点もあるが、大阪方言のネンと石川方言のゲンは様々な面で似ているが、ネンが持つ談話機能の一部をゲンは持っていない（3.1.3.2 節）といった相違点もある。

(d) 体系変化の方向性に違いがある。大阪方言における変化は、ンヤがコピュラの性質を失ってネヤ、コピュラそのものを切り離してネンというように、ンヤがネンに向かって徐々に性質を変えていくという一方向的な文法化としてとらえられる。一方、石川方言における変化は、伝統形式を体系から追い出したところに A 群と E 群で疑問文と平叙文を区別するという新たなルールを導入したという点に特徴があり、一方向的な文法化ととらえるのは難しい。（3.2.1 節）

(e) 具体的な変化のプロセスとしては、母音変化を起こすことと、接辞形式からの類推で新たな形式ができることの 2 点が両方言に共通している。（3.2.2 節）

そして、以上を踏まえて、大阪方言と石川方言のノダ相当形式を日本語や他言語の中に位置づけた。明らかにしたことの要点は以下のとおり。

(f) 大阪方言と石川方言は、形式や機能が異なる複数のノダ相当形式を使用するという点で、他の日本語諸方言とは異なっており、他の方言に先駆けて最先端の変化を遂げた方言と位置づけられる。しかし、機能とコピュラの分布に関わる規則には共通性があり、「平叙文の文末において、ノダ相当形式がコピュラなしで使用された場合、意味は「実情説明」に限定される」と一般化することができる。(4.1.1 節)

(g) 上記の (e) にまとめた変化のプロセスは、大阪方言と石川方言には起こっているが、他の方言には起こっていない。このことから、特に類推による変化は、ノダ相当形式のさらなる変化の条件となっていると考えられる。(4.1.2 節)

(h) 日本語を含めてアジアの諸言語では、名詞化の機能を持つ形式が文法化して様々な機能を持つようになっていることが多くの研究で指摘され、そのルートもかなり明らかになってきたが、本研究で取り上げた大阪方言と石川方言のノダ相当形式は、議論されているルートのさらに先にある変化であると言える。この 2 つの方言の事例は、アジアの言語における名詞化辞の文法化研究に新たな知見を提供すると言える。(4.2 節)

以上にまとめたように、本研究で取り上げた大阪方言と石川方言は、ノダ相当形式の変化という点では日本語の中でも他言語を含めた中でも珍しく、今後の変化の 1 つの指針となるのではないだろうか。

本論文の最後となる次章では、本研究で明らかになったことをまとめ、今後の研究の展望を述べる。

第9章　まとめと展望

1.　はじめに

本論文では、大阪方言と石川方言のノダ相当形式を取り上げ、そのバリエーションの体系と変遷過程を明らかにしてきた。そして、それらを対照させることで、ノダ相当形式の変化というものがどのような条件のもとで、どのような過程を経て、どのように変化するかを明らかにしてきた。

本章では、本論文の終章として、本論文で明らかになったことをまとめ、今後の研究の展望を述べる。

2.　本研究で明らかになったこと

2.1.　大阪方言

第 4 章では、大阪方言のノダ相当形式の記述を行い、以下のことを明らかにした。

（4-1）形式面については、ンヤが最も「準体助詞＋コピュラ」の構成を保っており、ネヤ・ネンヤはその構成を少し失い、ネンになるとその構成は全くなくなり、終助詞のようになる。

（4-2）意味面については、ンヤ・ネヤ・ネンヤとネンで違いがある。ネンは基本的に〈対人〉用法に限定されており、ンヤなどにはない対人的な機能も持つ。一方、ンヤ・ネヤ・ネンヤは〈対事〉用法で使えるが、〈対人〉用法ではいつでも使えるというわけではない。

（4-3）大阪方言にはノダ相当形式の種類が多いが、準体助詞と同じ形式が割り当てられているものは少なく、その現れとして、「ノヤ」や「ノンヤ」があまり使われないといったことがある。

大阪方言のノダ相当形式は、ンヤ→ネヤ・ネンヤ→ネンの順で次第に終助詞化していく様子がうかがえる。しかし、本研究で考えた変遷過程は、これとは別のものだった。

第 5 章では、近畿方言のノダ相当形式、特にネンとテンがどのような過程を経て成立したかを明らかにした。要点は以下のとおりである。

（5-1）ネンとテンの使用には地域差があり、ネンは使わないがテンは使うという地域がある。

（5-2）このことから、ネンとテンはそれぞれ別の要因で成立したと考えられる。

（5-3）テンはタンヤからの母音変化とヤの脱落によって成立し、ネンはノヤが変化してできたネヤがテンから類推を受けたことにより成立した。

（5-4）ネンヤは、ネンよりも後にできたと考えられる。

（5-5）このように考えることで、大阪方言においてネンが過去形に後接できず、意味的にテン＝タ＋ネンとなっている非対称的な現在の体系への説明になりうる。

また、第 5 章で明らかにしたネン・テン成立過程を以下に図示する。

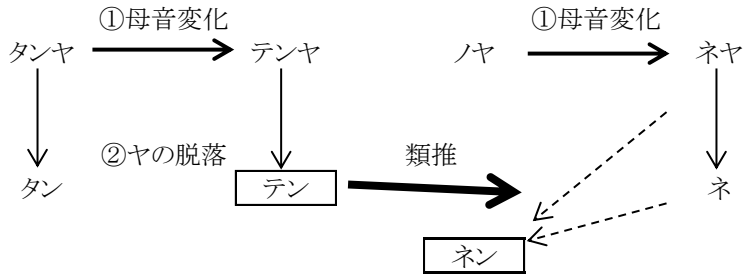


図 9-1　ネンとテンの成立過程（図 5-1 再掲）

ネンよりもテンが先に成立し、そこからの類推でネンができたことが示されている。第 4 章のところで述べたように、現在の体系を見るとンヤ→ネヤ→ネンという過程が想定できるが、実際はこのような複雑な過程をたどってきたと推察される。また、今後の変化として、ネンが過去形に後接した「タネン」がどのように広がっていくかという点に注目したい。

2.2.　石川方言

次に、石川方言のノダ相当形式を記述した第 6 章で明らかにしたことをまとめる。

（6-1）〈対人〉用法においては、接続する述語の種類とテンスによって使用する形式が異なるが、どのような場合でも平叙文の形式（ゲン・-eN・ネン・テン）と疑問文の形式（ガン・-aN・ナン・タン）があり、そのどちらかを選ぶようになっている。

（6-2）〈対事〉用法は〈対人〉用法に比べて変化が進んでおらず、地方共通語の「ンヤ」を使うか、〈対人〉用法の形式をもとに作った形式を使うしかない。このように、当方言のノダ相当形式においては、〈対人〉用法の中で先行して変化が起こっている。

（6-3）当方言のノダ相当形式の体系は、〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別することに力点を置いた体系であると言える。伝統形式である「ガヤ」からこれほどまでに変化した要因の 1 つとして、石川県若年層方言話者が準体助詞「ガ」をほとんど使わないということが考えられる。

ここで記述したノダ相当形式は、ここ数十年の間に若年層を中心に使用されるようになった形式であり、多くの形式を持つが、その体系は非常に整然としている。この記述は新田（2004）で既に指摘されていることを含むが、形式の位置づけや新田が記述していない形式の追加など、新田の記述を引き継ぎつつも更新する形になっている。

第 7 章では、石川方言のノダ相当形式の変遷過程を明らかにした。伝統形式ガヤがどのような変化を遂げて現在の形になったのかを、談話資料や昔話資料をもとに明らかにした。要点は以下のとおりである。

（7-1）ガン・ゲンから-aN・-eN ができたのではなく、動詞非過去形と「ガヤ」「ゲ」との融合形からできた-aN・-eN のほうが先にあり、動詞の形を復元するためにガン・ゲンができたのである。

（7-2）-aN・-eN のア段とエ段の違いという対立が成立したことによりタン・テン、ナン・ネンといった形式が次々にできていった。

（7-3）以上のように考えることで、ガン・ゲンが過去形に接続できないのはなぜか、A 群と E 群の機能分担はいかにしてできたかといった先行研究が説明できなかった問題を解決することができる。

以上を図示すると次のようになる。

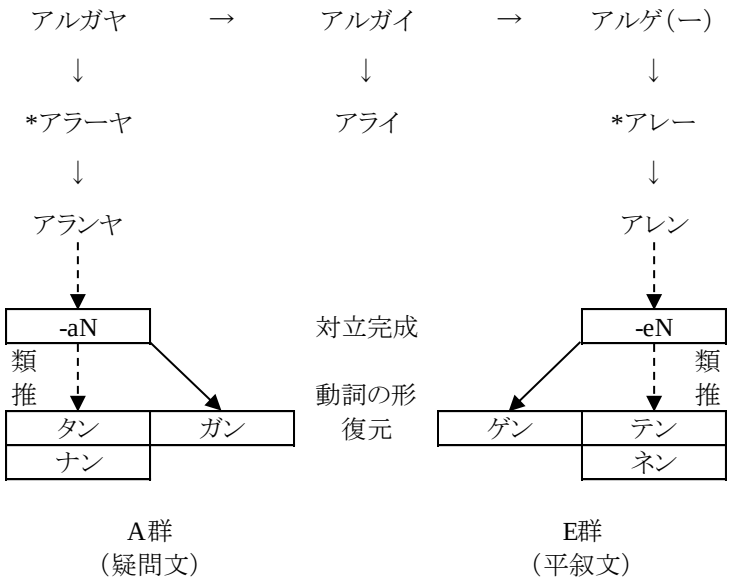


図 9-2　石川方言におけるノダ相当形式の変遷過程（図 7-6 再掲）

この図からは、A 群と E 群の対立ができたことによってバリエーションが増えたことがわかる。そして、一連の変化の位置づけと要因について、以下のことを指摘した。

（7-4）先行研究で指摘されていた、意味の漂白化や脱範疇化といった文法化の特徴は積極的には見いだせず、単純に文法化と言うことはできない。しかし、A 群と E 群の対立を原動力として、短期間のうちに非常に大きな変化を起こしていることは、注目に値する。

（7-5）石川県のノダ相当形式にこれほどの変化が起こったのは、若年層が準体助詞「ガ」を使わなくなったことや、ガ行子音が鼻音ではなく破裂音になったことが要因として考えられる。また、関西との言語接触などの社会言語学的な要因も考えられ、今後明らかにしていくべき問題である。

この第Ⅲ部では、石川方言におけるノダ相当形式の新しい体系を詳細に記述するとともに、そこに至るまでの変化のメカニズムを明らかにすることができた。

2.3. 本研究の結論

最後に、第 8 章で明らかにしたことをまとめる。第 8 章では、第 7 章までで明らかにしたことのまとめとして、大阪方言と石川方言のノダ相当形式を対照し、以下のことを明らかにした。

（8-1）どちらも〈対人〉用法に特化した形式を発達させているが、体系のあり方には両方言で違いがある。大阪方言は平叙文の中で〈対人〉に特化したネンなどを発達させているのに対して、石川方言では〈対人〉用法の中で平叙文と疑問文を区別することに力点を置いている。

（8-2）新形式のもとになった伝統形式を使用するか否かに違いがある。大阪方言ではネンやネヤなどの新形式とともに伝統形式ンヤも使用するが、石川方言では伝統形式ガヤが使われなくなっている。

（8-3）個々の形式にも方言間の異同がある。例えば、どちらの方言にも過去マーカーを含んだ「テン」という形式が存在し、テンスの対立において非対称的な体系を形成している、「ネンヤ」「ゲンヤ」など、コピュラの「ヤ」を見える形で持っている形式は〈対事〉用法で使用されるといった共通点もあるが、大阪方言のネンと石川方言のゲンは様々な面で似ているが、ネンが持つ談話機能の一部をゲンは持っていないといった相違点もある。

（8-4）体系変化の方向性に違いある。大阪方言における変化は、ンヤがコピュラの性質を失ってネヤ、コピュラそのものを切り離してネンというように、ンヤがネンに向かって徐々に性質を変えていくという一方向的な文法化としてとらえられる。一方、石川方言における変化は、伝統形式を体系から追い出したところに A 群と E 群で疑問文と平叙文を区別するという新たなルールを導入したという点に特徴があり、一方向的な文法化ととらえるのは難しい。

（8-5）具体的な変化のプロセスとしては、母音変化を起こすことと、接辞形式からの類推で新たな形式ができることの 2 点が両方言に共通している。

以上を踏まえて、大阪方言と石川方言のノダ相当形式を日本語や他言語の中に位置づけた。明らかにしたことの要点は以下のとおりである。

（8-6）大阪方言と石川方言は、形式や機能が異なる複数のノダ相当形式を使用するという点で、他の日本語諸方言とは異なっており、他の方言に先駆けて最先端の変化を遂げた方言と位置づけられる。しかし、機能とコピュラの分布に関わる規則には共通性があり、「平叙文の文末において、ノダ相当形式がコピュラなしで使用された場合、意味は「実情説明」に限定される」と一般化することができる。

（8-7）上記の（8-5）にまとめた変化のプロセスは、大阪方言と石川方言には起こっているが、他の方言には起こっていない。このことから、特に類推による変化は、ノダ相当形式のさらなる変化の条件となっていると考えられる。

(8-8) 日本語を含めてアジアの諸言語では、名詞化の機能を持つ形式が文法化して様々な機能を持つようになっていることが多くの研究で指摘され、そのルートもかなり明らかになってきたが、本研究で取り上げた大阪方言と石川方言のノダ相当形式は、議論されているルートのさらに先にある変化であると言える。この 2 つの方言の事例は、アジアの言語における名詞化辞の文法化研究に新たな知見を提供すると言える。

以上のように列挙すると、非常に多くのことが明らかになったように思われる。しかし、それは本研究で扱ったような変化が珍しく、他の方言や言語に見られない事象であるからだろう。したがって、事例が少ないため十分な一般化や類型化などはかなわなかったが、以上にまとめてきたような言語事実の記述そのものが本研究の意義の 1 つであると言える。本研究のまとめである本章で、第 4 章から第 7 章で明らかにしたことを改めて述べたのは、これらの記述が単なる個別論の 1 つではなく、記述そのものが重要であるという意識に基づいてのことである。そして、上記の（8-8）に示したように、本研究で記述した言語事象は、今後の変化を予想する指針になるとともに、特に他言語において、見落とされてきた変化に目を向ける契機となるのではないだろうか。

以上、本研究で明らかになったことをまとめた。これを踏まえて、最後に今後の研究の展望を述べる。

3. 今後の展望

本研究で明らかにしたことは前節にまとめたが、扱いきれなかったことや、研究の中で見つかった発展的な課題もある。そこで、本論文の最後に、今後の展望について簡単に述べる。具体的には、以下の 3 点である。

① 社会言語学的な研究
② ノダ相当形式の意味に踏み込んだ研究
③ 名詞述語文や形式名詞との対照

以下、それぞれ簡単に述べる。

3.1. 社会言語学的な研究

これまでに何度も言及してきたように、本研究では社会言語学的な視点が不足していた。特に、石川方言のノダ相当形式はここ数十年で起こった変化であり、変化がどこから始まり、どのように広がっていったかという問題は、いまだ解決できていない。現在石川県に住んでいる人は、60 代くらいまでは既に新しい体系になっているが、新しい体系を受け入れる前に石川県を離れた人であれば、まだ新しい体系になりきっていない可能性がある。そういった人を対象に社会言語学的な調査を行い、変化の言語外的なメカニズムを明らかにしたい。

また、石川方言のノダ相当形式に起こった変化は、伝統形式を使わなくなった若年層が標準語とも違う新しい形式を作り出すという創造的な言語変化である。若年層の言語変化のあり方を明らかにした先行研究としては、関西方言を取り上げた高木（2006）が有名だが、

石川方言ではどうだろうか。石川県の若年層話者が話すことばがどのようなもので、どのような変化が起こっているかを、ノダ相当形式だけでなく他の言語項目についても明らかにしたい。そして、近隣の方言との接触による変化も観察していきたい。

3.2. ノダ相当形式の意味に踏み込んだ研究

本研究では、ノダ相当形式の形式面と意味面の両方の特徴を扱ってきたが、どちらかというと形式面を大きく取り上げてきた。これは、形式面に大きな特徴がある事象を扱ってきたためだが、それを差し引いても、意味面に関しては課題が残されている。例えば、本研究ではどの方言でも「ノダ相当形式」として扱ってきたが、果たして「ンヤ」と「ガヤ」が全く同じ意味を表しているのだろうか。大阪方言のネンと石川方言のゲンに関しては、上記の（8-3）で少し検討したが、それもごく簡単な分析である。

そして、ノダ相当形式の意味の考察に関連することとして、終助詞と組み合わさった場合の意味ということがある。大阪方言に関して少し考察したが、石川方言ではほとんど触れられなかった。こういった問題を扱うには、母方言でない方言の意味をどのようにとらえ、記述するかという大きな問題を解決する必要がある。そのため、時間はかかるだろうが、今後少しずつ明らかにしていきたい。

3.3. 名詞述語文や形式名詞との対照

これは発展的な課題である。第 2 章で触れたように、準体助詞からノダへという変化は、形式名詞の文法化との共通点がある。また、ノダ相当形式の用法を記述するに当たって、コピュラの分布が問題になる方言も少なくない。この問題は、白岩・平塚（2009）が示したようなコピュラの地域差や、「文末名詞文」（新屋 1989）や「人魚構文」（角田 2011）と呼ばれる表現とも関係する。本研究で明らかにしたノダ相当形式の発展を、名詞を中心とするこれらの表現と対照させることで、その変化のあり方の一般化・類型化をさらに進めることができると考えられる。

4. おわりに

本章では、本研究で明らかになったことをまとめ、今後の研究の展望を述べた。本論文で扱いきれなかったことや、もっと調査したかったことは他にもあるが、いずれも今後の課題としたい。

謝辞

本論文をなすにあたっては、多くの方々にご協力いただいた。

まずは何よりも調査にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げたい。複雑で時間のかかる調査にもかかわらず、長時間つきあってくださり、ご家族やお友達を紹介していただけないでしょうかという図々しいお願いにも快く応じてくださった。このような方々との出会いは、研究を進める中で得た何物にも代えがたい財産である。

特に、石川・富山方言の調査においては、本当に多くの方々にご協力いただいた。おひとりずつお名前を挙げることはしないが、富山大学の中井精一先生と富山大学の学生さんたちには、調査へのご協力から話者の紹介に至るまで、本当にお世話になった。また、金沢大学の新田哲夫先生や、九州大学の平子達也氏にも話者を紹介していただいた。ここにお礼申し上げる。

また、学会や研究会などで筆者の研究に興味を持ってくださり、数々の有益なご意見をくださった方々にも、厚くお礼申し上げる。もちろん、本論文に関するすべての責任は筆者にある。

そして、研究室の仲間や先生方にも本当にお世話になった。何よりも、渋谷勝己先生には学部時代に言語研究の楽しさを教えていただいてから、この博士論文提出まで、お世話になりっぱなしだった。他にもお一人ずつに感謝したいことはいくらでもあるのだが、ここに長々と書くのもどうかと思うので、具体的なお礼はまた別の形でさせていただきたいと思う。

他にも、まだまだお世話になった人はいて、お礼申し上げたいところだが、きりがないので、ここは本論文を研究成果の報告とすることで、少しでも恩返しになればと思う。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・特別研究員奨励費（研究課題「日本語諸方言における準体助詞の対照研究」）の助成を受けている。

用例出典

〈談話資料〉

加藤和夫（1998）「石川県小松市符津町方言の自然談話」『小松市立博物館研究紀要』36, pp.1-50, 小松市立博物館.

国立国語研究所編（1968）『方言録音資料シリーズ 9　石川県羽咋郡志雄町荻市方言』

国立国語研究所編（2001-2008）『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成』国書刊行会.

大阪府大阪市・京都府京都市・兵庫県相生市・奈良県五條市・和歌山県田辺市・滋賀県甲賀郡甲賀町・石川県羽咋郡押水町

日本放送協会編（1999）『全国方言資料』NHK 出版.

大阪府方言収集緊急調査（文化庁）　大阪府八尾市山畑（未公開データ）

〈昔話資料〉

石川児童文化協会編(2005)『読みがたり　石川県のむかし話』日本標準.

大阪府小学校国語科教育研究会編（2005）『読みがたり　大阪のむかし話』日本標準.

岡山県小学校国語教育研究会編（2004）『読みがたり　岡山のむかし話』日本標準.

香川県国語教育研究会編（2005）『読みがたり　香川のむかし話』日本標準.

加能昔話研究会編（1979）『日本の昔話 26　加賀の昔話』日本放送出版協会.

京都のむかし話研究会編（2005）『読みがたり　京都のむかし話』日本標準.

滋賀県小学校教育研究会国語部会編（2004）『読みがたり　滋賀のむかし話』日本標準.

奈良のむかし話研究会編（2004）『読みがたり　奈良のむかし話』日本標準.

新田露子（1996）『七尾地方の方言集』

兵庫県小学校国語教育連盟編（2004）『読みがたり　兵庫のむかし話』日本標準.

和歌山県小学校教育研究会国語部会（2004）『読みがたり　和歌山のむかし話』日本標準.

参考文献

青木博史（2005）「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3，pp.47-60，日本語学会.

青木博史（2011）「述部における名詞節の構造と変化」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』pp.175-194，くろしお出版.

愛宕八郎康隆（1976）「肥前長崎地方の準体助詞『ト』について」『長崎大学教育学部 人文科学研究報告』25，pp.69-79.

安達太郎（1999）『日本語研究叢書 11　日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版.

石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店.

井島正博（2010）「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』6，pp.75-117，東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室.

井島正博（2011）「主節における非文末ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』7，pp.70-103，東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室.

井上優（2006a）「富山県井波方言の『ガヤ』について」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2 文論編』pp.179-192，くろしお出版.

井上優（2006b）「第 4 章　モダリティ」佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂『シリーズ方言学 2　方言の文法』pp.137-178，岩波書店.

今井喜昭（1993）「準体助詞か形式名詞か―“ノ”に関する論理的整合性をもとめて―」『日語学習与研究』73，pp.1-6，対外経済貿易大学.

岩井隆盛（1983）「中部方言の概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 6　中部地方の方言』pp.5-29，国書刊行会.

上野智子（1992）「高知市および周辺域方言の準体助詞『ガ』」『国語と教育』17，pp.9-16，長崎大学国語国文学会.

大竹芳夫（2009）『「の（だ）」に対応する英語の構文』くろしお出版.

大西拓一郎（2013）「用言準体法の分布と形式」熊谷康雄編『国立国語研究所共同研究報告 12-05　大規模データの多角的分析　成果報告書―言語地図と方言談話資料―』pp.59-68.

大野小百合（1983）「現代方言における連体格助詞と準体助詞」『日本学報』2，pp.27-66，大阪大学文学部日本学研究室.

大野小百合（1984）「現代日本語方言における種々の準体助詞の成立について―現代方言における連体格助詞と準体助詞＜その 2＞―」『日本学報』3，pp.63-84，大阪大学文学部日本学研究室.

大橋勝男（1988）「現代方言に見る準体助詞―特に新潟県新津市古津方言に着目して―」此島正年博士喜寿記念論文集刊行会編『国語語彙語法論叢』pp.595-617，桜楓社.

小笠原千絵（2014）「若者の会話に見られる『ネン』―『タネン』の出現―」『近畿大学日本語・日本文学』16，pp.157-177.

奥田靖雄（1990）「説明（その 1）―のだ、のである、のです―」言語学研究会編『ことばの

科学 4』pp.173-216，むぎ書房.
奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論―名詞句の構造―』大修館書店.
尾上圭介（1999）『大阪ことば学』創元社.
勝村聰子（1991）「『やんか』について―その表現機能と『ではないか』との対比―」『地域言語』3，pp.19-31，天理・地域言語研究会.
加藤和夫（2007）『〈方言学習教材シリーズ 1〉みんなで学ぼう！金沢ことば』科研費報告書.
加藤和夫（2014）「列島縦断！　日本全国イチオシ方言　石川県」『日本語学』33-8，pp.92-93，明治書院.
加藤重広（2010）「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学』5，pp.35-57，東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所.
紙谷栄治（1981）「『のだ』について」『京都府立大学学術報告　人文』33，pp.1-14.
川本栄一郎（1983）「石川県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 6　中部地方の方言』pp.337-362，国書刊行会.
神田靖子（2005）「コピュラ構文の文法化―歴史的語用論の視点から見た『ノダ』の原型仮説　平安初期まで―」『同志社大学留学生別科紀要』5，pp.17-32.
神部宏泰（1996）「播磨方言における断定辞の推移―『ネン』『～テン』の成立とその機能―」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点（上）』pp.63-79，明治書院.
木川行央（2001）「関西方言における『のだ・のです』に該当する表現をめぐって」「日本語の伝統と現代」刊行会編『日本語の伝統と現代』pp.263-277，和泉書院.
木川行央（2010）「松崎町池代方言における準体助詞と準体法」『言語科学研究 : 神田外国語大学大学院紀要』16，pp.55-73.
菊地康人（2000）「『のだ（んです）』の本質」『東京大学留学生センター紀要』10，pp.25-51.
北川千里（1995）「『わけ』というわけ」『日本語学』14-9，pp.88-98，明治書院.
北原保雄（1966）「＜終止なり＞と＜連体なり＞―その分布と構造的意味―」『国語と国文学』43-9，pp.55-71，東京大学国文学会.
岸江信介（2000）「大阪府泉南方言の分布と動態―『大阪府言語地図』と『大阪市～和歌山市間方言グロットグラム』を通して―」『言語文化研究』7，pp.185-220，徳島大学総合科学部.
岸江信介・中井精一・鳥谷善史（2001）『大阪府言語地図』近畿方言研究会.
木部暢子（2010）「イントネーションの地域差―質問文のイントネーション―」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見―知られざる地域差を知る―』pp.1-20，ひつじ書房.
工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学　解釈と鑑賞』50-3，pp.45-52，至文堂.
国広哲弥（1992）「『のだ』から『のに』・『ので』へ―『の』の共通性―」カッケンブッシュ寛子・尾﨑明人・鹿島央・藤原雅憲・籾山洋介編『日本語研究と日本語教育』pp.17-34，名古屋大学出版会.
郡史郎（1990）「大阪語の文末詞『か』の音調と機能 : 内省に基づく考察」『音声言語Ⅳ』pp.1-

25，近畿音声言語研究会.
国立国語研究所編（1951）『国立国語研究所報告 3　現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版.
国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図　第 1 集』大蔵省印刷局.
小杉孝二（2003）「大阪弁『ネン』の変遷―上方落語を中心に―」『地域言語』15，pp.33-50，地域言語研究会.
小西いずみ（2014）「要地方言の活用体系記述　富山県富山市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集（2）活用体系』pp.66-74，科研費報告書.
近藤清兄（2013）「秋田県男鹿方言のノダ文について」『聖霊女子短期大学紀要』41，pp.34-48.
近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
坂井美日（2012）「現代熊本市方言の準体助詞―『ツ』と『ト』の違いについて―」『阪大社会言語学研究ノート』10，pp.30-47，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
佐治圭三（1969）「『こと』と『の』―形式名詞と準体助詞（その 1）―」『日本語・日本文化』1，大阪外国語大学留学生別科（佐治圭三（1991）pp.181-195 に再録）.
佐治圭三（1972）「『ことだ』と『のだ』―形式名詞と準体助詞（その 2）―」『日本語・日本文化』3，大阪外国語大学留学生別科（佐治圭三（1991）pp.197-222 に再録）.
佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』ひつじ書房.
佐藤琢三（2006）「名詞カタチの文末用法と説明の機能」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 3 複文・談話編』pp.137-153，くろしお出版.
柴谷方良（2009）「日本語準体法再考―体言化と連体修飾―」『日本語文法学会　第 10 回大会発表予稿集』pp.33-43.
白岩広行・平塚雄亮（2009）「名詞述語に繋辞動詞が必要か―繋辞動詞の使用頻度に認められる方言差―」『日本語文法学会 第 10 回大会発表予稿集』pp.82-90.
陣内正敬（1991）「博多方言文末助詞『-ト』の新用法と語彙拡散」『九大言語学研究室報告』12，pp.51-59，九州大学文学部言語学研究室.
新屋映子（1989）「“文末名詞”について」『国語学』159，pp.左 1-14，国語学会.
高木千恵（2002）「大阪方言における断定辞ヤの文末詞的用法について」『阪大社会言語学研究ノート』4，pp.143-152，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
高木千恵（2005）「大阪方言の述語否定形式と否定疑問文―『～コトナイ』を中心に―」『阪大社会言語学研究ノート』7，pp.73-87，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
高木千恵（2006）「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究』別冊 2，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
高木千恵（2008）「大阪方言における動詞チガウに由来する諸形式の用法」『国文学』92，関西大学国文学会，pp.左 83-96.
高木千恵（2009）「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』5-4，pp.1-15，日本語学会.

田上稔（1999）「準体助詞『の』について」『女子大国文』126，pp.74-89，京都女子大学国文学会.
高山善行（1990）「連体ナリと終止ナリの差異について」『国語学』163，pp.1-13，国語学会.
田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5，pp.37-48，明治書院.
田附敏尚（2006）「青森県五所川原市方言の文末形式『ンズ』」『国語学研究』45，pp.61-72，東北大学大学院文学研究科.
田附敏尚（2013）「青森県五所川原市方言の『のだ』相当形式『ンダ』『ンズ』の相違」『国語研究』76，pp.41-59，國學院大學国語研究会.
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ　「のだ」の意味と用法』和泉書院.
田野村忠温（2006）「コピュラ再考」藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』pp.249-270，和泉書院.
都竹通年雄（1986）「文法概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 1　方言概説』pp.117-148，国書刊行会.
角田太作（2011）「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1，pp.53-75.
坪根由香里（1994a）「『ものだ』に関する一考察」『日本語教育』84，pp.65-77，日本語教育学会.
坪根由香里（1994b）「『もの』『こと』『の』に関する考察―『のだ』を中心に―」『南山日本語教育』1，pp.99-128，南山大学大学院外国語学研究科日本語教育専攻.
坪根由香里（1996a）「『ことだ』に関する一考察―そのモダリティ性を探る―」『ICU 日本語教育センター紀要』5，pp.45-62，国際基督教大学日本語教育研究センター.
坪根由香里（1996b）「終助詞・接続助詞としての『もの』の意味―『もの』『ものなら』『ものの』『ものを』―」『日本語教育』91，pp.37-48，日本語教育学会.
坪本篤朗（1984）「文のなかに文を埋めるときコトとノはどこが違うのか」『国文学　解釈と教材の研究』29-6，pp.87-92，学燈社.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
中井幸比古（1998）「近畿地方の方言の動態に関するアンケート調査報告　種々の文法形式」『方言研究（1）』pp.66-71，神戸・方言の会.
中井幸比古（2014）「京阪方言の比較―『のだ』、敬語、否定、引用の『と』、語尾のス・ル、擬古方言―」『神戸外大論叢』64，pp.23-52，神戸市外国語大学研究会.
中西彩乃・沖裕子（2011）『大阪摂津方言若年層談話文字化資料　付 CD-ROM：一部音声資料・文字化全電子データ』信州大学人文科学研究科.
名嶋義直（2007）『日本語研究叢書 19　ノダの意味・機能―関連性理論の観点から―』くろしお出版.
新永悠人・下地理則（2010）「北琉球奄美湯湾方言における準体助詞 *si* の形態統語的振る舞いについて」『日本言語学会第 141 回大会予稿集』pp.212-217.
新田哲夫（2004）「石川県金沢方言のガヤとその周辺」中井精一・内山純蔵・高橋浩二編『日

本海沿岸の地域特性とことば―富山県方言の過去・現在・未来―』pp.163-182, 桂書房.
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部 モダリティ』くろしお出版.
野田春美（1997）『日本語研究叢書 9　「の（だ）」の機能』くろしお出版.
野田春美（2002）「第 7 章　説明のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書 4 モダリティ』pp.230-260, くろしお出版.
野間純平（2013a）「大阪方言におけるノダ相当表現―ノヤからネンへの変遷に注目して―」『阪大日本語研究』25, pp.53-73, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
野間純平（2013b）「高知県四万十市西土佐方言における準体助詞」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp.5-14, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
野間純平（2014a）「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン―ノンの分布を中心に―」『阪大社会言語学研究ノート』12, pp.24-36, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
野間純平（2014b）「要地方言の活用体系記述　大阪府方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集（2）活用体系』pp.102-111, 科研費報告書.
灰谷謙二（2010）「広島方言における文末詞『ノン』」『尾道大学日本文学論叢』6, pp.27-37.
橋本修（1990）「補文標識『の』『こと』の分布に関わる意味規則」『国語学』163, pp.左 1-12, 国語学会.
橋本修（1994）「『の』補文の統語的・意味的性質」『文芸言語研究・言語篇』25, pp.153-166, 筑波大学.
橋本進吉（1934）『國語法要説』明治書院（橋本進吉（1948）『國語法研究』岩波書店, pp.1-96 に再録）.
林大（1964）「ダとナノダ」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝編『講座現代語 6 口語文法の問題点』pp.282-289, 明治書院.
原口裕（1978）「連体形準体法の実態―近世後期資料の場合―」春日和男教授退官記念語文論叢刊行会編『春日和男教授退官記念　語文論叢』pp.431-450, 桜楓社.
原田走一郎（2007）「若年層の福岡方言における『 - ト』の接続について」『思言　東京外国語大学記述言語学論集』2, pp.170-177, 東京外国語大学記述言語学研究室.
彦坂佳宣（2006a）「『行くダ』などの言い方をする方言群とその性格」『名古屋・方言研究会会報』23, pp.1-11.
彦坂佳宣（2006b）「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』2-4, pp.61-75, 日本語学会.
日高水穂（2013a）「『昔語り』に現れる文末表現の地理的分布」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析　成果報告書―言語地図と方言談話資料―』pp.13-32, 国立国語研究所.
日高水穂（2013b）「昔話の『語り』の地域差―文末表現を中心に―」『日本語学会 2013 年度春季大会予稿集』pp.163-170.
日高水穂（2014）「ヤンカ類による知識共有化要求表現の動態―ネンカ・テンカの発生メカニズムと地域差―」変異理論研究会夏合宿発表資料.

福田嘉一郎（1998）「説明の文法的形式の歴史について―連体ナリとノダ―」『国語国文』67-2，pp.36-52，京都大学国文学会.
藤城浩子（2007）「ノダによる『強調』『やわらげ』の内実」『日本語文法』7-2，pp.171-187，日本語文法学会.
舩木礼子（2014）「要地方言の活用体系記述　山口県東周防方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集（2）活用体系』pp.112-124，科研費報告書.
舩木礼子・佐竹久仁子（2004）「静岡県中川根方言の推量・意志・勧誘表現」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』pp.53-90，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
北國新聞社編（2005）『新 頑張りまっし金沢ことば』北國新聞社.
前川朱里（2000）「『（ヤ）ガナ』と『ヤンカ』の用法・機能上の相違について―『ではないか』との対比を中心に―」『現代日本語研究』7，pp.77-97，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
前田勇編（1965）『上方語源辞典』東京堂出版.
牧村史陽編（2004）『新版　大阪ことば事典』講談社.
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.
益岡隆志（2001）「説明・判断のモダリティ」『神戸外大論叢』52-4，pp.1-25，神戸市外国語大学研究会.
松岡弘（1987）「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』24，pp.3-19，一橋大学語学研究室.
松岡弘（1993）「再説―『のだ』の文・『わけだ』の文―」『言語文化』30，pp.53-74，一橋大学語学研究室.
松丸真大（1999）「京都市方言における『ノヤ』『ネン』の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1，pp.61-73，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院（復刊　くろしお出版 1972）.
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.
南不二男（1985）「質問文の構造」水谷静夫編『朝倉日本語新講座 4　文法と意味Ⅱ』pp.39-74，朝倉書店.
宮地朝子（2007）「形式名詞の文法化―名詞句としての特性から見る―」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』pp.1-31，ひつじ書房.
村田真美（2003）「宮崎方言の『チャ』と『ト』」『阪大日本語研究』15，pp.109-129，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
村中淑子（2009）「第 2 章　関西方言および女性語」『加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究』pp.5-17，平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金（萌芽研究）研究成果報告書（研究代表者　尾崎喜光）.
森山卓郎（1989）「文の意味とイントネーション」宮地裕編『講座日本語と日本語教育 1　日本語学要説』pp.172-196，明治書院.
森山卓郎（1992）「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59，pp.35-44，大阪大学国語国文

学会.
柳田征司（1993a）「無名詞体言句から準体助詞体言句（「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」）への変化」『愛媛大学教育学部紀要 第Ⅱ部 人文・社会科学』25-2，pp.11-36.
柳田征司（1993b）「『の』の展開、古代語から近代語への」『日本語学』12-10，pp.15-22，明治書院.
山口堯二（2000）『構文史論考』和泉書院.
山口佳也（1975）「『のだ』の文について」『国文学研究』56，早稲田大学国文学会（山口佳也（2011）『「のだ」の文とその仲間　文構造に即して考える』三省堂, pp.11-34 に再録）.
山本俊治（1982）「大阪府の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 7　近畿地方の方言』pp.195-228，国書刊行会.
幸松英恵（2012）「（いわゆる）発見のノダについて」『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』pp.175-182.
横田淳子（2001）「文末表現『わけだ』の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』27，pp.49-64.
吉川泰雄（1950）「形式名詞『の』の成立」『日本文学教室』3，pp.29-38，日本文学懇話会.
劉向東（1996）「『わけだ』文に関する一考察」『日本語教育』88，pp.48-60，日本語教育学会.
DeLancey, S. (2011) Finite structures from clausal nominalization in Tibeto-Burman. In Yap, F. H., K. Grunow-Hårsta & J. Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, pp.343-359. Amsterdam: John Benjamins.
Grunow-Hårsta, K. (2009) Pluri-functionality in the Magar nominalization system. *Nepalese Linguistics* 24, pp.37-48.
Herrig, S. C. (1991) Nominalization, relativization, and attribution in Lotha, Angami, and Burmese. *Linguistics of the Tibet-Burman Area* 14-1, pp.55-72. Bundoora : La Trobe University.
Hopper, P. J. (1991) On the principles of grammaticization. In Traugott, E. C. & B. Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization Vol. 1*, pp.17-35. Amsterdam: John Benjamins.
Horie, K. (1998) On the polyfunctionality of the Japanese particle *no*: From the perspective of ontology and grammaticalization. In Ohori, T. (ed.) *Workshop Series 6 Studies in Japanese Grammaticalization -Cognitive and Discourse Perspective-*, pp.169-192. Tokyo: Kurosio.
Lahaussois, A. (2003) Nominalization and its various uses in Thulung Rai. *Linguistics of the Tibet-Burman Area* 26-1, pp.33-57. Bundoora : La Trobe University.
Matisoff, J. A. (1972) Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In Kimball, J. P. (ed.) *Syntax and Semantics vol.1*, pp.237-257. New York: Seminar Press.
Noonan, M. (1997) Versatile nominalizations. In Bybee, J., J. Haiman & S. A. Thompson (eds.) *Essays on Language Function and Language Type: Dedicated to Talmy Givón*, pp.374-394. Amsterdam: John Benjamins.
Shibatani, M. (2013) What can Japanese dialects tell us about the function and development of the

nominalization particle *no*? In Frellesvig, B. & P. Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 20, pp.429-451. Stanford: Stanford University.

Shibatani, M. & K. A. B. Makhashen (2009) Nominalization in Soqotri, a South Arabian language of Yemen. In Wetzels, W. L. (ed.) *The Linguistics of Endangered Languages: Contributions to Morphology and Morpho-Syntax*, pp.9-30. Leiden: Brill.

Sio, J. U. (2011) The Cantonese ge3. In Yap, F. H., K. Grunow-Hårsta & J. Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, pp.125-146. Amsterdam: John Benjamins.

Suzuki, R. (1998) From a lexical noun to an utterance-final pragmatic particle: *wake*. In Ohori, T. (ed.) *Workshop Series 6 Studies in Japanese Grammaticalization -Cognitive and Discourse Perspective-*, pp.67-92. Tokyo: Kurosio.

Xu, H. L. & S. Matthews (2011) On the polyfunctionality and grammaticalization of the morpheme kai in the Chaozhou dialect. In Yap, F. H., K. Grunow-Hårsta & J. Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, pp.109-124. Amsterdam: John Benjamins.

Yap, F. H. K. (2011) Referential and non-referential use of nominalization constructions in Malay. In Yap, F. H., K. Grunow-Hårsta & J. Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, pp.627-658. Amsterdam: John Benjamins.

Yap, F. H., K. Grunow-Hårsta & J. Wrona (2011) Introduction: Nominalization strategies in Asian languages. In Yap, F. H., K. Grunow-Hårsta & J. Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, pp.1-57. Amsterdam: John Benjamins.

Yap, F. H. & S. Matthews (2008) The development of nominalizers in East Asian and Tibeto-Burman languages. In López-Couso, M. J. & E. Seoane (eds.) *Rethinking Grammaticalization: New Perspectives*, pp.309-341. Amsterdam:John Benjamins.

Yap, F. H., S. Matthews & K. Horie (2004) From pronominalizer to pragmatic marker: Implications for unidirectionality from a crosslinguistic perspective. In Fischer, O., M. Norde & H. Perridon (eds.) *Up and Down the Cline: The Nature of Grammaticalization*, pp.137-168. Amsterdam: John Benjamins.